明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
明治四十三年十一月廿六日印刷納本
（毎月一回廿六日印刷納本）

女學世界

十二月一日發行

第十巻
第拾六號



年内に是非一度は三越へ

御光來被下樣奉願候。御歳暮の御仕着、御進物を始めとし總ての御準備は一度三越へ御出で遊ばされなば直に相調ひ申候、店内の設備日に日に新しきを加へ時節柄御必要品は悉く販賣罷在候。

玩具展覽會及び**染織物嗜好研究會**

も目下開會中、非常なる御高評を博し居り候外、新たに

會席膳部等食器新製品陳列會（十二月一日より開會）

をも相開き可申、御來觀のほど奉願上候。

東京駿河町

三越呉服店

女學世界 第拾卷 第拾六號 目次

一品一効

!!純無鉛!!

御料たつた白粉

●一品多能の望なきを主張する吾製造各種の化粧料は常に

▲博士大家無害證明▼



▲新式中の新式白粉▼

●如斯美人を試金石とし着實に善良の効果を收めつゝあり

御料あらひこ

▲一合の牛乳で洗ふより▼



▲一さじの御料あらひ粉▼

歐羅巴宮殿式

御料フード

▲水なしで化粧のできる▼



▲西洋風新式おしろい下▼

化粧界新美観

●比翼式男女小兒防寒マント●



當店の新案に成れる實用的防寒マントは二重胸にして體裁優美なる男女小兒の學校用として和洋服共兼用し得て最も恰好の品なり

●男女の年別けと着衣の寸法御一報あらば見本と定價表御送り可申候

▼一着價金六圓以上金拾圓迄▲

●歳末年始の贈物としてのデリケート●

贈物には如何なる者が宜しきかとの御心配は常に歳末年始の間際に起る問題ですが茲に御紹介申すデリケート化粧水が高尚優美にして二十世紀の進物には最も適當なることを確定するものである殊に寒さの嚴しき時候に於て最も外出多きお正月に顔のアレを防ぎ艶麗ならしむる最新輸入の化粧水を贈られたる家庭はどんなに喜ばれることであらうか

▼大瓶　五十錢　中瓶　三十錢

▼郵券五錢御送付あらば見本進呈▲



御進物用の洋服切手差出し申候

(本店)横濱市辨天通り(電話三四四番)

(東京出張所及び地方係)(東京神田鍛冶町電話本局二九〇一番)

中野屋洋服店

女(いの一)

孝道

全國一千萬家庭必備の大寶典

菊判全二冊クロース製金文字入
頗美本總紙數一千七百餘頁正價五圓

忠孝は我國民道德の精華にして我國體をして世界無比たらしむる所以也 而して我國民の忠君愛國の精神は日清、日露の兩戰役に於て遺憾なく發揮するを見たり、然るに孝道に至りては個人思想の勃興に伴ひて漸く頽廢に傾き、世人も多くは之を以て自然の勢となすもの〻如し。かくて孝道にして廢れんか、我國民道德は其精華を失ひ、我家族制は其存立を危うせられ、延いて道德の大本に動搖を來す無きを保せず。澤柳先生深く之を慨して玆に『孝道』の著あり。其所謂儒家の敎は固より、佛敎神道並に西洋倫理の說をも參し 又實踐の勸獎に資せんが爲に孝道に關する詩歌格言の粹を網羅し孝子の美談は本朝、支那、印度より西洋諸國の事蹟に至る迄、數千百種の書籍に探りて遺漏なし 思ふに本書は漸く衰へんとする孝道を挽回して我家族制の基礎を堅くし、道德の大本に培ふものと云ふべし、されば本書は學校は勿論、各家庭には必ず備ふべきものにして、人の子たる者の必ず一讀すべきもの也。依て弊社は此際期間を限り、破格の廉價を以て特賣を行ひ本書の普及に努力せんとす 請ふ此機を逸せず速に申込あらんことを。

內容見本進呈

往復葉書申込の事

冨山房藏版

短期特賣

特價金四圓

郵稅內地二十四錢臺樺四十六錢、朝滿六十錢

東京神田 **冨山房** 振替五〇一一番



博士賞贊良藥

改良 女月丸

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止り月經滯り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

諸嬢姉の福音



●肥滿病新藥（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き人輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は美顏美人となり艶白となり誓て窈窕たる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

藥價		送料
一劑一圓五十錢	三劑四圓卅錢	十錢
二劑二圓九十錢	四劑五圓半	

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七七番 小宮愛生堂

書籍

（大勉強一割引）

當店今般業務を擴張し東京博文館發行の新刊圖書を初め東京市内各書林に於て發行する書籍類は凡て定價の一割引（外に送料を要す）を以て迅速御取次仕るべく候間多少に拘はらず御註文の程願上候但し郵劵代用は定價通り申受く（外に送料を要す）

▼福岡市博多下新川端町 靜壽堂書店

（大勉強一割引）

書籍

●子を持つ親 病人ある家人は是非必要 特許品

改良 ね小便袋 良

定價●乳兒用九拾五錢●中人用壹圓貳拾錢●大人用壹圓九拾五錢 特別製品各拾五錢上り

送料各拾錢



衞生最良簡用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば老人の最も必要にして、これ、おきたち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長なり（男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ）

小兒病・

ルーデーサック（十二個五十錢 三十個一圓 / 五十個一圓半 送料八錢）

子宮サック（特製七十錢 二個一圓廿錢 / 三個一圓六十錢 送料八錢）

註文切手代用必ず一割増 替口座東京八一九八番

發賣元 大阪市東區京橋二丁目 常盤號ゴム部

一度
スミレ黒香油
を使って御覧なさい

赤毛が黒く白髪も自然に
黒くなつたのに感心しました

全く原料に本椿を用ひてあるだけに
毛髪の為めに良いのです
そして生際だの襟が決して汚れませんの

東京日本橋區横山町三
パール煉香油本舗
平尾銑也商店
電話浪花百十番
振替東京百十番

定價
小三十錢 送費四錢
中五十錢 送費八錢
大一圓 送費十二錢



女、いの四）

粧ひ



田中製版所三色版

◉婦人の幸福は如斯して得らるべし

結婚前に至つて健康なりし婦人の一旦他に嫁し未だ幾もなくて血の道癪に苦しむ者の非常に多きは事實婦人の生殖器が天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の繁殖するは當然にして結婚の機會に病毒侵入し其田畑を荒す故實際惡き土地の田畑に滿足な農産なき道理にて政治實業上外交繁き人の夫人及日常多くの客に接する婦人等は殊更其生殖器を害する機會多きを以て子宮血の道に苦しむ事の夥しきは此理由なれば一生の損害とならぬやう可要球を用ゆべし、方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の錬達一世を壓する獨逸伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に依る藥液をして直接に婦人の局處に作用せしむべく可要球(座藥にして内用藥にあらず)を調劑し幾多婦人科醫の實驗に供したる處殊に子宮内膜炎帶下白帶下赤帶下下腹筋張胸先差込子宮糜爛子宮出血及惡臭搔痒月經時疼痛痳毒性子宮病等の諸症に外用すれば驚、べく効力神速顯著なりとの稱賛を受けたり故に速に可要球を外用して病毒を根治せらるべし

可要球定價　三球入廿錢八球入五拾錢拾八球入壹圓、四拾球入貳圓　特製百拾個入五圓

發行所　東京本郷湯島天神前(振替東京千五百番)　藥劑師　中西莊吉

男女方必ず御讀下さい

金五千圓を左の方法に依り差出すことゝせり御用濟の瓶にある商標を剝ぎ取り慈善事業へ御寄附あれば一枚五厘宛で本舖にて何枚にても引換ます

宮内省御買上の光榮



を賜はりたる純良髪油は日本國中唯みやけ油あるのみみやけ油を常に用ゆれば髪の抜ることなし産後病後髪を長くし、のぼせをしづめフケはなくなる、頭の病にかゝることなし、外に墨抜洗粉。スキ油ビンツケ冬しらず等好評嘖々近頃類似椿と稱へ色々品澤山あり、みやけ油御望の方に對し混合物ある粗惡品を賣り付る奸商四方にあれば必ず東京人形町の**みやけ油**と御**名指**りの上御求めなさい販賣所全國信用ある店にあ

は欧米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞讃好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て専門的に多年苦心研究の後其有効成分を検明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を参考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する売藥丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在来の生毛劑や粗惡の實藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髪、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し抜毛の再生を早めチケド、デキモノ、ハツボー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●取次所ハ毎月ノ廣告ニアリ●

らい病

此のらい病藥は獨逸の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし其病勢の甚しからざる中に本劑を四ケ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても續て用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする瞞着手段の賣藥に非ず

アノサール　一ケ月分　貳圓
複方アノサール　一ケ月分　參圓

●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

本舗　醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

三河國碧海郡刈谷町

振替口座東京八參壹壹

電話刈谷參拾貳番

●本法は　女髪結師安部歌子女史

どれもくせ毛　二大奇方劑　毛はへうけあい

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者をして悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

濟世園

●東京市麹町區三番町六十七

女へるの二

乳の出る藥

乳の出ぬ人細き人及牛乳などの危險を思ふ人は二錢切手添へ申込あれ必ず一人の子を養ふに充分な乳の出る最新發見藥物療法を明記せる育兒の栞と題する册子を無代呈す●東京京橋山下町電話新橋三七九六　清水

また得難き運勢獨り判斷

四條家藏版

石版五度刷　美麗箱入

定價貳拾五錢　郵送料貳錢

吉凶判斷 懷中おみくじ

運勢を知りて事を成すは成功の基なり此のおみくじは法華經を始め諸經の精髓により成りたる神異奇妙の靈籤にして心を清め之に向へば鏡に物の映る如く運勢現はれ煩問を除き前途の解決をなふ

東京神田美土代町二の二振替二〇四一六　博文書院

奥村繁次郎君著

家庭に於ける

吉凶百談

全一冊洋装四六判

紙數三百八十頁

正價四十錢

郵税四錢

この書は平素家庭に於けるあらゆる禍福吉凶の原因を詳述したるものにて、文意は何人にも分り易く、一目にして半信半疑の妄説を破り、如何なる迷信家と雖も忽ち迷信の愚なることを感じ教育學及び風俗研究の參考書ともなり、教育家は固よりいづれの家庭に論なく、必ず一讀すべき實用的要書也

東京 本町 博文館

美術

造花材料

三國屋

關口商店

▼半製品、錢、打拔類

東京淺草區駒形町十四番地

振替貯金……一一六四二番

電話下谷四〇五一番

(御一報次第定價表進呈)

第十一回

會長 陸軍二等軍醫正 正六位 勲五等 ドクトル 渡邊鼎

通信教授

會員募集

規則要郵券二錢

產婆學講義錄

東京市四谷區內藤町一ほの部

東京產婆看護婦講習會

產婆科六ヶ月卒業

看護科四ヶ月卒業

美術



造花



果實

通信教授

二ヶ月卒業遠國の自宅に在て誰でも造花花簪六十種の果實標本等は美麗に出來ること保證す販路は擴大にして年中相當收益あり●案內書附製品見本は造花でも果實でも一種郵券十二錢兩種廿四錢郵券送れば直に送呈す

東京四谷區鮫町十二ノ九

美術造花傳習所

女(ろの三)

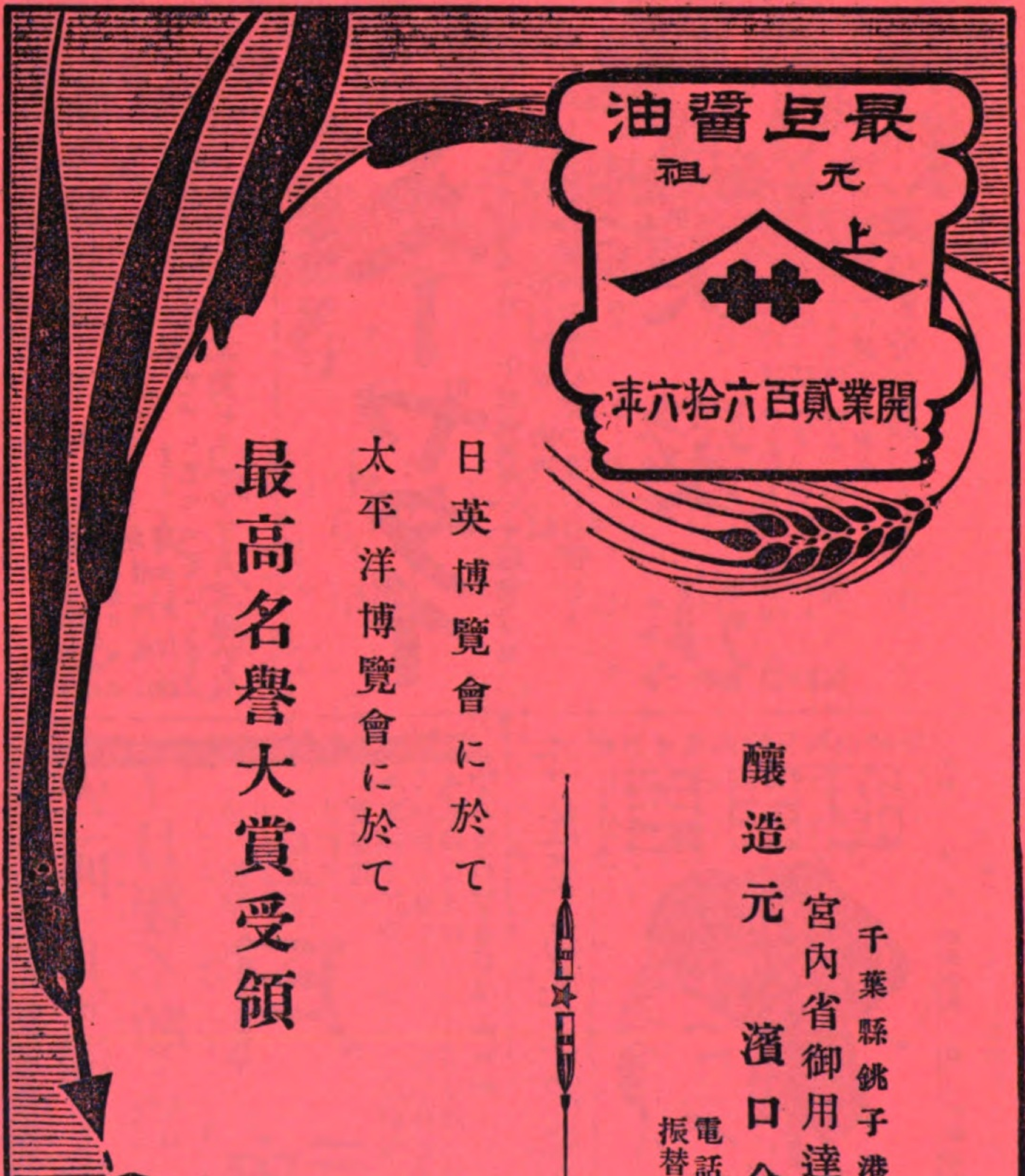

((歳暮品好適))
千代田香油
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
特製金七十錢
大瓶金三十五錢
中瓶金二十五錢
小瓶金十七錢
東京市馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九二


純白浮きスワン石鹸
歳暮品に好適
純良なる家庭用浮石鹸
▲定價 二個綴(壹本) 廿二錢
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
發賣元
東京馬喰町四丁目
山岸三之助
振替口座二〇五〇〇番

女(ろの四)

山海のつと




最上醬油
元祖
上
開業貳百六拾六年
千葉縣銚子港
宮内省御用達
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番
振替口座 五〇二一番
日英博覽會に於て
太平洋博覽會に於て
最高名譽大賞受領

(はの一)

理想的最新製劑

ちゞれ毛くせ直し

ベント

本品を一度使用せば如何なるチヾレ毛クセ毛にても立處に直伸す永く使用せば根本的にチヾレ毛クセ毛の有る處を忘るべし

定價 大金九十錢 中金四十七錢 小金廿五錢
送料 市內四錢 市外八錢

最新輸入高等染髮料

しらが赤毛そめ

ヘーヤダイ

大壜金貳圓五十錢 中壜金壹圓 小壜金五十錢
送料 市內四錢、市外八錢

此の二大有効製劑の說明は左の書に詳記せり

最新

衛生化粧美髮法

本書の內容

◎しらが、赤毛染の話 ◎毛のなき所に毛の生へる話
◎ちゞれ毛くせ毛直しの話 ◎毛髮の洗ひやうの話
◎拔毛どめ、ふけとりの話 ◎毛髮營養の話
其他毛髮化粧に關する秘訣

本書御入用の方は郵券二錢封入御申込あれば無代進呈す

●發行所 東京本所區外手町八十七番地 深澤國華堂

三四ヶ月の滯りも安全に流經し月經不順を整へ不順より發する子宮病、血の道を全治す

月調

月さらへ

最新錠劑 川本先生の新發見 小野先生實見證明

藥價	五十錠六十五錢
	壹百錠一圓十錢
	貳百錠二圓
	特製四百錠四圓
	同六百錠六圓
	●全國送料無料

▲本劑を持藥とせば月經前後に腰或は子宮の痛みなく毒血惡血を下し子血病血の道に罹る憂なし

▲貳錢券送付の方に治療攝生等詳記せる冊子を呈す

申込所 東京市京橋區南鍛冶町三●東藥味調劑所

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液



禿、脫毛、薄毛、生際惡き人試みよ……

本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髮の毛はへぎは眉毛髮等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他ある所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

女(はの二)

婦人世界

十二月一日發行 第拾四號 ◎ 一冊 拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢

◎内助の妻君とは斯の如き人……伯爵 林董

▽二萬圓の借金を返した良人の苦心 梅博士夫人

▽朝鮮貴族の家庭を訪問して感じた事 伊藤富貴子

▽結婚前の理想と結婚後の實際……佐佐木夫人

▽手輕で味よき大根料理……弦齋夫人

▽京都女學生の豆拾ひ競爭 京都府立第一高女校長 河原一郎

◎お歳暮の贈答品は如何にすべきか……村井弦齋

▽もし夜中に强盜が入つたら… 赤坂警察署長警視 本堂平四郎

▽小兒病の豫防法……加藤博士

▽出ぬ乳を採み出す女醫者にかゝる記……伊藤さと子

▽髪も衣裳も日本婦人の眞似する佛國婦人……茂木習古

▽十五年間一粒も米飯を食はぬ……安藤耐子

◎私の眼に映つた日本……朝鮮觀光團 李伯爵夫人

東京京橋南紺屋町 實業之日本社（振替貯金口座三二六番）

流行の指環

百余種を集めたる最新の「カタローグ」出來候に付き御申越次第無料送呈仕候



(1) 水仙花彫刻金剛石入　金百廿五圓
(2) 椿彫刻ダイヤモンド入　金貳拾八圓
(3) 二十金竹すかし彫　金拾貳圓
(4) 金剛石及ルビー市松形　金六拾圓
(5) ダイヤモンド三個入　金八拾圓
(6) 同七個入一文字形　金五拾圓
(7) ダイヤモンド一個入　金貳百圓
(8) 同一個入白金ハート形　金貳拾五圓
(9) 十八金眞珠十二個入　金拾貳圓
(10) 十八金水透し眞珠入　金拾八圓
(11) 十八金花形眞珠入　金拾圓
(12) 二十金日の出に梅彫刻　金拾參圓
(13) 同櫻彫刻ダイヤモンド　金貳拾七圓
(14) 同菊彫刻ダイヤモンド入　金四拾圓

東京京橋
南傳馬町

大西白牡丹

振替口座東京九二九三番
電話本局三十番三千番

長夜



河崎蘭香筆


大英國皇室
撰技御用品
DIEU ET MON DROIT
VINOLIA
愛兒を壯健に且つ快濶ならしめんとす慈母は
必ず評判高き舶來の
ヴィノオリヤァ白粉
ヴィノオリヤァ石鹼
を常に使用す
日本代理店
神戸クローザー商會
慈母も……又た……
ヴィノオリヤァクリーム
ヴィノオリヤァ石鹼歯磨
ヴィノオリヤァ香水
を愛用す
ヴィノオリヤァ會社
倫敦 巴里 紐育

女子會員募集

能筆は一生の徳

（にの四）

本會獨特の特許速成通信教授の方法に依れば短日にて上達すること五十有餘
萬の卒業生の成績に依て明かなり

書者 東京高等商業學校習字教授 稻川雲谿先生及び玉木愛石先生 外講師大家數十名

書者 女子部） 小野鵞堂先生 ◉書簡文とも細字 六ケ月卒業

本會員に限り雜誌筆の華毎號進呈す

見本 詳細會則無代進呈

東京本鄉區大學正門前 三千〇十一番
電話下谷三千二百十番

帝國習字速成學會

新刊

一戸いせ子女史著 ◉ 四六判頗美本 正價五拾錢 送料六錢

實驗 家庭料理法

本書は女史が多年の實驗に基きたるものにして其特色は廉價なる材料を用ひたると、料理法の簡易にして料理に心得なき人にもなし得るとにあり

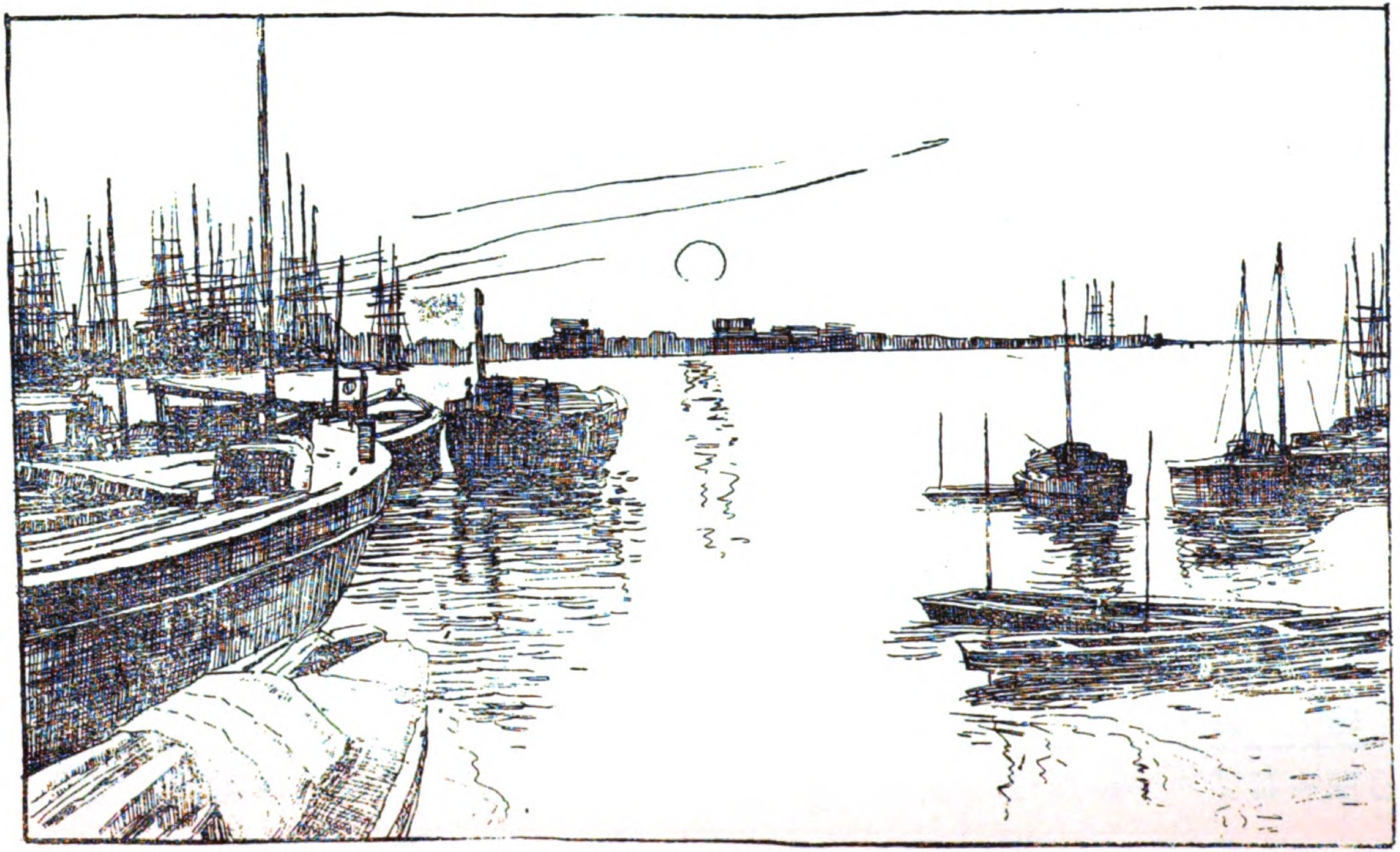
東京本鄉森川町
文成社發兌
振替一九四六七番

水仙と藪柑子



跡見花蹊女史

冬の月島




造花材料
東京横山町
天野卯兵衛
商店

◎日英大博覧會受領名譽大賞寫◎



◎名譽アル 山葉ピアノ 山葉オルガン

◎謹告

弊店販賣ノ山葉ピアノ、山葉オルガン並ニ鈴木ヴアイオリンハ昨年米國シヤートル大博覧會ニ本年又日英大博覧會ニ出品シテ其何レヨリモ名譽大賞牌ヲ受領シ世界ニ於ケル優逸ナル良品タルノ證明ヲ得申候

右御得意樣ヘ御禮旁御報告申上候間何卒倍舊御引立御用命ノ程ヲ伏シテ奉願上候

東京市京橋區竹川町十四番地

日本樂器製造株式會社東京支店

共益商社

◎管樂器弦樂器並ニ附屬品

手風琴、ハーモニカ、音樂書類新荷到着仕候

◎樂器月賦販賣並ニ賃貸及ビ調律修繕等最モ御便利ニ取扱可申候

◎營業品目錄ハ御申越次第贈呈可仕候

◎名譽アル 鈴木ヴアイオリン

女(ほの三、


鉛氣ない匂の高尚な
大學白粉
如何ほど荒れたる
肌も美しく滑かになる
大學化粧水

家門の繁榮（松方侯爵家の一族）



本圖は十一月二十二日金婚式を擧げられたる明治の元勳松方正義侯爵の一族にして　中央の二人が即ち侯爵夫妻なり、祝賀の事天聽に達し特に金盃を下賜せられたり、侯爵は本年七十六歳の鶴齢、夫人まさ子も亦六十六歳の龜齢を重ねられて今回の賀を迎へられたるはまことに目出度き次第なり、侯爵の一家は世嗣巖氏夫婦を始め七夫婦打揃ひて　家門の繁榮子孫の慶福は上流社會にありても稀に見る所なり、

和服と洋装

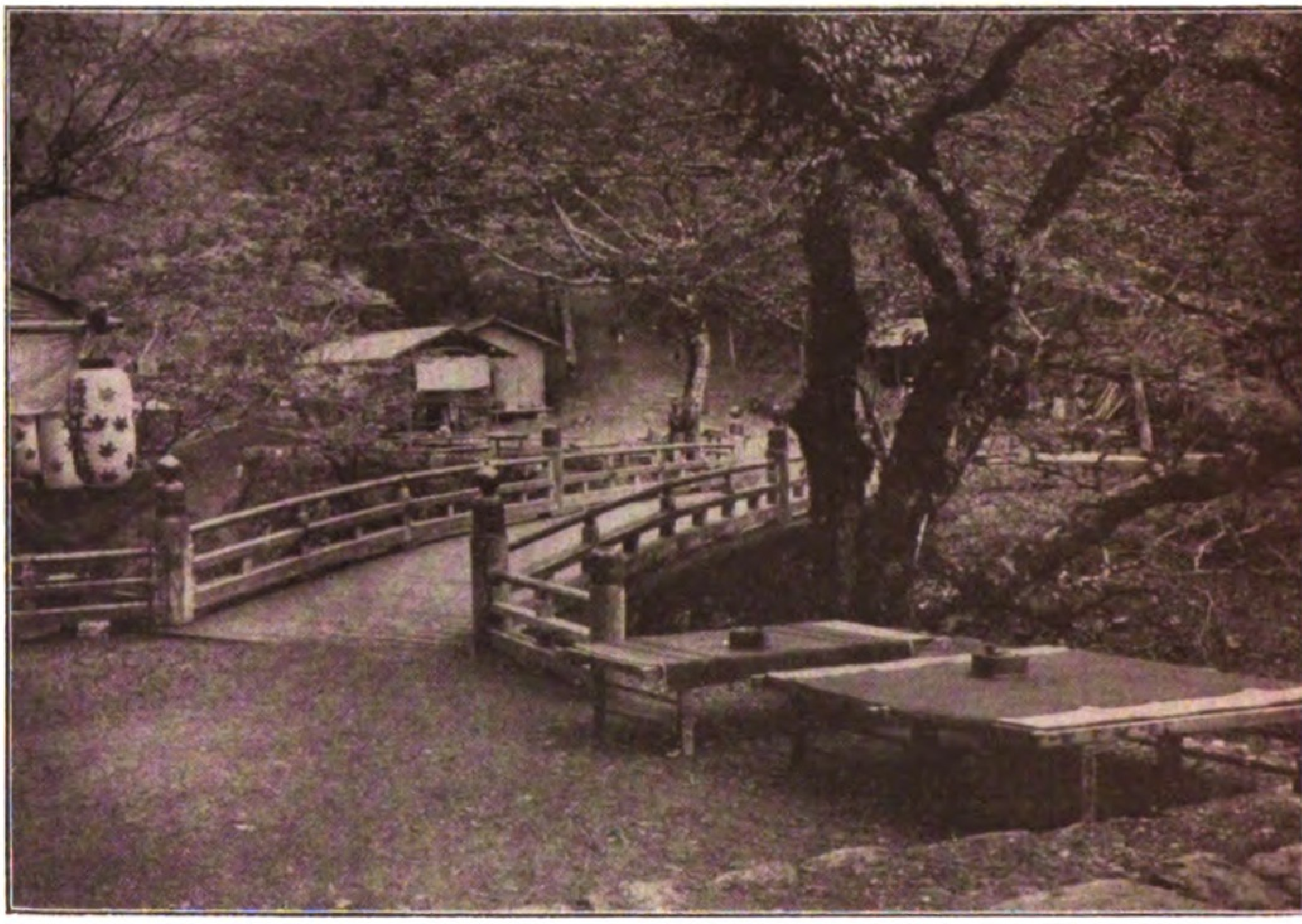
本圖中和服の令孃は本年七五三の祝着姿にして上圖右は日本橋佐内町の某紳商の令孃左は三田四國町の某實業家の令孃下圖左は木挽町の某紳士の令孃なり又中央の洋裝は國民新聞社長德富氏令孃にして下圖は紳商原六郎氏の令孃なり



女(への二)

女(への三)

紅葉の名所



京都高雄の紅葉

水禽



山城小椋池の水鳥

逝ける閨秀作家



（記事参照）

廣(その三)

飲む丈血になる

ボビナイン

病者は薬を飲む前に先づボビナインを飲め

▲總ての病者は薬物的療法を行ふと同時に滋養療法を行はざるべからず、然らざれば如何なる名薬も其効甚だ尠なかるべし

▲**ボビナイン**は以上の目的に最も適合せる滋養品にして歐米にては廿餘年前より貴重なる滋養品として賞用せらる

▲血と肉とを構成する**ボビナイン**は生牛肉中に含蓄せる總ての滋養分を最も斬新なる方法に依り其性質を變んずることなく抽出したる理想的滋養品なり

▲**ボビナイン**が幾多滋養品中傑出せる所以は消化吸收力の速かなることにして如何に胃腸の悪しき人又弱き人にも直に消化せらるべきを以て幼兒の滋養品として牛乳に滴下し用ふる時は其効最も著るしかるべし



大瓶二圓十五錢
小瓶九十五錢
送料一本八錢

▲適症 貧血、神經衰弱、産前産後、小兒の發育不良、食慾消失、肺結核

服用法はサイダー、牛乳等に混和して用ふる時は尤も妙なり

各地到る處の藥舗、洋酒店にあり ●説明書御報次第進呈

ボビナインは飲むだけ血になる滋養品なり

(其の四)

日本總代理店

横濱市境町二丁目

藥種貿易商 合資會社 友田商店 振替口座 東京一九三八番

令嬢かゞみ



右圖、辯護士大久保端造氏令孃靜子、中圖、東洋捕鯨會社取締役原眞一氏令孃實子、
左圖、視學官御園生金太郎氏令孃芳子。

料理のおけいこ





大阪割烹學校野外實習運動會の圖




於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN.
ヒゲタ印醤油
宮内省御用達
田中玄蕃釀造

通信販賣
博通社特賣品

寒さの用意と正月の娯樂品!!!

女(ちの二)

◀百人一首▶

正月のカルタ遊びに月桂冠を得るには、早く御求めになり練習なさるに限ります

函入特等品 市價二、〇〇 特價一圓四十錢
函入上等品 市價一、三〇 特價九十錢
函入中等品 市價一、七〇 特價四十錢

●送料 市内無料 内地八錢 臺、樺廿錢 清、朝卅錢

◀羽子板▶

羽子板は俗に際物と言いまして、世間では非常に高價に賣て居ますが、當社は薄利多賣主義で、最上品を極めて安く御求めに應じます

尺五物市價二、四〇 特價一圓五十錢
尺四物市價一、八〇 特價一圓
尺三物市價、八〇 特價五十錢

●送料 市内無料 内地八錢 臺、樺廿錢 清、朝卅錢

專賣特許 紙おしろい

平素帶の間に狹み置ば急場又は外出の時に、即樣御化粧が出來る匂ひ薫ばしき、至つて重寶な白粉であります

懷中鏡、口紅、化粧紙及景品券附
市價二十錢 特價十五錢

▲送料 内地八錢 臺、樺廿錢 清、朝卅錢

肉色メリヤスジバン

肌當り良き裏毛薄鴇色の品で、どんな冷え勝の御婦人でも、此を御召に成ば寒さ知ずに過されます

ジバン半 白襟付裏毛 特製市價一、〇〇 特價八十五錢
股引同値 白襟付裏毛 上製市價、九〇 特價七十五錢

▲送料 内地八錢 臺、樺廿錢 清、朝卅錢

足袋とカバー(足袋の上ばき)

紳士貴婦人間に多大の愛用を蒙れる當社特製の精良品で、型の優美仕立及染色の堅牢、價格の低廉、世間在來品とは凡ての點に卓越せる、經濟實用兼備の優等品であります

足袋正 白キヤラコ市價、三〇 特價廿二錢
白モウカ市價、二五 特價十八錢
紺市價、三五 特價廿三錢

カバー 黒、利久茶同値 特價十五錢
白、茶褐、時色、紫同値 特價十四錢

(大さは八文半より十一文迄裏紋羽にて同値)

▲送料 内地八錢、臺、樺廿錢清、朝卅錢

精良品を最廉價に提供するは當社の本領!!!

大橋メール、オーダー、ビジネス

東京日本橋區本町一丁目 ● **博通社** 振替口座東京五十番 電話本局六百四十番

婦人画報

十二月一日　十二月卷　一册廿五錢　郵稅二錢　六册稅共壹圓五拾錢　十二册稅共二圓八拾八錢

畫報

▼下町ぶり（彩色美人畫）……井川洗厓筆
▼貯金管理局と專賣局女工慰安
▼德川慶達公の家庭▼故大塚夫人……
▼御前講演の諸令孃……
▼座蒲團の進め方と煙草盆の進め方……
▼高尾山に於ける三姬宮殿下……
▼新たに女醫となりし五才媛……
▼新婚の九條絍子姬……
▼女子大學運動會▼……セス森久保
▼樂しき日曜の一日
▼天長節の夜會・食堂と客室
▼鍋島侯爵邸の朝鮮婦人
▼女學館の同窓會と江の島行き
▼女學生の戶隱山登山……
▼大森恩賜館に於ける朝鮮貴婦人……
▼中禪寺の湖畔の跡見成女生徒
▼第二第三女子師範・東京高女運動會……
▼女學生の活人畫……
▼京都大阪神戶各女學校運動會……
▼各名家の令孃鑑▼新郎新婦……
▼可愛がらるる小兒虐待さるる小兒

讀物

小言の言ひ納め……新渡戶博士
男女間の正しき同等……鎌田塾長
男女は有機的社會の二成分……中島德藏
四十三年の女學界……下田次郎
森久保エセル夫人……婦人記者
しやうじの張替へ……宮川すみ子
勇婦りや……遠山稲子
我家の歲の暮……穗積博士夫人・鳩山博士夫人・加藤博士夫人
皇后陛下の御歌……
歲の暮と女……秋香女
亡友大塚楠緒子女史
味のはなし……富士川游
おしやべりの時間……ゆく秋
十二月の花と料理いろ〳〵……
趣味の心理……高島平三郎
火の要心……佐治實然
親より虐待さるる兒童……原胤昭
過去一年間の婦人界思潮……富田脩

女（ちの三）

東京麴町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九番　振替口座一一八一八番

本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す

特効
フケ取りツヤを出し
チヾレクセ毛を直す
高等煉香油
チエリーポマード
定價（小金貳拾錢
　　　中金參拾錢

特効
ふけを去り艶を出しちヾれ、くせを直し毛の發育を補く
高等香油
チエリーオイル
定價
大八拾五錢
中四拾五錢
小貳拾五錢

本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
煉製美顔料
フエスおしろい
定價（金參拾五錢
　　　金貳拾五錢

東京市日本橋區本町二丁目
發賣本舗
高橋初次郎
特電話四一三番

宮内省御用達

醸造元
千葉縣野田町
茂木佐平治

天下一品

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

女（ちの四）

令嬢かゞみ







右、牛込　長坂道子　中、麴町　早田けい子　左、牛込　和田とし子

衣服と表情



本圖は東京下町逸紳商の令孃姿を撮影したるものなるが、衣服と容貌の釣合極めてよく整ひ、ゆつたりとして物に迫らざる着こなしは其の性格をあらはして萬遍なく品位の上に一段の精彩を加へたるがごとし。（菅原文學士の記事參照）

化粧香水

《歳暮品好適》

プラチナ



八方美人の香水

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能さい持つて居ないが此のプラチナ香水は

◉ハンカチーフに一二滴たらして持てば終日香氣を保ち

◉微溫湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ

◉顔を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し

◉頭髪に塗抹すれば毛髪を養ひ香氣馥郁香油の代用をするのみならず髪のくせを直し赤毛白髪を防ぎます

故に人は本品を「八方美人香水」と云ふは尤なる次第である

定價壹瓶三十錢▼郵券代用一割增遞送無料

東京日本橋横山町一丁目

發賣元 近江屋 天野源七

電話浪花八六三番 振替口座五九三三三番



女(りの一)

女(りの二)

東京市京橋大鋸町 女子文壇社出版 （振替口座東京第壹七貳九番） 賣捌全國書店

女子文壇

一日發刊 十二月號 六年第十六號

●歳暮其他の進物に就ての注意…小貝貞子●料理のお話…二見浦子●愛嬢を喪ふたる感想…高島涵子●財布の紐を長くせよ…篠田女學●銀行の電話掛…滋子

▲女性雜感……………………………あづさ弓

▲現今の婦人と其將來の發展……宮田成女學校長

▲朝鮮の貴婦人を觀る…………………よしし

▲一家の經營………………水野外務參事官夫人 水野萬壽子

▲故郷の家……………………………佐野天聲

▲服粧と色彩の嗜好……木下工學士夫人 木下良子

▲廣き世界を見よ……………………兒玉花外

●玉の輿を捨てゝ處女の貞操を全ふしたる私の告白…美智子●今秋のかゝみ…長曾我部菊子●ルナパーク…鈴木春子外

懸賞詩文 依例豐富

●定價五拾五錢 郵税壹錢五厘

少女十二月一日號發刊 口繪挿畫美麗 定價拾錢 郵税壹錢

少女

●織姫・おだつし（さん）（じめ）●人形物語●女間諜●決死の少女

前に悲歌の一曲を彈ず●花子さんの惡猿の大阪見物●沒書の靈●まだ見ぬ兄●人形●大哀れ友●下駄の緒外●新案歴史畫のあて物

●今の婦人　全　定價貳拾錢　送料壹錢半

●都會の婦人　全　定價貳拾錢　送料壹錢半

●地方の婦人　全　定價貳拾錢　送料壹錢半

●若き婦人　全　定價貳拾錢　送料壹錢半

女（りの三）

毛利公爵母堂、岩倉公爵夫人、鍋島侯爵夫人
大隈伯爵夫人各序、牧野伸顯男書簡
◎鳩山春子夫人著
（クロース製全一冊）

婦人の修養

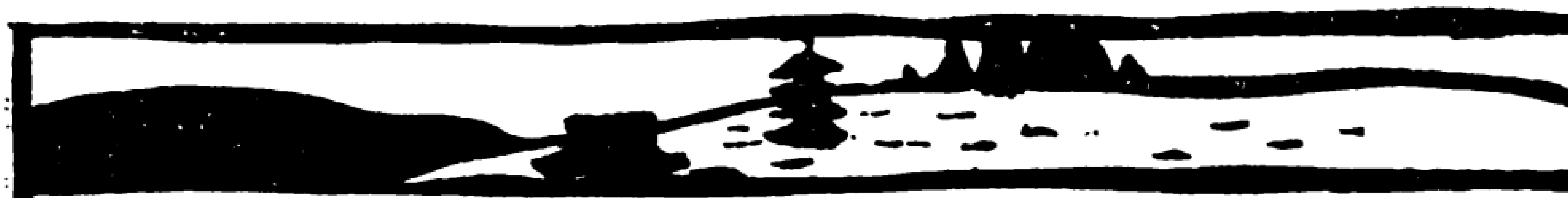
定價 金壹圓貳拾錢

郵税 金拾錢

本書は鳩山春子夫人が内外の務め繁き中に深き素養と、廣き見聞と、富める經驗とを以てものし敢て新奇に走らず舊きを套はず能く其中庸を得たる眞に好著と謂ふべし之を讀たらんには母たる人は育兒の教へを聞くべく、社交の婦人は交際の術を學ぶべく、一般夫人は常識修養の指鍼とすべし各女學校は最好の參考書として如何に偉大なる感化を受くべきか。

女（りの四）

東京 博文館 本町



女學世界

第拾巻第拾六號

十二月號

かくばかり流れて早き年波を
のどかにのみも渡りつるかな　知紀

月花にあかし暮していたづらに
過さぬ身さへ惜き年哉　永好

明日の日のあらぬばかりに暇くかな　千濱
煤取拂ひ餅ひつくとて



女魂男才主義

米國教育學博士　西山恕治

△女魂男才

女魂男才主義とは、平たくいへば女の魂で男の心といふ意味である。女魂とは大和女魂ともいふべきもので日本婦人の貞淑、貞操、優美、責任、犠牲、從順、謙讓などいふ良夫に忠實な大精神のことで、これはどこまでも尊重し、發揮させたい。

併し將來の女子は單に此の女魂、――大和女魂をもつてゐるばかりでなく、女魂と併せて男才をも備たねばならぬ。男才とは文字の示す通り男子のもつてゐる知力、才能のことである。卽ち女魂男才とは女の魂で男の心と言ふのであるから、男子のやうに知あり賢く才あり能あり而も其の上に女子たる大和女魂をもつた立派な淑女のことである。

女魂男才主義は純知的なお轉婆養成主義でなく、又、狹い意味の良婦賢母主義でもない。つまり賢婦淑女主義の教育なのである。

△プラトーの高等教育說

古來女子教育を論じたものは少なくなかつた。併し希臘の哲學者プラトーの女子教育論は二千年も昔に論じたものであつたが、積極的の女子教育として堂々たるもので、驚くべき奇拔な議論がある。プラトーは女子をして男子の眞の友たらしむるには男子と同一の知的教育を施さねばならぬとの立脚地に立つて、哲學のやうな高尙な研究でも、音樂であらうが體操であらうが、凡て男女を同樣に教育すべしと說いて、女子にも馬乘りを教へた。此の主義を更らに極端にまで進めて女子の兵役論をさへ主張した。

△妻として見たる女子

女子を單に妻といふ方面から見ても女魂男才主義の女子教育は必要である。「女子に同情とか補助とか慰藉

などを求むるは丈夫の恥辱である。」とは建部博士のいふところである。併しこれは趣味に合はぬ妻を娶つてその妻に倦いた失望の斷案で、博士の瘠せ我慢ではあるまいか。若し博士が、話しても張合のない一向煮え切らぬ先妻を去つて更らに第二の眼のあいた女子を迎えてならうことなら彼の女に同情と慰藉とを得たいと思はなかつたならば、何を苦んで再婚をしよう。此の心がないならば恐らくは博士も再婚はしなかつたであらう。

△男子の妻に對する不平

私の友人には妻に對して不平を抱いてゐる者が少くない。「僕の妻は僕の話相手となるには餘りに愚物である。」とか、「僕の野心とか希望とか困難などを妻に打明けたいけれども僕の妻はあまりにたよりない、つまり僕の妻は僕の相談相手とか慰藉者とかいふものになる資格がないのであらう。」と、恁ういうやうな不平の聲はそり〳〵耳にするところである。恁ういう女子は所謂良妻賢母主義によつて教育されたおあつらへ向きの情の女、箱入娘である。

△情の女子と知の女子

明治の才媛としてその令名隱れなかつた樋口一葉の小說は、實に此の情の女の性格をその作物の上に表はしてゐる。一葉女史の傑作の一つであると稱せられた小說十三夜は誠によい標本である。女史の十三夜を見ると情の女が情に絆されて悶えに悶える樣を描いたもので、理性のない情の女が悶える記錄である。たゞ感情を或程度まで抑え得たといふので無謀な大事も仕出かさないで濟んだといつてめでたし〳〵でその局を結んでゐる。これを西洋の女流作家の手になつた主義の小說、理知に明るい小說と較べると誠に好い對照である。併し情の女としての一葉女史には少しも理性とか知の光がなくて、動もすれば盲の情に支配されるやうな傾向を表はしてゐる。若し一葉女史にして今少しく理知の教育を受けたならば、あんな十三夜のやうな小

說ばかりに筆を染めては居なかつたであらう。

△沙翁の女子教育觀

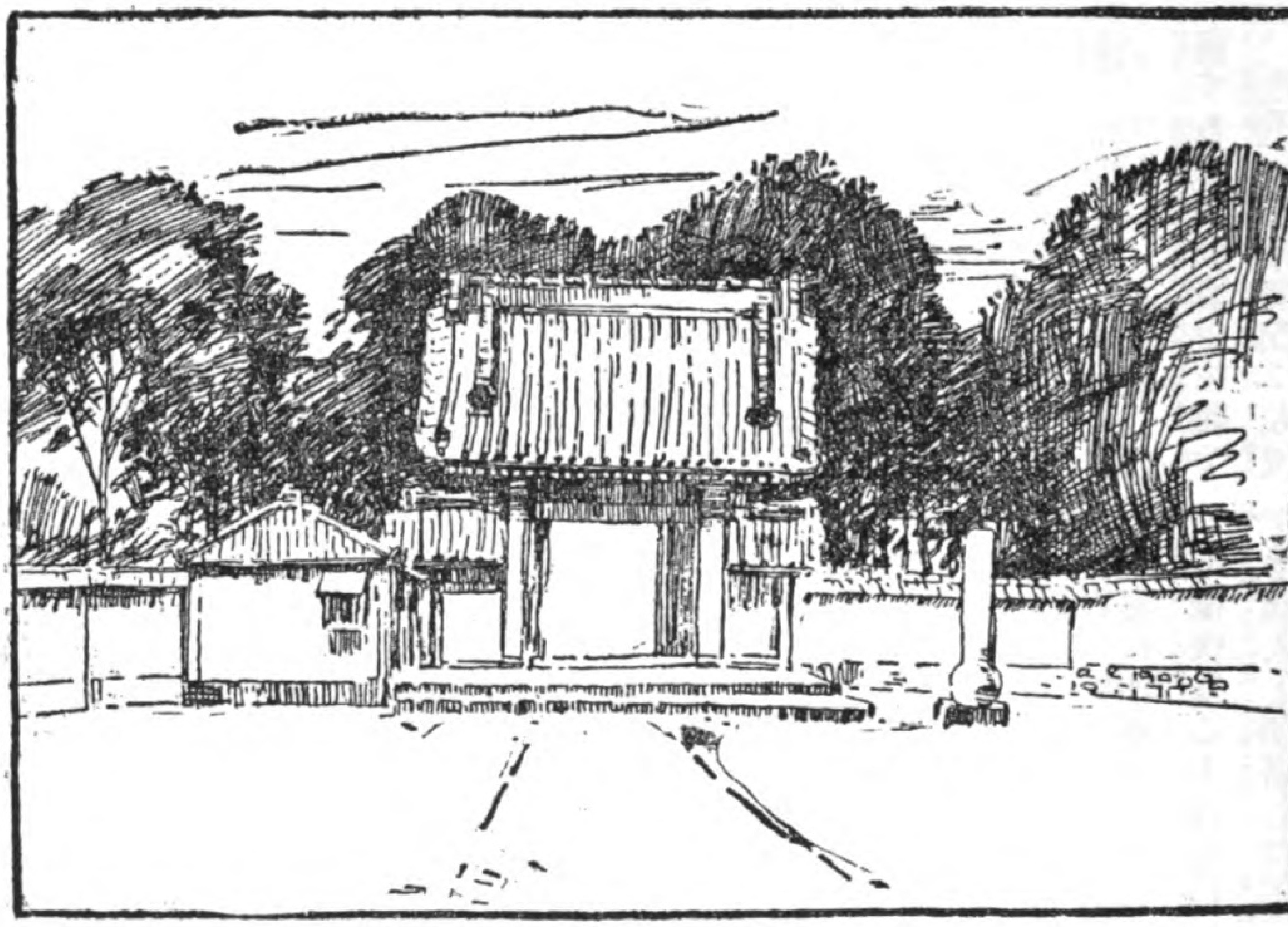
シエクスピアの小說『ジユリアスシーザー』を讀んだ者は、此の一番に沙翁の婦人觀や女子教育の理想を仄めかしてゐるのに思ひ當るであらう。シーザーを扼殺せんとて日夜悶々たりしブルータスの妻のポーシアは、深夜に床をぬけ出でゝ良夫の跡を追ひ、手を取つて涙ながらに『御身もし妾の良夫ならば秘密の凡てを打明け給へ、此のポーシアにも悶えを分たせ給ずや、ひとり悶え給ふは妾を妻とも思さぬお仕打、愚かなりともポーシアは御身の妻、一生を君に捧げし此の身は御身のかたわれなり、何とて妾に秘し給ふや、同じ家に食を共にし床ゐたゝむるのみが夫婦の道と思すにや嘆つれなからずや、それにては妻といふも妾同樣、妾を妻にはなさぬみこゝろにや、妾を妻と思召さば結婚の誓を守りてかくしごとをすべて妾に打明け給へ。』といつたが、斯かる妻を持つたブルータスは幸福である。

情の女には到底此の眞似は出來ないであらう。

單に同情するといつてもいろ〳〵ある。情意的同情ならば所謂良妻賢母主義の女子教育で澤山である。不具者でない以上、飯を焦がさない程度の女子ならば乾度成功するであらう。併しポーシアのやうな知的同情者たるには到底偏狹な良妻賢母主義の女子教育では駄目である。ハウプトマンの劇曲「孤獨生活」にも、良妻賢母主義の情の女にあいた良夫の著述家が、一日友人の紹介で高等教育を受けた若い女學生と相知り、その女學生が自分の論文を理會し、これを評し、それに贊成したので、自分は千載の知己を得たと悅んで妻を疎んじ、その女學生と親しくなつたとある。要するに妻として良夫を慰藉するにも此の知的同情がなくては決して知ある男子は滿足しないものである。女子も此の知的同情を以て男子の合理的活動、知的生活、事業、趣味等を解し得なければならぬ。此れはどうしても男才主義の女子教育でなくては達せられないのである。

△内助の妻と
外助の妻

情の女が同情慰藉するといふのは、内顧の憂をなからしむるやうにするのが關の山である。手鍋さげるか稲川の妻のやうに身賣するのが落ちである。之れを救ふものは女魂男才主義の敎育であるといひたい。知の女子は單に内顧の憂なからしむる位な消極的慰藉、姑息の同情に甘せず、進んで外部の憂をもなからしめ、眞の同情者、好伴侶たる見上げた女子である。此の外部の憂なからしむる女子を



駒込吉祥寺

作るには從來の偏狹な良妻賢母、内助主義の女子敎育を棄てゝ、外助主義、女魂男才主義の敎育にしなくてはならないと思ふ。

△ブリトン博
士夫人

私の友人に曾てコロンビア大學の植物學の敎授をなし、今は紐育のブロンクス大公園の博物館及び植物園の理事である博士ブリトンといふ人がある。その夫人はバーナード女子大學の卒業で、植物學を專攻して、紐育の女子師範學校で植物學を敎へてゐたが、嫁して

後はよく家政を整理し、博士の洋服を作るにも少しも博士を煩はすことなく、夫人自ら色合から地質、寸法書まで作つて注文するといふ風で、眞に內助の夫人である。そして單に良人をして內顧の憂なからしむるばかりでなく、良夫と共に南部地方を旅行して高山地の植物を蒐集したり、博士の著、植物學大系は三千頁の大著述で昨年米國で出版されたときには博士の原稿を淸書したり、或はタイプライターに書き直すやら、印刷摺の校正するやら、索引など迄も夫人自らちやんと作つて大に博士を助けた。又、博士が歐洲にあるときは良人の代理として植物園を預かつて少しも缺くるところがなかつた。夫人の如きは實に內顧外部の憂を共にする外助主義、女魂男才主義の敎育の理想であつて妻母としての模範であるといつてよい。

△男女敎育の區別

男爵加藤博士は『女子を敎育するに良妻賢母主義でなくてはならぬといふならば、男子を敎育するにも矢張良夫賢父主義でなくてはなるまい。』といはれてゐるが、まことに尤もの說で、眞の同情者、慰藉者として內外に活動し、理性、理想、判斷に富む知の女子、外助主義の眼のあつた話のわかる女子を作るには、どうしても女魂男才主義に育てねばなるまい。

男子は生產的に敎育し、女子は消費的、不生產的に敎へ、男子は積極的に女子は消極的に敎育し、男子は知的に女子は情的に實用的に、男子は技術的職業的に女子は技藝的遊藝的に、男子は社會的進取的に、女子は家庭的保守的に敎育するなどは、餘りに極端な區別ではあるまいか。これしきの狹い限られた良妻賢母主義の女子敎育では外助の活動婦人、眼のあいた話のわかる女子を作ることは先づ六ケしいことであらう。

△將來の女子敎育

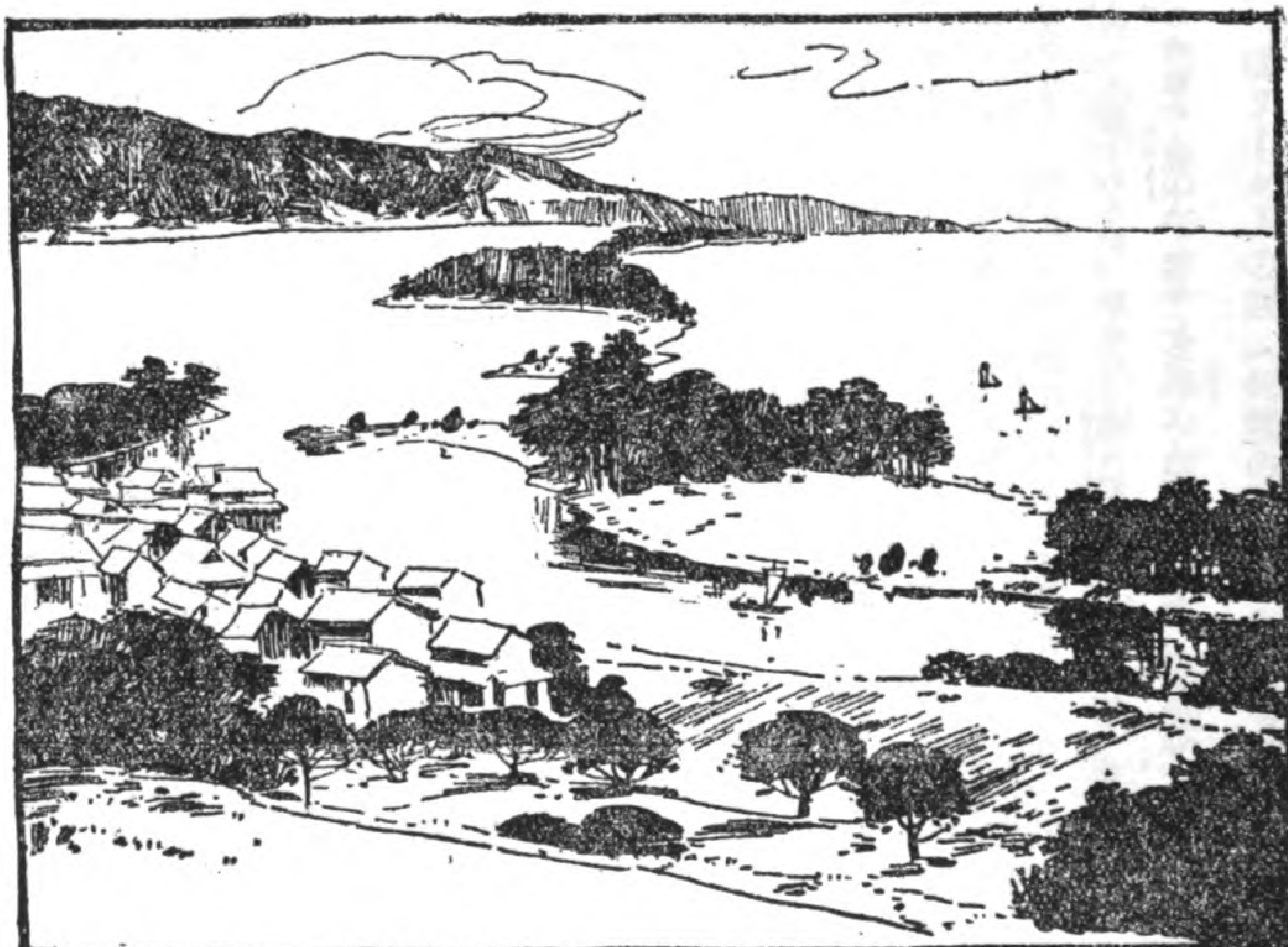
『妻に洒落をいつたのを說明してやらねばならぬほど不愉快なことはない。』といふ西洋の諺がある。これは外國人と結婚した不愉快を諷したと同時に、自ら女で

もせめて良人のいつた洒落位を理會し得る智識がなければならぬと女魂男才主義の女子教育が必要であると感じての餘り、消極的、保守的、家庭的、遊藝的の狹偏な良妻賢母主義の教育に失望した男子の卒直な不平である。實際のところ、良妻賢母主義の教育は、その實質と內容とが狹く制限された爲めに、多くの惡妻愚母をも輩出せしめたやうである。良妻賢母の美名に眩惑して惡妻愚母の中毒に苦んでゐる者には將來の我女子教育の向ふべき女魂男才主義の精神を味はせてやりたいものである。〔完〕

寒かりし夜半の嵐に渡りけん
　けさよりうかぶ池の水鳥　　直好

枯あしの下根に鳴やあさるらん
　なひく穗末に雪のこほるゝ　　千潁

草も木も雪の心にまかすれど
　埋みかれたる月の影かな　　契沖



文珠山より見たる天の橋立

活動寫眞の弊害

▲近頃流行します活動寫眞の中には、時に依ると、殘酷なもの、殺伐なもの、或は如何はしい樣なのすらないではありません、夫れに若い夫婦が、子守に子を負はせて之を見物する杯は、子供の爲に害はあるとも、利益とは思へませぬ、先頃も有名な學者の妻君が、子供を連れて芝居を見ました、其後芝居を見た子供は咽を突いて自殺する眞似をすると云つて、尺を口中へ差し入れますと、其傍に居た一人の子供が、何心なく尺の先を强く打ちましたから堪りません、其子は遂に夫れが原因となつて死んで仕舞ひました、是れは目擊に依りて得た力、模範は實行上の教訓で、到底口で敎へる事の出來ない事を敎へて居るのです、ですから惡い模範の前には如何に立派な教訓も、其效力を失ふのである、故に苟も父母の行爲が其口で云ふ所の教訓と相異つて居りましたなら、其教訓が只無效になるばかりでなく、却て子供は反感を起すものです、父母若し口に云ふ所と身に行ふ所と相反する時は、小兒は直に其父母の言行反對を看取するのであります。

▲其他小兒の見る事、聞く事、云ふ事が發達するに際して注意すべき事柄は澤山あるけれど、其内二ツは更に心を注いで頂きたい、第一は父親母親とも總て言語を愼んで、且つ正確の言語を使ふ樣にする事です、子供は正確に云ひたくても舌が廻らぬのです、夫れを兩親は立派な舌を持ながら、子供の眞似をして、舌たらず、片言を云ふ事です、ヘイ左樣ならをヘイチヤイとか、電車をデンチヤとか云ふ類で、小兒の爲めには極めて不親切であるのです、どうかして正確の言語を用ふる樣にすることが大切であります、第二は敬虔の模範を示す事です、小兒は父母兄弟姉妹朋友と交る間に、自己と自己以外の總ての者と一致結合せしむる原動力となるべき共通の感情を有して、人は個々孤立の如くでも、感情は決して孤立でなく、共通一致の特性のある事を微かに感ずるもので ある、子供を寢ませるに小說を讀みつゝ小兒に乳を與へる母もあるが、敬虔なる母は靜かに其子の保護と幸福を念ずるものもあつて、斯かる母の感化は小兒生涯の幸福の源で、老年になつても母子の愛情は益々濃やかになります。（江原素六氏）

語學と料理の實驗

櫻井女塾長　櫻井ちか子

▲私の方針

私が女子に英語を敎へます目的は、勿論英學者を作らうと云ふのでなく、良人の伴侶となり子女の監督者となつて不自由を感せぬ位に語學の修養を爲せたいのにあるのでございます。それで私方へ參る生徒はこれから新家庭を造らうとする婦人、或は已に家庭を持つた婦人が多いのですが、偶々專門に研究する望のものが參りますと、津田さんなぞへ廻すやうにいたして居ります。高等女學校を卒業したものは語學も一通の程度に達して居る筈ではございますが、澤山な科目を學んで頭腦が纏まつて居ませんから學んだゞけの語學を活用させる力がついて居りません。私方ではつまりこの上磨をいたしますので假令ばリーダーの四（何種のリーダーでも同じやうに力がつくものです）を學べば、歴史、地理、生理、家政その他何んでも四の程度だけの書物なら讀了することが出來るやうに敎へます。若し結婚その他の事情で中途退學いたしてもそれまで學んだゞけの程度の書類は讀み得る腦力を養ふやうに導くのでございます。

▲私の塾に組の多いわけ

近來は一般に婦人が語學の必要を感ずると見えまして、これまで餘り素養のなかつた奧樣方が大分私方へ來られるやうになりました。かやうな婦人達は各家庭の都合を見斗らつて來られるのですから、そのお仲間を一組として敎へて居ります。一體私方では樣々な學力の人が參りますのと、各生徒の都合とを察して時間を割當るのとで人數の少い割に組が幾つにも分れて居るのです。組の多いのは敎ゆるのに煩雜なものでご

ざいますけれども、腦力も境遇も懸隔した者を一齊に敎授したところが實効がありませんから出來るだけ種類を小分して置くのでございます。世間では私方を兎いハイカラで高尚なものばかり敎へるやうに評判いたしますが事實は全然相違して居ります。晩學の婦人なぞは堂々たる學校で多數の學生と共に學ぶことや、家庭の時間都合等で折角の篤志を妨げられるものですから私はこれらの婦人のために同情を寄せて適宜の方法を執つて居ります。

▲學ぶ人の決斷が必要

何の學科でも左樣でございますが、語學を學ぶにも自己の體質や腦力を能く省みて相當の速力で進みませんと勞して効なき結果を生じます。運動は體育の基でございますけれども若し心臟病でもあれば加減いたさなければならぬと同じく、勉強さへすれば速かに高程度に進まれると申しても他に腦を使ふ責任があるとか復習時間が乏しいとか、天性腦力が鈍いとか云ふものは、これらの障害なき者と並馳して往くわけに參りません。障害ある頭腦へ一時につめ込うとすれば一升入の器に一升五合の水を入れるやうなもので溢れ出すばかりでございますから先づこの位のことなら自分の頭腦にも時間の都合にも堪へられると云ふ見きわめをつけて徐々と進まうと云ふ決心をいたすことが何より必要でございませう。これだけの月謝と時間を費してこの位の進歩ではつまらぬと云ふ打算的の考も婦人には有勝なものでせうが不相應にあがくのは挫折の基で遂に虻蜂取らずになつて了ふのでございます。今日は茶碗と云ふ語一つ明日は皿と云ふ語一つと云ふ風に學んでも確實に頭腦に入れば一年に三百幾つの言葉を確實に覺えられますので、確實に覺えたことは僅かなやうでも非常に活用力のつくものでございます。

▲子息のために英語を學ぶ細君

六人の子を持る或教師の細君は、今年中學へ入つた長男の英語復習を見てやる力のないことを遺憾に感じ良人の贊助を得て當五月から私方へ通學して居られるのですが、下婢は一人ありますもの、の三歲の乳呑兒もあり多勢の子供の世話で却々忙しいのに係らず、寸暇を割て子息のために修養されるのは誠に感心なことゝ存じます。唯今第一リーダーを學んで居られますが、僅かづゝ進む中學一年生の英語復習位は十分見て上げることが出來ますし先達も玩具店のトイショップと云ふ看板が讀めたと云つて悅んで居られました。



逗子名所白瀧不動

▲意志强固な晩學婦人

私方へ丁度五年通學して居られる三十四五の細君がございます。この婦人の就學したわけは、子息が中學校で英語は注意點を取るので御夫婦

で心配されましたが、英語だけの復習に家庭教師を頼むほどのこともなからうから寧そお前が學んで私の代りに面倒を見てやつたら宜からうと良人が言はれたので私方へ來られるとになつたのです。併し度々のお產、その他家事の都合で折々永く缺席されましたから五箇年で漸くリーダーの三に進んだ位のものでございますが、永く休んでも用事が片付けば再び通學を始め忍耐強く學んで居られますので、子息の復習も見て上られるやうになり先達の中學の試驗には子息が英語を七點取られた相で大層悅んで居られ、新橋停車場でウェイチングルーム（待合室）の文字が分つたなぞと云つては樂しんで勉強して居られます。この婦人の感心なことはお友達が料理の夏季講習に入つては如何ですなぞと勸めましても、頭腦が鈍い上に五人の子を持つた私が色々な稽古事に手を出しても及ばぬことですから夏休の間にせつせと洗張仕立物を片付て、學びかけた英語を專修したいと思ひます」と言つて少しも他に雷同されません。これが却々尋常の婦人に出來ぬ意志の強いところでございませう。私は何時もこの婦人を生徒達の模範にいたして居ります。

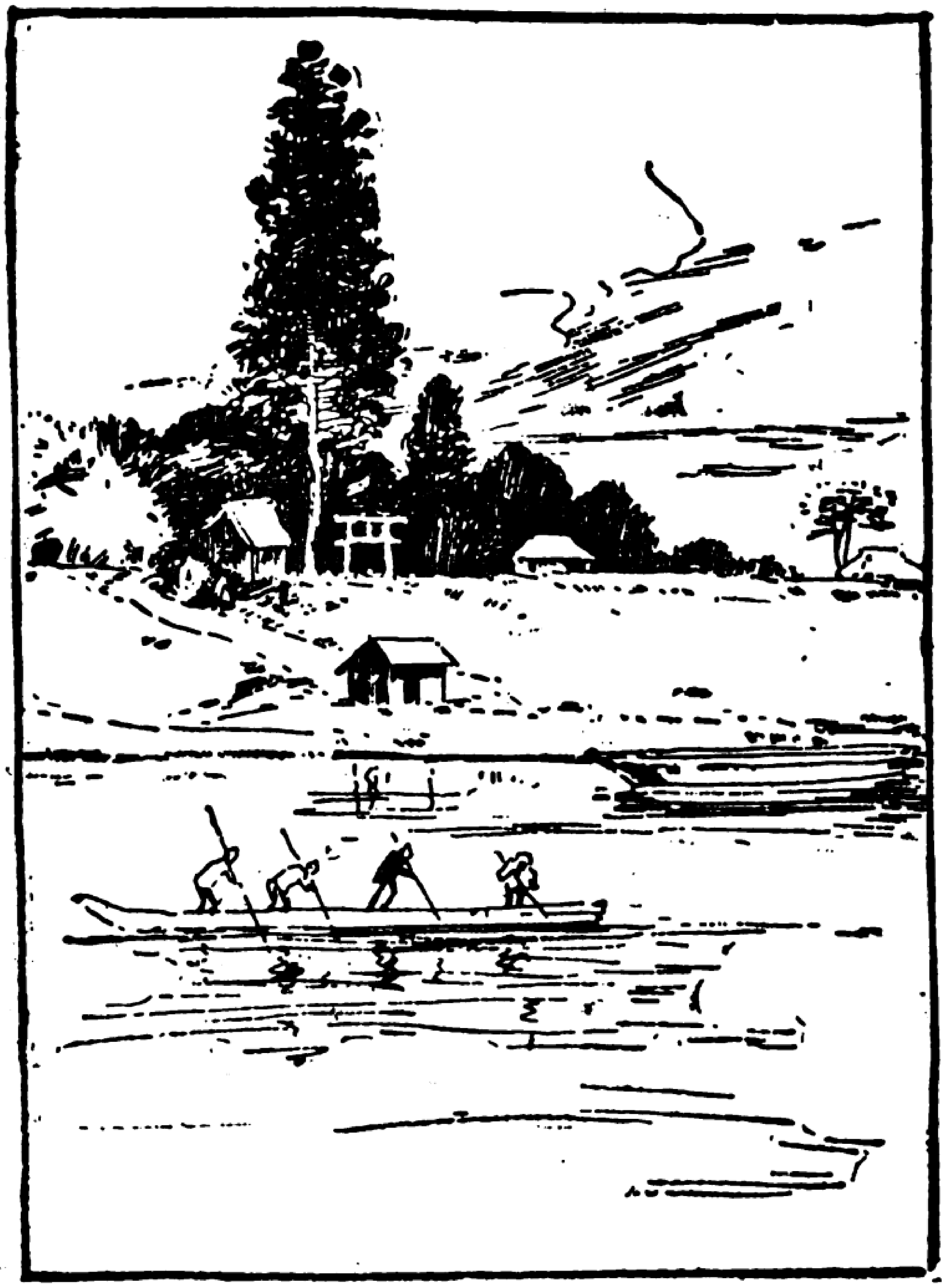
▲僅かなりとも學ばぬに勝る

妻は田舍の高等女學校出で英語の素養がないから子供のために學ばせて置きたいとか家內が丸きり盲目では一寸書棚の本を取つて貰ふにも用が辨せず、せめて書物の名位よめるやうにしてやりたいなぞと心配して妻君を連れて頼みに來られるお方が近頃大分ございますが、良人がかやうに注意されますのは誠に床しいことゝぞんじます。假令僅かづゝでも進歩的のことに從事して居れば婦人の思想が高尙になり、且勉學のために家事を疎かにすると言はれまいと云ふ警戒心も起りますから、寸陰を惜んで働くやうになるものでござい

ます。姑のある家でも追々文明式になるものと見えまして留守を預つてやるから通學せよと言はれる感心な姑さんも近頃大分あるのでございます。

▲多藝を一時に學ばんとする婦人

良人の留學された留守中を利用して私共へ英語を學びに來られた某妻君は、英語の他に茶の湯、活花、音曲、和歌と云ふ風に多種の藝を一時に習ひ始めました。



矢口の渡し古圖

で元來頭腦は良い人でしたけれども纏つた進歩が出來ず惜しいことゝ存じました。何の學藝も必要に違ひありませんが家庭を持た婦人が僅か五年間に百色藝を漁つても思ふやうに參らぬ道理です。歸朝の良人を待つの用意として學びたいことは數々あるものではございませうが、八方へ手を出して一の趣味を解する能力も得られないでは詰りません。分を計つて一藝を習熟するに限ると存じます。

▲學問の時期を誤るべからず

怠らず學べば進歩いたすには相違ありませんが、頭腦の疲れた者の學問は却々困難に見えます。學校の他に澤山の技藝を修めつゝある高等女學校生や一家を成し子を持てる婦人なぞは頭腦の良い者でもその疲れがあり〳〵と見えまして教ゆる方でも成るべく分量を抑へると云ふ工合でございます。琴、活花、茶の湯等の技藝は女子に必須なものでございますけれども、腦力のたんと要らぬこれらのことは年を取つた後でも覺え悪いことはありませんから妙齡の内に腦力の要る學問の方をみつしり修めて置くに限ります。女子自身も父兄もこの點に注意して時期を誤らぬやうに考へられたいものと存じます。

▲料理の教へ方

私方の料理教授は一週間に一回で、十二回で卒業、毎回四五種を教へその度毎に必らず生徒各自の調製品で會食することにいたし、毎土曜日午前九時に稽古を始めて十二時に會食、午後も矢張三時間の稽古で晩食を喫することに定めてございます。この會食の際に食卓の裝置、料理の持運び、食べ方等を覺えさせるのでございます。食べ方なぞは常識で考へても列席者の振を見ても分るやうなものですが、熟練しませぬと一寸の手形も無細工に見えることがあります。假令ばスープの皿へ手を添へるにも外國人は皿をつまんで手の脊を表側へ向けるやうに持ちますので指環なぞも現はれ誠に美しい手形に見えるのでございます。洋食はこのスープ皿の持方で經驗の有無がよく分るものです。些末なことでも社交の體面上一通り心得て置く必要がありませう。

▲料理に道具立は要らぬ

好い食物を執るのが體育のために必要だと申しても

無暗に高價な品を求めるには及びません。料理方一つで如何やうにもなるのでございます。假令ばスープでも牛鳥肉等の他に季節に應じて幾らも手輕な原料で作ることが出來ます。冬分はバカなぞ尤も宜しく、舌を細びいて汁に散せば一寸美しふございますし、出しがらをメリケン粉と團めて揚げたのも好味でございます又鹽鮭を炙り細かくむしつてゆでた馬鈴を擂りたのと混合し、金鍔を燒やうに胡麻油でジリ〱と燒きます

粟津の松原の古蹟



と却々甘しく、菜でも附合せれば結構な滋養品として食卓に上せることが出來ます。而して料理の道具もテンピやフライパンがない場合には土鍋と七輪でも間に合ひますから學んだ料理法を活用して身分に應じた滋養食を工夫することが肝要です。

△鉛筆の先を尖らせる技倆

私が多年女子を敎へて感じましたことは、頭腦の判然とした者の少いことゝ、男子より不緻密なものが多

いことでございます。假令ば女子は教へた事柄が解つたか解らぬかと尋ねましても判然とした答をいたしませず、或は解らなくても解つた風を爲て誤魔化して了ひますから教授がいたし悪くつて困るのでございます。私は英語熱の盛んな頃、男女各々十五人づゝの混同教授（但し晝間だけ）を試みたことがありましたが男生の方は私の心付かぬ微細の點までズン〳〵質問いたし、解らぬ内は遠慮なく幾回でも解釋を迫ると云ふ風ですから、女生はこれを傍聽するだけでも餘程力がついたやうでした。凡て質問なぞに就きましても男子の頭腦の方が餘程緻密であることが分ります。鉛筆の先を尖らし、紙包をキチンと拵へる技倆は男子の方が勝つて居ると云ふ俚諺がございますが畢竟女子特に近來の女子は雷同的に學ぶものが多く忠實と熱誠を缺いて居るために頭腦が自然粗末に傾くやうに思はれます。



婦女界

新年號からどんなになるか

他の婦人雜誌の如く無責任な記事や新聞の三面記事の燒き直しのやふなものは決して載せませぬ。面白い記事、眞面目な記事、美しい寫眞と繪畫は他の雜誌の眞似の出來ないものを載せます。既に家庭をなせる方のためには實際的に役にたつ家政育兒等の記事を。未婚の若い婦人たちのためには結婚前の心得となる親切な記事を。一般家庭のためには男子にも是非とも讀んで頂きたい記事を載せますから。婦人方は勿論眞に理想の家庭を望む男子方も新年から必ず『婦女界』を讀んで幸福な家庭の人となられんことを希望します。

皆さんのお宅で一番喝采を博する

新案結婚双六（しんあんけつこんすごろく）

を新年附錄として添へます……（横二尺六寸縱一尺六寸）

婦女界編輯局の考案で有名な桐谷洗鱗氏の畫

新年號の内容目次は最早發表されたけれども今はたゞ諸君の想像に依して置きます。願くば實物に就て御承知あらんことを。眞實なる婦人の味方として有名なる羽仁吉一氏と同夫人もと子女史は新年からその力を本誌のために竭されることになりました。羽仁夫人は『夫婦論』と云ふ雄篇を毎號誌上に連載致します『夫婦論』の序論とも云ふべき

▲理想の花嫁花婿とは如何なるものか？（未婚男女並に新家庭の必讀すべき十餘頁の雄篇）は新年號に載せます大改善の『婦女界』は如何なる大計畫がなされ居るか？新年の雜誌界をアット言はせる本誌の新年號は今月中に御註文あらざれば品切のため御注文に應ずることが出來ないかも知れませぬ。

質素で高尚で實際役にたつ雜誌

一冊金十五錢（郵税一錢半）六冊金九十錢十二冊壹圓七十五錢（前金）

東京神田表神保町 **同文館** 振替東京一三五番

女（めの一）

松本風琴洋琴ヴァイオリン、ハーモニカ其他西洋樂器音樂書新目録郵劵貳錢送附次第進呈



趣味ある迎年準備

祝福に滿ちたる四十三年も殘り少なになりて多望なる新春の目前に差迫り申候得ば諸姉の友垣に贈らせ給ふ年末、年始の贈答品、さて迎年の準備に心配させ給ふ事と奉恐察候、されど其御心勞も無用の時代に到達致候、ハーモニカ、ヴアイオリン風琴等はクリスマスに年末年始の贈答品として斬新にて高尚なるものに御座候、殊に

松本製風琴、洋琴

は本邦製中最優秀なるものにて音色清朗外裝美麗に候へば清新なる家庭の迎年準備品中缺ぐべからざるものに御座候、亦

新輸入二十錢樂譜

は歐米好樂家に歡迎されつゝある樂譜にて西歐名曲を一曲一部としたるものにして其數一千七百餘有之候 何れも一部廿錢送費二錢にて候間御知友にて或る名曲の譜を求めさせ給ふ方へ廿錢樂譜中にて求められ之を贈物とせらるれば「如何に氣の利きて優しき友なるよ」との厚き感謝を受け給ふべきことと信じ申候

高尚なる新贈答品

東京銀座

松本樂器合資會社

電話新橋二二九八 振替東京一三五〇五

女(その三)

畫報

四六四倍判
本文廿四頁
寫眞刷込み
數度刷
正價金十錢
郵稅金一錢

持に依て扱はれ、政治家も軍人も學者も宗教家も乃至役者も藝者も皆此心持にて誌上に會せしむ。

◎如何はしき刺戟的の記事を以て、讀者に不快の押賣を爲す如きは、本誌の絶對に取らざる所とす。本誌は何人の前にても遠慮なく、如何なる場合にても安心して披見し繙讀し得べきものなり。

◎本誌は何人の家庭にも之を備ふるに適し、其應接間、客間、居間、何れに置くにも可ならざるなし。頭の人にも適し、手の人にも適し、又毫も懸念なく青年男女に推奬し得るものたること勿論なり。

◎本誌を購讀すれば茶前茶後の座談に窮することなく社交界にたえず新奇にして上品なる話題を無盡藏に供給さるべし。又汽車旅行の侶伴としては、蓋し天下復以上の重寶なかるべし。

◎新年初號には、特別餘興として、日本全國新百美人の艷麗なる寫眞大附錄を添へ、數萬部を増刷す。

●日曜の新福音＝週刊の創刊!!

振替口座 東京二四〇

博文館

少女世界讀者諸君此廣告を見落す勿れ

英語少年

好評嘖々たる英語世界の弟分生る

四六二倍判紙數四十頁舶來上等紙
石版極彩色、亞鉛凸版六度刷其他
寫眞銅版及電氣版畫入

正價金十錢 郵税一錢

明治四十四年一月一日創刊

初等程度の英語雜誌は世間にいくらも有るが、何うも皆六かしい、趣味が無い。二三頁と讀むと早や欠伸が出ずには居れません。本誌は新年から新に生れ出る日本一の面白い、やさしい英語雜誌で、樂しみ乍ら英語の稽古が出來ると云ふのが主意であります。編輯は飽く迄斬新を極め、無數の挿畫は美と善を盡し、記事は何れも一粒選りのものばかりですから一字も餘さず面白く讀めるのが特色です。それに印刷は類の無い彩色刷の畫入ですから何れ程光彩を放つか知れませぬ。滿天下の少年諸君が學校外で英語を勉强するに是れ程やさしい、そして面白い氣の利た雜誌はありますまい。

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

幼年世界

ヨウネンセカイ

第一巻第一號

明治四十四年一月元旦發行

お馴染の少年世界も來年は十七と云ふ年を迎へ、少女世界も大きくなりましたので、こゝに弟の「幼年世界」を連れて參つて、小學尋常五六年までの生徒諸君のお相手を致します爲になつて面白い雜誌であります兄さんは弟御に姉さんはお妹御におすゝめを願ひます評判〳〵!!!

ミナサン

ヨウネンセカイハ　ショウネンセカイノ　オトオトデ　マタ、ショウジョセカイノ　イモウトデアリマス、ヨウチエンカラ　ショウガクジンジョウ五六ネンノ　セイトショクンノ　オトモダチニ　ナルノデ　アリマス、ドウゾ　ショウネンセカイヤ　ショウジョセカイドウヨウ　ゴヒイキヲネガイマス。

オカシヨリケツコウナザツシ
タメニナツテオモシロキホン

毎月一回 一日發行

菊判八十頁石版口繪二枚光澤寫眞版二頁

正價八錢 郵税一錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

女(ぬの七)

参版!! 参版

大町桂月先生譯評

新譯文章軌範

箱入ポケット金七十五錢送六錢

永しへに白熾の光熱を放つて文章道を照す者は『文章軌範』一巻也

特色 一本文五號總かな附、頭に原文對照。二毎篇解題及作者の何たるを説く。三毎篇末の自家の批評は一篇の精神を説き含蓄せる思想を闡明す。四難解の辭に注釋を附す。五逐字譯にして而も直譯に非ず六携帶便、紙質上等、印刷鮮明、ポケット箱入總クロス綴天金縁、頗美本。

評（萬朝報曰く） 支那の文集中日本にて最も廣く讀まれ、且つ文章を學ぶもの〻手本とせられたるは、謝枋得が選せる文章軌範に若くものなく、是れが評釋、註譯の書汗牛充棟も啻ならざるも、多くは訓詁の末に走り、之を譯出して初學者の讀誦に便ならしめ、讀書百遍義自ら通ぜしむるもの無かりし、今譯者は苦して之を譯出せるは、故きを温ねて新しきを知る風潮の盛なる折柄、時宜に適したるものと云ふべし、本書は十分讀みこなせる譯文を本文とし、返點附きの原文を頭に置き、彼以對照して讀過の際意義と漢文の表出法とを覺るに便ならしめ、一文毎に記者及日本支那の各家の評語を附したり。

發兌元 東京市神田區錦町二丁目（振替東京二〇七八九）春秋社書店

東京市京橋區中橋廣小路（振替東京四一〇九）文榮閣書店

●年末年始の贈物として本書と共に日記帳を以てせば何物の妙か之に如かん●

水野葉舟著

新様式 日記文範

愛の書簡の姉妹篇

渡邊ヨヘイ氏書 頗美本

四六判三百三十頁

定價金六十錢・・・・・・送料八錢

（附錄）大家の日記十數篇

著者曰く「日記を記さざる一日は其人の生涯より永へに消滅せる一日也」と實にや日記は吾人の内生活史にして確實なる生存の足跡也。誰か足跡を世に留めずして自己を葬り去るの苦痛を苦痛とせざる者ぞ。思へ日記は實也詩也。生涯の喜劇も悲劇も日記に於ては美しき追懐の詩となりて永く其人の慰藉たるべく日記は一日も記さずして措く可らざるもの也。希くば本書に其道を尚へ！

参版

新様式書簡文範

愛の書簡

金六十錢 送料八錢

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路（振替東京四一〇九）文榮閣書店

東京市神田區錦町二丁目（振替東京二〇七八九）春秋社書店

文、のの入）

善光寺大本願 尼宮樣の御日常

清水瑩子

氣骨稜々を標榜として、發カラを以て誇りとした信州も、時代の風潮には逆らひかねて、どうやら面目を改めました、縣内一の都會、長野市も、先づ大道りの大門町を御覧じろ。軒のひくい塗家造りを追々と壊されて、それに代る歐風の三層樓四層樓。飾窓や明滅電氣や、美事文明の都市の姿を整へました。

從つて勝手と茶の間の仕事にのみ齷齪した婦人も目に見えて、社交界に活動し初めました。

何處にでも有るお定まりの愛國婦人會は申す迄も無く。懇親を主とした長野婦人會も盛況を告げて居ます。それらの大達者は知事夫人大山德子の君又市の婦人の發展の焦點たる三美人と云ふのがあります。いづれも位置ある人の奥様で、寶石や綾羅や容姿の美を愈愈美ならしめ、道行く人の眼を奪ひ、見る者の心を奪ふ。其隨一某醫學士夫人を、燕園樣のお筆に成つた、「宴の暇」のモデルとして名高い方。

これらの方々は市の名物とも云へましせが、類を他に求めれば求め得られぬ事は無い。唯一つよそに見られ無い女性を此長野市は持つて居ます、全國幾十萬の信仰を纖弱い一身に集められる尼宮樣。

御參詣に成つた方は御存じの筈。細長いだら〳〵坂を登り切つた向かふに、尊とげな堂宇が聳えて見えませう。雨風に古びた建築は、永い歴史を語り顔な、：：：。三國傳來の如來樣の御尊體はたつた一寸八分とやら、その御身に衆生の渴仰を負される事、さすがは善光寺樣の法力です、三つ彈いた算盤球が卅圓でも三百圓でも無く、此せち辛い世に三萬のお金を其場で寄進に附いた日本橋の問屋さんも有りました、兎にも角にも尊い如來樣のお傍に、日毎〳〵仕へられる尼宮樣の、法體とは申せ花やいだお姿に又隨喜の涙を流さ無い人が有りませうか。私は此地に移り住んで、初めて見上げた時以來、此お方の起臥の消息の一端を知り度いと思つて、其道々の人に問ひたづねましたが、お

居間の緋房重げに垂れたお簾すの内は、此世と隔つた神秘の境、確かに知る事が出來ません。

御生家は俗稱に大宮樣と人が申ます。けれど京都ではなく、やはり東京の御生れ、華族女學校へ御通學行つたと云ふだけは確か。お年は廿五歲。未だいはけ無い十二三の童女にして、昔は恐多くも皇族の姫宮を奉戴したその尼宮樣の位置に据ゑられ給ふた幸福を讚するのは、情緒の枯木に成り懸つた珠數つま繰る連中、おいとしいと涙をこぼす方が人情でせう。考へても。御覽遊ばせ、頰ずりするお人形の上へ、房々ゆらぐ黑髮は、剃刀の跡青々と剃り落して、花鳥の色も無き色の白衣に重ねた紫のお衣。僅に紅の名殘を止めた緋金襴のお袈裟。世間並みのお姫樣に思ひくらべたなら、實においとしいお身の上です。

それはかりではありません、日毎〳〵のつらいお勤め。宵にいけた炬燵の火の、其まゝ黑く消えた寒さ。重ねた夜着の中に膝をちゞめる曉の枕に響く太鼓の音。

「あゝ大本願の太鼓がなる。お上人樣はもうお目醒めに成るのねへ。」と獨言まじりに云ひ合ひますが、さぞお辛いでせう。直ぐお風呂に召して、如來樣に近付き奉る。清淨の御身となられて、お粥の膳に向はれて。表には肉食妻帶を戒められても、お注連掛け渡した軒から、お魚燒く烟のもれるが當世ですが、此所ばかりは嚴重なお精進。それも事そいで梅干位でおすましに成つて、扨てお上り。

お住居の大本願は御堂への入口。もとは仁王門の有つた邊りで、本堂へは一町餘り。先づ江戸の昔、大名屋敷の長屋門からでも出て來さうな、菖蒲皮か何かの法被を着た先拂ひが二人、續いてお付きの尼樣黑や萠黃の衣をまとつて從ひます。副住職の出られる時には此方が先に、次に朱の臺傘をさしかけさして靜々お上人樣、拔ける程白いお顏。聳えたお鼻と引締つたお口は十分の威嚴を保つて、涼しい中に露を含んだお眼に、相憐を表していらつしやる、寒さの折には紫縮緬の頭巾など召します。羽織袴の役人やら何やら廿人程の

行列はまだ薄暗い山門を通つて、御堂に入られると、無明の夢を醒ます様な鉦鼓の聲が、神々しく響き渡ります。サア善男善女、此時に進はずばと云ふ勢で押し懸ける。此所も浮世。少しばかりでも寄進に付いた者は、内陣に入つて尼宮様の法衣の裾に近い後に坐れるのです。晴夜に輝く星と照り映えた蠟燭に、尊さ添ふ雲形金襴の帳之を開く權を持つ人は尼宮様以外、大勸進の僧正あるのみ。併しそれはお開帳佛と云つて御前立ち。奥の〳〵御本體は、七年に一度の御回向に御開帳が有ると云ひ、矢張り御前立ちの一つとも申します。それを開くのはお上人様の特權です。

それからお御酒お十念のお授けが有つて、やがて御下向なんですが、初めて此お朝陣に行つた私は驚きました。本堂前の敷石の上に、ずらりと蹲んだり中には土下座をした一列。まあ何をするんでせうか。さすがは信心者。難有い尼宮様を拜むのだな。とあて推量して愚なる迄の渇仰を、心に拜しながら見て居ると、そこへ先の通りの行列で出ていらした。湧き起る南無阿彌陀佛の唱名。一齊に手を合せて伏拜んだ老媼達の頭の上を、雪と白い房をたれた水晶の珠數が撫でゝ行くのである。此連中はぞろ〳〵後に付いて、大本願の本堂へ上り込む、此所で又一しきり讀經が有つて奥へお這入りになるのですが未だ〳〵お役目はすみません。先祖の回向とかお剃刀頂くとか、死ぬ時持つて行くお結脉だの經帷子だの、いろ〳〵の品物を頂いて行く人たちは、奥迄行つて授かる。猶寄進の金高によつては、お居間近い廣間で御面會が有るのです。

之れがすむともうお午。特別の團體や講中でも來れば又お堂へお上りに成るのですが、大抵は午後から小さな尼様に糊を押させて、お細工物なんぞなさいます。之は町の人々から進上物へ、心ばかりの返禮に用ひられるのです。少ないお手元金には、十分な御交際もなさり切れ無いと云ふ事。多額のお金が上るのにと不審に思はれますが。執事とやらの某さんには、緋緞子の布團へ木魚の様に肥つた體を据ゑて居られます。—夜のお勤めはほんのお内佛。これからやつと御自分

の御身體にお成り遊ばす。他に十月四日から十日間のお十夜。大きな箱提灯つけて、晝間よりは澤山のお供ぞろひでお上りなさる。いつも權勢爭ひの絶え無い大勸進方から。切石を投付けた事が有つたとやらで、辻辻の警護は嚴重でございます。

外から見ては隨分と骨の折れる日課を、繰返し〳〵お勤めなさるのは、矢張り御苦勞に思召すでせうか。只僅かに。休息なさるのは月の内に定まつた五日六日だけ。お樂しみと云つては執事の許へ集る、天狗連の謠曲を幾聞か聞いてお聞きに成るか、年に一度の女學校の運動會、之も特別にしつらへた場所に屏風引めぐらして、其中で御覽になるのです。此春は市の公會堂城山館で催された觀世の能へいらした。こんな事は異例です。若しこう云ふ事が尼宮樣の娯樂として適當なものならお蔭をかうむつて生活して居る、幾何の市民は、此方の爲に年に二度や三度の運動會や能樂會を開いてもよからう、と私はしみ〳〵思ひました。近く郊外の箱清水と云ふ所へ、別邸が造られて、稀には此所で清興を樂しまれます。紫のお被布に同じお高祖頭巾と云つた風で、お供は男女五六人の事があります。裏の山つゞきで蕨を折つたり、花を摘んだりそれが無上のお樂しみなんでございます。つまり無いと云へばつまり無い生活でせうが、權門富貴の姫君とてあらまし定つた運命の型から、のがれる事の御出來になら無い女の御身です。纖弱い雙の肩に、數知れ無い老若の信仰を荷ひ玉ふ尼宮樣の勢力は、羨しくも亦類の無い御責任の重いお身の上では有りませんか。そして自らも、確固とした信念の上に、無上の樂土を見出でゝ居られるなら、よそ目には似無い安樂境に、感謝の日を過していらつしやるのでせう。私はいつも〳〵さう思ひます若し尼宮樣のお口から、御所感の一端を伺ふ事が出來るならばと。

としふりて木の身ならぬ心には　　眞潮
春の音の春なやはまつ

身につもる君も忘れて待るゝは　　千沼
たさなむにかへる春かも

大塚楠緒女史の追懐

佐佐木信綱

艶麗の筆を以て多年文界に異彩を放たれました閨秀作家大塚楠緒子女史は、十一月十二日を以て大磯の僑居に病歿されました。光彩ある藝術家、多藝なる女秀才、三十六年の短生涯は惜みてもあまりある悲しさにたへません。こゝに女史と師友の交情淺からざりし佐々木信綱先生をお訪れして追懐談をうかゞひました。

暮れ行く秋の雲の色もさびしく木の葉が散りそめて、さらでだに物のあはれの胸にしむ今日この頃、大塚楠緒子の君を失ふたことは、私に取つて限りない悲みであります。

顧ると女史が初めて竹柏園へ來り學ばれたのは十六歳の春で、今年三十六の秋に世を去られたので、丁度二十年の長い間の親近で、かく語りつゝもそゞろに追悼の情に堪へず考も亂れるやうに思ふ。

容儀もあゝした立派な仁、其に美しい心を盛り、女としては過ぎる程な學識を有つてゐられ、尙ほその上にあれだけの文學的才能を有つてゐられて、婦人としては申分のない人であつた。

女史の父君は名古屋、宮城、東京等の控訴院長をせられた大塚正男氏で。女史は其長女である。

父君の赴任中は母堂と共に、麹町一番町の邸に住んで富士見小學校に入り、次で共立女子職業學校に刺繡、繪畫を學び、翌年當時まだ一橋に在つた女子高等師範附屬の高等女學校に入學して、同校が今のお茶の水に移轉した年に首席で卒業せられた。

で、卒業後今の博士保治氏を夫に迎へられたが、程なく博士は獨逸へ留學されることになり、其留守中の女史は、唯無爲に日を送るのは夫の螢雪の苦に對してもすまないと言ふので、英語を松野フリーダ孃に就いて修め、傍らピアノと獨唱とを學び、後フリーダ孃が結婚されたので英語は明治女學校に通ひ、ピアノは音樂學校教授橘糸重子女史に就いて學ばれた。繪畫にも趣味が深くて、最初跡見玉枝女史に、後橋本雅邦翁に學ばれました。嘗て展覽會に觀音の像を畫いて出され

た事があつた。

女史の一生は、極めて平和な幸福な充實したものであつた。良家に人となつて、而かも名譽ある學者の夫人として家庭も平和に、四人の子供の母となつてはよく子らを愛育せられた。主人の博士は學者だけに家事には頓着されない人であるから、女史の負擔は普通の家の主婦以上に重かつた譯で、其負擔を負ひながら、尚ほ餘裕を剩いて文學上にあれだけの仕事をされたのは普通の女子に出來難いことであると思ふ。然し女史は常に文筆に離れなかつた人であるが所謂趣味を追ふのに急で、主婦としての家事を留守にするといふやうな缺點は無かつた。女史に取つては家庭が第一で文藝が第二、家庭整頓の餘裕の中に文學があつたのである專門家――男子の藝術家から觀たら或は藝術を輕んじるといふ譏があるかも知れませんが、女性として一家の主婦としては然うあるのが當然であらうと思ふ。

友達との交際も極めて圓滿な方であつて、學者の妻としての境遇が境遇だけに、外交官の夫人などのやうに社交的ではありませんでした。が時々さう多數でない集會を家に開いて、學者や文藝の士を招かれた事があつた。自分もたしか故藤岡博士、中島氏新海氏などゝ度々招かれた事があつた。また元良博士夫人と共にすみれ會といふ會を起して、桑木、姉崎、上田(敏)博士など大學の敎授助敎授の夫人十數名が月々順々に其家々に集まつて、實際家庭に應用し實行出來るやうな問題を語りあつたり、又專門家の講話を聽かれたこともあつた。

旅行は夏の避暑は必ずして、伊香保を最も好いて書かれた小說の中にも同地を背景に取つたのがある。鎌倉にも行かれたが、一昨年の夏四女のすみ子さんが彼處で發病して以來、其後は大磯へ行かれたが、遂に大磯が悲しい終焉の地となつた。

女史は夙くから文章に巧みであつた。竹柏會に來られて間もなく、英語讀本の譯案であつたらうが、或る幼い子供が人形を持つてゐた。それが弄んでゐる中に次第に垢くなつて來た。それで子供は常に母が洗濯

して汚れた物を綺麗にするのを見てゐたので、其を應用して人形を水に浸して洗ふたが、勿論其結果はよく無かつた。で母親に泣いて訴へると、母親は何等かの人生の教訓をするといふ筋で書かれた。幼い人に似合はぬ巧な筆づかひに感じた事を、今に記憶して居る。しかして美文スケッチの類をつぎ〳〵書いて居られたが、彼の故一葉女史の作風を慕ひ、其作を愛讀して居られた故、小說を試みてはいかゞとすゝめたに其折から博文館から閨秀小說を發行するに際し、その中に發表されたのが處女作であつたとやうに記憶する。

次いで小品を澤山書かれたが、それは凡て「晴小袖」一卷の中に輯めてある。後萬朝報のために筆を取つた「露」といふ長編がある。これも單行本となつて刊行された。次で東京朝日新聞に掲げられた長編「そらだき」「同窓編」等がある。又隨時心の花、趣味、明星、帝國文學、早稻田文學、東亞の光、其他各種の婦人雜誌に始終筆を取つてゐられた。女史が最後の長編「雲影」は大阪朝日新聞の賴みで三十回ほど出來て居たが、全部完結してから掲載したいとのことで其儘になつてゐるうち、病氣が發して再び起たず、遂に惜しい未成品として殘つた。

それで女史ははじめ一葉の作を慕ひ、次で硯友者の全盛期に會ふて紅葉山人の彩筆を崇拜し、近頃では夏目漱石氏の作風を崇拜してゐられた。これは夏目氏と夫の博士とが親密な仲であるためも伴なつた事と思ふが、かの「そら炷」には漱石氏の「虞美人草」の筆致を學んだやうであつた。作は極めて早い方であつたが所々の雜誌などから原稿を賴まれると、厭と拒絶ることの出來ない性で、氣の進まぬ時も義理に書くと言ふ風がありました。それは全く斷りかねての女の優しい氣からであつたのである。一時多作に過ぎるやうに思ふて最少し作を減じて、苦心洗練の作を出されたらばと云ふた事もあつたが、依然斷りにくかつたものと見える。隨つて然う言ふ風であるから、發表した作必ずしも皆女史の滿足したものとはいへぬ。また新聞の小說の讀者の迎合を頭に置いた態度の見えぬでも無い。

去年頃から自身も其事を感じられたと見えて、作品の上で一轉化したい、新らしい試をして見たい、と言つてゐられた。現に此夏大磯から送られた長い手紙の中にもそのことが熱心に書いてあつた。

元來が十分の修養があり、多年の基礎があり、それに才氣がある人であるから、一度奮發して猛進せらるれば確に新らしい眞の人生を觀た作が出來て、巧に書衣を脱ぎ得た人であらうと思はれる。博士の話によると、少し病氣がよくなつたら、又筆をとりたいと數冊の美くしいノートブックを持つて行かれたが、臨終の枕邊にそれが殘つて居た。遠逝の後もしや何か書いてあるかと博士が開けて見られたに、いづれも白い紙であつた。よく／＼病氣が苦しかつたものと思はれたと涙ぐんで話された。聞くも涙の種子である。

脚本の方にも書き試みたいといふ考があつたので、舊く佐々君の編輯せられた文藝界に「綿帽子」と言ふ喜劇を出され、其他にも數編遣つて居る。英文の方も達者の方で、まだずつと以前海外文學の輸入が今程でない以前、夙くマーテルリンクの「タンタジルの死」、ゴルキーの「業屑」の翻譯をしてゐられる。尙ほ女史の作で何であつたか覺えぬが、藤生貞子女史が英文に翻譯してあちらで出版されたものがあつたやうにも聞いて居る。

次で短歌の方は、明治二十三年亡父が丈夫でゐた頃に入門され、當時父の門下の服部博士夫人繁子、岡山高等學校長酒井夫人愛子、前ベルギー公使加藤夫人孫子、橘糸重子女史などゝ共に學ばれてゐた。其後小說に筆を執られてからは、折にふれて作られるに過ぎなかつたが、今年一月十一日わが竹柏會歌會の發會の日、雪が小止みもなく降つて居たが、女史も滅げずに來會されて大勢集まつた舊い歌の友達と話して歸られた翌日二十首ばかりを送つて寄越され、それから月々詠まれて、四月以後の病中にも作があつた。

なほ新體詩をも古くから作られて、その秀逸は竹柏園集第一編第二編及び、あけぼの、玉澤の數卷に載つて居る。日露戰爭の當時であつた。一編の軍歌を太陽

誌上に揭げたが、戰地にあつた某將校が其を見て非常に勇壯な作であると感じて作曲をさせたが、非常な流行で某地の戰鬪で某隊が其軍歌を歌ひながら突擊したとのこと。凱旋後その將校が記念として贈つた陶器の花瓶がいつも女史の居間の床に飾つてあつて、妾のやうな者の書いた假初め作が我皇軍の志氣をよしいさゝかでも鼓舞し得たかと思ふと非常に喜ばしい」と言つてゐられた。花瓶も歌も殘つてゐるが、女史はもう他界の人である。



女史は生來才氣のあふれた方で、文章の技巧の巧妙な點は天才と言つても過褒ではあるまい或は一面餘りに才の有餘つたため技巧が進步し過ぎて作全體の上に禍したかとも思はれる程である。勿論一面の取材乃至創作的才能も豐富で、其感受性も極めて銳敏であつた。或る時の

話に、子供を抱いて、湯槽の中で洗つてやつてゐながら、若し今ふと手を離したら子供は溺れて死ぬであらうと冥想して自分ながらゾッとした。で其晩すぐ筆を取つて書いた物が、題は忘れたが、或る貴族の夫人が海岸で一人の愛兒を海水に取られたので、人々をして炬火を點しながら、暗い夜の海の中に探らせると言ふ筋のものであつた、私は其を聞いた時、餘裕のない主婦生活にゐながら、而かも或る暗示を捉へるに鋭敏な女史の感受性に感心した事であつた。

尙ほ女史は手紙を書くことの上手な人で、文章の一種面白い運び方は勿論、書風も極めて巧であつた。自分の許に送られた書狀や橘女史峯夫人などに送られた手紙を集めたらば、一編の面白い書翰集が出來るであらうと思ふ。

料理もまだ日本の家庭の婦人が餘り注意しなかつた頃から心掛けて學んで居られた。十數年前、夫の博士が獨逸から歸られた祝宴に狩野博士、菅、中島、山川氏、中村進午博士などゝ共に招かれたことがあつたが其が丁度八月十五夜で、それに因んだ日本料理が女史獨りの工夫で極めて上手に出來てゐるのに驚かされたうへ、食後に出された西洋菓子――カステラを種にして其上に白い砂糖を蒔き、上に赤い砂糖粉の英語で、「祝」の詞句が巧く書いてある、當時に珍らしい趣向に再び驚いた事があつた。一體に器用で獨創的な才があつたので、友達が寄合つて、異つた風な珍らしい袋物――信玄袋などを持つてゐるのを見ると、よく見てゐるが次に落合つた時には、きつと其に似た袋をもう一層獨得の新工夫の加はつたものとして持つて來てゐられると言ふ風であつた。

女史の性格は、前にも云うた如く、女史の父君は土佐の人で、元來土佐の武人は男子幼にして切腹の作法を敎へるといふ程な氣風があつたせいか、女史の性格にも然うした心の內の强い閃があつた。けれども然ういふ婦人によく見る外面の倨傲といふやうな傾きは少しもなく、表面寧ろ正反對の優しい人であつた。彼の「晴小袖」が單行本になつて出た當時、束髮をやめて始

終日本髪を結うて來られた。ある時怪しんで問うと、「晴小袖」の表紙繪の女があんなに突出した庇髪を結うてゐるので、若したまゝあの晴小袖を見た人があつてあんなハイカラな自分と思はれては殘念であるからと微笑みながら答へられた事があつた。

召使の婢などに對する女史は（常に三人ぐらゐの召使が居た）普通の家庭に見ない程に勦つて暇があると、習字讀書などを自分で敎へてゐられた。長女雪江孃の乳母などは女史のしつけで或商人の家に嫁してゐたが、今年の春病氣をして困つて居たのを、高輪病院へ入院させてやられたが、女史より前に世を去つた。二女の綾子孃の乳母が孃の成長後乳母が要らなくなつても奧樣の側を離れたくないと下女奉公をして、時々讀書を女史から敎はるのを此上ない幸福としてゐた。今度の病氣の最初大磯の大内館と言ふ旅宿に居られた頃、宿に宿屋の娘らしくない擧止、



靜な優しい娘があつて、よく女史になづき、女史が第一回に歸京する時今少し居て下さるやうにと、出立の前の晩泣いて別を惜んださうである。本月(十一月)の三日の午後自分は女史の病を大磯に訪ふた。虎の石の傍の家で、海のよく見える、浪の音のなつかしく響いて來る二階に寢てゐられたが、元氣好く、色々文學上の話から雜話をし、病氣が治つた後の抱負なども語られた。其やうにしつかりして、顏の色も勝れてゐるので、自分は悦んで歸京したが、其翌日早く端書が屆いた。

　籠り居は松の風さへうれしきに心つくしの人の音づれ

と書いてあつた。然るに思ひきや、此が女史の絶筆に成らうとは。後六日を經て悲しい凶報をうけねばならぬ運命になつた。あゝ。女史の逝はいふ迄も無く大塚家の大なる不幸であるが、わが竹柏會にとつても女史の如き才媛を失うた事は實に痛歎の至である。否我が會のみならず閨秀の文壇にとつて大いなる不幸である。

記者が先生をお訪れした時、丁度女史生前の親友華ドクトル夫人百合子女史がお子さんを連れて先生をお訪れになりました。次に記するのは華夫人が佐々木先生の追懷の連想を點々綴ぶて語られたものでございます。尙ほ楠系取子女史からも佐々木先生に宛てた長い追懷を訴へた優しい手紙が來てゐました。

實は今晩も獨りで宅で坐つてゐると、楠緒子さんについて色々生前の事が追掛け〳〵思出されて居堪らないので、せめて此の先生でもお訪ねして色々お話を伺つたらと思つて參つたやうな次第でございます。

最初先生の御家から電話でお知らせ頂だいて、それと承つて鈴の音をならしたあとは、何とも言へぬ悲しさに襲はれました。去年あの弘さんと言ふ男のお子を始てお產みになつた時、私が祝にお訪ねすると、子供がふえてもそれにかまけた風はすこしも見えない、話はいつまでも文學談ばかりなので、男のお子様が生れて文學談よりか顏を見せて下さいとお願ひ致しますと、「見なくつたつて、目が二つ鼻が一つ口が普通にくツついた人間の小さいのですの。」と笑はせなすつた事

があります。この語は楠緒子さんの全體の性質のよく表はれたものとして覺えてをります。無意味の世辭のやうな詞はついぞうかゞつた事が御座いません。一體に諦めの好い方で、隨つて宗教觀念も抱いてゐられなかつたやうです。所謂宗教を要求したい程逆境に立つた經驗のない方であるのと、性質が明るくつて物事に深い執着がおありでなかつたため宗教の必要がなかつたのだらうと存じます。それはどちらかと申すと氣爽な方でした。

それに大層物事に器用で被居つて、今私が持つて居ます、此絹糸で編んだ財布なども、楠緒子樣が編んで下すつたので、今となつては想出多い片身で、何でも珍らしい物があれば必度自分で拵へて御覽になりました。いつぞや、テーブル掛が氣に入る品は非常な高價であるから、自分で編んだと申されて、花つなぎの見事なのを用ひてありました。それに昔からお玄關の障子の手かけの處が普通の十文字にきつてなかつた事です。或時は百合の花又クローバーの葉のかたちなどがはりかへの度毎に變つて居りまして、お取次の女中をまつて居る間いつもみとれてをりました。

先達てのお便りの中に訪ねて吳れて嬉しいといつもよりなつかしげに書いた終りに、近頃雜誌「スバル」に發表される小金井きみ子、森しげ子又かの根岸派の野上彌重子などの作を注意して讀めと書いてゐられました。あゝした才の豐富な上に、素養もあり、殊に力の強い方でしたから、今少し長生されたら、屹度新らしい文藝の潮流に棹されたらうと存じます。其事——自己改新がしたいと言ふことは近頃折にふれて度々申されました。いはゞ自己改革の潛伏期、過渡期にゐられた譯で、それを思ふと一入に愛惜の念に堪へません。自身で眞に滿足された作は遂に書かずしてしまはれたやうに、親しく其お頭腦の具合を伺つてゐる私達には思はれます。それかあらぬかいつか私をお訪ね下すつた時にも、大層立派な何かの科學の原書をお讀みになつて被居いました。それは勿論創作の改新的素地をお作りになる勉強であつたのでございます。いつか華

族會館で竹柏園の大會があつた時、丁度滿開の櫻の下の萌えた芝生でみなさんと、寫眞をとりましたときベンチを並べて、馬杉靑琴女史に楠緒子さんと私がならびましたが思はぬ最後の記念になりました。馬杉樣は逝かれるし、此度またこんな事になりまして心細さお察し下さいまし。

尙ほ文藝以外大塚さんは繪畫がお出來になるので、お召物の色合の配合などいつお目に掛つても大層調子よくお扮裝りでございました。まあ意氣な方でしたが品格が高う見えました。繪畫の方は文學程に世間に知られてゐませんが、平常小說なら鉛筆と紙さへあれば臺所に居ても書けるが、繪畫は色々道具もいる、部屋もいる、時間もなか〳〵であるから、主婦として出來かねると諦めて被居いました。

お子供樣方は自分で好でするならそれにまかせるが餘り智慧の實は與へない平凡な者に仕揚げたいと言つてゐられました。才氣强い御自身の內心に人生と學問との格鬪が幾らか苦しい氣持をお與へ申してゐた故なのかとも存じます。

昨年の文部省展覽會に出た橫山大觀さんの例の「流燈」が私大變氣に適りましたので、石川玉溪女史に頼んで模寫して頂きましたが、いつか大塚樣がお訪ね下さつて、床の間の其を御覽になつた時、「貴女これを可いと思つて被居るのですか。妾こんな繪は、唯大きな目が六つ光つてゐる外、何にも印象をうけませんよ。」と仰つたことがありました。一體が思つた事は或程度までこんな風に快活に言つて除ける性でゐられました、而かもそれが他人に惡感を與へぬ位の氣合は大塚樣の才媛であつた特長であると思ふて居ります。模寫の眞物に及ばぬ點もありませうが、成程さう言はれて見ると、六つの太い眼があると申て笑つた事で御座います。日頃の會話にもよく警句に富んだ方でそれが一向に氣障でなかつたやうでございました。

左樣でございます。食物の事は餘り口にしない嗜みある方であつたので、何がお好物で被居つたか覺えてゐません。下町の物は味いと仰つて何んでもあがりま

した。所詮楠緒子さんは文明の過渡期に立つた只今の日本の家庭の主婦として、最も進歩して而かも弊害に捉はれない理想に近い方であつたと存じます。よく往來してゐたものを、これから先私はどれ程淋しい思をするのだらうと心細さに堪へません、最も女らしいお心構へと感心して居りましたことは作物にモデルを置かない主義だと屢々作つたことです、他の作物に一見之はさる家庭をうつしたものであるとか、誰やらの境遇にそつくりだといふやうな評を聞くけれどもまことにあるまじき事と思ふ、實寫にこしたことはないそれを捉へてかけば樂であるが、併し知己や朋友のおもかげがさしてはすまないから可成身邊に遠い性格ばかり心がけてゐると申されました、種々窮屈な中にお筆をおとりになるのですから今一ト息とおもふところもおひかへなさつたと推察いたさるゝむきも御坐いました。

何かお友だち顏につまらぬお話を申して却て故人の御迷惑にならうと恐縮いたします。（十一月十七日）

小春日和

胡蝶

常になくよく晴れ渡た日だ。かうやつて一日家の中で暮してしまふのも勿體ない様な氣がするので、上野をおねだりした。

思ひきり根の上たルイザ巻に白琥珀の、リボン花に結びて……空色のパラソル右手にかざしながら兄様と父上と三人で。

大變な人出だ事。軍人學生、商人、紳士、ありとあらゆる階級の人が集まつて上野は、今し、人の共進會だ。

春の上野は花やかに、ゆきゝの人も、上ついた何だか、だらしのない人ばかりに見えるけれども、秋!!此頃の上野は、緑こき常磐木の間がくれに、紅葉した櫻、いゝ、もみぢが顯り映えて不忍池畔の秋景色、詩趣ゆたかなる仙境だ。

入場券求めて展覽會へ入る。引きぞわづらふ花あやめ、いづれを甲、いづれを乙とも、わかぬ達筆畫才、たゞうつとりと見入るばかり。蕉園さんの秋の調、何とも云ひ様のない音！我を忘れて立ちつくしてしまつた。

「ネー兄様　いつ見ても蕉園さんのは、よう御座いますねえ」

ナふり返て見たら、まあ私とした事が、そゝつかしい。いつの間にやら父様と兄さんは他へいらしつてしまつて。見も知らぬ、マトキユリトの方に話かけて居たのだ。ハツと耳の根まで赤くしてしまつて。

「まあ失禮を……御免遊ばして……」

「ナどう致しまして……」

快活におつしやるので、なほ更氣まりが惡く穴あらば入りもしたき心地がして、急ぎ、すり拔けて父樣はと見ればもう次の室へと、

「兄樣てばひどいわ。置き去りになすつたものだから私、大變な事をしちやつてよ」

「エ？どうしたの？」

「兄樣かと思つて知りもしない人に話をしてしまつたの」

「アハ……… だつてあんまり露さんがおそいのだもの……あはて者だれえ………」

だつて仕方がないわ、夢中だつたのですものアもう油畫の所へ來てしまつた、不折さんの槃諾迦尊者の前は人で埋りさう、

「露さん、このネルの着物の女て云のは渡邊與平としてあるだらう？」

「エヽ渡邊としてありますわ……何故？」

「與平さんのワイフを書いたのだつて」

「マアさうですか、どうも與平さんにしては名字が違ふと思つて居りましたのよ」

「だからワイフの苗字と自分の名とをつけたんだつて」

制帽の御首をすこしかたむけながら、ぢつと見つめてらつしやる

「さう？女でこの位書けたらいゝわれえ」

「御前も書いたらいゝぢやないか」

「ホヽヽヽ繪葉書一つ滿足に書けないものが」

「僕が敎へてやるよ」

「エ？兄樣が？ホヽヽヽヽ兄さんに敎はる位なら外に澤山大家がありますわ……御門違ひよ」

「また惡口の競爭をして居る、サアもう出ようよ」

父樣が笑ひながらベンチに腰かけて居らつしやる。

「父樣、これから向島へ行きませう。ボートがありますよ」

アさうさう、今日は早稻田のレースだつたつけ。すつかり忘れてしまつたわ「エヽ行きませう。ネ？父樣いゝでせう」

とう〳〵父樣を說きつけて、淺草行の電車に乘る。込むこと込む事。皆滿員ばかり、やつと鮭になるの丈は免かれて、肩をすぼめて端にかけた

「露、春擧のがよかつたれえ。然し非賣では仕方がない」

御氣に召したかして、山元さんのばかり、賞めてらつしやる、矢張父樣は日本畫の方へ力を入れて御覽なすつてたが………

先き人違ひしたのがをかしいやら、恥しいやらて、獨下向いて笑て居たら。「露さん降りるんだよ」

おやと思て首をもたげるともう雷門、、、そゝくさと降りたちてサツとパラソル打開く。吾妻橋から向島の方を見やれば、リボンや黑い頭で土手を埋めて居る、皆艇庫の方へと足が向ひてる。ヅドンと一發。レースは開かれた。どちらも一生懸命。オール持つ手の鮮やかさ。

「露さんどつちか勝つ？」

「エ？さうれ私　赤が勝つと思ひますわ」

「僕は靑だと思ふよ。若僕の方が勝たら、如何する？」「どうもしないわ」

「そんな冷淡な事があるものか。勝たら、おしるこに、餅菓子 に それから………」

「ホヽヽヽヽまあいやだ、喰しん坊れこんな所で大きな聲してをかしいわホヽヽヽヽ」

衣服と表情

文學士　菅原教造

これは通俗心理學講演會に於て菅原文學士が「運動の美と衣服」と題し講演せられたるものゝ梗要なり

△衣服と精神の延長作用

衣服の運動美を述べる前に、先づ衣服と吾人の精神作用との關係を申上げます。假に電車にでも乘つて、他人に羽織の裾を敷かれたとする。其時グイと裾を引張ると共に、自分が踏敷かれたかのやうに不愉快な氣がする。又卷莨の吹殼を道に棄てた時などでも自分でそれを踏消せば何ともないが、若しそれを見も知らぬ人が、殊更に踏みにぢつたとすると、自分が蹂みつけられたやうに不快な感じがする。其他座布團でも帽子でも、撲たれたり蹴られたりすると、身體には何等の痛痒を感せぬけれども、精神には甚だ不快を感じます。之に反して衣服なり所有物なりを他人に褒められると、自分が褒められたよりも嬉しい場合がある。これは畢竟自己の精神が身體以外に延長して、衣服や所有物の上に働くのです。心理學者は這の精神の膨脹する狀態を自我の擴大と稱して、我の精神は全世界までも延びるものと說いて居ります。即ち他人に一家を犯されゝば一家の上に心が働き、一國を冒されゝば一國の上に精神が働くといふ理窟になるのであります。

△衣服を活物と見做す

この自我擴大の觀念は單に自分ばかりでなく、自分と密接の關係ある人の上にも及ぶものです。昔平の景淸が、敵の大將源賴朝の衣を刺貫いて、せめてもの無念晴しをしたとの話がある。之は敵の魂が衣の中にあるものと見做して行つた一種の精神作用です。菅原道眞が遠島流罪にされた時　天皇より恩賜の衣に涙を濺いで、遙に皇居の空を伏拜んだと云ふ事實や、赤穗義士の赤垣源藏が亡兄の衣をその人と思ふて、禮拜したといふ話の如きは、總て皆な衣服を人に擬ふ精神

の擴大作用です。

生命のない衣服を活た物の如く見做した實例は彼の刈萱物語の中にもあります。石童丸が互に顔も見知らぬ父を尋ねて高野山へ上つた歸りに、實父の刈萱道心と途で行逢つた時、二人の衣と衣とが縺れ合つた。そこで父は子を見送り、子は父を見返りがちに、親子と知らずして別れたが、然し相互の衣同士が父子の緣を知るかのやうに、巧みに書現はしてあります。かう云ふ風に生命なきものを活けるが如く見做すのは、想像力よりも感情の作用が多く伴ふものです。

△衣服に伴ふ感情の表出

一體衣服には形（體格）の美を現はすものと、運動の美を現はすものと、それから形と運動との兩方の美を兼ねたものと、かう三通りあります、形の美を示すのは洋服とか、シャツ股引の如き身體に密着した種類です。運動の美を現はすものは舞衣、お能の衣裳、垂衣、振袖、朝鮮服の如き寛濶した物でなければなりません。又形と運動の美を折衷して現はすものは、筒袖に袴、法被に股引と云つた風な上半身と下半身と一致しない服裝がそれです。而して運動美を示すところの寛濶した衣服は、主に上中流社會の人に用ひられ、筒袖股引の如き身に密着した物は、中流以下の勞働者に多く用ひられてゐる。そこで此の三つの服裝の内何れが最も優美なりやと云ふに、無論運動美を示すに適する舞衣、振袖のやうな種類です。

例へば彼の獅子舞などは、萌黄の大きな風呂敷様の巾に、牡丹や狂ひ獅子を白抜きにしたのを被つて、その巾の動かし方一つで巧みに獅子の死んだり活きたりする表情が現はれます。又支那風のダラリとした衣服や、軍人のマントの如きも、手足を動かす表情が細かに現はれるやうに出來てゐる。婦人の服では彼の裲襠と稱するもので、之れは多く遊女間に用ひられてゐるが、此の裲襠の着こなし方と、袖や褄や裾等の運動する狀態によつて其女の境遇と性格とを推察する事が出來ます。それ故衣服の種類と、精神の表情とは直接の關係

があるものです。

△頭髪の表情作用

次に身體各部の動かし方によつて、精神の表出を見られます。先づ頭部の運動に就て申すと第一に毛髪です。それが長ければ長いほど其人の擧動や氣持がよく現はれます。その例は支那人の頭髪を見ると直ぐ解る。彼等が走つたり暴れたりする時は、毛髪も一緒に走つたり暴れたりするし、その鎮靜なる時は頭髪も亦鎮靜である、昔八百屋お七が戀に亂れて、我屋に放火する時の繪を見ると、髪毛が焰のやうに吹亂れて、その精神狀態が如何によく現はれてゐる。又古の武士が戰場に入亂れた有樣を顯はしたものを見ても、その劇しいのは大童に髪をふり亂し、或は逆立て髪と髪とが闘つてゐるやうに想はれる。古人は此の感情の狀態を形容して「怒髪天を衝く」と云つたが、誇張の言といへども



よき形容詞である。それから頭の運動を中心として觀察すると、よく芝居などでする男女の駈落者が、頬冠りの端を風に吹靡けて行く。その手拭の翻へる態はよく精神狀態を形容し其場合の心持を示したものである。

△振袖に現はるゝ情緒

次に手の運動によつて、其時の心持や動作が知られる。その最もよく、見はれるは振袖を着た時である。芝居に出て來る姫君や舞妓などが、長い兩方の袂をかかげていろ〳〵な身振をする。泣く時、嬉しい時、怒る時、又すねる時、甘へる時、恨む時、皆なそれ〳〵の心持が兩袖と手の運動によつて現はれます。それから又手の持物によつて精神の狀態を示す場合もある。旗を持つて勢ひよく行く所を見れば、旗その物によつて直ちに勇ましく想はれるし、頭を垂れてハンケチを眼の邊に當す場合には即ち憂ひの色が示されます。それから下部の運動は羽織の裾、若くは帶の端の翻るのによつて表示される。德川時代の婦人には、猫じやらしと稱する長い〳〵帶があつて、それを結ぶと兩端が地を曳摺るやうに垂れる。其帶の端の振廻しやうを見ると、大抵その女の心持が知れます。次に足の運動によりて窺ふべき精神狀態は、褄と裾とに見はれます。褄の捌き方、裾の翻りやうによつて美にも醜にも見え、且つ又喜怒の動作まで察しられます。それ故女形優や舞妓などは褄の端に鉛を入れて、舞踊の表情を補けるとのことであります。

△表情と衣裳の品質

總じて芝居でも舞踊でも同じことですが、其人物の精神や、性質や、感情は、身のこなし方と共に衣服の運動によつて現はれるものです。泣く時は衣服も泣き怒る時は衣服も怒り、嬉しい時は衣服も嬉しいかの如く動きます。此の時々の精神狀態の變化を見はすには、衣服でさへあれば何でも可いといふ譯には行かぬ。場合によつてそれ〳〵品質を異にします。能狂言の如き

は、形を崩さずに人物を現はすのが主眼ですから、繻紗や錦織のやうな剛々した衣裳を用ひますが、之に反して西洋の舞踏やオペラの如き、複雑で急劇の波瀾を要するものは、その變化の多い表情を現はす上に於て、是非とも紗か絽の如きシナヤかで翻りの良いものでなければなりません。又日本の踊や舞などは、落着いた所作の中に複雑な表情を見はす場合が多いから、縮緬の如きシツトリとして而も細かな運動を示すものが適



當です。急に迫らず、緩に失せざる場合、若くば硬柔何れともつかざる人物の性格を現はす際には、繻珍と縮緬の中間にある羽二重の類が最も適します。芝居でする大名のお殿様などが、主に羽二重、綸子の衣裳を着て出るのは、心理學上から見ても、甚だ當を得たやり方です。

△東西婦人服の比較

古の大名の長袴や、西洋婦人の裾を長く曳摺つて歩く繪を見ると、その裾の靡く形によつて、何方から來て何處に行くかといふ道行が解ります。隨つて靜歩する時、快濶に走る時、怖れて遁る時、それ〴〵心の狀態が裾の運動によつて知られます。歌麿の美人畫など

には、衣服の着こなし方一つで、よく其女の職業と性格とを現はしたものがあります。

總じて演劇、オペラ、舞姫、音樂家等の用ひる藝術的の衣服は、裳の長く擴がる寛潤したものが多い。そのわけを一口に申すと、寛潤の衣服は、形（體格）その物を示すよりも、運動の美と表情美とを現はすに適するからです。隨つて悠長な衣服は美術的、身に密着した餘裕のない衣服は非美術的といふ結論になるのです。

そこで又西洋婦人の服と、日本婦人の服と何れが優美なりやと比較して見るに、その解答は着物の「裾」の相違によつて說明せられます。即ち西洋婦人の裾は、歩く時風を孕むやうに出來てゐる。之に反して日本の婦人服は、風を受流すやうに仕立てある。此の相違がやがて東西、美の標準の岐れる所以である。要するに表情美に富むのは西洋服、形の美に於て優るのは日本服、と斷案を下すのが至當かと考へます。



冬の自然美



◎ヒステリー的なる時雨

多恨なる秋を送る涙の雨あり、その名をば時雨とぞ云ふなる。淋しき微笑にも似たる冬の太陽の、すゞろ曇るかと思へば、俄かにはら／＼と降來り、忽ちパッと霽れわたりぬ。其のさま宛然ヒステリーを患ふ女性の如くなるを覺えずや。

霜月の末、嘗て山路を辿りゆきぬ。千樹、萬樹、或は黄ばみ、或は紅葉、微かなる風にも枝に溜らず飜々と散りつ。たちまち後方に當りて髪を梳るやうなる音すと思ひて振返れば、時雨の脚、早や我が頭上を越して行手の方へ走りゆきぬ。落葉の錦、雨の絲、折から木間を洩るゝ夕陽に映えて、美しと云はゞ云ふものゝ、狂女の華美かなる衣裳被きて唯走りに走るかと、淺猿しくも哀れなり。

霜冴え鐘凍る夜、寒月空林を照して皎々たりと思ひきや、忽ち軒に柔軟き雨の音あり。この時、美人蘭燈に背きて三絃を彈ずれば、凄艶の極なり。妖美の極なり。

やよ時雨物思ふ袖のなかりせば木の葉の後に何を染めまし　前大僧正慈圓

だまされし星の光や小夜しぐれ　羽紅

◎淡き夢に似たる簾の枯葉

三十石の船に乘りて、夜に淀河を下りぬ。同勢十數人の乘合、最初の中こそ煙草燻らせつゝ互ひに興に任せて談しあひたれ、夜の更くると共に、或は膝を抱へ、或は荷物に枕して、皆な冷き夢を結ばむとせり。

うら、若き男ありき。坐りたるまゝ大なる荷物に倚りかゝりて、右に枕し、左に枕し、幾度か眠らむと悶へたりしが、やをら身を起して蓬の外へ出でぬ。夜色茫茫として河風寒し。彼れは徐かに河面を眺めつゝ、幽かに細く、されど朗らかに『槍錆』を唄ひぬ。彼れが寸燐を磨りし刹那、品位ある愁ひ顔の闇夜に現はれて、直ちに又消えぬ。榮花の昔はさらざりしか。點々たる河心、唯だ艫聲のみ詫し。水禽の夢を驚かせしこと幾度ぞや。左手は茫々たる一帶の枯蘆、折からの夜風にそよ〳〵と戰ぎて、宛然淡き夢をば見るが如し。

津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり　西行法師

枯蘆の中に淋しき捨小舟　宮濤

◎傷ましき橋姫

夜更けぬる頃、宇治川の橋に立ちて、靜かにその河瀬の呟くを聞けば、まなくしも心の傷まるゝ哉。

網代木にいざよふ波の音ふけてひとりや寢ぬる宇治の橋姫　前大僧正慈圓

古へより語りつたへるを聞けば、宇治川の橋の下に美しき女神の在して守り給へるを、更深けたるころ、住吉の大神の、私かに通ひ來ますとなむ。希臘の神話にも小女神の物語あれど、更に其れに比べて、一入哀れ深くぞ覺ゆるなる。

◎心忙しき木枯

雲の帷帳幾重ともなく重りあひて、日色更に暗慘として見わかず。終日木枯のみ吹きに吹く。其の些かだに小止みなく、森を吹き、林を吹き、丘阜を吹き、家居を吹き、吾に吹きに吹くを見れば、最早歲の暮れなむとするほどに、身も、世も、追ひたてらるゝやうに心忙しくぞ覺ゆるなる。

おのづから音する物は庭の面に木の葉吹き捲く谷の夕風　藤原清輔

木枯や門の榎のあたり痛　一茶

夕暮に至りて雲裂け、弦月木枯に吹飛ばされむとしつゝ、危く枯林の上に懸りぬ。

時しもあれ冬は葉守の神無月まばらになりぬ杜の柏木　法眼慶算

夜に入りてより風やうやく止みたれば、舞ひ狂へりし落葉の、其處此處に堆高く積りて、冴えに冴えたる青白き月光の、霜置くらむやうにぞ照り渡りぬる。

大空の月の光し清ければ影見し水ぞまづ凍りける　読人　不知

◎晶々たる霜柱

神々しき社の夜府に明けはなれむとして、東天の空に金色の雲たたよはす時ほど、森厳なる景色はなし嘗て大宮に泊りし時なりき。ひと夜寒き衾に襲れて、霜冴ゆる曉方、氷川公園をそぞろあるきしぬ。

一際高き丘に聳立てる老松の、未だ眠りより醒めざるにや、その一枝



一葉だに搖がすことなく、宛然銀箭を見るが如く立てり。空には數角するどき星の、瞬りに忙はしう瞬きすれども、なほ暫時は夜るの事に鎖されぬれば、霜を蹐む我が下駄音のみさくさく、、、さくくと聞ゆ。

暫時ありて、東方の空に曙の色ただよひ初めぬ。見よや、紺碧の空少しく紫色を帯び、低き山の端を限取りて、闇の帷帳、水色にうすれゆくかと思へば、次第に黄橙色に變り、紅色に變り、やがて金色なる無數の射線を放射しつゝ赫灼たる一塊球徐ろにせり出しぬ。其れと等しく、野や丘や、森や林や、悉く燃ゆるばかり

に金色に映發しぬ、霜に下駄にて印せし霜柱の、折れて、崩れて、燦然と紫金色に輝くを見よ。彼の老大なる松樹も、何時しか目覺めて、朝の風に微嘯してありき。

歩みを移して氷川神社の境内に入れば、神殿の大屋根に置く霜白く、二三羽の神鴿朝暾にかゞやきつゝはたはたと飛びぬ。

霜柱の霜見る朝の日和かな　利 牛

◎香ばしき枯草

麗かなる日、田圃の傍らに積み重ねられたる枯草の上に横はりて、その香ばしき香を嗅ぎつゝ、靜かなる農村の有樣を眺め暮らせば、我が身融然として溶くるかと覺えし。

大空のみ彌がうへに碧瑠璃と澄みぬれど、四邊の風色、皆な一樣に冬枯の色に裹まれたり。彼方の森を見よ。此方の林を見よ。たゞ淋しき褐色に叢立てるのみ。

間近き所に洗場あり。小川の流れを一個所に堰きとめたれば、上流は水嵩やゝ深かるべし。數人の農夫等膝のあたりまで水中に沒して、大根の白きを洗ひ、葱の青きを洗ひゐたり。彼の堰かれし水の、奮躍して堰を越ゆるや、小さき瀧津瀨をなしつゝ、[illegible]、下流へ下流へと流ゆくなり。青き葱の葉あり、白き大根の折れたるあり、一度この瀧津瀨と共に水底深く潜りたれど、軈て一間許り下流の所にて浮び出で、輕く流れに浮きつ沈みつしながら、下流へ〳〵と流れゆくなり。

冬枯の中に、いさゝか生色あるを認えて、やがて來ぬべき春の若草さへ思ひ出でられぬ。

葱買うて枯木の中を歸りけり　蕪 村

葱洗ふ流れも近し井手の里　蕪 村

洗場の彼方なる竹藪には、藪鶯の頻りに舌鼓うつが如く啼きぬ。その下に、大なる白き家鷄の、朱き鷄冠振りつゝ、餌物やあると枯葉の下をあさりゐたり。

子供を罰する鞭の加減

文學士 倉橋惣三

▲子供を罰する目的

子供を制する鞭は常に大人の手中にある。然し子供を叱る前に一應考へて戴きたい。如何に手中に鞭があるにしても、親達は子女を鞭打つに相當する覺悟と研究とが出來てゐるであらうか。それが先づ考へものである。吾人は父として、兄として子供を叱つたことがある。打つた事もある。けれどもアトからあゝ可哀相なと後悔するやうな叱り方をした例も尠くない。そこで子女養育の任にあるものは、第一に罰の目的といふ事を考へておきたい。之れには罪そのものを罰するのと、他に言譯の爲に罰するのと、悪い事を再びせしめない爲に罰するのと、いろ／＼の場合がある。罪そのものを罰するのは至當であるが、世間には他人に言譯の爲に叱る親達がある。これが甚だ宜しくない。例へば自分の子供が近所の子供を泣かせたとする。此の場合に申譯がないと云つて、實際は叱るに價せぬ事でも、打つたり擲つたりする。之は親達の面目を保つ爲に子供を犠牲にするも同様の行爲である。

▲懲しめの罰とみせしめの罰

子女が悪い事をしたら、叱らねばならぬ。罰して再びせしめないやうにするのが親達の責任であるけれど之れには二様の別がある。當人以外の者に悪い事を見習はせぬ爲の、所謂みせしめなるものと、當人を改心せしむべき懲しめなるものとから二通りある。太郎の悪事を次郎が見倣ふては困るとて叱るのはみせしめの罰で、他に關係なく本人だけ鞭つのが懲しめの罰である。或場合には前者の罰し方も必要ですが、改善を主とする教育の方面から云へば、懲しめの罰が有効ですそんなら此の罰し方は如何なる方法を取るべきかと云ふに、之れにはいろ／＼の種類がある。其中には良い

手段と惡いのとあるから、左に項目を別けて說きませう。

(一) 身體を撲つ體罰。
(二) 生活慾を制限する罰。
(三) 所有慾を妨げる罰。
(四) 自由慾を束縛する罰。
(五) 名譽心に訴ふる罰。
(六) 威嚇。
(七) こゞと。

叱り方はこの他にもあらうけれど、先づ大體この位のところで研究して見ます。

▲折檻の手を呪ふ子供

撲つたりはつたりする體罰は、大抵一時の怒りから發したもので、甚だ野蠻的であるばかりでなく、遂には子供の發育を害するやうになる。加之これが一番子供に反抗心を起させます。或る牧師の子で五歲になるのが、朝夕神に祈禱して曰ふには『神樣よ、希くば阿母の手を取上げて下さい。』と、此子は始終阿母さんに打たれたり撲られたりするので、其結果母の手を呪ふやうになつたのです。又九歲になる或職人の子が、二十錢銀貨を一つ偸ねた刑罰として其父に燒火箸を握らせられた。そして父子共に警察の厄介になつた實例がある。それ故體罰は最も危險な上に効が尠い。唯た一つ此方法の必要なる事は、子供が强情で我儘で、如何とも手に了へぬ場合にのみ施すべきであるが、然し好ましい手段ではない。

第二の生活慾を制限する罰。平素の通りにお菓子を與らぬとか、副食を減らすとか、寢具を薄くするとかいふ、總て肉體の慾を制限して懲しめる方法は如何であらうか。之れは體罰よりも多少效目があつて、且つ進歩した叱り方だらうと考へる。然しこれとて極度に施すと反抗心を起させるから、餘程手加減が肝腎です。

▲斯る罰し方は如何

第三の所有慾を妨げる罰、即ち玩具を取上げるとか、日曜で遊びに出すにも、太郎と次郎には十錢づゝ與つて、三郎は惡戯をしたから五

餌しか與らないといふ罰し方は如何であらうか。勿論效目はある。利目はあるがそれだけ反抗心を買ひ易いのです。或る西洋の家庭で、子供が誤つて皿を毀した。萬事規則づくめの母は此處ぞ懲しめどこだと云ふ考へで、子供の貯金の中から皿代を辨償せしめた。すると其子は反抗心を起して、遂に盗みをするやうになつた。こんな例もあるから、總て罰け程度を考へてやられればなりません。

次に自由慾を束縛する罰といふのは、禁足、監禁、或は縄で柱に縛りつける等、すべて子供の自由を束縛して謹愼せしむる手段です。之れは一時利目があるけれど、三四時間と經つ中に段々効力が薄くなつて、終ひには監禁された藏の中で悪戯をしたり、不善事を考へたりするから、此れは寧ろ有害にして無效である。



▲懲罰を誤りし悲慘な事實

第五の名譽心に訴ふる罰即ち學校の成績表を貼出しておくとか他の善良な子供を引合にして反省を促すとかいふやうな方法は、最も有效なる罰し方には相違ないが、餘り利目が有り過ぎて、却て危險な場合がある。或家で十三歳になる女の子が、學校の成績が悪いので、兩親はその表を應接室へ貼出しておいて殆んど恥辱的の刺戟を與へた。女の子はそれが殘念で耐らないで、遂に遺書をして家出して了

つた。罪を悔ゐませるのは宜しいけれど、侮辱を與へてまで懲しめやうとするのは教育の精神ではない。之も亦熟考を要します。次に威嚇して懲らしめる手段。即ちそら妖怪が出るぞ、それお巡査さんが來たといふやうな懲し方は、二歳や三歳の幼兒なら利目もあらうが、それ以上の子供には無効です。第一虚言をついて懲罰の手段とするのが宜しくないよしや眞實の威嚇であつても、度重なれば効がなくなるから、此れも先づ用ひたくはない。それから第七のことゝ、之が最も研究に價する事だらうと考へます。

▲無効なる小言

小言にはいろ〳〵の種類がある、順序として先づそれから調べて見ませう。

第一根本的に間違つたことがある。それを尙ほ小さく分けると、怒りと叱りとの區別を失つた小言がある。之れは腹の立つまゝに怒鳴りたてる行方で、少しも子供の戒めにはならぬ。次に機嫌買叱りと云ふのがある。これには親達が腹の蟲の居所が惡くて叱るのと今一つは學校の教員などが自分の好不好によつて生徒を叱るのと二通りある。何方も子供の心の標準を覆へす基になる。それから憎み叱りに、長崎叱りといふのもある。憎い〳〵と思つてゐる一念が或機會に爆發して、平素の恨み思ひ知れと怒鳴り立てるのが所謂憎み叱りです。長崎叱りといふのは、母親などが良人や姑に叱られた腹癒せに、子供に當り散すといふやうな類ひで、よく世間にあることです。

次に又子供の本性を深く考へないで、大人の標準を以て叱りつける親達がある。漸く四歳か五つの幼兒に向つて、論語、孝經などの文句を引いて小言を云ふが如きは、實に愚の極である。親の身としては子供を早く良い者にしたいといふ精神から、六ケ敷い戒言をいふのであらうが、要するに徒勞です。

▲雷鳴叱りと五月雨叱り

一口に惡戯と云ふ中には、惡い事も無論あるが、善いことも無いとは限らぬ。その利害の程度も考へずに子供が惡戯をしたといへば何でも彼でも叱りつける人達がある。小言を云はなければ、親の役目が濟まぬか

の如く心得てゐる人の子こそ好い災難である。

以上は根本的に間違つたことの種類です。

第二に方法の間違つた小言の種類を擧げて見ると、その叱り方に高壓的、理詰的、皮肉的、追迫的等いろ〳〵ある。高壓的のやり方は一名雷鳴叱りとも稱する。ガラガラと一時に來て後は忘れたやうになる。此効力は如何かといふに、矢張り其時だけであつて、永く持續しません。次に理詰的の小言、之はヂリ〳〵ダラ〳〵と理窟を並べて、子供を謝罪せなければ已まぬといふ行方である。子供はいつまでも



理責めにされるから、終ひには困つて、口では詫るけれど、眞實に心服したのではない。之れも一名五月雨叱りと稱して、勿論有効なものではない。それから皮肉的の叱り方は、姑や小姑が嫁に對するそれと同じくチクチクと遠廻しに責める方法である。乳母などは正面から小言を云へぬ所から、裏面でそれとなく當こすりをいふが、その皮肉の爲に子供の根性迄がヒネくれて來る

▲包圍攻擊の惡結果

父が一人の子供を叱つてゐると、母が出て來る、祖母が出て來る、姉が出て來る、

兄が出て來るといふ風に、家内中出て來て一人の子を虐めるのがある。之れが所謂追迫的の叱り方で、甚だ危險な結果を生ずる。父のお目玉を頂戴して折角後悔しかけてゐる所へ、多勢一度に出て來て包圍攻擊をされては大抵な子供は自暴になる。窮鼠却て猫を咬むやうな椿事を出來するのは、得てこんな場合からです。外見坊の母親などが更に又虛榮叱りと云ふのがある。人前だけ子供を叱りつけて、こんなに子女の躾方に注意するといふ事を示すのである。素より偽善心から出たのだから戒めにならう筈がない。尚ほ此の外に溜置叱り、洗ひざらひ叱りと稱して、三年も五年も前から溜めておいた事を、一時に持出して、洗ひ浚ひ叱言をいふ人がある。又叱るべき時に叱らずして、思ひ出した時小言を云ふ人もある。是等は孰れも時機を失してゐるから、何等の効果もありません。

▲小言の四大要訣

叱責の種類と、こゞとの分析とは先づ以上の如きものですが、更に小言に關する一般の注意を引括めて申しませう。

（一）子供を尊敬せよ、信用せよ。

（二）形を叱らずに心を叱れ。

（三）こゞとの要訣は正當、公平を主として多辯ならざるにあり。

（四）小言の後を完成して其威嚴を保て。

之れに少しく註釋を施すと、第一の子供を尊敬せよと云ふのは、必ずしも長上の如く敬へといふのではない。子供だとて馬鹿にするなとの意味です。七八歳以上になると朧ろげながら一個の人格が出來てくる。從って無理な叱り方をすると直ぐ反抗心を起すやうになる。それ故叱るにしても、人格を蹂躙せぬ程度に於て改善を促すことが肝要です。兎角親の信用しない子供は餘計惡事に傾き易いが、親は子供に騙される覺悟で、好意と信用とを捧げて居れば、終には子供の方で其情に感じて虛僞が吐けないやうになる。

▲結果よりも動機を叱れ

次に形を叱らずに心を叱れといふのは、よく動機と結果とを考へて、結果のみ見て濫りに罰するなと云ふ事に歸するのです。例へは太郎と次郎と同一の惡事を企てゝ、太郎は成功したが次郎は未遂であつたとする此場合に大抵の父兄は遂げた方を重く罰して、未遂者

を輕くする。之が即ち形を叱つて心を叱らぬ間違つた遣方である。遂げても遂げないでも惡事を企てた精神には變りがない。此際には形よりも先づ心を罰すべきである。それから正當の小言といふのは、理に適つた叱り方で、即ち理が非でも自分に隨はせやうといふ様な無法な事を行らぬことです。次に同一の惡事に對して、公平といふ事が何よりも肝腎である。自分の愛憎心によつて甲を重く罰し、乙を輕くするが如きは最も宜しくない。前に述べた機嫌買叱りなどは、子供を邪路に陷れる第一の動機です。更に又こゞとは儉約する必要がある。のべつ幕なしに小言の云ひつゞけでも子供も終ひに慣れて了つて、又始つたといふ風になる

▲小言の威嚴

次に子供を叱つたならば、其結末をつけねばならぬ叱りつ放しでは效がない。即ち或程度まで訓戒を施したならば、翻つて後悔せしめるだけの餘裕を與へておかねばならぬ。前述の如く、皆なで寄つて群つて「お前が惡い〳〵」と家内中一人も同情者の無いやうな叱り方は、反抗心を起させる基だから、其手加減を注意せねばならぬ。それには大體家庭内の敎育方針を一定する必要がある。皆なで叱るのは勿論惡いけれど、父母兄弟の意見が一致せぬのは更に宜しくない。母が戒めてゐるのに、父がそれを絶對に否定するやうな事があると、遂には「こゞとの威嚴」を失するやうになる此邊も亦手加減を要する。

小言といふ方面から、一般の家庭を觀察するに、子供の前途の爲に訓戒を施すといふよりは、寧ろ父母自身の都合の爲に叱るといふのが多いやうである。親達は先づその點から反省もし、研究もしなければなりません。

右は通俗心理講演會に於て「こゞとの研究」と題し講演せられたるもの〻概要なり。

世界の美人くらべ

△着こなしに長ずる佛蘭西の婦人

此頃世界を漫遊して歸つて來た或る詩人が、歐米美人の評をしたのが却々面白い。曰く佛蘭西婦人は美しくも愛らしくもない、背が低くて痩せ過ぎて、頭が馬鹿に短い。肩も背も丸でなくつて、鼻は曲つて居る。顏色のよいのは大部分彩色で、眼は大きくて愛らしいけれども、顏全體が物になつて居ない。姿勢も甚だ様はぬ。先づ値打は着物の着こなしにあるだらう。佛蘭西婦人は總じて顏色が沈んで、そしてタイプが一樣なので厭になる。

△一向榮えぬ獨逸の婦人

獨逸婦人は重苦しくて男性的に見える。背はやはり低いが、併し佛國人と反對に肥え過ぎて居る。ウエストは堅く締めて努めて小さく見せやうとして居るが、一向に小さくならぬ。顏が何となく愚鈍に見えて、赤い頬も腐ち朽ち色になる。頸は絶對になくつて、髮の毛は皆ブロンドで少しも變化がない。

△英國婦人は高過る

英國婦人は背が高過ぎる。思ふに英國婦人は皆が燈籠木の様に延びるまで歩くものと見える。肩は怒つて角立つて居る。長い頸に高い額の顏は美しいと云ふよりも寧ろ强いと云ふ方であらう。彼等は己れの背の高さを耻づるが如く多くは前にうつ向いて居る。概して着物の着こなしがまづい。

△時代後れの伊太利娘

伊太利娘は時代後れの傾がある。彼女はコルセットの用ひ方を能く知らぬらしい。希臘婦人は小さくて痩せて居て哀れなものだ。昔のヴイナスの女神形のは今どんなに探しても見附からない。和蘭美人は歐洲中の尤物であるけれども、少し小さ過ぎる樣だ。

△地球上の最上美人

其處に至ると亞米利加美人は流石に渾圓球上の最上美である。背が高いけれども決して高過ぎはせぬ。スラリとして能く整うて居る。肩の曲線が能く出來て居て胴も短くない。脣も大きくて立派だが、何故か出頭は頻りに擺ようとして居るのは少し可笑しい。長く美しい腕、スラリとした脚、却々調和が好い。姿勢は端然として輪廓が明瞭である。圓い力のある顏と來たら恐らく世界無類であらう。

△個人性の發達

頸は長からず短からずで、着物の着こなしも申分はない。其上米婦人は個人性が發達して居るから、表情にも服裝にも自らそれが現はれて、種々なスタイルとタイプが出來る。佛國婦人の流行の奴隷たると異にして、各人の創意が却々面白い。且つ近來運動が盛んな爲め益々體格の發達を助けて今日に至つたものと見える云々。ちとかけねはあるかも知れぬが面白いところもある。

英國人の食卓

在倫敦　長谷川天溪

△豫想外の苦心

ロンドンに着いて、最も多く苦心するのは食卓上です。印度洋を横ぎる時に、猛烈なモンスーンに吹かれても、左程に閉口しなかつたし、ロンドンの途の分らぬのも地圖と磁石さへあれば平氣なものだが、たゞ朝夕にレデーと一つに食事をする、これが何よりも骨が折れます。パンを嚙つて、牛肉を切つて喰ふのに、骨の折れる筈はないやうなものゝ、而かも外國に出て見ると、大に苦心を要します。

勿論、ホテルか下宿屋にでも泊つてゐるのならば、お客樣といふことを楯にして、自分勝手の眞似をなし得るであらう。他の客の手前を考へなければならぬ場合には、ボーイに酒代をやりさへすれば、吾が部屋で氣儘に食事することが出來る。所が自分のは純粹の英國の家庭、而もレデーが三人まで居る家庭に飛び込んだのだから堪らないのです。一體英國人と云へば、蘇格蘭人までを含めて考へられるが、此の地の人は、此の二者を判然と區別してゐる。また實際、英國人と蘇國人とは、多くの點に於いて異つて居ります。其の三人のレデーが未婚者で、血統も敎育も、共に純乎たる英國流であるから、ことに閉口するのです。

△三人のレデー

豫め申して置きますが自分は航海中、極めて無禮講の生活をして來た。そして英語を聽くことも、語ることも、共に自由ではない。次に此の家庭に就いて、少しく説明して置きたい。長女といふのが、二十七八歳で、主婦の役を勤めて居ります。(女主人公は、とうの昔に歿したといふ) 次女が二十五六歳で、家庭敎師です。季の女が二十一二歳で、小學校の女先生。又次女と三女との間に、男子がある。孰れも皆な能辯です。學問では自分の方が遙かに優れてゐる。英文法にかけ

ても、自分の方が科學的に知つてゐる。併し話すことが出來ぬから、結局負かされてしまひます。けれどもよく饒舌りはするが、皆な詰らぬことを言つてゐるので、若し日本人であつたらとても相手には出來ない程です。

其の中で長女の談話が、最も解り難い。外國人だからとて加減して發音するでもなく、のべたらに、べちやべちや言ふのだから、どうしても分りません。聞かなくとも宜しいことを言つてゐるのだが、聞かない譯にもゆかぬから聞く。これがなか／＼難物です。けれども次女の方は明晰に語つてくれるから大いに助かります。季女の方は、年が若いだけに、ゆつくり話すのは氣まりが惡いと見えて、艶氣を含んで、べら／＼とやるから、これが復た分りません。自分には英文は讀める。シエークスピヤも、カアライルも、テニソンも讀んだことはある。西洋人と談話したこともある。併し女の言葉に出遇つては、からきし駄目です。就中、家の三人は口達者なので閉口です。

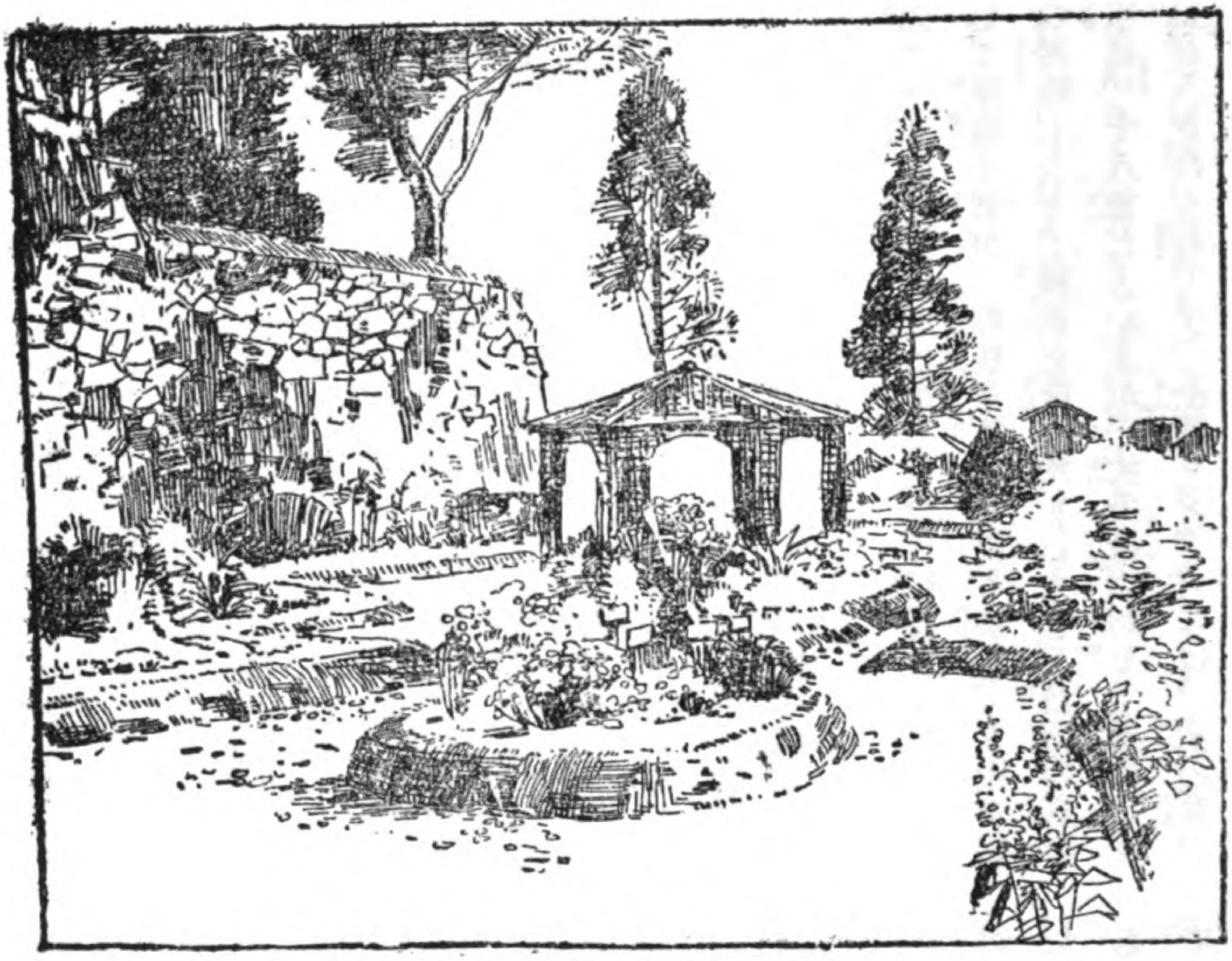
自分はロンドンに着いて、膽を潰すほど驚いたことはないが、婦人の言葉の分らぬのには、吾が身が情けなくなるほど驚きました。詰らないことを言はれても其れが解らぬのだから嫌になります。加之、此方の言ふ事も通用せぬ場合がある。さうなると愈よ馬鹿臭くなつて、平凡のとを餘計出鱈目を言ひたくなるが、其の出鱈目が、食卓上の禁物です。つまり平凡のことを、詰つたやうな顔で尤もらしく語り合ふのが作法と見えるのです。

△食事の規律

食事の時間は、日曜を除くの外は、大概次のやうに定めてあります。

△朝飯(Breakfast)は八時頃で、鷄卵、ベーコン、ハム、紅茶(又はコーヒー)などを用ゐます。無論パンは附き物です。時には、ムットン、チョップを出すこともあります。オートミルを出すのは、御馳走の方で、普通の家では稀にしか用ゐません。

[illegible]手公園紫芳亭



食卓上の世話は主婦が勤めるが、自分の家では侍女が勤めて居ます。

△晝飯(Lunch)は一時若しくは一時半です。温かい肉類又は魚類に、ポテト、野菜類を附け、終りにプヂング又は果物を出します。ポテト以外の野菜は、毎日種々異つたものを出すが、其の名を呼ばずに、單に Vegetable と云つてゐる。

△晩飯(Dinner)は午後七時若しくは七時半に調へられて、此の時が最も御馳走があるが、併し晝飯の品の外にスープがある位のものです此時は主婦がテーブルのトップに、主人がボットムに席を占め其の他の家族は男女互に入れ混つて椅子に着くので、作法の嚴しい家になると、皆盛裝して出るのですが、自分等のやうに、着のみ着のまゝの連中は、朝から晩まで、同じ着物で、御免を蒙つて居ります。

△晝と晩との間、即ち四時か、四時半頃に茶を飲む茶菓子を用ふることもあるが、普通はパンにバタ

マルメレード、ジヤム位のものです。晝飯に喰ひ足りない分は、此の時に補ふやうにしてゐる。若し此の茶時が無つたならば、自分等のやうに大喰しつけた者は大に困るわけだが、英國人も空腹を感ずるから、こんな茶時を作つたのでせう。

△日曜日は、文字通りの安息日で、孰れの家でも晏起する。だから朝飯は九時か九時半で、晝も晩も順送りに遲くなる。また此の日の晩飯は殊に「日曜」と稱して、晝飯の殘物か、又は冷肉位で間に合はせて居ります。此の日の晝が御馳走のある時で、一家の者は教會堂から歸つて來た儘の服裝で食卓に就くのですが、例に依つて吾輩は同じ服で居ります。

先づ一日の食事の定めは、ざつと斯んなものです。そして家族の者が、朝飯を喰べてゐる間に、女中が寢室の掃除したり、寢臺を直したりします。自分の家の女中は、十八歳だといふが、丈の高い婦で、自分などは見おろされる程です。全體ロンドンには、丈の高い女が多い。その高いのが大股に歩くのです。仕方がないやうなものゝ、女中までが僕等を見下すに至つては自分の値打が下落したやうな氣がします。

△パンの喰ひ方

パンの喰ひ方を記して見ると、パンだからバタかジヤムか、マルメレードか、或はチーズを附けて喰へば外に方法は無いやうに思はれるが、其の附屬物の用法に心得があるのです。一口に言へば、肉類又は魚類の皿のある間は、斯んな味物をパンに塗つては宜しくないのらしい。勿論之れを附けて喰ふも、決して禮法に外れて居らぬのださうだけれども、一方に副食物を有ちながら、尙ほパンに味を附けるのは、贅澤と見做されてあるらしいのです。自分は最初の中、日本に居た頃と同じ調子で、始めからバタを塗りつけて喰つて居たが、主人公やレデー等の喰ふのを見て居ると、皿のある間は、決してバタ其の他の物を用ひず、皿の物を喰ひ終つて、なほパンの殘つて居る時か、又は新にパ

ンを取つた時に初めてバタか、マルメレード、ジャムなどを用ゐるのです。何時見ても左樣にしてゐるから仕方なしに自分も眞似し始めました。お客樣だから眞似しなくとも宜しいのですが、自分一人で始めからバタをこて／＼ぬるのは、氣まりが惡いから止めましたチーズは最後に用ゐるが、レデーは決して用ゐません稀に喰ふ時は、何のかのと辯解しながら喰つてゐます男は構はぬが、女はチーズが好きだなどと言ふものでないさうです。

△家庭の朝

これから、自分一個人を中心として書かせて戴きます。自分は決して早起の方ではないが、ロンドン人に比較すると、大に早く起きる方です。顏を洗つて、洋服を着て、煙草を吸つて、時には葉書を四五枚書いても、中々食事の銅鑼(此の銅鑼 gong は各戸に備へてある)が鳴りません。腹は空いてゐるから、ぐう／＼音を出し、朝から餓鬼道に落ちてゐるやうな有樣です。

毎朝こんな風では詰らぬから、自分も朝寢坊をすることにしてしまつた。氣儘に朝寢をするならば愉快ですが、無理に寢てゐなければならぬのだから、餘り感服されません。

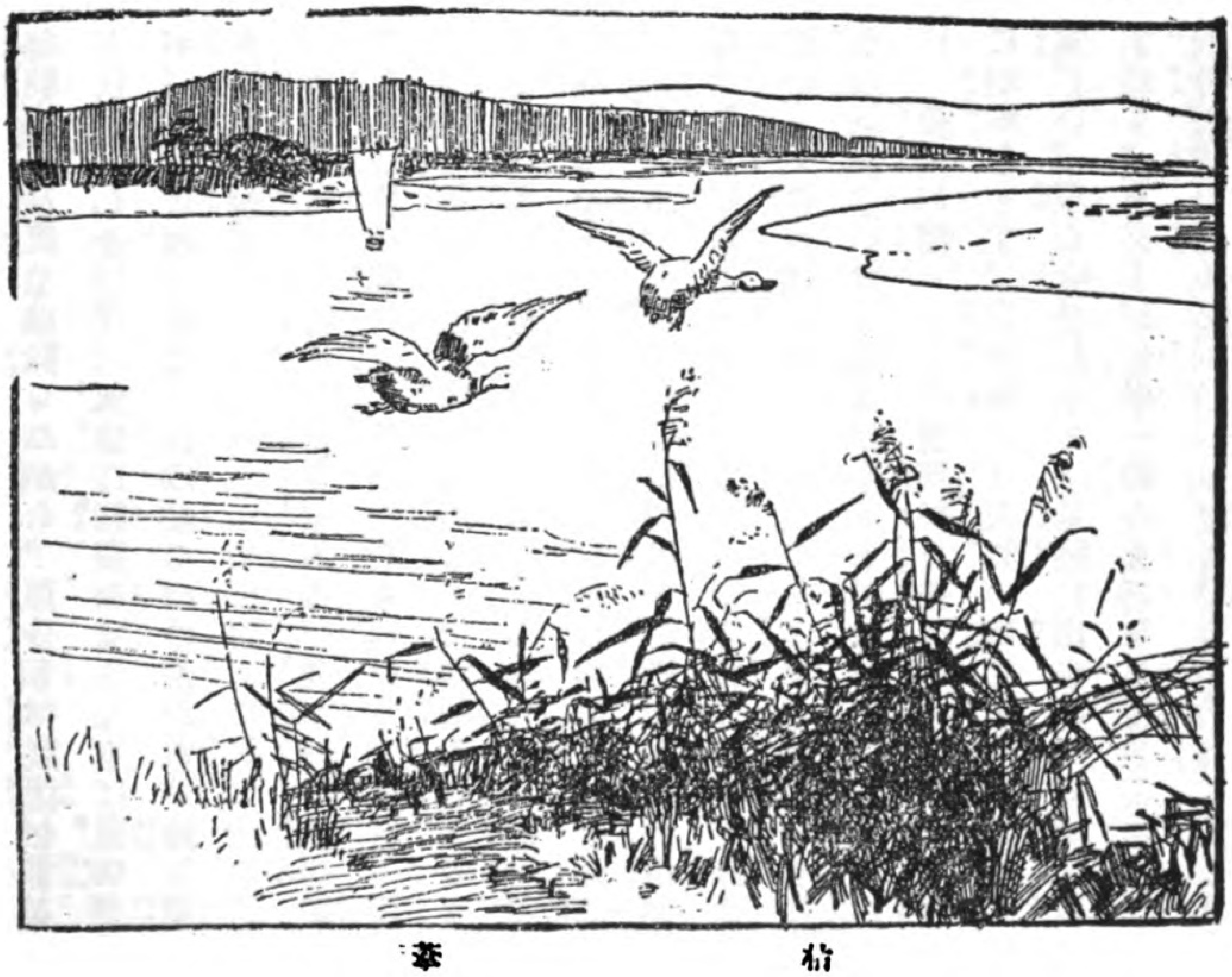
銅鑼が鳴るや否や、食堂に入る。先づ朝の挨拶から天氣の好惡に就いて、言ひたくも無いことを言ふのです。元來英國人は天氣模樣のことで神經を惱ませて居ります。少しく晴天でもあらうものならば、種々の形容詞を述べます。新聞までが、昨日の天氣は英國晴だなどといふ。日本でならば、餘り結構でない天氣をすら、very fine, brilliant, lovely, Charming などと云ふのだから、吾が國の秋の晴れ渡つた空などを見せたなら形容詞がないので困るだらうと思はれます。其の反對に、曇天が續くと――實際毎日曇天なのです――頻りに辯解します。自分等には天氣の事などは、どうでも宜しい。早く喰ひ終つて、見物に出掛ける方が急務ですから、レデーが食事を終るまでなど待つて居られぬ自分が喰ひ終ると同時に Excuse me で、外に飛び出し

てしまひます。新聞は朝の茶を飲みつゝ讀むのださうですが、そんな事は嫌ひだから、外に出て、汽車や乘合自動車の中か、或は公園に往つて讀みます。

△辛抱して聞く質問

朝飯は、これで濟むから何んでもないが、晝と晩が嫌ひです。嫌ひなのではなく、詰らぬ目に遇ふので馬鹿馬鹿しいのです。尤も晝は大抵外で喰ふ。それも上等の料理屋などには入らず、ライオン家か、ＡＢＣ家で濟せます。此の二軒は市内到る處に支店を出してゐて、最も手輕に食事することが出來、且つ女中への祝儀嚴禁を看板にしてゐるから、非常に繁昌してゐます。

晝に家の食卓に就く場合は、令孃等ばかりと喰ふのです。主人公と倅殿とは勤めに行つてゐるから、家に殘つてゐるのは、女ばかりです。それが我れ劣らずと喋々するのだから大變です。やれお隣の鸚鵡が鳴いたの、家のピリ（犬の名）が昨晩あばれたの、馬に乘つて



枯葦

郊外を駆け廻りたいのと、何んでも詰らぬことを話し合ひ、或は自分に向つて、日本には電話があるか、電車があるか、自働車があるか、日本のレデーは毎日何をするのだ、などと聞きます。自分は斯樣な質問を受けた時に、私の社には電話機が三十箇位あつて、小僧が百人ばかり、自働車が二十臺ばかりある。また日本のレデーは勉强してゐると答へてやりました。

△レデーの不意打

こんな詰らぬ話の問答は、聞いてゐる必要がないがこれも耳を慣らし口を自由にする稽古と思つて辛抱して居ります。で一生懸命で聞いてゐると、ナイフとフオークの方が自由に動きません。テーブル、クロースを汚しては、氣の毒だから、喰ひ方にも氣を附けねばならぬ。殊に魚類を出された時は（而も日本人は魚類を好むとて、屢々此の御馳走が出る）小骨を除くのに手數が入る。その方に一生懸命になつてゐると、突然レデーの方から Will you pass the bread,(Butter, Water, etc.)Please? と來る。一寸手を延ばせば、取れる所にある品だから、何も吾輩を煩はさなくとも宜しかりさうなものに、取つてくれと言ふのです。用心してゐる時は、巧く取り次いでやるが、皿の方に夢中になつてゐる時は、大いにまごつきます。生れて此の方、こんな事を遣つたことが無いから、不意打に遇ふとパンだか、バタだか、何と言つたのか解らないこともあります。

自分は、こんな時には、何時も考へます。此の家の主人公も氣のきかぬ男だ。年頃の娘を三人とも家に置かなくとも宜しかろう。早く嫁にやつて、孫の顔でも見た方が樂みだらう。三人共、容貌は十人なみだから貰ひ手は、いくらも有るだらう。第一、こんな令孃が三人居るから、僕達が閉口する　何んでも早く片附けて貰ひたいもんだ。と。

△とんだ失敗

晩の食卓には全家族皆な一緒です。四方から自分に

向つて、見物して來たことに就いて、種々の質問が出ます。日本との比較も問はれる。聞く方と、話す方と手の方と、同時に活動させねばならぬ。斯うなると、文學論も、人生問題も、社會論も、政治論も考へてゐる暇がありません。Will you pass the bread? と來たのに對して、大聲に No と應へた人もあるが、實際四方から色々の事を言はれると、返答を間違へることが多いのです。これなどは Will you have some more meat と聞き誤つたから「否」と出たのです。そんならば早く喰つて、早く逃げたら宜しい、と言ふ人もあるかも知れぬが、情ないことには、其れが出來ません。Cannot ではなく、習慣上許されないのです。

△食卓上の女王

英國の社會は、レデー本位の場合が多い。殊に食卓では、レデーが女王の位地に居るのだから、レデーが喰ひ終つて、椅子を離れるまで、男は起つことが出來ません。そのレデーが、ぺちやくちや話しながら喰ふのだから、中々長い。男は其の長いのにお附合して、のそ〳〵と喰ふのださうで、何んでも横目で、レデーの皿の加減を見ながら、ナイフとフオークを動かすといふことです。自分などは、口と耳と手との外に、目まで使はねばならぬやうな詰らぬ思は爲たくない。又英國へ來たのは、レデーの前で、ナイフとフオークの使ひ分けする稽古が目的でないから、さつさと喰つてしまつて、喰つてから後悠然として、レデーの終るのを待つてゐるのです。此の時、レデーの顏や、手つきや、喰ひ方を觀察する。少し體裁の惡い時は、パンを喰ひつゝ水を飮んでお附合をしてゐる。かうするとレデーの方が早く切り上げます。

自分は、こんなことを爲しながら一日を送つてゐるロンドンに着いて、食卓上で苦心しやうとは、夢にも思はなかつた。英國人でも、慣れてゐるとは言ひながら、矢張り窮屈の思をしながら、食卓に就くのでせう。況や吾輩に於いてをやです。自分などは、二年の後には、國に歸つて、大あぐらで三度の食事をやる樂

みがあるが、英國人は死ぬまで、それが出來ぬのですから考へると英國男子は可哀さうになります。生命を維ぐ三度の食事を、氣樂に喰ふことが出來ず、何時もおよばれの席に在るやうに勤めねばならぬのは、一生の損でせう。

△表面と裏面

序に言ふが、皿の物を喰ひ終つたならば、ナイフとフォークとを眞すぐに揃へて置くのです。両者を十文字に重ねて置けば、まだ喰ふ意味だから、女中は決して皿を下げません。次に英國人は、食卓上に酒類は用ゐません。水ばかりです。ウヰスキーでも飲みたい者は、自分の部屋で秘密でやるのでせう。僕の家でも誰れかしら飲むだらうと思つて、頻りに罎を探して見たが、一本も見附からぬから、全く用ゐぬのかも知れません。これは洵に結構な習慣だと思つた。併し酒屋を覗ふと、老若男女相交つて、盛に飲んで居ります。そこに英國の裏面が暴露されつゝあるのです。





お正月の準備

△重詰料理（其一）

あわたゞしき光陰は又年と共に走り、感興深き歳暮も早間近になつた。さて、新年の重詰もの、去年は忙しい思ひして二通りも用意してたけれど、其割合にお客様がお出になつても召上る方は少い、そして又お心安く澤山めし上つて下さる樣な方は、もう大方御馳走のなくなつた時分、入らつしやるのだもの、折角の苦心も徒勞になつてしまつた、それにこりて今年は手のかゝらぬものばかりを考へました。

一の重は（吸物）

鴨或は鶏に小松菜、輕便清汁

鴨或は鶏のよき肉を適宜に切り、薄きだしにて一度ざつと下煮をして置く、小松菜もよく洗ひてざつと鹽を振り、色の變らぬ樣煠て一寸程に切り置く。

輕便清汁は水一合を煮立て、削りたる鰹節一合餘入れ、よき煮汁を取り、鹽二勺醤油二勺を加へ、味をつけ、さめたらば瓶などに入れ置く、來客の時椀に、湯を入れ、一度あたゝめ、其湯を捨て先の鴨或は鶏に小松菜見計ひ、盛り合せ、右の清汁小匕半杯程入れ、其上に沸湯適宜にさし、味加減見て松葉に切りなる柚子を吸口として出す、即席吸物てに大に便利なり。

二の重は（口取）

松かさ鯛、竹の子甘酢、梅花玉子

鯛を三枚におろし（片身は適宜の切り身として味噌漬にして置く）片身を皮つきのまゝ一寸五分四角に切り、皮の方より斜に一分厚さに縦横に庖丁目を入れ、串にさして燒く、皮はぜて松かさの如くなる、七八分燒けたらば醤油三四度もかけて燒き、かけては燒きする。

竹の子は罐詰を用ひろとにして、なるべく小さきもの丸のまゝたてに二つに切り、根の方より薄く切り放さぬ樣庖丁目を入れ、手にて廣げると末廣の形となる、砂糖、鹽、水にて煮、鍋を火より下す時酢を加へ、其汁の中に一二時間浸して置く。

梅花玉子本式は手數故略して、煠で玉子十個の殼を去り、其中五個だけ食紅にて色をつけ、紅白共に縦に長く竝べて布巾に包み、兩端をしばり、杉箸五本廻りに程よく竝べ、二三箇所固く結へて五六時間置き、二三分の輪切とする。

三の重は（さしみ）

鹽鮭作り身甘酢短冊大根細打人參

鹽鮭も鹽の辛きは一夜程水に漬け置き鹽出しなし、又酢の中に一夜漬け置き皮を去りさしみに作る。

短册に切りたる大根、細打人參、共に鹽を振り、一時間程へて水にて洗ひ、布巾にて包みて水氣を去り、酢の中に漬け置き、鹽の向ふにさしみと共に盛り合せ、甘酢をかけて出す。

甘酢は酢五勺、味淋五勺、醤油少々合せて煮立てたるもの。

四の重は(甘煮)

篠うど、花形慈姑、小角鱈

うどを洗ひて一寸程に切り、庖丁にてくるくると皮を剝ぎ、一度湯煮してあくを捨て砂糖だし醤油にて煮る

慈姑は洗ひて皮を剝き、梅の花形に切る、或は茹でたるものを金串の先に糸を結び、切り合せてもよろし、崩れぬ樣煮汁たつぷり砂糖醤油にて甘加減に煮る。

小角鱈は皮を取り、五分角に切り、一度湯煮して後前同樣だしたつぷりにて汁の煮詰る位に煮る、鱈は煮る程身しまりして味よろし、此外お正月になくてならぬ田作りごまめや、數の子煮豆などは前日こしらへて置く。

先の鯛の味噌漬は一つづゝ紙に包み、醤油と酒少しにてゆるめたる味噌の中に漬け置く、蒲鉾もお雜煮用の外餘分に取つて置く。

さて愈々お正月となつてお客樣の時はお重詰や、即席吸物で取りあへずお屠蘇出して置てゆつくり召上ると見たならば早速有合の物を用ひて暖い雜煮でもこしらへる。

蒲鉾に鶏、小松菜、椎茸、百合でもあらばなほよろし、先づ始に煮汁をこしらへ、冷して置て椎茸は水につけ、石突を去り、だしに醤油加へたものでさつと煮て、百合は一枚づゝはがして一寸程に茹てる、蒲鉾は適宜に切り、鶏や小松菜は吸物種を用ひてそのまゝ生ならば醤油につけて置く、茶碗の下に百合を入れ、其上に蒲鉾、椎茸鶏、小松菜といふ風に並べ、玉子一人前一個の割で大丼にかきまはし其汁三倍の煮汁と同じく三分の一の醤油を加へ一寸加減見て茶碗に注ぎ入れせいろうにて十五分間位蒸して出す。

其間に鯛の味噌漬の紙をはがし、串にさして焼き、小かぶの柚子漬など附合して出す、上戸の人は大抵御飯いらぬものなれど、聞いて見た上で淺漬であつさりお茶漬を出す、下戸の人や婦人客にはお酢もじ或は我家特製のチツキンライスを出す、此時も吸物用の鶏を用ひてよろしき故其つもりでなくなつた時あとをすぐに用意して置く。

淺漬もお正月用のは大抵十二月の始頃に漬けて置く、それは醤油の明樽に餘り太とからぬ上等のほし大根一把中位の見當にて糠一升、鹽七入合、麹五合、位の割によくまぜ合せ、先づ其の糠を厚めに下に敷き大根をすきまなく並べ、又糠を振り又大根といふ風にして上には大根のかくれる迄厚く糠を振りかけ、押蓋をして重き押石を載く、水が上りたたらば少し輕くする大抵廿八九日頃蓋を開く買つたものより一段味よろしく價も安く上る。

又蕪の柚子漬は、當座漬なれば焼魚の附合ともなり、酢の物の代用ともなり重寶である、其法は蕪を薄く切り、ざつと鹽を振り、暫くへて

一度洗ひ蒸して水氣をよく絞り、柚子の皮と赤唐がらしを刻みまぜ、絞り汁に酢を加へ、鹽と醬油少〻入れて小さき器などにつけて置く。（みどり考案）

△重詰料理（其二）

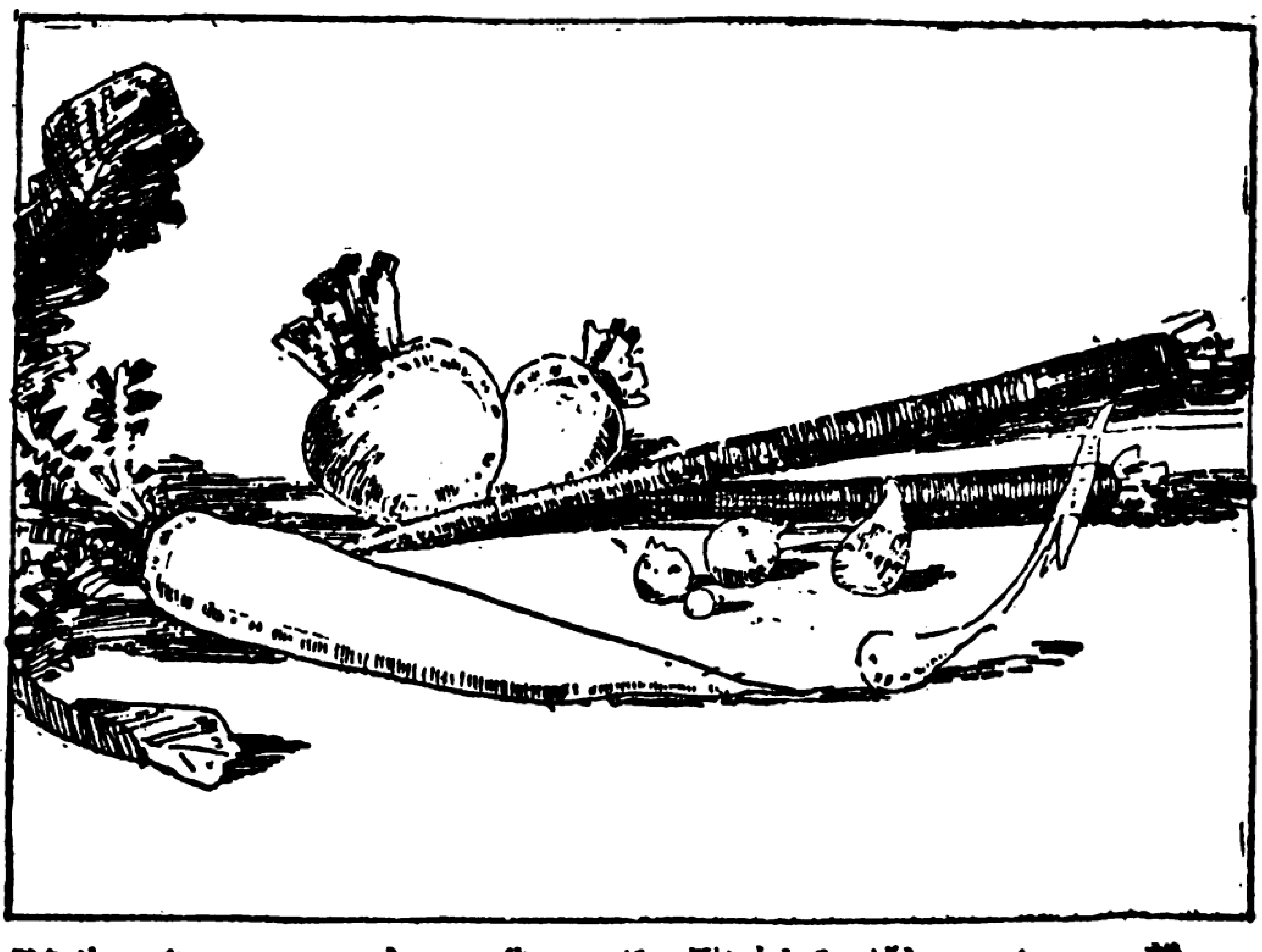
初の重　羽子板蒲鉾・手まり麩・小松菜　新年の雪（吸物）

二の重　鷄肉・八つがしら・竹輪・なまあげ・牛蒡　八千代煮（甘煮）

三の重　さゞれ石・岩根・苔の花　君が代和（酢のもの）

與の重　松風さより・竹の子・梅の花　松竹梅（口取り）

小皿　煮豆・照ごまめ・數の子



雜煮　切り餅・鷄肉・芹・大根

△吸物

羽子板かまぼこは白身魚の身をこそげとり、よくたゝき擂鉢に入れてこするやうにすり、鹽と卵の白身を加へ、小量のだしにて軟かにしておき、そぎ板を小さき羽子板の形にきり其の上にのせて蒸籠にて蒸す。

普通の蒲鉾を羽子板の形にきり一分位の厚さにそぎて用ひてもよし。

手まり麩　五色に色づけた小さき圓き麩に一寸味をつけておく。

小松菜　湯出て一寸位にきり醬油に一寸浸して上げておく

清汁は醬油を鍋に入れ煮たてゝ其中へ鰹節の削りたるを入れて、一度煮上りたる時鍋をおろして暫く漉したるを貯へおき（これを萬年醬油といふ）來客

の時一塊程に入れ、熱湯を注ぎて出す。山いものすりたるを一寸熱湯につけて、つゆにうかす。

△甘煮

牛蒡は中分にわり、薄く切り、水につけおきてゆでる。

なま揚げは四角に切り、湯をかけて油をぬく。

入ッ頭は皮を去り、四角に切り湯出ておく。

煮だし、醤油、味淋を合せ、鶏肉竹輪を煮、其の煮汁にて他の三品に味をつける。

△酢の物

さゞれ石は卵をゆで、白身をこまかに手にてちぎり、鹽酢のなかへつけておく。

岩根はきくらげを洗ひ、石突を去り、細かく切りて一寸ゆで鹽酢につけておく。

菅の花は花キヤベチを鹽湯出になし、細かにちぎりて酢につける。

君が代酢は黄味のゆでたるものへ砂糖を加へ酢にてのばし前の三つを加へる。

△口取

きよりを三枚におろし、小骨をぬき去り、鹽水にて洗ひ、水をきり、味淋と醤油同量を合せて煮たてたる汁をつけて焼く。焼けたる時も一度汁をつけ、擂りたるけしをふりかけて再焼く。

竹の子はさつま芋の皮を去り、薄く切りてゆで、裏漉にして鹽砂糖にて味をつけ、抹茶を入れて青くし、節竹の形につくる

峰の花は玉子をゆでゝ白身と黄身をわけ、各々裏漉にして白身には鹽を加味し、黄身には砂糖を入れて味をつける。布巾をぬらしてまな板に擴げ、其の上に白身をのせ中に黄身を入れてしばりて蒸し蒸せたらばほどいて四分位の厚さにきる。

△小皿

黒豆はよく洗ひて、軟かになるまで煮て、砂糖とあめ少し入れてつやよく煮上げ、別に長芋を骰形に切り、人参を小さき手毬にむきて別々に軟かになるまでゆで、鹽砂糖にて味をつけ、豆を盛りたる上に二ッ三ッおく。

てりごまめは田作りの頭と骨を去り、ほうろくにて煎り、にかへし砂糖に醤油を加へ、煮立てたるなかに入れてから〳〵になるまで煮る。

△二日の献立（牡蠣豆腐とフッシュアラノマド）

牡蠣豆腐

玉子五ッわつてかきまぜたる内へ二倍位のだしを入れ、牡蠣を一合半ばかりたゝいて其の中にまぜ、醤油を加味して茶碗むしの茶碗に入れて蒸し、別にうす葛のあんを作り、蒸せたる時上へかけて出す。

あんはだしに葛と砂糖を入れ、透明になるまで煮て作る。

フッシュアラノマド

鯛を一人前づゝの切身にし胡椒鹽をふりヘッドで両面をいためて皿にもつておく

別にバタをとかしメリケン粉を二匙ばかり入れていためて牛乳一合を入れてまぜたる内へ蝦をうでゝあられに切りたるを入れ、それを前の魚の上にかけて天火にてやき上にかけたるソースのかたまるを見て出す。

△三日目の献立

一、肉めし

二、つゆ、蛤吸口柚子
三、フリカツセビーフマセドアン
四、酢のもの
五、朝倉せんべい

一、肉めし

米一升挽肉半斤にんじん二本牛蒡一本油揚三枚醬油一合

牛蒡は小さくさゝがきにして水につけにんじんはせんに切り揚げは四隅を切りはがして細くきり、湯をかけて油をぬいておく、御飯を普通より醬油を入るゝ分丈水かげん少なくしかけ前の品々を入れて普通の如く炊く。

二、つゆ

蛤は泥をふかしてよく洗ひ、煮たちたるつゆのなかへ入れる。鹽三醬二の割合にて味をつける。

三、フリカツセビーフマセドアン



牛肉百目を五人前に切り、鹽胡椒を振りて湯で、肉をとり上げたるあとに馬鈴薯人参を小さく切りたるを入れてながくぐつ〱と煮、軟かになりたる時玉子一個をかきまぜて肉に入れ、鹽胡椒の足らざるを加へて前の肉の上にかけて出す。

四、酢のもの

鳥貝け洗ひて切り、酢につけておく大根を薄く短册にうち鹽にてもみ水をかけて絞り酢につける。人参も少しうちて色どりに加へる。酢より出し皿につけ合せ柚子醬油砂糖少々を加へたるをかける。

五、朝倉煎餅

メリケン粉二砂糖一の割合にて合せたるなかへベーキンタパウダー（フクラシ粉）を入れ水にてこれ棒にてのばし型にてぬき胡麻油であげる。（多摩子考案）



無言の教訓

野路の雨

不言の教、天地自然の默示が近頃私には、又無き教典でございます、之ばかりは日常片時も身邊を放す事が出來ないのですもの……。花は紅柳は緑と悟つた人でも折ふしの變遷のあはれを知る、まして動搖し安い少女心は、善惡の事に觸れ非常なる感動を及ぼすものです。私は之れでも、多少は精神の修養を心掛けて居ますが……無言の教典なぞ申たつて、皆樣から御覧になれば乾度お恥しい黄卷赤軸、又百合一片、捲り立てたら、禪のお智識なぞから一喝を頂戴するでせう……。

けれど、實私は得たる教訓と實行が兩立しないので煩悶して居ます、詰らぬ事ですが、身に泌みた立聞話を悉皆打明けて、イスラエルがバビロンへ寶物を持去られたやうに、私の教典を捨てゝ了つたら、若しか失樂園前の安心立命の地を見出すかも知れません。

△途すがら

生垣つゞきの道から通りへ出ますと、烏を囮にした鳥屋や、赤い友禪メリンスを釣した呉服屋、生花屋の店はコスモスだの蜀紅の錦の菊の花が並べてある。例も單調な色彩と音律の狹細しい町内を、珍らしさうに歩く私の心は全切空虚で……ぼかんとして居るのですの、然し眞逆魂が拔けた樣に、ふら〳〵してる理由でも無いので……其空虚を充す可く何かしら、空想が湧

まます、歡樂に耽ける折もあり又、センチメンタルな想ひに落入る時も有りますの、考へるとばからしいお話なの、遂ひ二三日あと、かうした心地で歩いて居ますと突然「ハイ御免よつ」と私は前へ突飛ばされ、よろよろとして膝を着く途端、眼の前を護謨輪の車が駈け拔けました、

「まー　危ない。」

「姉さん、怪我しなかつたか。」

異口同音に往來の人は、私を勞つてくれましたが、私は赤くなつて消えも入りたく駈けぬけました。恥しい――それは若い身に有勝ちな羞恥でなく、本當に自身を耻じたのです。

お蔭樣で怪我は御座いませんでしたが、もし運惡く、足でも轢かれたら大變でしたわ、今思ふと冷汗が出ます。

町を歩く態度と云つて、有はしませんけれど、兎に角さういふ心持を失つて居たのが耻しう御座いますの。それに又私は何故斯う、憧憬し易いのでせう。偶とある欲望が起ると、もう胸が踊つて押へ切れぬほど全心それに囚はれて了ひます、那麼時よく物を毀損たり、洋燈を落して火事を出しそこねたりするものですから、毎々母から「用をするなら、用の事ばかりに氣をお入れなさい」と云はれますが、

「それだつて、私忙がしいのですもの」と口返答をして……其實あとでは後悔して居ますの。

私はやれ文章を作るのだの、雜誌へ投書するのだのと、云つては、用なぞ致します折は必らず着實といふ事を失つて居ます、一方理性に考へれば矢張り母の言葉が眞理でございます。否すべて、精神一到とか一意專心とかは萬々承知の格言ですが、扨聞き捨てにはならないものです、善く電車なんぞで掏摸に逢ふのは、大方、人込みに氣を呑まれて居る時とか、茫然天井の

廣告を見て居る際です…。蓋し實驗だらうつて…。全く仰有る通り…。

詰り心に空虛が生じた時はもう、既に身の破滅、失敗の原因です、私の理想つたら。

雙耳如聾口似啞
等閑觸著火星飛

の句を指しますけれど、どうしてどうして現實とはねえ…。

武勇勝れた武士は一寸の隙もないといふ、それでこそ天下の險を往來し得たのでせう。



萬象の美に恍惚たる刹那こそ、魔も入れば神も這入るでせう。バイブルの中の蛇も易では潛龍、善く咀嚼すれば、煩惱と即菩提の例もありますが、さらでも誘惑に囚はれ易い弱い女性に奈何して、惡魔を神と同化し得ませう。

お腹が減つては戰が出來ぬとか、本當に生存競爭の世の中に有る限りは、常に充實した心持で隙といふものが無かつたなら、まあ〳〵失敗がなからうと存じますけど、貴女の御考へは如何で御座

いますか……。

△病友を見舞ひて

町さん私もう胸が一滿になつて了つたわ、妙さんのそりあお痩せになつた事、ほんたうにおいたはしいわ、頰の肉もげつそりお落ちになつたし、唇の光澤なんて有はしないのよ、それにあの指輪がもうずる／＼に拔けて了ひさう……嫌ですね、病氣するほど不幸な事はないわね、善く丈夫な時死ん了ふ／＼と云つた妙さんが、私の顏見ると癒る乾度全快するわつて云ふんですもの、人間てものは矢張世の中に執着の念が放れないんだわね、生命つて本當に大切なものなのよ、全くさう思つたわ、だから私もう身體を大切にしやうと感じてよ、あら非道い甘い事をいつて情けやうと思ふなんて……。だけれどもねえ、妙さんも可憐さうですが、一倍お氣の毒なのはお母樣よ、彼おど／＼遊ばす御樣子、御心配のたゝまつたお顏付、親といふ字が刻んだ樣に私の胸に這入つたわよ、あゝ親なればこそ、濟まない濟まない孝行しなければ濟まないと、私人事でなく泌々と感じましたよ。

そりあ全く私は我儘なものですから。

「お前の機嫌は本當に採り惡い」と母が例も愁痴を溢す都度、私つたらぷつとふくれて、ガタン／＼當り散らしお終ひに

「障子にとがは有りませんよッ」と母を怒らして了ふの、ね、妙さんの母樣は未だ／＼お若いから何ですけど、私の母はもう老人ですもの、それを我儘云つては執拗たり僻んだり、母を困らしてる幻影がまざ／＼と見える樣だわ……否本當によ。

町さん貴女もお母樣に御心配掛けない方が可いわ、ほら、妙さんも貴女も私も親一人ですものね、人事ぢやないわ。まあ假によ、緣起でもないけれど、私等が

若しも先立つたら、殘つた母樣はどうでせう。それこそ光も何も消えて了つて、暗黒な穴藏へ投込まれた樣でせう、そして杖も柱もない闇の世界を、手探りにとぼとぼと歩く――おゝ嫌だ、私年寄つた母樣に那麼思ひさせるのわ――今も妙さんにさう云つて元氣を付けで來た處なのよ、妙さんも原因は胃からですつて、胃も惡くなるわ。三人でよく喰べつこなんぞしたんですもの、あんな事絕對に不可ないわねえ、もうよしませうよ、私恐くなつ了つた。親に苦勞かけるのは惡いわよ。

そりあね、實際母樣たつて、隨分腹の立つ樣な無理を云ふわ、だけどそれは私等の心一つで波風が立たないんですからね、そりや事件にもよりますけど、普通母の言葉に屈服して居るのが、道ですわ、えさう感じたの。加之に今日は泣いたの、だつてね妙さんの母樣つたら、私の歸りしな、さうつと、

「奈何も病氣してから、僻味を起して困ります、當人も苦しいでせうが他では猶愁う御座います、既う〳〵一層自分と變りたいと思ふ位です」つて、

私どきんと胸に堪へてよ、それからね。

「本當に貴女はお丈夫で何よりですね、身體が惡るくつちやもう貴女…折角貴女もお氣をつけ下さいましよ。」

しんみりと仰つた時、私から引締められる樣に悲しかつたわ、私遂々外へ出ると淚が留度なく溢れたの、それに彼日は雨が降つてるでせう、じめ〳〵と何もかも哀愁を覺え了つたんです、傘を窄めて泣いて歸つて來た理由でせう。不言の敎つてこれですわ、私孝行〳〵といふ事を思つたわ、それに又健康の必要も痛切に知つたの、もう母に心配かけまいと神樣に誓ひました。貴女又いつか御一緒に妙さんをお見舞しませんか。

△世渡りの一

不肖な私が兎やかう申上る迄も御座いませんが、貴女のお考へはちと穏やかでございません、否女は元來一割方損に生れた者なんですからね。

決して御意見ぢやないのですがまあ、私の失敗談をお話致しませう、さ、お茶でも召上つて今日は御ゆつくり遊ばせよ。

そりあ私だつて、夫と別れやうと思つた事は幾度も御座いましたわ……貴女の旦那樣は御酒も澤山は召上れないし何と申したつてお仕合ですよ……私の處なんぞ彼通り浴びる程頂くし、有れば有りつたけ使ふと云ふ性分でございませう、加之食客まで引張つて來る事もあるのですもの、世帯の苦勞はさん〴〵させられました、さもしい事を申す樣ですがお金つたら極まつた月給以外に一錢の收入もなし、そりあ四苦八苦でございました。それで男つてものは無勘定でちつとも斟酌はないのですから、私だつてさう〳〵辛抱もしきれませんから稀には愚痴も出るといふもの、すると貴方、蒼蠅いつと頭から怒鳴りつけ、

「家へ歸れば泣言ばかり云ふ、いやだ〳〵一日外で頭を疲らして、休めやうとすればこれだ」と苛々して居るのでせう、そりや察して居ます然し妻の身となれば又悲しうございますわ、あら松田さんもさうですか、男つてものは本當に何方でも御同樣ですことね、

でも……仕方が有ませんよ、自棄になつて、えゝ一層の事別れ了ふ方がいゝ、何の一人身になれば、お針をしたつて生活して行けると、其時は威張つて、不足勝なぐづ〳〵の生活は沁々厭になりまして、新らしい生活に憧憬出すものゝ、詰る處それが女の猿智惠とか申す、淺墓な了見でございますわ、さういふ時は、えて空想に落入り易く而して魔に見込れる折なんですよ、矢張り兩夫に使へぬ主義が全く處世の道の羅針盤と存じます……まあ、お聞きなさいませ！

斯う云ふ時に偶と疑惑が起りますの、私ねえ其時本當に本當に世間の人が憎らしく、誰も私に同情を寄せてくれやしない、お金なんぞ催促にくる商人なんか鬼の様見えましたわ、、、、、、全く。遂ひ無駄使を私は始める、もう何をするのも倦怠を覺えましてね、其日の仕度にも手さへかければ經濟なお菜もできるのを、え丶面倒なつて氣が起つて、お入用お構なしといふ流儀でやる、猶いけませんわ、實際貧ほど情ないものはございませんねえ、人に窮狀を打明ければ夫の耻を吹聽するやうなものだし、一人苛々してるもんですから漸漸了簡が狹くなつて品性が卑しくなります、でも夫は機嫌の可い時なぞは。「俺も、今少しだから辛抱しろ、二三ヶ月たてば今より位置が登るから」なんて申ますが、何だか奈何も前途遼遠に感じられましてね、お終ひにはだん／＼夫に逆らつて參ります、あ丶惡るい濟ないと知りつ丶物を云はれても返事をしなかつたり、ぬぎ捨てたお召をわざと疊んで上なかつたり、垢だらけの服を召してとす黑い靴を履いて見すぼらしく、御



出勤なさるのを平氣で傍を向ひて、斯うでもしたらお懲りになるかと、肝腎な婦德を忘れて、健全なる品行をも打捨てゝ這麼態度を致しましたのを今考へると汗顏の至りでございます。ヒステリーになつて曲りくねつた根性がどうして眞から心付いたかと申ますと、ふと頭腦に一閃の光明を意識したからでございます。光を得たら漸々に暗黑な悶灰色の影が遠く／＼消えて了つて…とはちと誇張したかも知れませんが、何しろ女は女らしく夫に從ふべき者だと觀念致しましたよ。

實は之限りのお話をするが或る晩私は夫と爭つて飛び出しました、もう大變感情が激して居りまして、前後の考なく、新らしい生──伴なはれた歡樂と一方には現在の哀愁とが混亂して、夢の樣ふら／＼と近所に自炊している從姉の門を叩きました。

何分實家の父は頑固ですから、追ひ歸されるのは必定と、里へ行くとは出來ませんでしたから…。

忘れもしない青い樣なお月夜の晩でしてね、一泊は致しましたが、從姉といふのは恐ろしいクリスチヤンでして、種々と私の不心得だといふ事を申ますし、寐覺め勝の夜中に、一人行末を思ひますと、急に涙がほたほた溢れて、自分が惡い／＼と無形の鞭にひしと打たれました、殊にあんなに寂寥を感じた事はありませんでした。

翌朝從姉に送られて、ゆく道々さぞ夫は怒つて被入るだらう、引摺り廻られ、打擲されるのは覺悟しておりますと、夫は何も申ませんで太息して、

「解つたらもういゝ、もう過ぎた事だ。」

と云はれた時、あゝ惡るかつたと、一層怒りつけられるよりも、一倍の重い苦痛を感じました。

詰り切つてもきれぬは夫婦です、貴女が別れると仰有つても末は大抵かうしたものです。私もう眞實家事

空前新法

男子部 撰文者 大町桂月先生 揮毫者 日高秩父先生

女子部 撰文者 鹽井雨江先生 揮毫者 坂正臣先生

手紙をよく書きたき人は

▲本會は西洋のぺんまんしつぶと支那の寫字法を折衷し之に新案を加へし獨特の一大新法改良習字速成帖により書簡文字を半切形に練習せしむるを以て進歩實に驚くべし家庭練習用としては恐くは本會の右に出づるものなし◎前期後期各六ヶ月

◎詳細會則 申込次第進呈

東京青山北町一の八 陸軍大學東隣 大日本書簡文字速成會

本書には前編に添へたる落合先生作孝女白菊の歌を吟誦せしむるに便するが爲め特に高等師範教授田村虎藏先生の作曲せられたる白菊の歌の樂譜を添ふ

家庭小説

後の白菊

(コロタイプ口繪入 四六判表装優雅)

定價金參拾五錢 郵稅金六錢

新刊出づ

阿蘇の人作 鏑木清方畫

月明かならんとすれば浮雲掩ふ、あらゆる慘虐の手は孝女白菊の身邊を圍繞せしも、よくその辛慘を忍びたる彼は遂に再び光風霽月を見るに至る、著者は當代有數の文士にして、構想の奇筆致の妙は讀者をして恍惚たらしむべく、前編に對して一頭地を抽でたる作なる事は言を俟ず、速に愛讀を賜へ

表装優雅 定價郵稅共金四十六錢

第九版 ―巖谷小波題 蘇山人編 鏑木清方繪

家庭小説 孝女白菊

本編には井上博士と落合直文先生の詩と歌を添ふ 好評嘖々

●發行所 ◎東京神田表神保町 振替口座一九〇四四番 福岡書店 ◎同市淺草下平右衛門町 振替口座一九〇六五番 岡村書店

女(るの一)

本誌始め博文館雜誌廣告

御得意各位に謹告

本誌も彌々當號を以て四十三年度の終刊と相成申候從て本年度に於ける本誌外各雜誌廣告の情況は御得意方の深厚なる御同情に依り前年度より遙かに好成績を擧げ申候是れ弊館各雜誌共前年より一層擴張に伴ひ廣告効驗も益確實と相成り申込者の增加せる結果にも可有之とは存候得共畢竟御得意諸彥の御眷顧厚きによる次第と弊館一同深く感謝する處に御座候茲に乍略儀紙上を以て謝禮の微意を申陳べ候尙來年度も倍舊の御引立を懇願申上度如斯に御座候

追て**四十四年度本誌初刷**廣告は**十二月十日**を以て**〆切期日**と確定仕候へば歲末御多用の事と奉恐察候へども右期日迄に是非共御用命仰付られ候樣乍憚御手配被下度是又併せて奉希上候

東京市日本橋區本町

博文館廣告係

女(ろの五)

東京朝日新聞記者 澁川玄耳君序文
やまと新聞記者 岡雷平君著

南洋群島珊瑚嶋探檢記

玄耳君の序に曰く『……此の本の標題を見たり、廣告を讀んだりする人は、或は例の見て來た樣な法螺か、若くは、圖書館仕立の綴縷織かとおもふであらう、併し一たび繙いて見たら意外に驚くであらう、書中に記する所は、悉く著者が親しく經歷した所で實事實情に非るはなく、而かも其觀察の各方面にして且つ奇警なること實に趣味と實益とに富んで居る、つまり本書は著者の才と學と勇氣との反映である』

全一册

菊半截洋裝美本
紙數約三百四十頁
定價金三十錢
郵税六錢

江見水蔭君新著
織田東禹君密畫

小說 牡丹族

著者最近の努力に由つて成つた快著述です。其思想は奇拔にして其文章は圓熟、他に類と眞似手の無いのが實に水蔭子の筆。最初の一頁を開いたら最後、迚も卷を措く事が出來ない程面白い。知らず識らず五百餘頁の大册を讀盡さずには居られません。讀盡しても未だ餘韻が長く〳〵響いて居ります。文學上の價値を有しながら、興味の含蓄、斯くの如く多き小說は全く珍らしいです。

卷中主要人物（▲自制力を有する現代の眞青年（水野靜也）▲境遇に於て現代と隔絕し爲に最も自然に近き人たるを得たる少女（龍子）▲甚だしく不自然に戀愛性の發達せる老爺（宗兵衞）▲遺傳と境遇とに由り一部の精神病者たる乞食少年（ワン〳〵小僧）▲逆境に耐へ沈默の間に實行する眞の愛國者（高穗健造）▲愛を蹂躙せむとして失敗せる妖婦（お小夜）女（ゐの六））

全一册

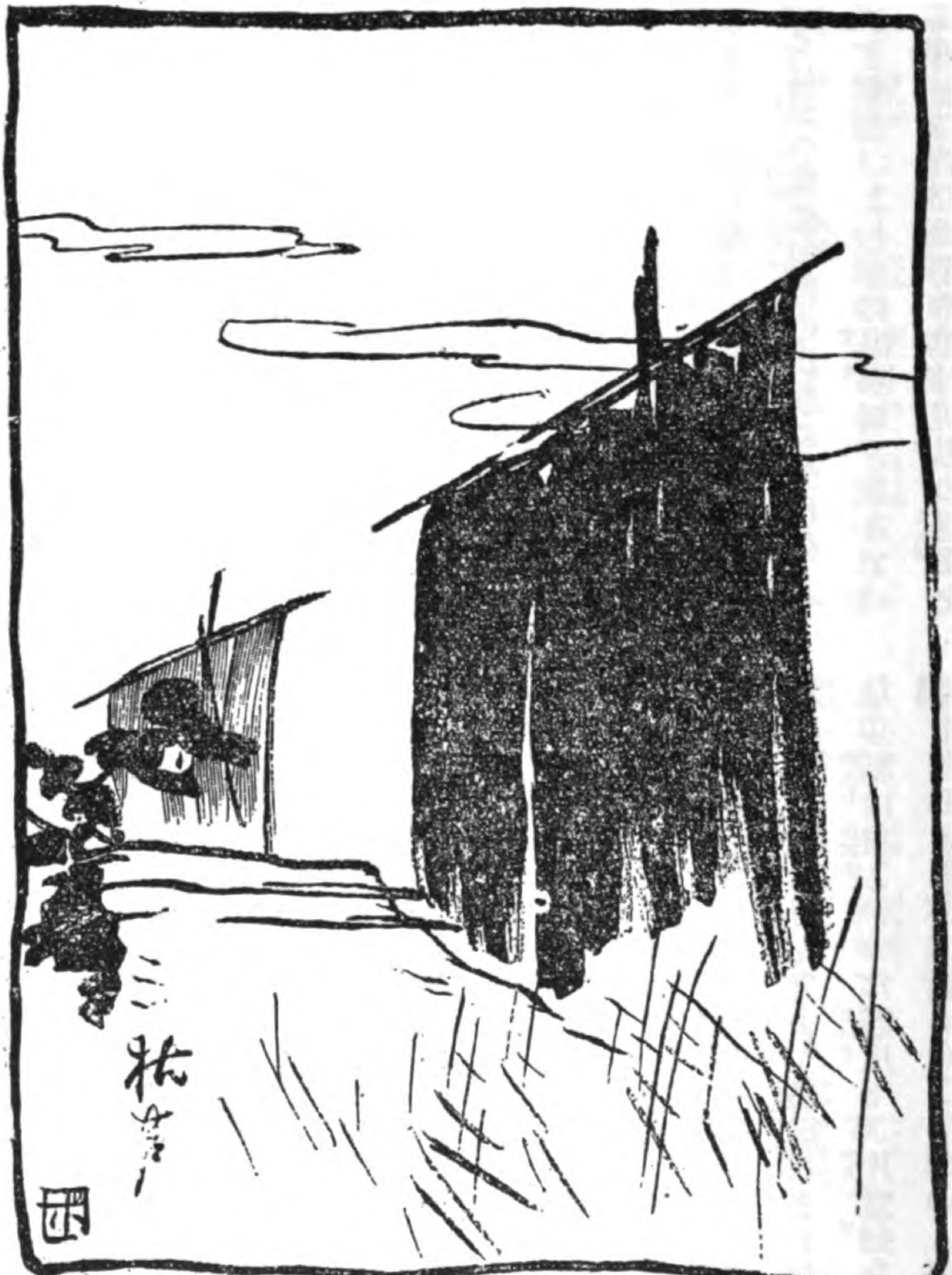
四六判洋裝美本
紙數五百頁
定價金五拾五錢
郵税金拾錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

に努力しやうと決心致しました、そして一日も早く夫の成功を祈るのです、でも此節は自然經濟の秘訣を自覺したから不思議ですわね。

△世渡りの二

私が最初世の中へ投げ出され、自活すべき運命を吹きつけられてから、只今の樣になるまでは隨分愁い事



も悲しい事も、さん〴〵めぐり逢つたものでございます、もう斯うやつて袴を着けて社に勤めるのが五年になります、全く自分でもよく辛抱したと思つて居ます。

何も取立て、社がつらいと云ふ理由でも有りませんが自分の手でお金を得るのですもの、又云はれぬ氣苦勞もありま

す、勤めと云つて機械の樣に、日々の日課を繰り返してばかりも居られません、それに女子ですもの、愛嬌もいれば、朝夕の挨拶お世辭もしなければ、中々圓滿な人交際が出來ませんわ、よく新參の內は學校かなんぞの樣に、一日神妙に働き上役なんぞへはおそる／＼、物も言はぬ樣に致しますが、實は其時分早く內面觀察を仕得た者が勝利者で、出世の道が早いのでございますが、幸か不幸か私は這麼茫乎者でしたから、唯眞正直に表面の規律や訓示を守つて、そんな裏面なんかに氣が付かなかつた爲、一時は失敗致しました、氣の付いた時は遲蒔で、煩悶痛恨、飢鷹のやうな情闘を抱いて、どうかして私ももう少し地位を進めてもらひ度いと思ひましたが、とは云へ追從輕薄の出來ぬ生れ付、今更何の智恵が浮びませう、よしました出來たところで、今時分可笑な木に竹をついだ樣子や、付燒刄の言葉を並べたつて、さつぱり効能が無い而已か益々己が品位を下げて了ふのです。

天が憐れんでくれましたか、偶と私は自らある秘訣が浮びました。强直に我主義を立て通す、決して他の障害や冷笑をも省みないとの決心から、遂々今では眞實の勝利者となりました、而してひそかに裏面ばかり活動してる人等を、憐れまずには居られません、ちと貴女の前で口幅つたい樣ですが、私はかやうな誇を持つて居ます、少しの疚しい處のない手段で、自分の位置を築いたのですからね‥‥。

同僚のAさんBさんは社長の御機嫌伺ひに行く、信用も愛でたいと知ると、むら／＼となるのは女の常で御座いますけれど、世間一切見まい聞くまい只誠實を武器として、忍んで／＼堪忍じました。何有向うが右なら私は左といつた態度で、片意知を貫いた結果一人叫んだのです。

人の力で巧言を千度百度弄し、萬一袖の下のからく

りがあつたとて、構はないッ、其中を一人嚴然と神の力によつて、我職務を忠實にはげめばいゝ。

忠實に身を砕いて勤務し、一點の非の打ち處もなかつたなら、百の敵が來たつて恐れるものではない。

第一事務員といふものゝ目的は、職務に專心たる可き事が、抑々の條件なのだから、此正道を確乎と、踏み堪へたなら、乾度動かす事が難かしいと思ひます。

萬一忠臣臧の師直の樣な、陋劣な手段を廻らされたつて、私は其侮辱を忍ぶ……もし萬やむを得なく、職を失つたつて、吾信ずる主義に仆れたのは寧ろ勝利を得たのだ、といふ考へで以後私は、陰日なたといふ事を一切致しませんでした。一面から申しましたら、馬鹿らしい迂遠い手段だとお笑ひなさるでせうが、然し何等の障害にもびくともせず、常々洋々とした心で居られるのは之が第一で御座います、這麼堅い安心の場所はないと信じます。

そりあ始めは賴のないやうな、悲痛を感じる時も有ますけれど、私は奮るつて、決心といふ鋭い刀で、そんなむら雲は拂捨てやうと試み出し、一度は千丈の斷崖へ身を投じましても、乾度蘇生るの信念に依つて、猛進しましたの。

まあ……このくらい考なけりあ、直ぐ厭世家ですね、今時莊嚴でもありますまい。氣をぐつと大きく持たねば自活するのは難儀なものです。

何だかお話はそれ丁つた樣ですわね……まあ一寸申すも私はね、朝も先立ちに早く出勤しますし、仕事もさつさと片付け、決して手をたらして、油を賣つた事なんか有ません、何にでも念を入れゝば人にまけやしない事は當前ですもの。そりや仰るまでもなく、眼をぬすんでは依り合つて無駄口を叩く方々から見れば苦しいかも知れません、けどもかうした自分の心は一點の曇もない四面玲瓏、鏡の樣でございますから、取

締りが來たからどうの、上役の御機嫌が惡るいからかうのと、詰らん心使ひは入りません、貴女、泥棒猫みた樣に、きよろ〳〵人の顏色ばかり伺はないでも、差支へなしですから、精神の苦痛なんか夢更ございません。

心が平和だといつか、見聞くものが愉快で〳〵福の神樣が舞ひ込みますよ、ほ……、僞と思召ならおためし下さいませ、否就職遊ばしてる御婦人方は是非かやうな世渡りをお探りになるやうにと私お勸め致しますわ。

私の知つてる交換手の方ですがね、お官署でも矢張暗潮が流れてるさうですつてね……其方なんか田舍のぽつと出でしたから、隨分愁らいのださうです、もう辭職すると仰つてゝすが、本當にお氣の毒、お察し申ますけれど、私そこで一奮發、敵を引受ける勇氣があつたらば……と思ひますわ。

それに又貴女、自分がいくら同僚間の女王になつたつて、何か心に秘密をもつて、風の音にも心置く風情では困ります、疑惑や邪推に悶々の結果、人を中傷したり、惡手段で人を落しめたりする不道德は、屹度還座お方の特有ですもの。

たとへ世が末期になりました處で、大義名分は確然として居ます、人情が浮薄に流れた故、強ち自分の信念まで捨て、流行にならはなくとも、宜敷からうと存じます。私は朧の春の月より澄み渡つた秋の月の、かくしだてのないやうなのが、大好きなんです。

私はこんな經驗を以つて、自ら敎訓を施しましたので……。まあ〳〵お陰樣で只今は、どうにか人に押されぬやうになりました。

貴女もさうくよ〳〵お考へなさらず、遣る處までやつて御覽遊ばせ、どうせ一生心配して送るのは詰りません、一度は人に揉まれ、苦しまないぢや出來た人間

にはなれませんですわ。私なんか大抵徹底とは参りませんが、兎に角自分を信頼してますからねえ。

もう〳〵心細い事を仰有らず、勇氣をお出し遊ばせよ、何有鬼や蛇ではなし、同じ造物主がお作りになつた人間同志ぢやありませんか。死ぬの生るのと生活に不平を云ふのは、反つて自身が至らないので御座いませう。

まあ、失禮な事申上ましたね、けれど、これも貴女のお為を思ふからですよ‥‥何卒ね悪るくお採りなさいませんやうに‥‥。



△噂から得る教訓

A、鳥渡拝見‥‥貴女の金蘭簿、おや、大相個條書がありますね。必ず中間に立つて人の事を告げぬ事、こりあ全くだ、M子さんなんか好いモデルだわ、私お蔭で非常に迷惑して了つた事があります

よ。

B、あゝいつかの事、貴女が私の悪口を云つたとか何とかつて・・・ありあ私つひ誤解し了つたのよ。

A、そんな事どうでも可いけれど、貴女と親友の中を一寸でも波瀾を起させてさ、よくある事だけれどよくない事ねえ。

B、全くよ、だから先一條に特書した理由ですの、

A、萬事熟考の上着手する事だつて、極まつてるわ、此邊は平凡だ・・・成可く虚偽をさける事・・・あゝさう、虚偽と云へば今日可笑しくつて・・・。

B、へえ奈何いふ事？

A、今日ね、出入の魚屋の小僧が無理に顔を顰めて、泣かうとして居るのでせう、餘り變だから、奈何したのつて聞いたら、其返事が面白いですよ・・・

B、まあ！　なんつて。

A、今出前に持つてく魚を犬に捕られたから、此儘歸ると家で、お前がくすねたらうつて、打たれるから、云ひ譯に泣きながら歸るつて云ふのホヽヽ、實際家庭が思はれてよ、子供の事だから一笑に附し了ふけれど、日常氣を附ける事ですわね。

B、實の處私等だつて、さう云ふ意味の行をやつて居る人だから・・・自己を退けて見ると本當に浅猿しい行爲だわね、詰り一家の波瀾の原因ですわ。

A、けれどもね、其魚やの主人の待遇や他に親の敎育が自然、其子をさう感化したものとすれば可哀想ですわね、私母となつたら・・・否主人となつても、大に注意しやうと思ひますわ。

B、用意周到ですね、といつて私も同感よ、それに女つてものは實際廻り氣だから、生活上なんかにも取越苦勞とか、想像の度を過したりして、飛んだ失敗をするものですわね。

A、さうですとも、加之に直ヒステリー性になるから

お丁ひには同情もなくなり、憎惡の念で人にみられてよ、私の姉なんかの様に。

B、あゝ耳が痛い、私は我儘ばつかりして居るんだもの、だけど種々な些細な事で、自然に敎へられる事があつてよ。A、種々な事つて……？

B、それはね…かうつて云へないけれど、一寸母が身體の惡い時とか、それから兄が餘り遊ぶ時なんぞ、沁々呑氣ぢやいけないと思ひますの、季の變遷や木の葉の落ちたりするときは、かう淋しくなつて自然に生活と世間つて事を胸にハツキリ印象されるわね。

A、貴女は情熱家だからさうでせう、ね、虚榮心が無かつたら、どうでせう。

B、でも…女ですもの、絕體に無くする事は駄目だわ、私妙な江戸ッ子氣が出て、逐ひ人と反抗する虚榮心が…それも場合によつては必要ですが、私なんか、着物とか遊山とかに張合ふんですもの、增長した日には大變だと、知つては居るけれど。

A、ぢや思切つて、江戸ッ子氣なんか全廢した方が可いわ。B、さう…。

A、私もね、弱點があるのよ。だつてさう昔の樣に男女の間を八釜しく云つては居られませんわ、と思つて私ある青年と、音樂會や、夜散歩に行きましたの、あら全く穢れた交際ぢやないのですよ、私は自分で潔白だから、何の耻づる處もなかつたの、すると、先日其人から、手紙に思ひでの夜、だの、心を語りの雨の一日なんて、意味ありげなものを寄越され、非常に家の誤解を受け了つたの、全く冷汗を掻いたわ、矢張異性は敬遠するのが爲です。

B、まあ、左樣、お互に氣を付けて、修養しませう。

A、えゝ本當に…。（日常生活の教訓第壹部）

（前號に第貳等とせしは誤）

新案の裁縫用具

▲長年月間裁縫科を擔任致して居ます吾れ〳〵の經驗からして、斯くすれば衛生にも適つて且つ便利であると決りました事項が二つ三つムいます、其一つは「石綿張りの火熨斗臺」を使用することであります、形は四角でも八角でも隨意と致して其の板の上に厚さ約二分計りに石綿を張つた臺を作りまして、火熨斗を使用する場合は其臺の上に置くのです、左様すると第一火熨斗の面があれず、かん〳〵起つてくる火を入れて置いても少しも危險はありません。

▲其の二は「脫脂綿の針刺」でこれは脫脂綿を金巾若くは唐縮緬若くは絹に包みたる針刺です、頭髮又は椽などを入れて針刺と致してる風習は今尙ほ行はれて居るやうですが、之れは衛生上頗る劍呑であります婦人達が指に破傷風を發して手術を受くるに至るのは、時として針刺内の頭髮や椽中に湧いた黴菌の浸入に依ることがあり其の他此關係からして指を痛めるのは珍數ない程です。

▲其三は「蠟の使用」です、裁縫者がちよい〳〵針を頭髮になすり付るのは頭髮の油氣に依て針の通りを滑かにする爲でありませうが、之も前同樣黴菌侵入の恐れもあり、且つ不潔でもありませうから、其の代りに蠟を使用するが好いです、針の塗つた度毎にちよい〳〵蠟を透すと大變通りが良くなります、二錢か三錢かの蠟があると數ケ月間用に足ります。

以上は經驗中に時寄他人にお話致したこともムいましたが、いよ〳〵之れが衛生的の便利であると決定致したから、學生の新入學に際して針刺などは必ず新規のものと取替させます。

▲大に裁板も裁縫に缺くべからざる必用品でありますが、二間か三間の狹い宅であると普通のゝは不便であるので、いろ〳〵工風致して「カサイ實用裁板」と云ふのか出來あかりました、之れは大體をボール製で三つ折り若くは四つ折になつて居るから不用の時の取扱にはなか〳〵輕便であります。（東京女子師範學校今村順子女史）



今様 枕の草紙

礒ちどり

○見たる事なきもの

足長蜘蛛の巣繕へたる」一薬舗の薬局の人に薬賣り居たる。されど暑き日も寒き日も洋服着風采奏で、足どりも面白げに歩くを見れば必ずよき事の道になるにぞあらむ。」その外目白の子、西洋人の小女、さては物事にさばけたる博士も見し事もなき。我身一ッの僻眼に

にや知れねど、博士とし言へば古き文書物の中に埋もれ時世と遠かりさゝやかなる事をも大事の様に思ひなす人を想出すこそせんなけれ。醫學博士、工學博士はよけれども文學博士はいとゞ物古りたる様覺ゆ「女とあらむ者が、斯々の事書きたり、ゆゝしき大事也」と天地の覆りたらむ様に打愕き「さても今時の女の墮落したり墮落したり」どひた歎きに歎き給ひたるもをかし。三毛猫の牡猫。

○女の見し男の職業は

實業家會社員はなべて暮も豐にてよろしけれど何時も何時も忙しげにて休む暇とてはなき、偶の日曜などには客多く來るに酒などいだし日もなほ短き心地する」工業家も好もしからじ殊にさる紡績會社あるは砲兵工廠などは夜業と言ふものありて、蝙蝠の様に晝寢ね、夜となりぬればこそ〳〵と出で行く。喧ましき機械の音、さては息もつまる烟の中に眞黒となりて働く人の我夫としなれば妻は淺ましきに涙もこぼれぬべ

し。なべて身體働かせてある男は趣味もひくゝ、女の雜誌小說等見てあれば「そは何ぞ」と手にとり見、初の寫眞版五六枚はねて、味氣なげに打やり、「何か甘き物工夫せよ」等言ふらんかし。

總じて勤め人は夕暮迄も我家へ歸さまほしけれ、物心つき初めし子供持の父の朝夙く出で夜遲く歸るれば我子の寢覺めたる顏見る事も稀に、夜等燈火ともしたる下に夜食したゝめながら寢顏しみ〴〵と見入れ妻と微笑みかはし居たるは何となく哀なり。されば朔日、十五日などの休の日に子供は父を見馴れねば母の側みにゐたる「此處に來よ」と髯多き顏に笑顏見せてさし招けば早泣かむばかりにしたるは親の身にすればいとゞつらかりなむ」

巡査は世の人より怖ぢらるれど辛苦しく、まして何時惡しき者の手に襲るや知れねば恐ろし。」さるにても思ひ出でつ。學校の寄宿舍にありける頃、冬の眞夜中にふと眼醒むれば閉せし筈の廊下の戶、怪しき音立つるに、皆搖起し蠟燭さゝげ怖る〳〵見にゆけば庭に出づる戶の打開かれて夜寒の風のいとゞ吹き入るなりけり。

やがて舍の內は湧くが樣なる騷となりぬ、我部屋へ入る者とてはなく皆廊下の片隅に打集ひて、思ひ〳〵人の打震ふ樣なと打笑へど脣の色とてはなし、暫しありて巡査の赤き提灯もちて來給ひぬ。舍監の君を後に方々見廻るに恐る〳〵つき行く人もありしが、巡査の一人「此處等に隱れ居るやも知れじ」とつか〳〵と納屋の方に行き侍るにわな〳〵と逃げ來給ひつ。其巡査は提灯其處に置き、ゆん手に佩劍にぎり右手に傍なる長柄杓とり流石用心ふかく戶押しあけ給ふに、はたと音してころがり出でし物あり、巡査の君は思はず飛退き給ひしがそは空俵なりけり。事過ぎては誰も〳〵そのこと語りいでゝ笑ひしが、其折は怖しきに胸つぶれいかで笑ひなどはしたりし。」

敎育家は頑固なる大學の哲學の博士より初めて中學敎師小學敎師迄皆それにぞある。中にも小學敎師は巡査とならべて貧しきものゝ譬にも云ふなるは心得じ。

童はひねもす、ゝ、のど佛のゆるぐ泣聲いだし、いとむさげに鼻たらせし子を天の使とも思ひ、二階など貸り、紛れし靴はきたるはいど〻哀深し。

あな戀しき事を申してけり、野菊の君は脊の君に先生もたりけらし、げに戀しきことを申してけるよ。」

○清らかならぬもの

油入るゝ器。祖母の耳の中。猫の耳も何となう濕りて清ならず。」孤兒の襁褓、初の程は衞生の爲惡しなど言ひ、他の物は倹約すともそれのみは白き清げなる木綿にてせむと思ひしが日數經つまゝに何れも〳〵濡れたるに初つ方の意氣込は何處へか古き物は何にもあれ引出して使ひたるよ。しと〲と降る雨の日は外に乾すこともならず一間に綱はり、種々の色なるを滿艦飾の樣に打吊し。あるは鷄籠の中に火桶いれ、上に濕りしものかくるに異樣なる香の立ち迷ふも親にしあれば忌はしとも思はであらむ。」その外布團綿。饒舌の抽斗の中。田舍なる中學生の小倉服も清らかならず、されど都なるはさる事なし。



○異なるもの

羊の眼、兎の顔。その外獣の子は皆罪なし。人の子も皆罪なし、三つか四つの子連れて道あゆむに、ふと石などに躓きていたく泣くに、驚きて其處撫でやり擦るに漸く泣きやむ。されど頬に涙つたはり鼻の下いみじう汚れたるに「さても汚き顔かな。鼻をしもかまで」など言ひて袂より紙出して押拭ひやるに悄泣吃口したり「未だ痛きや」と問へば頷くに「最早治りしや」と云ひても亦頷きつ、「あな、もどかしき子よ」と腹立てて「何方ぞ」ときけば暫し打迷ふ風情にて「彼方」と向の方を指さすに、可笑しさに思はず打笑へば、共に子も笑ひ出したる、いと罪なし。

○賤しげに見ゆるもの

白粉濃く塗りすぎ、襟足鮮明に飾つきゐたる。美はしう着飾りたる女の足袋黒く成りゐたる。また衣類は汚き程にもなくて下駄のみよき男。カフスカバー。男の毛糸の襯衣着たる。人前にて楊枝つかひゐるは怪しき音たてたる、何れも賤しげ也。

義歯は汚き物の限にぞある。年老いたる男などの義歯したるが、食事せし後それを抜き出し茶碗に湯汲みて洗ひまた舒ら両顔に嵌めなするは賤しげに見ゆるのみか見る者は胸をぞわるくすなる。慎しむべき事にこそ。

○もて惱むもの

晴れたる日に持て来し雨具。泣く子、母親の一寸隙に連れて外出したる留守にいみじく泣き出し抱きやりても反りかへりたる。夜泣する子にも親はほと／＼持て惱むよ。雨降にのぼりつく犬。

今様の僧は精進やはする梵妻と云ふものもち本堂の庭に襁褓乾したるもあり。供養等の折によべば形ばかり経よみ後は詣り合せし者と四方山の話などするにいと賢しらげに物言ひ何を云ひてもさなり／＼と答ふ。やがて我寺の修繕も近き侍りぬ等それとなく云ひたるも可笑し。うら盆に寺よりおどろ／＼しき袋もて来て米乞ふは唯此邊のみの慣にや。

社、寺の門際に、金幾圓、何某との札建て而も二圓

三圓と云ふはいと小さくてあるはいと凄まじ、布施の志になど多少なやはある、札建つるならば多きも少なきも同じ大さにてあらまし。

僧の御頭はならべて丸らかに金柑の様なるが多し。額かどかどしう、あるは中凹み後に張りいて才槌の様なるは見し事もなきは奇しき事なり。



○卑下せらるゝもの

流行後れの物持ちたる。演劇などに行きたるに我よりよき席に知人見出したる折、長屋住ゐ。あかぎれと云ふ物したる手も骨牌遊などに招かれし折にはいと卑下せらるゝ物なり。

なべて骨牌遊びはもどかしきもの哉。我札ばかりは如何にもして守らむと見詰めたるに向なる上手の「御免遊ばせ」と言ひて持歸りたる「同じ持歸るならば斷言はであれ」と腹立つれど術なし、されば此仇討たんと向なる札の内、「少女の姿」あるは「我衣手は露」など我上の句知りたるを一心に目がけてあるにいつか取り漏らしたるも口惜し。顔赤くほて

り、眼痛くなりたれど我持札人に讓り只二枚三枚『是を拔かれては』と云はれつゝ上の句敎へられて守りたるか亦それをもとられ終んぬ離て頭いたければと託言いひ火桶の傍に來て合戰の樣眺むるに『並べし札を互にとり合ひて何の面白き事やある』なぞふと哲學者の樣なる事考ふるも奇し。かゝる折ふと我家の氣にかかれと招かれし主に惡しければ歸りもならず何とも知れぬ淚の怪しう湧き來ぬるもをかし。

○何となく妬ましきもの

我前にて人の稱められたる。昔は往來せし友の今は身分隔たりたり、さればとて其身分になりたしとも思はねど。

夫の、人の妻の事度々言ひたるも何となく妬ましき心地すらむ。(大尾)

盜賊の注意

秋から冬にかけて賊の忍び入る時間は、夜の十二時過ぎから朝の三時頃迄が最も多いのです、最も山の手と上町と下町と云ふやうに處にも因りませうが、兎に角何れの家庭でも、大抵就寢時間は十時位でせう、勿論職業の種類に依て十二時或は一時二時三時過ぎ迄も、起きて居る家庭もありませうが、概して家人が寢込んで仕舞ふのは、十二時から三時位迄で、此の時間に忍入る賊が最も多く、警官が賊を逮捕するのは、先づ朝の五時迄であります、之れは賊が仕事をして歸る處を狙ふのです、併し夏季に多くある賊賊は、日暮頃に尤も夥いのですが、是は夏は屋内を開放して奥の一室で家族が集つて晩餐をして居る處を狙ふので、冬の賊は宵口からヂッと忍び込んで居て、深夜を待つて仕事をするのです。

賊は天井の引窓から入るのが取別けて多く、引窓を絶好の入り口と心得て居て、塀から屋根に這ひ上り棒をひつかけて巧みに引開け悠々と屋内に忍び入るのです、引窓から賊に入られるのは全く主婦の監視が足りないのと下女の不注意とに因つて、賊に好機を與へるのです、又戸締りの極めて嚴重な家庭でも稍やともすると湯殿や臺所の水口や、或は便所などから忍び込まれる事が多いやうですから、特に然う云ふ處の注意を怠らない樣にして貰ひ度いのです、要するに戸締を油斷するのは何よりも惡いと思ひます。

(警視矢野元三郎氏)



小春日記

内藤千代

△

コバルト色の天皇日和、私は午後から奈良林さんへ行く。

靴ぬぎに上品な緋鼻緒の草履がぬいであつたから、きつと嘉鶴さんと思つたら、案の通りであつた、奥様は白の前かけのまゝ、濡手ふき〳〵含笑んで出てゐらつしやる、直男様のお部屋へ通される。

お床はのべてあつたが、直男様はネルの下着に銘仙のどてらはおつて、お机に凭つてゐらした、掛花活に白菊が清い香りをはなつて居る。

「よく來て下さいました。この頃はひどいお見かぎりやうだから、どうかと思つた。」「あら。」

花ならつぼみの直男様は陸軍小尉、こんな御病氣さへ出なければ、今日などは雄々しの武者振り、青山原頭馬上ゆたかに……。あゝ何と云ふいたましい御夫婦でせう。

とは云ふものゝ私、直男様のとこに上ると何だか不安で……、肺つたつてまだ肋膜なのだし、奥様など平氣で朝夕御一緒にしてらつしやるのだけれど……嘉鶴さんはとみれば、お膝に行儀よくお袖を重ねて、泉水の方をぢつとみつめて被居る、漆黒の桃割に黄菊の一輪、質素な秩父のお被布、嘉鶴さんも淋しい方だ。

やつと奥様も坐におつきになつた、まア奥様のお髪ほんとに何ていゝんでせう、ふつくりした前髪から、鬢の境目のところなんぞ、まつたく震ひつきたい樣、

少し上氣した頰に、うろしの後れ毛はらりと懸つて、おぼろお召の薄綿入。

直男樣のお所望で、いやがる嘉鶴さんを無理やりに緋紗綾の袋を拂つて、お琴が前にさしすゑられる、私まで一緒になつてしつこく、お強ひしたら、もう眞紅になつてお了ひなので、お可哀想だつた。細い襟首を俯けて、少さなお聲で、一曲おひきなさつた。奥樣は何のかのとお上手にごまかして、どうしても遊ばさなかつた。直男樣も大分元氣が出で、私を冷かし初める。

どうぞ此方へ、とお座敷の襖を開けて、其處にはもうお支度が調のつて居る。一閑張の食卓、九谷の大花瓶、正座に直男樣、何時の間にか黒紋附のお羽織召して――。私と嘉鶴さんが左右、奥樣が下座。

直男樣の五分演說、一同つゝましく　陛下の萬歳をとなへた。祝杯のあげられるところだが其樣ものぬきにして、美しいちらし壽し、鯛の鹽燒、茶碗蒸、新栗きんとん、梅花玉子、りんご羹、烏賊の福祿煮、柿なますこで添へられた、奥樣のお手際。　直男樣のお顏にも笑があふれて居る。

「まア、奥樣はほんとに氣が利いて被居るのねえ、私達の大好物ばかり……」心から云つたら

「內藤さん、富さん(奥樣のお名)はね、西洋料理の方が上手なんです、度々夫君に黒燒のオムレツを食はせます。」

「けれど、富さんのこしらへたものなら何でもて有仰るんでせう、ホヽヽヽ」

「あらお千代さんは」

「おほゝゝゝ」

紅かけ納戸の紋羽二重に、緋綸子の裏が、またなく可愛く艶である。私もあの紋羽二重を緋裏にしといてよかつたと思ふ。

眩しい夕陽が丸窓の障子に栄ゆる。

△

今日から我家の二階へは、かねてお話のあつた伯父樣からの御紹介で大學生が一人わらつしやる事とな

つた。

どんな方かしら？　八代樣の樣ならうれしいけれど天はさう私の願をきゝとゞけては下さらぬ。

母樣はお忙しくお掃除やら飾りつけやら、大きな卓子を二人がゝりで持ち上げるやら、私も姉樣冠りで半日暮して了つた。

一時過ぎがらからと車が着く、私はいそいで茶の間にかくれた。二階へ通らるゝ後姿を、硝子ごしにチラとみる、制服を着てゐらしたが、脊のあまり高くない方だつた、落ちついた物の云ひ方、お義理のやうな



母樣のお笑ひ聲もきこえる。

やがておりてゐらした母樣が、火鉢のふちにのせた名刺には「法科大學生、勝見豊一」とあつた。あら法科、何科だらう、獨法ならいゝ。

お茶やお菓子を私にもつて行けとおつしやるいやだ母樣。

しばらくすると母樣が、まだ荷物の整理をするから一寸手傳つてくれとお云ひなさるのよ、行つておあげ。

仕方がない、何時まで引こんでも居られまいから、一寸着替た羽織の袖を通し乍らとん〳〵とんとあがる。

「よくいらつしやいました、お初に……」と手をつくと「や、御厄介になります」と膝を直された。私は一目みて、これでも大學生でといさゝか失望した。銘仙の着物に縞のお羽織着て、少し癖のある髪をきれいに分けて、角ばつたお顔に金ぶち眼鏡、何となく十五銭均一の店にでも坐りさうな風采なんですもの。

「行きとゞきませんで……」と答へて「あの何か御用ですつて母が」「はア、これを烏渡」

立つて行李やトランクに手をおかけなさる。

云はるゝまゝ明るい障子際に卓子を据ゑ、うづ高い書物を床の間に積んだり、毛布や衣類は戸棚に入れたり、その間にもいろ〳〵な事話しかけられる、お故鄕は福岡だと有仰つた。ぢや五高の御出身ですかときくと、

「否、僕は北です」「あら、仙臺で……」「否、そつちの北でない」「あゝ四高？、さう、私、四高は大好ですの」

「大分學校の事にくはしいですね、油斷がならん」

「千代や、千代や」と下で母さんがお呼びになる、御免あそばせと云つてかけ下りて了ふ。

夕方、私がお膳部を持つて行つたら、ペン握つて、頭おさへてゐらした。

「どう遊ばして、折角御養生にいらして、あまり御勉强は駄目よ。第一書物なんぞお供につれてらつしやるからわるいんですわ」と云ふと、

「紙魚の化物なんて惡口は御免ですよ」と仰つた。

大概お給仕はいらないと仰るだらうから、そしたら置いてお出、と母樣に云はれて來たのに、だまつて箸をおとりなすつてお給仕させる。仕方がないから、お盆もつてかしこまつて居た。貴女は自由思想家だの、新人だのつて、賞めるやうな冷かすやうな事云ふ。

「新人て何ですの、支那では花嫁の事だつて夏目先生に笑はれますよ」と云つておあけ申した。

御飯もすんで、欄に凭りながら、

「少しそこら散歩して來やうかな」

「行つてらつしやいまし。あ、妹をおつれ遊ばせな、道がおわかりにならないでせう」

「貴女も行きませんか」
「エヽ、そんな足はもちませんの」
「妹さんは可愛い方ですね。貴女にはちつとも似て居ない……」
「あらまア、御挨拶でございます。ほゝゝゝ」

△

寒い!!、朝日に輝く霜が雪のやうまだ髪も結はず、羽織の上から前垂かけて、縁がはへ出ると、勝見さんがタオル下げて立つて居られた。一寸吃驚する。
「お早うございます」と云ふと、うなづいて、庭下駄



のまゝ裏庭の方へ行かれる、山茶花の葉からキラ〱光りながら雫が落ちた。
二階の掃除は日課のうち、日當りのいゝ六疊二間を占領して居る勝見さんを一寸憎らしく思ふ。ばた〱バタ〱、はたきの音を盛んにさせなければ、勝見さんの御きげんがわるい、妙な方だわ何もわけはない、障子の紙をばたばたたゝいてればいいのだ。
來たてには自分で床もお上げになつたのに、此頃つたら、いやにねばりくさつて、主人公ぶつて、癪に障るつちやない、こ

れだから下宿屋住居の人は可愛げがない、同じ大學生でも佐藤さんや八代様、何て初心だつたのでせう。母様は伯父様からの御紹介と云ふので、その義理のため、それは大切にして被居る。

畑の菜の葉には霜がとけて、露が生々と美しい。

「今日はまた半襟がかはりましたね」つてまァ隨分目の早い方。昨日まで從姉様に貰つて淡紅色綸子をかけてたのが、今朝お納戸色のにかへたんだから……。

十時頃、郵便が來たので、二階へもつて行くと、何思つたか、根ほり葉ほりいろ／＼な事話しかける。例によつて「でせう」「どうですか」「存じません」でもち切つておいたら、貴方はまるでつかまへ所のない……鰻のやうな女だつて罵倒された。

「ほゝゝゝ鰻とはちと恐れ入りますけれどね、私は不得要領の人間ださうです、自分ぢやさう云ふ氣でもないんだが、何でも確たる返事をした事がないんですつて、勝氣の藤子様なぞは「貴方と話てると焦れつたくて氣持がわるくなる」と怒つて了つた位……、さうさう高島さんは「ミス、アイドントノー」だつて、する分な。一體私は横着かも知れない、責任を避けて我と云ふものを出さないので、長上の人からは割合に可愛がられます。子供の時には非常な强情つぱりの利かぬ氣で、隨分母様を困らせたものださうだが、大分この頃は處世術が上達したさうな、處世術は詐僞を意味すると岸さんが仰有つた。金言だ。けれどさうしなければ渡られぬ世だから仕方がない。處世術の下手は到る處の獄屋にあり。

勝見さんは私のことを、耳がわるい／＼つて云ふ。わざとつんぼのふりしておあげ申す。

「きこえましたか」なんて疳癪起す。そして、貴方は鼻にも病氣がある、早く大學へでも行つて診てもらへの、近頃病氣しましたかつて、きくから、いゝえ、と云つたら、馬鹿に手首が細いぢやないか、なんて私も神經起すわ。だが小松さんにも「伊勢道」だつて云はれた(五十丁一里)。何となく英法科は蟲が好かぬ、勝見さんと小松さん、何だか顏だちまで似てるやうな：：まあそんな事より早く縫かけの羽織仕上げて了ひませう、あゝ早く來年になつて、出京準備の袴でも縫ふ頃になれば好い。

レウマチスの昆蟲療法

香川縣農事試驗場技師　町田貞一

△蜜蜂は僂麻質斯病を治癒す

僂麻質斯なる病は俗に血の道と深い關係があつて主に婦人、殊に初老の人、家庭の世話燒盛りのおかみさんに多い病である、輕い病のものは平素差したる苦痛もない樣であるし、又外見何等病的の感も無いものもあるが、重症の患者になると生涯不治で、草枯草生、氣候の變り目等には全く體の置き處も無い程痛み患ふものである。概して夏の暖かい時より、冬の間の寒い時、體の冷える時が、一層病氣は重るようである。處が茲に不思議にも本病者を蜂に螫させて全快と迄は行かぬが、目下大に病氣輕快となりたる實驗談を紹介しようと思ふ。素より余は醫師にあらねば、學理上の說明は爲し得ないが、レウマチスの病毒に蜂の毒素が合して、毒性の中和でも起り病勢を挫くのではあるまいか、兎に角理外の理として、茲には御預り致し、後日學者の研究に俟つことゝしやう。

△七年間關節レウマチスを患ふたる婦人

頃は本年夏の盛りである、元來余は農業就中農作物の害蟲及益蟲の研究に從事して居る處から、同僚を介てし蜜蜂の分讓を懇請せられた人がある、その人は池田某といつて當年四十二歲の婦人であつた、極めて重症の關節レウマチス患者であつて、七年以來病氣に惱まされ、今や肢脚の各關節部、其他の筋肉は攣衝を起し外部に大小種々而も堅き瘤狀の凸起が出來、其他の箇所は瘠せて居るから、一見頗る畸形である。

一日たりとも痛みの忘らるゝ日は無く、關節の屈曲等に殊に痛みを感ずるから、日常帶を結ぶとき、入浴の時等には、一々人手を藉りる始末である、某醫學博士某醫學士、其他專門の醫者先生に就て、何回となく診察治療を乞ふても、藥石効多からず、只病勢をして

旺ならしめざる丈けに抑制する位ゐに止まると申された、或時は人の勸めによりて灸點も師を換へ、處を變へ、一ヶ月二ヶ月位づゝ、毎日繼續灸點した事もあるが、其當時のみ緊張りした氣持ちになるだけにて、何等の効能も現はれない。

△投藥、按摩、電氣療法、皆無効

苟くも人の口の端にかゝる善しと云ふことは、醫者や藥は申すに及ばず、按摩にあれ、電氣療法にあれあらゆる方法を皆試みた、なれど一向効顯の無いに困り果たる折柄、不圖親戚の一人が、米國に渡航して居て、其地からの通信に、蜜蜂がレウマチス治療法に專ら行はれ居る實例を言つてよこした、そこで物は試しと早速私の處ろへ蜜蜂の分讓を切望せられた次第である。

そも〳〵この蜜蜂療法の根元といふのは時代も判然せぬが、米國に於て或るレウマチス患者のお婆さんが誤つて蜂の巢に觸れたところが蜂は大に怒つて烈しくお婆さんを螫した、その爲め一晝夜非常に痛んで發熱し、苦しみ通したが、それが偶然にもレウマチスの療法となつて其後は病勢頓に治り大に輕快になつたと謂ふ事實である、それから學者社會に研究の緒が開かれ今では一般にこの療法が賞揚せられ、信用されるやうになつた尤もこの說は嘗て我師桑名先生の講義の一節に記憶を存して居たからこゝに好奇心ではなく、全く研究資料として試驗することゝなつたのである。

△蜂に螫さすこと十餘回

そこで、蜂螫療法を行つたが第一回は本年の八月二十六日、十頭の蜜蜂を捕へて小瓶に入れ、患者の家迄約十四五丁の間携へて行き、ピンセットにて蜂の後脚部を横に、背腹より挾み押へ、六脚は人體に止まり得るやうに、患者の痛みの局部へ觸れしめたのである蜂は容易に螫して劍針を我體より離し、螫したる儘患者の肉に殘るのである、然しながら、元來團結群棲性の蜜蜂の事であるから僅か十頭ばかり巢より取り來り

長時間に亘つた爲め、既に蜂の勢力を殺ぎて大概十頭中六七頭は螫力を失ひ僅か殘りの三頭のみ目的を達したやうである。

それから第二回は九月四日であつた、今度は前回の失敗を避くべく、患者を私の事務室に來らせ、飼養してある蜜蜂の巣箱の傍らに居らせて一頭づゝ捕へたものを直ぐに使用した處が今度は頗る好結果を得た、即ち双腕に八箇を螫さしめた、螫した針は局部に殘つて居るか十分間位ゐ經た後にピンセットで挾み、拔き取り捨つるのであつた。

其後九月七日同く十日、同く十七日、同く廿二日、同く廿七日、十月一日、同く四日、同く十二日、通計拾回毎回三四頭より十頭位づゝ螫さしめたが尙ほ繼續して實行する筈である。



鹽原十景の内

△螫させたあとの模様

我輩普通の人は一ヶ所でも蜜蜂に螫されようものならば見る間に其場は赤く腫れ上り、皮の張り裂けんばかりに毒素は血管を傳ふて、そこから大分離れた場所迄膨らみ、熱を持ち、痛みを感ずるものであるが、此病者は一回に十頭位の蜂に螫しても孰れも外見其周圍が壹錢銅貨の大さ位ゐ赤く、僅かに膨れるのみであつた、其夜から少しく發熱し、翌日の同時刻が來ると體は寒氣立ち、身振ひなどして、恰も感冒と同じ樣な一種嫌な氣持ちがするさうだが三回五回と繼續すると遂には斯樣な兆候は失せて仕舞ふようになつた、扨て螫された場所は三四日位ゐにて膨れも赤色も消え失せて針の跡小さく固くなり、非常に痒みを覺え、恰も種痘の痊へ際と少しも違ひは無いとのことである。



豐原十景の内

△漸々快方に趣く

三回五回と繼續する内に、瘤狀突起物も漸々と小さくなり、筋肉の伸縮、關節の屈曲も極めて工合よく、痛みも随つて薄らいで來た、平常なら今日此頃秋冷曇枯れの季節で、降雨でもあらうかと謂ふ前日等は、一種特別な苦痛を感ずるので、まるで晴雨計の代用になる位であつたのに、昨今は別段痛みの發することも無くなッたから、是れは愈々効力顯著なるものであると信じ、十數回繼續反覆盤刺を試みた處、益々輕快に趣き只今では帶も自ら結び得らるゝ位ゐになつたとて心から欣喜の情が見えた。

思ふに七年間も患ひて肢腕に瘤狀畸形まで現はれ、よく／＼慢性となつたものにさへ、右樣の効顯があるとすれば、未だ發病の初期なる人、即ち體を冷した時に節々の痛みを覺ふる位ゐのものならば、此の方法が著しき効果を奏し得るであらうと信ずるのである、尚ほ私は總て經驗を重ぬる積りですが從來の實驗談を讀者に紹介すると同時に、此病氣に惱める人に對し、直ちに應用試驗を爲られんことを希望し、且つ願はくは専門の博士に進んでそれを學術的に研究を願ひたひものであります。

子なき婦人の悲痛

私は平常病院に縁のない方でしたが、一度肩や頭で惱みました際、醫者の診察を受けました處、婦人病のやうに診斷を下しました。私は毎時順當に分娩をいたすのみならず、良人は品行方正の君子ですから、婦人病ではあるまいと思ひまして、大學の木下さんに診察を請ひました處、忙しかつた疲れの爲めで、婦人病ではなかつたのです。私は一寸大學病院の婦人科へ參つて見ただけでも、患者の多くは例の惡い毒に傷けられて居ることに心付き、而して何れも是れが爲めに子を持たぬ婦人たることを承知いたし、肉體はお蠶ぐるみで寶石の指環を光らして居つても、その心理を解剖したら何程の悲劇が潜んで居るであらうと同情に堪へませんでした。子のある婦人は格別の氣苦勞なしに、變化自在な天使を媒ちとして良人を慰めることが出來、良人も子の愛の爲めに品行を保たれますし婦人自身の性情も子の爲めに圓滿となるものでございますが、子のない婦人は二倍も三倍も心を使つて單調の家庭を賑はし、良人の心を引付ける工夫をしなければなりませず、心情もそれが爲めに、だん／＼冷かに頑なになると云ふやうな次第ですから、子を持たぬ婦人は實に何割の損か知れません。良人の不品行の爲めに繁殖力を失ひ、繁殖力を失つた爲めに、良人の愛を失ふと云ふ不幸な婦人を見ます毎に、實に殘念で堪らなくなります。（小崎千代子女史）



その日〳〵の教訓

清水玉露女

二日。今日はクラスメート七八人が母校の作法教室へ集る御約束なので朝早くから出掛ける。奥様もお母様も皆ありし昔の袴時代にかへつて語りつ笑ひつ。其賑やかさ!!、最初つから普通の御交際のやうに、「誠によい時候になりました」「左樣で御座います」なんてゆるゆると頭下げて御辭義して居やしない。「まあ〇樣暫くねお坊樣は？」つて眼を輝かすと云ふ風なんですもの お友達程なつかしいものはありあしない。

それにつけても二十餘りの春若いに花の御姿散らしたまひし愛子の君の御いたはしさ夫なる若き海軍士官の君は今も猶青山墓地をしげ〳〵と訪ひ給ひて萬量の思ひに沈みたまふ由今日も其御話で皆泣きたくなつてしまつた。お脊は少し低かつたけれど其御活潑さと云つたら運動會の花であつたのに……人間にも死ぬと云ふ事がなくつて夫婦は永遠に若く美しく生きながらへてお互に助けあつて暮したらどんなに樂しからうに……エヽ……それぢや私なんか千人位子を生んで耳がつんぼになるだらうつてアラ!!! ですからさ子供も男三人女二人とちやんとたれでもきまつて居てない人や多く生む人のないやうになつたら宜からうと思ふのよ。

五日。三越白木白牡丹とへまはつた。一體よせ切れと云ふものはやすいやうに人が言つて皆御求めになるけれども私は一切買つた事はないのであの恐ろしいよせ切れ室へは立入つた事もないけれど外で見て居ると何と云ふ淺ましい光景でせう髪も姿もみだしながら荒荒しくかきまはしより取りする其樣子。エヽそりや皆

十人が十人と云ふわけではないけれどまあ呉服物は女の生命と見えますねエ、私新案よだれかけでも作つて呉服屋の入口で賣らうかしら？、エ？自分だつてよだれが出さうだつたでせうつて？イ、エ私は人の容姿の美しいのにはよだれが出る程羨ましいけれど衣服はそんなに限りもなく欲しいとは思ひませんわ。

九日。音樂學校に生田流の琴の研究會があつた。五段砧。源氏ほととぎす。など聞きたいものが多かつたので行つて見ましたが皆様の御達者なのには實に〳〵感心してしまひました。私も六歳の春から十八迄毎日毎日お稽古したけれどたゞ初めは子供だつたのでお稽古がいやで〳〵ちつとも上手にならうと云う心は出なかつたし成長してからはもう數も多く上たし年月もかかつたしいゝ氣になつて油斷してとう〳〵師の君が御亡なりになるまで身にしみて敎へて頂かずにしまつたのは何と云ふ勿體ない事だつたらう、もう過ぎた月日は一生までども再びめぐつて來やしない。まして亡なつた先生が二度と可愛がつて敎へては下さらないと思ふとつく〳〵悲しくなつてしまつた。

子供等には早くからお稽古させて何でも上手な方のを澤山見せてよく話して聞かせませうと考へながら歸る。車の上から夕もやの不忍池を眺めた心持ちは誠によかつた。此所らあたりはいつも學生の世界のやうに角帽や袴の君が往來なさる、學生生活を止めた當座は羨ましいやうな氣もしたが今では馬鹿々々しくて學校へなど行きたいとも思はない。長年の間毎日々々窮屈な机の前で下らない事を根よくやるのはもう何も知らぬ子供の内の話お汁を甘味しく作るのは色で加減し、煮物を上手にするには手工合で加減すると分つて見れば割烹の御けいこも無駄だし。水は何と何と幾何の分量の割に化合しやうと衣服は寒暑をふせぎ、容儀を整へるために作らふとも皆實際に當つてそんな事を云つてる人はありやしない。或る奥様が夫の君の洋行歸りを横濱に御迎へしやうと夫のお友達と御一緒にいらしつて一日までども船が後れて着かなかつたのに其御友達はとう〳〵一日會社の御勤めを休んでをしまひなさ

つたさうな。會社の損失其方の御迷惑に御氣の付かぬが女學生上りの奥様の特長さと、誰やらが苦笑して話した事があつた。此頃の若い人達は義理も禮義も辨へません、朔日にお弔ひの返しものをよこすとは何としたいやな人と、いつぞやお饅頭を手にのせてくど／＼とおつしやつたお祖母様の顔を思ひ合せて可笑しくなる。女子敎育。人格の養成など〻御論の立派な先生達の一向何事も不行屆勝の失體だらけで平氣で御出の方がある世の中ですもの……。



二三日前、晶子様のひらき封と云ふのが萬朝報に出て居ましたつけ其痛快!!!。願はくは晶子様に二萬圓程御小遣が持たせて見たいと心の內に考へながら微笑んだ。

十月十一日。一昨夜より工合あしかりし夫のいよいよ本當の腸カタルと定まつて今日から床中の人となられた。「辭世を作つてお置き遊ばさなくつて」と云つておいたら暫くして「狂歌が出來た」と呼ばれる。數日前つひ近所の家で夜逃げ同樣に人知れず引越しをなさつた方がある、其お方が毎日ゴム輪の車でお出掛けな

さつたので。

　玄関を張れども内輪は切れず
　　ゴム輪の車火の車にて

「まあ失禮ねエ」と大笑ひ。

　下谷より叔父樣御出になつて女事務員の御話が出た時。「此頃は女事務員で長く務める人がありますが先年迄は二年もつとめるのは少ないです。長く居るとあの人はまだ緣付かれぬと云はれるが辛さに嫁づかなくても一先づ退職して他へ勤め代るのがあつたもんです」

と女なるかな女なるかな。

　然ながら自分の力で自分が生活する其ほこり!!! 羨ましい事限りがない。子供の世話や臺所の始末なら少し慣れた女中で澤山。學問をしたのも遊藝を習つたのも何の爲めか分りやしない、高等女中! 高等女中! 聞くも飽き／＼した。「女十七。男は二十。一生三月。常月夜」と昔の人がかこち言。ほんとに／＼。月清き海の眞砂路なつかしき君と手を組んでローレライでも歌つたら……。風かをる校庭にラケット握れる少女の春は夢と消えにし今日の生活!!!

　十八日。雨上の月影さやかに梢をてらして今や年中の好時節。長々の軒の玉水聞あきた子供等はののさまゝゝゝゝののさまといつまでか端居して眺て居る。「ののさまの中には兎がお餅をついて居る」と思つて居るのがいつまでか續くものぞ宇宙を知り人生を知り我身體の肉體の遂には亡ぶと知つた時の其苦痛!!! やうやく皆眠かしてさあこれからが夜なべでもと時計をみれば大概九時片袖も縫ひきらぬうちにしまはなければならぬ。

　十九日。よいお天氣にそゝられて急に大森行を思ひ立つ。みどり樣御留守かしらと心配しながら汽車を降りて畑の裏道つたひ行けば春のやうな長閑さに身に沁む秋の風情をこめて何とも云はれぬ思ひがする。

　と見ればもう青竹の垣。柴の門、みい樣の御住居はすぐ近く華やかなピアノの音がして居るので思はずパタパタと走り着いて。

「よかつたお在家で……」とつぶやいたら。

「今日は僕も御在家です」門のすぐ傍で勳樣笑つて

入らつしやる。

「まあ凛りした」

「お氣のお小さい事で」とこれが御挨拶。進行曲はハタと止んで美しいみどり樣が下りて入らつしやる。

「まあうれしい」さあ御上り遊ばせ植木屋さんも上つてお茶でも召し上れ」と脊の君を見給へば。

「へエ〳〵」と勤樣もダリアの中から出て御出でになる。

「美麗でございますねえ」と見惚れて居たら「樂しみなものです」と眞面目に御返事なさる。奥樣には何だ彼だとからかひなさるに私共には其くせを治さうとして時々いやに眞面目なお顏を遊ばすから可笑しくなる道の都合で私の家から高等學校へ通つていらしつた時ボートの選手でベースの選手でそれは〳〵あばれ者で大食でお辨當に西洋おむすびを作らへて上げやうと數を伺へば「十八!!!」と大えばりなんですものおまけかと思つて十個こしらへて上げたら歸つてお腹が減つたつて大さわぎ私のとつておいた栗饅頭まで食べてしまつたくせに、と云つてあげたいけれど、

「食べられたつて泣さうになつたのは誰でしたつけ。」なんて仰有られても困るからとがまんしておく。……私だつて運動會の時の絹糸の袋の中に柿やお菓子で隨分ふくれましたものですもの切角今、奥樣がほそして氣取つて居ても昔のお話は出したくないから「何を御遠慮?花に見惚れてる御姿は寫生したい程よまあいゝから早くいらつしやいよ」とみい樣お座敷で呼んでいらつしやる「大きな聲だこと」と云ひながら下駄ぬいで上る。障子なければ田や畑。はるかに汽車の道をへだてゝ海が見えるから云ふ所で、たゞ二人仲よく暮す新世帶のどんなに詩的な朝夕でせう御退勤の頃には二町ばかり先きの小川の所までいつも御迎へにいつては二人連れ立つて歸り御夕食後はまた二人して御散歩日曜日には大概東京で……」と花やがそうつと私に話した。

「あんまりお仲がよすぎると御二人ともあめになつてしまひますつてね」と云つたらあめつてなんですか、

ア、飴ですかハヽヽヽ、せきの藥になりますよ飴はたん、せき咽喉痛み、引風邪、ぜんそく……」

「およし遊ばせよおしまひはオ一二位なんですわ」

「此間中の長雨にもずゐぶん飽きましたが私なんか心の中迄しめつてしまひましたがこなたでは物のあはれは一向よその風ね」

と云ふと、みい樣は。

「まあ。あんな事、私は秋や春は何より悲しいのよ何にも見ないやうにして居たつて新聞は見るでせう？見れば音樂會や繪畫展覽會の事が書いてあつてイプセンのノラぢや



ないけれどこんな所にたゞ此儘子を生んで。育てゝ。年老つて死んでしまふが辛くなるのよ」

と本氣で仰有るので。

「あなたなんぞまだ今の内は結構よ今から悲しくちや私のやうになつてから毎日泣いたつて足りやしません。思へばお互に池之端の先生へ通ふ時分にや向ふ側の上野の森を眺めては天晴れ未來は繪の名人と脣を五色によごして習つたもんでしたつけね」

「其時分は僕もよく鳥が絞殺されるやうなヴアヰオリンや一本足の人達が義足で鬼ごつこして

居るやうなピアノを聞かされたつけが」とませ返しておしまひなさるから。

「エ、さうでしたとも其ピアノも只今奥樣となすつてたまの御休暇にでも御聞き遊ばせば天來の妙音とひゞくのでせうに」と憎くまれ口をきいて忽ちまた元氣なお話に返つて面白く御晝飯を頂いてステーションまでお二人に送られて歸つて來た澤山切つて下すつたダリアは殺風景な部屋を美しく彩つて居る。

「校中第一の美人才女として花と賞で月と尊とばれしみどり樣を一人我手に占めて猶朝夕惡口を絕ち給はぬ勳樣よ果報燒けは恐ろしと思ひ知り給はじ幾久敷今のまゝに專心專意奥樣を大切にしたまへかし」と御禮狀のまゝ書き送つた。

あゝ後四ケ月經つて赤ちやんが出來ると。もう二十のお母樣!!! 惜しいやうな結構な事だ。

二十日。今日はもう二十日二十五日は〆切だと云ふからあと五日しかない其間書きかけておいたとて書くひまがあるかどうか分らず、あつたとて三人の子供のお守りしながら立つてゝ書く（下へ硯箱をおくとすぐ引くり返したり硯の海へ手を入れたりしてしまふから皆を座敷でおもちや出して遊ばせておいて茶だんすの上へ硯箱を置いて原稿用紙を手に持つてゝ書く、其書く間も上の子は色々の話をするからそれに受答をし下の二人には桃太郎の歌や舌切雀の話をしながら書くのですから、何としてろくなものが書けやう筈がない、もうこれで止めませう、其方が讀む方の御仕合せだから。

（終り）



初冬の景情

物集梧水

×

十里に連なる田圃、稲穂悉く刈りつくされて、切株のみ唯だうろ〳〵と殘りぬ。

野路の傍らに小さき岡阜あり、猫柳、葉空しく落ちて、道祖神の石碑、夕陽に塞かりける、我れ乾ける草を分けつゝ登らむとすれば、綿のやうなる白き花粉々として散り、螽斯仔を負ひたるまゝ左右に飛びかふ。何ぞ其影の侘しきや。

我れ、道祖神に倚りて蹲踞り、悵然として眺むれば、村雀地に下りて頻りに落穂を啄み、獨り秋の幸を恣ままにしぬ。聞く、詩人が憧憬れし神代の昔に於ては、野に不斷の春花發き、山に不斷の秋果實りて、人は恒に芳しき花の香を嗅ぎ、人は恒に熟したる果實の甘きを味ひつゝ、樂しく、甚とも樂しく游び暮らしたりしに、世は進みて、人は却つて飢に泣きぬ。

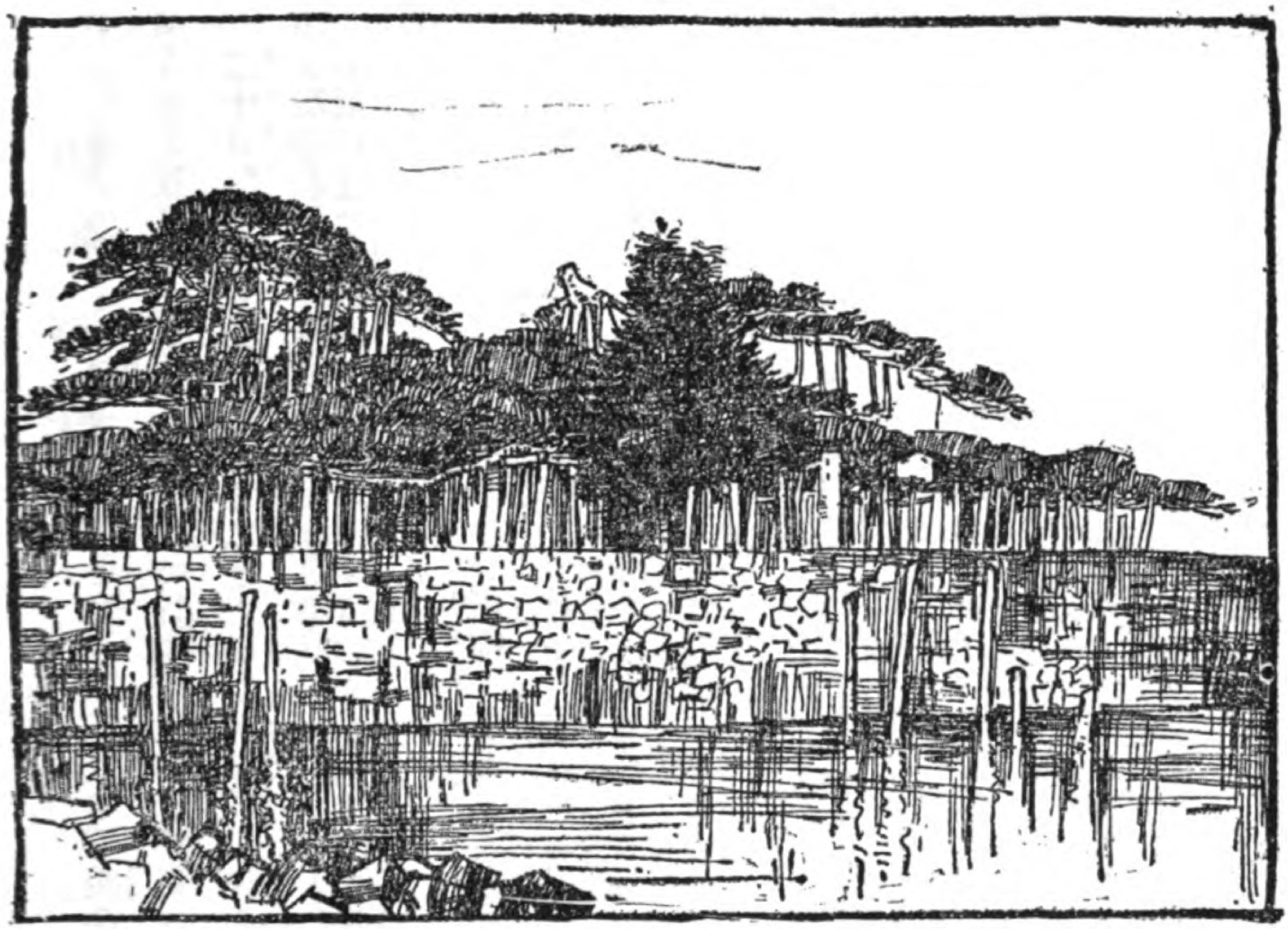
遙か彼方なる森の蔭より起りて、限りもなく遠く續ける細路あり。今、菅笠かぶりたる娘巡禮の、徐ろに鉦叩きながら、此細路を辿りて巡禮唄うたひつゝ來りぬ、その聲は宛ら人生に疲れたるが如く、その調は偏へに彌陀の御救助を仰ぐに似たり。あはれ人の子の寄る邊なさは、この娘巡禮と等しく、大哲學者の出でむ限り、大宗敎家の出でむ限り、尙は長く〳〵人生の行路に彷徨ふぞかし。

×

王績の詩に「樹々皆秋色、山々唯落暉」と言へる句あり。木曾の秋は正にこれなりと思はれぬ。

馬籠、妻籠の舊道より木曾川の流れに沿ひて二十八里の山道を行きゆく。時折、驛路を通ふ乘合馬車の、音もとゞろに踏轟かす轍の響、幽かに夢路を渡るやうなる喇叭の聲の他は、萬樹まさに色づける間より隱顯れする急湍の、轟々として山骨に轟くあれども、寂寞は之に依りて一入身に泌むるばかりなり。

陰鬱極りなき須原を通る。ゆるやかに傾斜せる坂路



唐崎の松

を挾みて、黒く煤けたる軒並の、層々相鱗次し、往來の中央に幅四尺ばかりの細流潺湲として流れぬ。村の子供等數多、諸所に設けられたる水槽に倚りて遊び居れば、白き鵞鳥の一群、喧しく鳴きながら、細流に浮ぶ落葉を啄みつゝ追ひぬ。

木曾山中第一の絶勝なりといふ寢覺里を通る。いとど荒れにし禪刹臨川寺の中庭に立ちて、遙かに木曾川の清流を瞰下すれば、兩岸の巖石突兀として相迫り、或は碧潭を湛へ、或は雪瀑を迸らしめ、水態の妙、口に述ぶ可からず。彼の水の江の、浦島の子が、釣を垂れしと云ふ平らかなる石あり。その形餘りに平凡なれども、口碑を聽きては、また捨て難き趣味あり。

谷底に埋もれたるが如き上松を通る。この村落は、朝に、夕に、嚴めしき山を眺め暮し、朝に、夕に、木葉吹く風を聞き暮す所なり。秋深うして、月輪天に孤なる時、峽猿啼いて月に叫び、その聲酸乎として聞くべからずと。

福島を通る。此處は稍々繁華にして、山中の大都會

なり。時計屋もあれば、活版所もあり。昔、此附近に木曾冠者義仲が崛起したるなりと云へば、眞に桑田の變じて海となる心地ぞせらる。

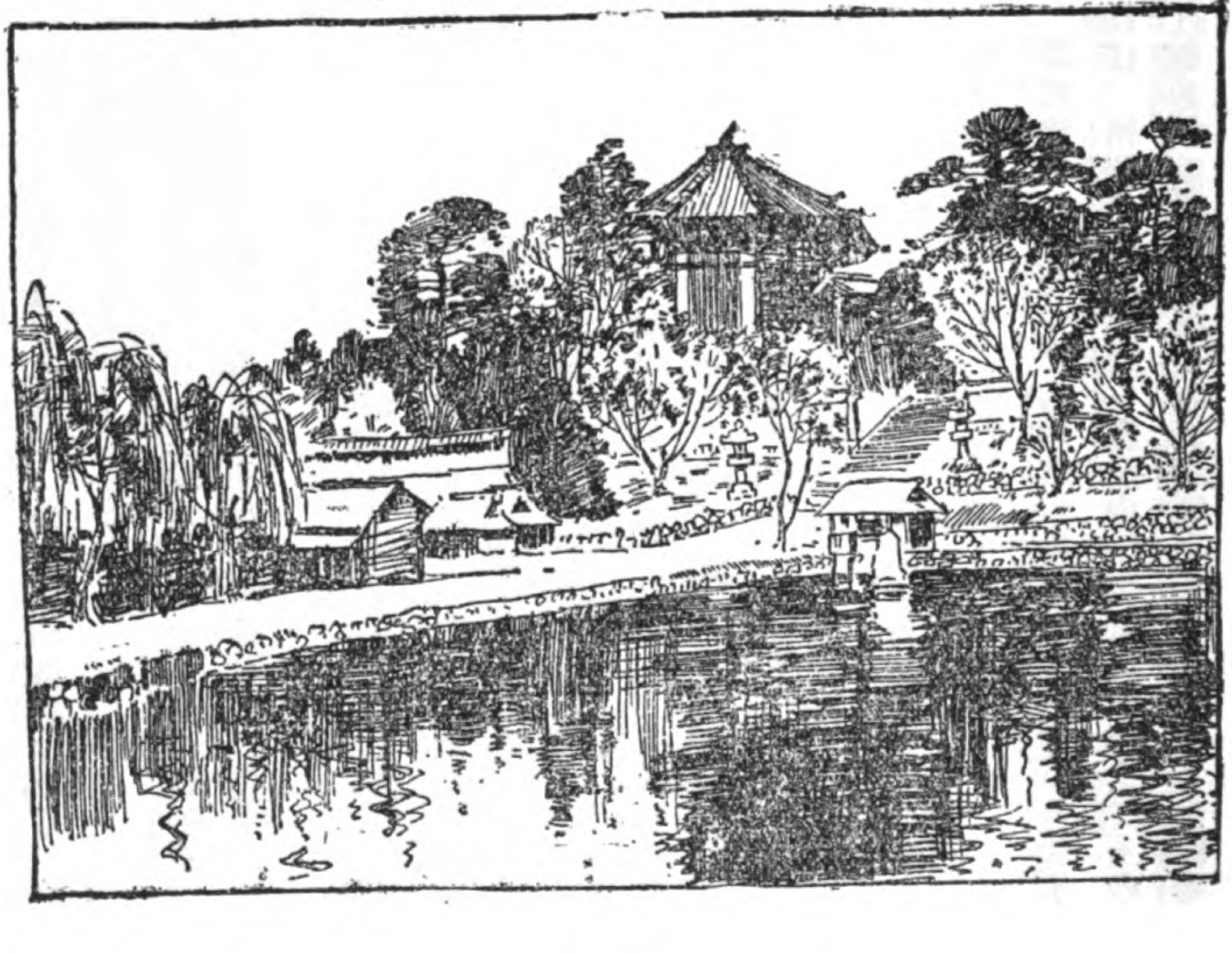
藪原を通る。鳥居嶺の麓に横はれる寒村なり、お六櫛を鬻げる店の、軒並に連なれるを見て、精しく其因縁を尋ぬれども、唯だ古き時代に於て、お六といふ女此櫛を造りたるなりとの他、何事も知らぬ樣なり。汝の口碑を忘れたる其不用意なるに驚く。

×

更たけて密かに庭面に下るれば、月光を帶ぶる白菊、瑩然として宛ら玉の如し。籬下に幽かなる寒蛩の聲あり。

いざや菊花の趣味を語らむ。この花、未だ奈良朝の頃までは、餘りに世に持囃されざりしと見え、萬葉集には一首も無く、諺にすら『楚辭に梅なく萬葉に菊なし』と云はれぬ。然るに支那の南陽縣にて、菊花の水を飲みたる者、皆な長命したりとの故事、我國へも傳來したりしかば、菊花は延壽の花なりとて、平安朝よ

奈良の南圓堂



り朝廷にて持囃されしこと大方ならず、九月九日には重陽宴、十月五日には殘菊宴を催され、此等の御宴には必ず菊合の御催しありて、互ひに菊の名歌を爭ひ合ひぬ。寛平の菊合の折、菅原道眞が「秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬか浪の寄するか」の名歌を作つて、御衣賜はりしこと世に名高し。去れば、當時にありて、菊花の名所も甚と多く、山城の皆瀨、嵯峨の大澤池、紫野、攝津の蓑野島、奈良の槇河、和泉の吹居、紀伊の吹上濱、伊勢の網代濱など、なほ數へんには、數限りもなかるべし。

時は移り世は變りて、靜かなるを喜ぶ公卿政治も、何時しか武人專制の時代となりては、靜かなる菊の趣味は殆んど打忘れられ、僅に華しき櫻花のみ彌が上に稱揚せられぬ。

然るに德川幕府に至りてより、氣節を尊ぶの士、ひそかに菊花の凜然として秋霜に驕るを喜び、何時しか又世に稱賛せらるゝに至りぬ。

×

坐して叡山の暮雲を看る。我が江州坂本生活は、直ちに生きたる詩にありき。

夕陽早く落ちて、比叡一脈の連山は、仄かに翠に、仄かに紫に、唯だ日吉神社々頭の紅葉のみ、燃ゆらむやうに空に紅し。

こゝに溪河あり、鞺鞳として落下す。若し夫れ此河に架せる石橋の上に佇立み、顧みて日吉神社の神殿を望めば、暮靄徐ろに迫りて、蒼古の情言ふべからず。見よ、五抱へ、六抱へに餘る老杉は、其肩へに緑苔を着けたるまゝ、陰々として陰をなせり。夕映に映ゆる紅葉は、風なきにその一葉、二葉、ひら／＼ひら／＼と飜り落ちぬ。蒼古の中、自づから凄麗の氣あるを覺ゆ。

×

曉景は更に妙なり。

濃霧濛々たる朝、日吉神社の馬場をそゞろあるきすれば、兩側の松樹、宛ら墨繪の如く宙に浮べり。その近きものは墨痕淋漓として雄姿を伺ひ得べしと雖も

も、その遠きものは淡々として聖人の立てるが如し。軈て歩を移して、神殿へ向つて進みぬ。遙か彼方に小さき黄色き物體あり。近いて之を見れば、石燈籠の燈明の、未だ消え殘りしものなり。之を知りたる刹那、限りなき興趣の、恰も胸に沸くが如き心地しけり。

彼の老杉生ひし森に入り、仰いで其梢を瞻むとする時、忽ち遠く鷄の長鳴するを聽きぬ。其聲重く森を壓して、沈痛の感響ふるに物なかりき。

×

一歳、利根の河畔に扁舟を浮べて、唯だ心のゆくままに漕ぎ廻りぬ。

傍らは一帶の蘆洲、折から秋の末つ方なりければ、雪をあざむく蘆花、紛々として亂れ飛びぬ。

蘆洲と向ひあひたる一方の岸は、やゝ小高き平地に續きて、諸所に黒き畑地あり、諸所に白き草原あり。かたりことりと忙はしげなる水車小舍の傍らに沿ひて、桔槹の悠然として大空に浮べるも面白や。

夕暮、灯火の入る頃まで、尚ほも興に乘じて扁舟を漕ぎ廻らせば、河風寒く身に沁みて、折々、蘆の塒に名も知れぬ鳥を驚かしぬ。

川下の廣やかなる所に、つと突出でたる水樓あり。絃歌の聲水に落ちて、黄なる燈火溶々として流れぬ。その景致の、餘りに妖艶なるに、暫時櫓を取る手を罷めて、旗亭の方を眺め遣れば、女の姿、障子に映りにけり。

潯陽江の秋の暮は、斯る夜にてはあらざりしか。



農家の食卓

あけばの

今日は日傭三人を頼んで お宮様脇の大根ぬきをさせる。お晝のお菜にはお汁ぴらをこしらへ、先日切つて干しておいた赤芽の芋莖が生がわきの甘ま鹽になつたので少しばかり三杯酢にしてお父様にさしあげたら大層お喜び遊ばした

日傭にお晝飯を知らせに行かうと竹藪の前を通つた時、かしわの葉が目についたのでおやつには時はづれだけれどおかしわをこしらへた。

晩は皆にはお豆腐のお味噌汁にしておいてお舅様お姑様には鯛の黄金燒をさしあげる。

(一)お汁ぴら　すり身、人參、牛蒡、孫芋、油揚、

(二)芋がらの三杯酢

(三)鯛の 黄金燒

(四)おかしわ

(一)すり身は鯛七八寸のもの三尾を三枚におろし庖丁にてよくたゝき擂鉢に入れて猶ほよく擂り、是れに溶かした馬鈴薯の中邊一本をおろしがねにておろしたるものを加へ、玉子二つ、酒少々、砂糖大匙二杯、鹽大匙二杯を入れて擂る。別に鍋に湯を煮たゝせおき、小皿を一寸ぬらして前記のすり身をしやもじにて一寸なすり半月形にして、煮たたせ置きたる熱湯の中に小皿からはがしつゝ浮かして入れ、ゆで上つた時水に上げて置く。

人參、牛蒡、何れも烏帽子ぎり。孫芋は丸のまゝ用ゐ、油揚は一寸位の角に切り中央を渡して三角に切り、一寸煮湯をかけて油氣を拔く。

お汁は普通の澄汁より心持醬油の味を利かせ、白砂糖少々加へ、前の品々を一度に入れて能く煮、菓子椀に具を山に盛りお汁をひたひたに入れて温かき處を出す。

(二)芋がらを水を幾度もかへながら洗で、茹で上りたらば、水に浸し置き二十分位で取り出し水氣を絞り、酢、醤油、砂糖の三杯をかける。

(三)鯛を長方形に切つて串にさし兩面を燒き、更に玉子の黄味をつけてざつと焦げぬ樣に燒く。玉子は海膽でといてもよし。

(四)かしわの葉を摘んで一枚づゝ、叮嚀に洗ひ煮湯の中に入れてゆで色の變りたるを度として水に上げてさまして置く。

米の粉を水で少し固めにねり、にぎりこぶし程にちぎりて蒸籠に入れて蒸す、蒸し上りたらば臼にてつき、適宜の大きさにちぎり、まるめて更に手にしお猪口の樣な格好に延ばし餡を入れて二つに折り、一つづゝかしわの葉につゝむ。餡は普通のと同じなれど、田舍にては赤砂糖をつかふ。

○

お祖母様のお日だからおやつにはいりたんごをこしらへ、晩にはお好きだつた饂飩を打つて御佛壇を賑かにする。けふの惣菜は

(一)うどん、味噌汁、葱、油揚、藥味、

(二)茶碗蒸し　燒き栗、[illegible]、生椎茸、干瓢、麩、

(三)新菊のごまよごし

(四)いりだんご

(一)饂飩粉三升を裏漉しで能く篩ひ、鹽一摑み玉子二個を加へ水で少し固めにねり、適宜の大きさにまるめ、一つづゝ蓙につゝみて足で滿遍

なく十五分間位ふむ。能くふめたらばのし板にうどん粉をふりたる上に載せ、のし棒で薄く延ばし、折り返し〳〵畳んで端より庖丁で細く切り、切りだめにためて置く。別に釜に湯を七分ほど煮立たせ置き、よき程づゝ此れを入れ湯のふきこぼれた時一度水をさし、再びふきこぼれた時あげて水に冷し、暫くして取り出し笊に上げて水氣を去る。

味噌汁は辛味噌で普通の味噌汁を作り、葱と獨活を繊にきり、鳥肉をぶつ〳〵切りにしたものを入れる。

饂飩を椀に盛り前のおみおつけを一度上よりかけてしたみ、更らにもう一度かけて出す。

藥味には柚子、葱等のこま〳〵切り。

(二)燒栗は生け栗をよく洗ひ鬼皮を剥きて燒き澁皮を去る。蓮根は輪ぎりに薄くなして、茹で、干瓢は鹽でもんで茹で、生椎茸、鳥とともに醬油、砂糖でずつと味をつけ、生椎茸は石づきを除き、干瓢は二本揃へて結ぶ。

以上の品を茶椀に入れ、玉子とだしを玉子一かい、だし四の割合で入れ、醬油、砂糖で味をつけて蒸す。

(三)新菊の若い處を根を去り能く洗ひ、煮湯で茹で、取り出して水に冷し灰汁を拔く。黒胡麻をほうろくで一寸あぶりて擂鉢ですり砂糖少々と醬油で味をつけ前に茹でた新菊を能く絞つて水氣を去つてあへる。

(四)お米の粉を湯にて練り小さいお團子位の大きさにまるめて早ぶかしに入れてふかし、さまして置く、別に鍋に赤砂糖少しと醬油少しを入れて火にかけ砂糖のとけた時、前のお團子をいれて能くまぜる。

○

庭の柚子が黄色に見事になつて來たので毎晩箸と盗まれる、昨夜も木枯の寒いのに乘じて盗んだものがあつたと見えて竹藪前のは大抵なくなつてしまつた。今日は家中皆がゝりで果を採る。數へて見たら七百三十二あつた。百宛東京の父様と叔母様の處にお送りする。早速おやつに柚子のお砂糖かけにしていただく。

晩は村の集會があつて夜が更けたので、お握りをこしらへる。

(一)鮭のかいゝ煮
(二)玉子の衣かけ
(三)おでん。こんにやく、里芋
(四)ゆづの砂糖かけ
(五)お握り

(一)生鮭を使ふと味がいゝけれど、まだ無いから鹽引の鮭を一日水につけて鹽氣を拔いて置く鍋に醬油、砂糖、水を適宜に入れ煮立ちたる處に鰹節のかいたものを普通の煮物よりは少し多く入れ、此れで鮭を煮る。

(二)玉子を能く茹でて皮を剥き庖丁で眞中から二つに切り、黄味と白味とを別々にして置く黄味は此れに、白砂糖を玉子一つにつき小匕一ぱいの割にて加へ、鹽少々ふりてざつとまぜておく。

向づけの小丼に白味の方を綺麗に五個位入れて上に裏漉しをかぶせ、別にして置いた黄味を白味の見えぬ迄こす。

(三)蒟蒻は三角に大きく切り、里芋は其儘ゆでゝ竹串にさし、味噌をねる。味噌は白味噌を能くすり砂糖醬油で味をつけ裏漉しにかける。

(四)椰子を皮ごと三分位の厚さに横に輪ぎりにして白砂糖をふりかけて皮ごと食べる。

(五)温かい御飯をお握りに結んで両面をざつと黄色に焼きお味噌をつけて一寸焼く。お味噌は赤味噌に、鰹節のけづつたものをお味噌の四分一の量ほど入、白砂糖少々生姜の細々に切りたるもの少しとを加へよくまぜて擂鉢でする。

○

新家のお嫁様が五月帯の祝にお赤飯を蒸かして持たしやる。松平が使に行つての歸りがけ由造の家に寄つたら娘に狐がついたといつて村の衆が寄り集つてお念佛の最中だと云ふ。可哀想にあの狐は神經病だもの、お念佛など枕元でやられた日には尚ほのぼせ上つてしまふだらう。何にしても村の人が集つて居る上は見ても居られないから夜食に蒸餡のお寿をこしらへて持たせてやる。

けふのお菜は

(一)かまぼこのちり

(二)いり菜

(三)お赤飯。おにしめ

(四)蒸餡のお寿

(一)白身の魚をたゝき長芋をつなぎに入れてすり鉢ですり、適宜の大きさにして蒸で、橙酢に醬油少々加へたものにつけながら食す。

(二)菜を茹でゝ水につけ置き、硬く絞り庖丁を入れて此れに油揚の繊に切りたるものを適宜にまぜ・醬油、砂糖で味をつけて汁のない様に煮る。

(三)お赤飯は此の地方でに粳米糯米半々の割合で炊ぐ。

小豆を皮の破れぬ様に茹でゝ其の水に、前に研いでおいたお米を入れて半日位つけて置く。お米一升に小豆一合位の割でまぜ蒸籠に入れてふかす。二三度ほど水をうつ。東京のよりはづつと硬い。胡麻鹽は東京と同じ。

お煮しめは普通と變りなけれど、何にても大きく切る。

(四)粳米四合糯米六合の割合にてご飯を焚き擂木で能くつき、まるめて餡をつける。餡は小豆を皮の破れる迄よく茹でゝ擂鉢ですり、更に鍋に入れて小豆二升に鹽五勺位の割合で鹽を入れて煮る。辛い事夥しけれど伊豆では甘い餡よりも此れを好んで白砂糖少しをふりかけて食す。

◎朝鮮人の食物

鮮人は普通まづい蔬菜を食べて生活をしてゐる。併し肉食の發達してゐる事はとても日本人などは及ばない、牛なぞは頭から尻尾まで剩す所なく料理して食べる。肉屋の店先には生々しい臟腑がかけ列れてあつて、これをいろ〳〵に料理した者を珍味として賞翫する。牛の首ばかり買つて、肉は肉、骨は骨で料理をする。牛の眼玉、牛の舌の料理は、珍味中の珍味である。牛の身體で食べないのは角ばかり、之は削つて細工物に使ふ。往來を歩いてゐると、よく生々しい牛の血汐を石油罐のやうな者に入れて、かついで行く者に出逢ふ。之れは滋養の藥だといふので牛乳の様に一合幾許といふ様に賣るのである。肉類の料理法の中には隨分日本に輸入したい様な珍奇のゐのも少くない。

事に觸れて味ひたる教訓

百合香

△病床中に味ひたる教訓

看護婦が、體温器を外しに來たので、ふと目がさめると、何處でうつのであらう、ゴーン、ゴーン、と餘韻遠く、かすかに聞える除夜の鐘の音。

「大塚さん、もう元日になりますのね。」

「えゝもうお正月ですよ。」

あゝ、あの鐘の音は、四十〇年十二月卅一日と、來るべき年の元旦との堺を報ずるのである、あの音の一つ一つに、四十〇年てふ年と私の廿歳の年も、追ひ追ひ遠ざかり、もう再び逢ふことの出來ない、過去の年となるのだ。

而して、新たに迎へる四十〇年元旦。

人皆は喜びに滿ち〳〵て、希望に輝く新春を、壽ぎかはして迎へるのであるに、私は……。こゝ病院の、分病室の一室、白き寢臺の上……丁度浮世を離れた、わびしい別世界で迎へるのだ。あゝ何といふ不幸だらうか。!

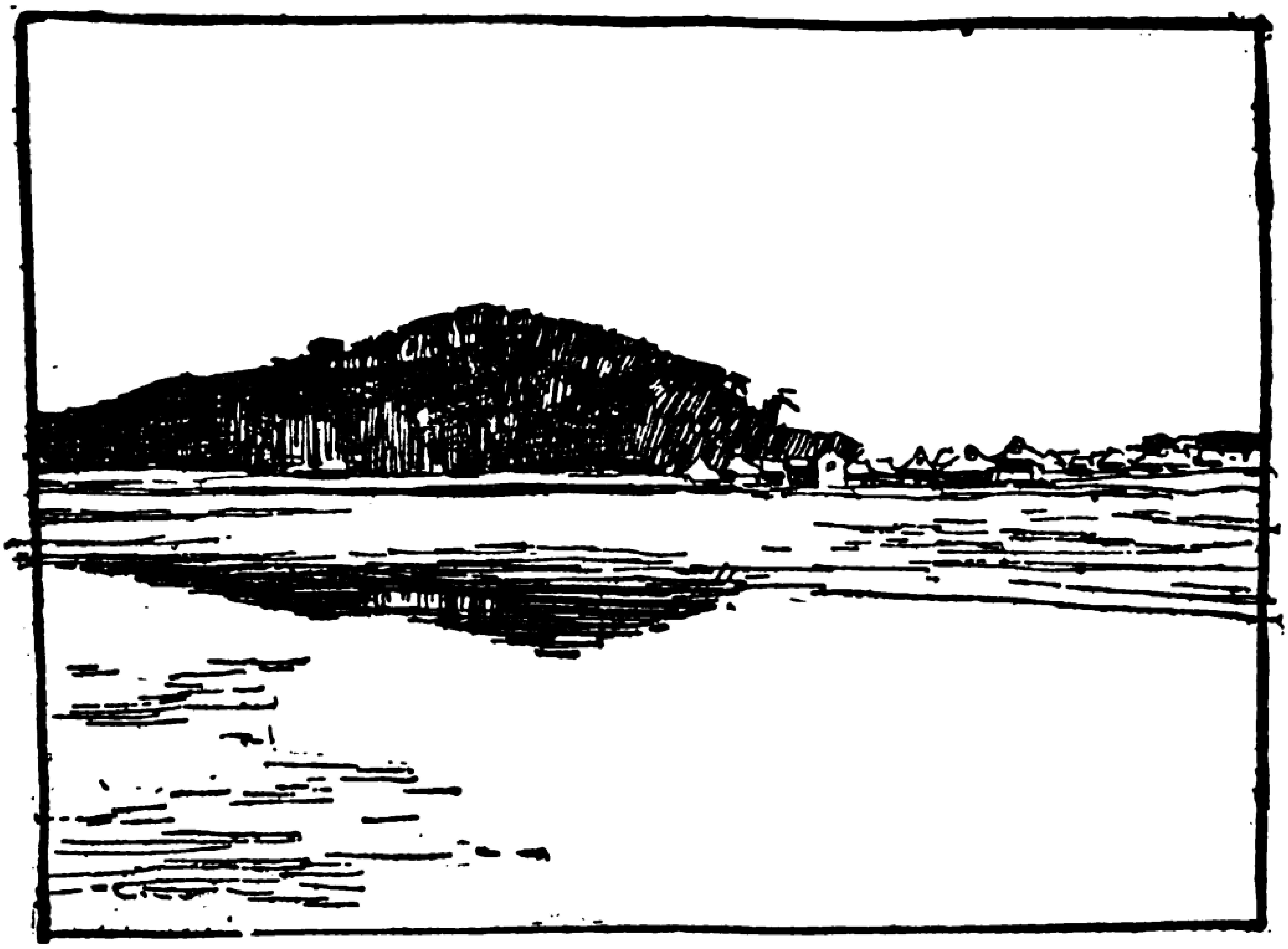
過ぎし十二月中旬、計らずも、重き病の人となり、釣臺に乘せられてくる時の心細さ。その前迄は、釣臺を見ると、氣味惡さに道をよけて歩いた自分が、傳染病にかゝつて、……と、思ふとなさけなくて、上に覆ふた布の下から、道ゆく人は何と思つて居るだらうか？ 矢張り道をさけるであらうか？、あの赤や白に、ちら〳〵透いて見えるのは歳暮賣出しの提灯を軒に揭げたのであらう。など、世は活氣に滿ち渡る街を、悲しい、淋しい思ひしつゝ、病院に運ばれてから昨日で丁度十日。精神はたしかで、別に苦しい處も無らひだので、大晦日には、退院も出來ると、獨りおもひ定め

て、お友達にも葉書を出した程であつたに、それも叶はず、遂に病院で元旦を、……。いつになつたら、退院が出來やうか。など、來し方、行末のことゝも、思ひ浮びては、淋しいやら、心細いやら、悲しいやら……。鐘の音はもう聞えない。靜かなる病院の夜半。ああ、もうよさう、こんな事思ふのは。お洗拭迄には、五時間あるから、また一睡しませう。

目がさめて、もう夜があけたであらうにと思つて、一時間程たつても、ちつとも明るくならない。どうしたのだらう、初日はまだかしら。時間はもう遲いのだが。硝子窓を透して、外を見ても、何もわからない。うつるは電氣の光りばかり。看護婦の居らぬ間にと、そつと床から下りる。烈しい下痢に骨と皮許りにやせ衰へて、ヒヨロ〳〵と、足にも力なくて、危く倒れさうなのを、寢臺につかまつて、漸く立ち、窓をあけて久々で外氣にふれる。冷やかながらも心地よく。まあ、暗いと思つたら其筈。雨がジト〳〵と、元日の朝からふり出して居る。

濕氣含んで居ては、と思つたが、深呼吸を三四回すると、氣が晴れ〳〵する。遠くに足音がしたので、見付けられると大變と、急ぎ寢臺に歸つて、知らん顏して横ると、すぐ、熱い〳〵湯氣の立つ、酒精を入れたお洗拭のお湯を、金盥に、一杯に入れたのをもつて、有木さんが來た。皇國の爲め戰死せし人の未亡人として、殘る香も高き其花の顏ばせ、後半生を、博愛事業に盡さるゝ、其心や尊く、其姿や美しく、氣高く、暫し恍惚とする。だまつて居る譯にもゆかず、「お月出度御座います、昨年中はいろ〳〵お世話樣になりまして有がたう」といふ。實はこんな處に臥る身は、おめで度ないけれど、本年も相變らずと、普通の人には云ふのだが、こゝで、相變らずでは大變だから、云はなかつた。

金澤八景の一　平潟の夕風



左側の卓の上を見る。花瓶には、姉様が伊豆から態々お見舞にとおもち下さつた、早梅と寒菊が生けてある。何よりの慰藉と、よろこんで見ると、まあ、嬉しいこと。堅かりし、昨日の蕾、操高き白梅の、元日早々よりほゝ笑んで……、何か吉事の暗示でゞもあるやうに、思はれて嬉しい様な、樂しみな様な感じがする。花瓶の隣りの、ルール孃（歐洲土産の人形）も、くりつとした瞳して見て居る。

オブラートに包んだ、藥を呑んでから卅分の後、重湯が來た。今頃家では、御兩親様、姉様、兄様、お揃ひで、樂しくおとそ汲み交はし、お雜煮を祝つておいで遊ばすだらうに、私獨りこゝに、相變らず重湯とスープ、梅びしをと、赤酒かと思ふと、なさけなくて、餘り進まないが、一日から殘して、容體表に記されるのもいやだから、無理にのんで仕舞ふ。

隣間はまだやまない。拜賀式に行く學生や、廻禮の人

人、凧あげ羽根づき遊ぶ子供達は、こまつて居るだらうが、外へ出られない私には、此雨が嬉しい。非常に嬉しくて、どうか、今日一日だけでも、ふり通しますやうにと祈る。人間つていふものは自分に都合が悪いと、妙に意地の悪い考へを起すものである。

　煖爐の傍の卓の上には、此室ばかりは特別にと、婦長さんがして下さつた新年の飾り。中央の紙の上には小さいながらも、お鏡餅があり、其上に、昆布も、橙も、飾つてある。右側の花瓶には、松竹梅、左側のには、水仙と赤い實の房々と付た南天があり、卓の下には、根づきの、香の高い、活々とした水仙の、水鉢も飾つてあり、僅かながらも、そして病院と言ひながら矢張お正月らしい様子のほのみえる。

　おとゝひ、お鏡餅を飾つて下さつた時は、嬉しうて看護婦に取つてもらひ、右の手に持つたり、左へもつたり、はてはなつかしさに、香をかいだ、(燒たての餅はいゝ香がするので)「お雜煮が祝へないから、せめて」といつたら、二三人居た看護婦に笑はれて、我ながら其あまり子供らしい行爲が恥しくて、ほつと上氣した様に顔が熱くなつた。

　この間、姉様がお歸りがけに、今日お出で下さるとの仰せだつたが、元旦早々から、病院見舞も……と、どなたにもお出でなき様にと、おことわりしたから、お見えにならないし、お友達は無論いらして下さらず獨り病室に臥る身は、淋しくてならない。何故かけふは人懐しくて、懐しくて、あゝ雜誌でも見よう。卓の上うづ高く積み重ねた書物は、皆讀み盡したが、これは、元日の讀み初めにと、見たいのをこらへて、殘して置いた、女學世界の新年號を見る。

　豊富なる新年の記事に、世間の人が羨しくてならない。殊に「初春の令孃日記」が、もうたまらなくねたましい。

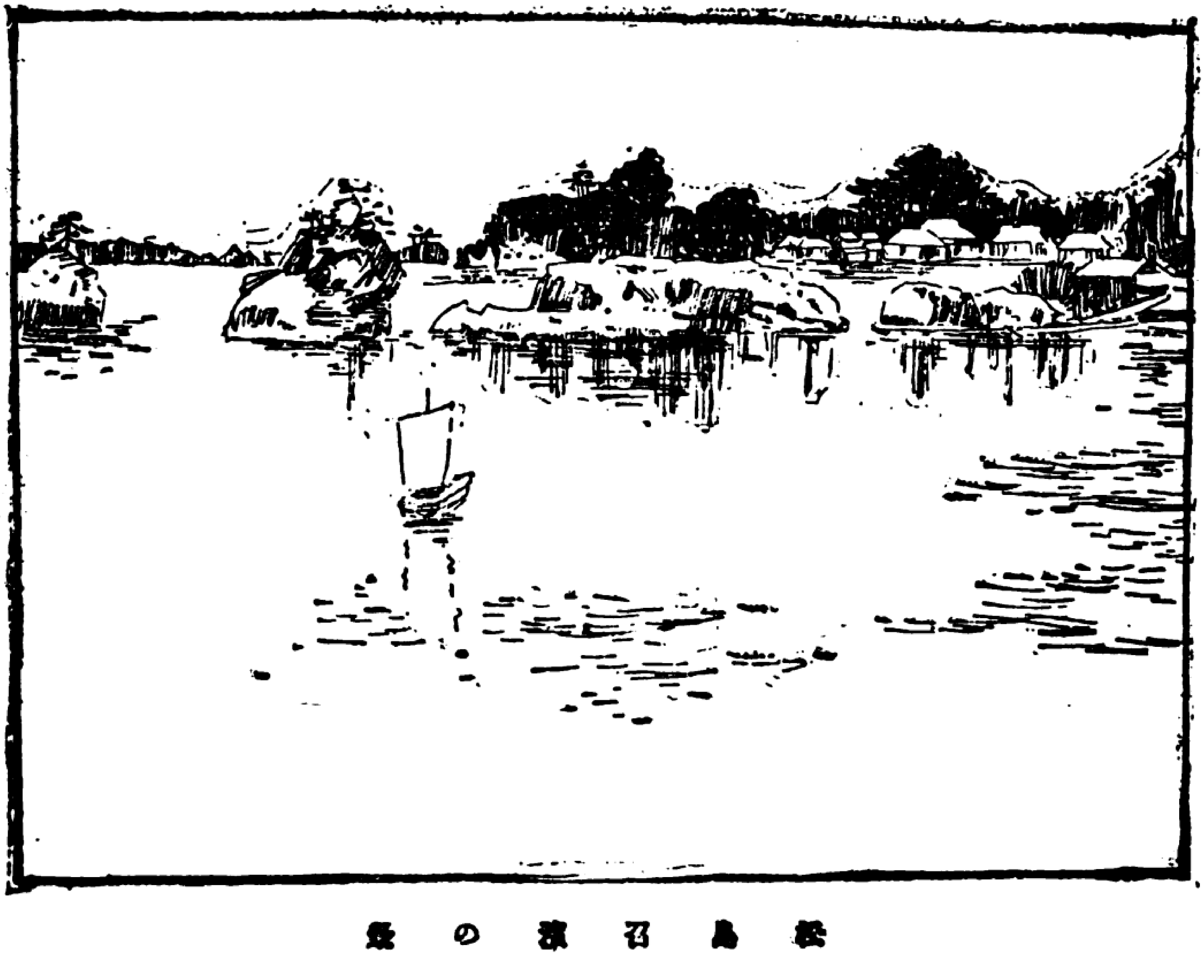
あゝ、私も健康であつたら、樂しいかるた會に、遊び暮すであらうに、樂しみし甲斐もなく、あゝこゝに。

おひる頃から、雨は名殘なう晴れて、陽も出てゝ、強い光線は、硝子窓を通して、顏一面てらす。

世の人はよろこんで居るであらうが、自分の氣は、もう堪らなく、いら〳〵する。

深みどり、門松たてゝ祝ひ壽ぎて、賑はふ太平の御代の新春。晴着に裝ひこらして、ゴム輪の車勢よく走らせ、都大路をゆきかふ令孃達、かるたに打興ずる若き人々の上をおもひめぐらしては、雨が降つて居た時の樣な平和な心もちになれない。また雨がふり出しますやうに、などゝ思ふ。あゝ、これも一種のあさましい嫉妬。何だか、こうして臥つて居るのが、じれつたくて、じれつたくて、病院をぬけ出たい樣な心もちもする。

一體いつになつたら、退院が出來るであらうか？



松島召濱の景

あゝまち遠しい。早く外の空氣にふれたい。土をふみたい。唯一度でも、かるたをしたい。賑はふ街を、歩きたい。お箸をもつて、食事をしたい。きのふ「私は日本人でありながら、半ヶ月程、お箸をもちませんのよ。」つて、云つて笑はれてしまつた。

それでも、此頃は、少しは、よくなつたと見えて、時には、空腹も感じ、意地汚のやうだが、種々のおいしいものを、思ひだしてならない。

この間なんか、どうしたのだか、そんな事のあるべき筈のないこの、分病室を、何處を、どう、風の吹きまちがへたものか、照り燒のおいしさうな香ひがして、もう堪らなくなつたので、もしや自分の鼻のきゝちがひかと思つて、看護婦に、聞いたら、やつぱりするといふ。

午後から、西さん有木さん、杉村さんが來て、雜誌を見ながら、いろんな面白い話をしては、つれ〴〵な身を慰めて下さる。外のは知らないが、赤十字の看護婦は、皆さん、親切に、傳染病でも厭ふ樣もなく、まごゝろもて、いたはつて下さるので、心から嬉しく感謝して居る。

「一に看病二に藥」とは、古い諺だが、看護人の、一擧一動は、病者の精神には強くうつるから、親切なのが、何より幸福。

一體この腸の病氣は、快復期になると、それは〳〵空腹で、並の人以上、食慾が進み、傍の見る目には、ずい分可笑しい樣な、意地きたない事することがあるさうだ。

私なんか、一箸も漸くであるに、あの梅びしほがたりなくておかはりしたり、お皿をなめたり、する人もあるといふ。

いくら空腹だとて、食慾にまかせて、食べれば、それこそ又もりかへしするし、與へねば、惜しむ樣に思

ふし、看護人は、手加減がむづかしいさうだ。

こう、平臥したまゝ、一足も動いてはならないと、云はれるのが、私にとつては、何よりの苦痛だ。

自分では、別にもう、いたみもしないし、起きたくてならないのだ。それで、くだらないことまで考へて心づかひ計りしてしまふ。そりあ腸チブスの人は、熱高いから、面會も謝絶し、新聞雜誌も、みさせないと云ふに較べては、私など樂なのかもしれないが。

自分の身の總べてのことは、人にしてもらひ、たゞ自分は、暖かに床に、臥つて居ればいゝのだから、外面から見れば、或は樂にも思はれやうが、私にとつては、何よりの苦痛だ。靜かに考へると、いろ〳〵の事が思ひに浮ぶ。

一番いやな職業ときゝし鑛夫。光線も入らない鑛山の陰氣な處で、薄暗い燈火を便つて、終日働く、その鑛夫、勞働者さへ、今はなか〳〵に羨ましい。たとへ、苦しくとも、自分の手足を、自由に動かすのだもの。病床に自由を止められた身より、どれほどか、幸福だかしれないと思ふ。こゝに於て、眞實に「勞働は神聖なり」といふ諺の意味を、深く〳〵味ひ得たうれしさ。

もう〳〵退院したら。全快したら、健康の身となつたら、何でもする。下女の代りでも、自分の力に及ぶだけのことはする。たとへ一日働いても、自分の手足を自由に動かすことが出來ればうれしい。

「勞働は神聖なり。」

新らしき、年の初めに得たる此教訓。

ながき臥床中に、深く味ひ得たるこのことは。

私は、永久に、忘れることは出來ないのである。

ふかく胸に刻まれし此ことばを。

此尊き教へを、病中に味ひたるを。年の初めに解したると、ふかく神に謝す。

△一の野菜より得たる教訓

今朝は、久々で晴れ渡り、るり色の空も見えたので
まあこれからはお天氣かと、久方ぶりに、太陽の光も
あふぎ、氣も晴れ〳〵として、よろこんで居たに、俄
かに變つてふり出す雨。あんないゝお天氣だつたに、
どうして、又秋雨が、……さう〳〵其筈〳〵、何とや
らと、秋の空は、變りやすきものであつたに。

それでも、毎日こゝ降り續かれると、陰氣で、淋し
くて、ならない。八月、水の出たのも、此頃だつたに。

昨日の夕刊、今朝の新聞にもまた、出水の模樣傳へ
られてあつた。こゝは山の手のこと、何日ふつたとて
出水の憂もなく、太平に暮して、居ることが出來るが
本所深川邊の人は、氣の毒なものだ。

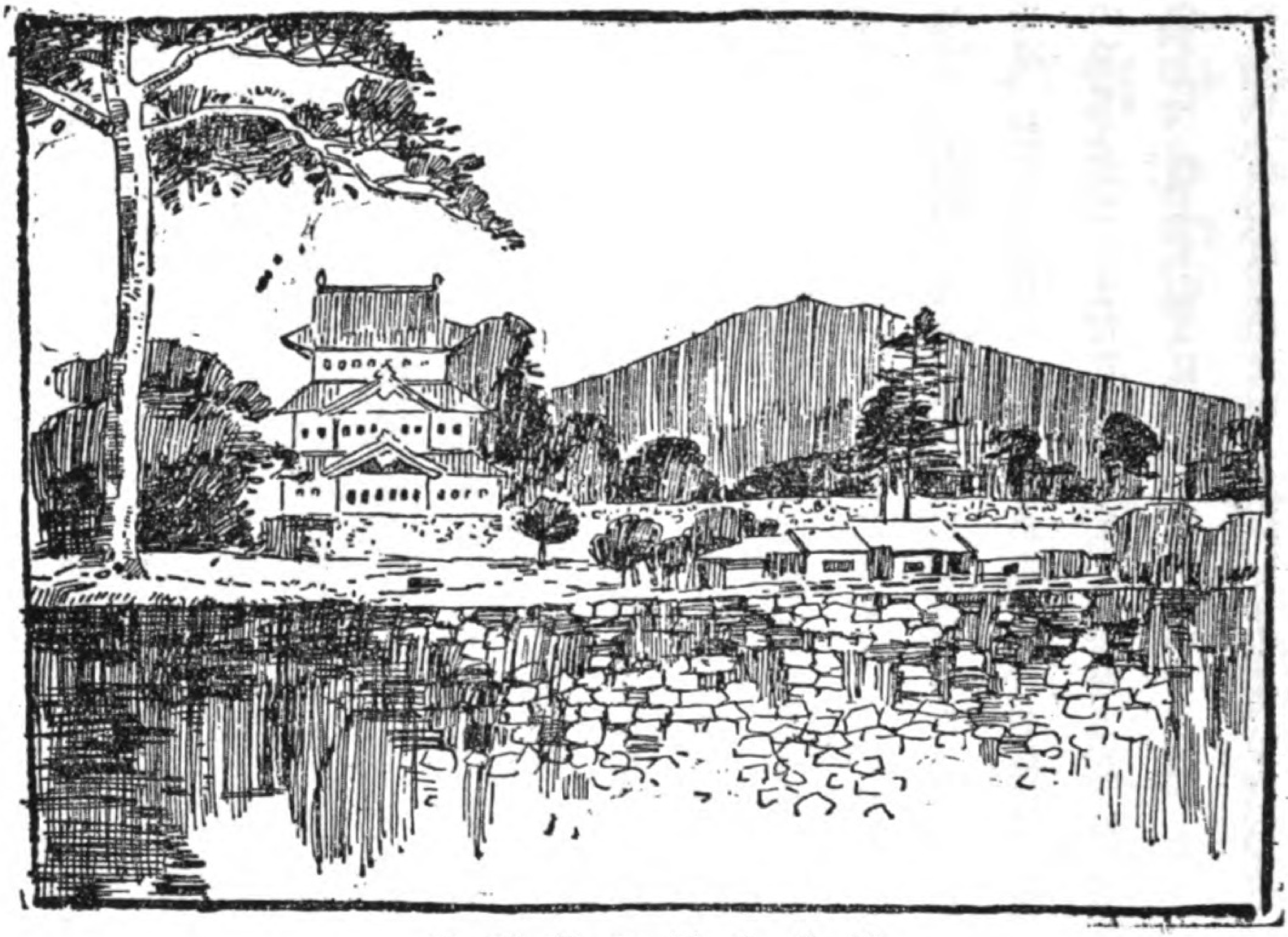
學校で、「低地や、濕地には成るべく、居を定めぬや
うにと、家事の時敎はつたのも、かう云ふことがある
からだ。

どうか、晴れますやうにと祈る。

廣告の樣に、縫ひものを出したまゝ、或は太く、或
は細く、銀線とふる雨をみつめ、靜かに、或ものを、
考へると、なんだか淋しくて、〳〵、人なつかしくて
ならない。

郵便と鶴の一聲に、「ハイ」と、我ながら驚く程な、大
きい返事して、出てみるとまあ、嬉しい、なつかしい。
梅様と多代さまからの御玉章、いづれも厚い〳〵の。
しばし、二通のお文、手にして、なつかしい、お二人
のおもかげを想ふ。

梅様とは、誌上にて得たる友、まだ相みしことなき
君ながら、相じたふたり。あゝ、早くお目にかゝり。
たいこと。優しい君のマダムぶりを、おもひみて。
多代さんからはいつもながらも、深情こもれるおぶ
み。



弘前公園の舊城址

女學校時代の友だか、なんだか振りわけ髪の其昔から、幼なじみの友の様なこゝろもちがして、互に何のへだてもなく、春のあした、秋のさやけき月の夜など、親しく手をとつて、語りあかすのであつたが、卒業といふものに、へだてられて、今は西と東に數十里。雁の便りに語るばかり。

この間御相談したことのお返事、やはり私とおなじお考へなので、私もこゝろづよくなる。まよひまよふて、決しかねたことでも、誠ある友のことばには、こころうれしく、理否も明らかに、たしかにこうきめた。あゝもつべきものは誠の友よ。

在學中、論理の時間中島先生から、「兄弟は他人の初め」といふことからいろ〳〵こみ入つたお講義伺つた時は、何だかこう、急に、波荒い、大海原に、捨小舟にのせて、流されたやうに、悲しい、淋しい、孤獨といふ様な感じがして、なぜ、道德者は、あんなことを

いふのであらうか、と少なからず、失望して、先生をうらんだこともあつた。

けれどもこのごろ、ほんとうにこの意味を知つたのだ。同じ親の血を受け、おなじ家におきふしゝて、生ひたちながらも、一朝他家の人となり、境遇を、異にするやうになると、へだてるといふではないが、いゝえ、いくらこちらで親しく仕様としても、何かゝ、間で、薄紙をもつて、隔をつくるかのやうになつて、昔のやうではなく、他人らしくなつてしまふのである。

私は、これが心細いやうな、悲しくてならず、なぜだらうか？　私だけこんなだらうか？　と、従姉に聞いたら、澄枝さんも、おなじ思ひで、「そりあ、むかふでは、頼るべきたしかな人があるから、自然さうなるのでせうが…　またなつたつていゝでせうが、私達のやうな、頼るものゝないものはかはいさうね。あゝ、やつぱりいつはりのない、友がいゝのよ。」といつた。

ほんとうに、こう、若い血の、わきかへる、一寸したことにも、ハツと驚く、此青春の、小さい胸三寸に包みあまることでも、生みの親にも、はらからにも、語りかねたことでも、まことの友ならば、うちあけてきかれもしききもして、暖かい、まごゝろからの同情を求めるやうになるのだ。

あゝ、もつべきは、親しき友よ。憂きを共に愁ひ、喜びをわかち、心の秘をもかたりあひ、助けつ、助けられつ、善を進め、悪をいましむる、眞實の友。

あゝ、私と、多代さんは、もう、親身にもまさる睦じさ。

年と共に、月と共に、二人の境遇は變りゆくとも、頭に白髪を頂くやうになつても、此美しい交りは、變らないことゝ思ふ。否決して變らないのである。

私は、優しい、眞實の此友を得たのを、深く感謝する。

雨の小止みをまてども、なか〳〵望がないので、二時頃からお花にゆく。

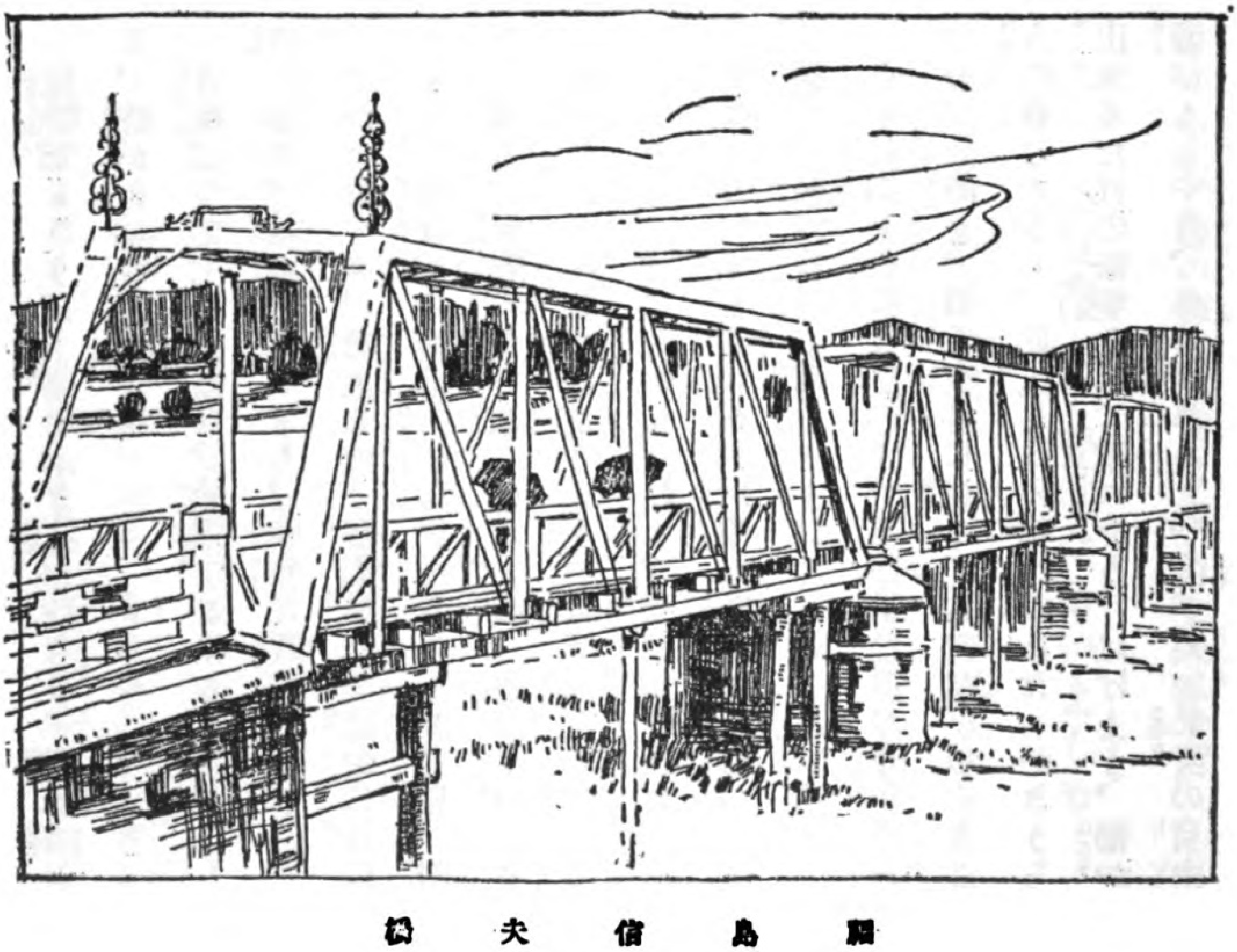
平井さんが、いゝ白菊を生けていらしたから、私もと思つたに、遲くなつたので。選り殘りの花が茶色に腐つた樣になつて居るので、仕方なしに、葉蘭を生ける。

此頃の日の短いこと。五時にはもう薄暗くなる。ことに、雨の日は尙早いから、暗くならない内にと、お夕飯の仕度をする。けふは別に變つたものもせず。

松茸と、白菊豆腐のおつゆ。畑の鶴菜をとつて、菊の葉にして、黃菊を心にして、一寸柚を香に落す。鯖の照燒。それからいつかの南瓜あれを煮ませう。

小さひ方は、ずつと前に使つたら、何とも云へないさう、南瓜たべて、はじめての味だつたが。

これは前のより、縮緬も多く、あまり、立派なので味はいゝに違ひないが、食てしまふのが惜しいやうで

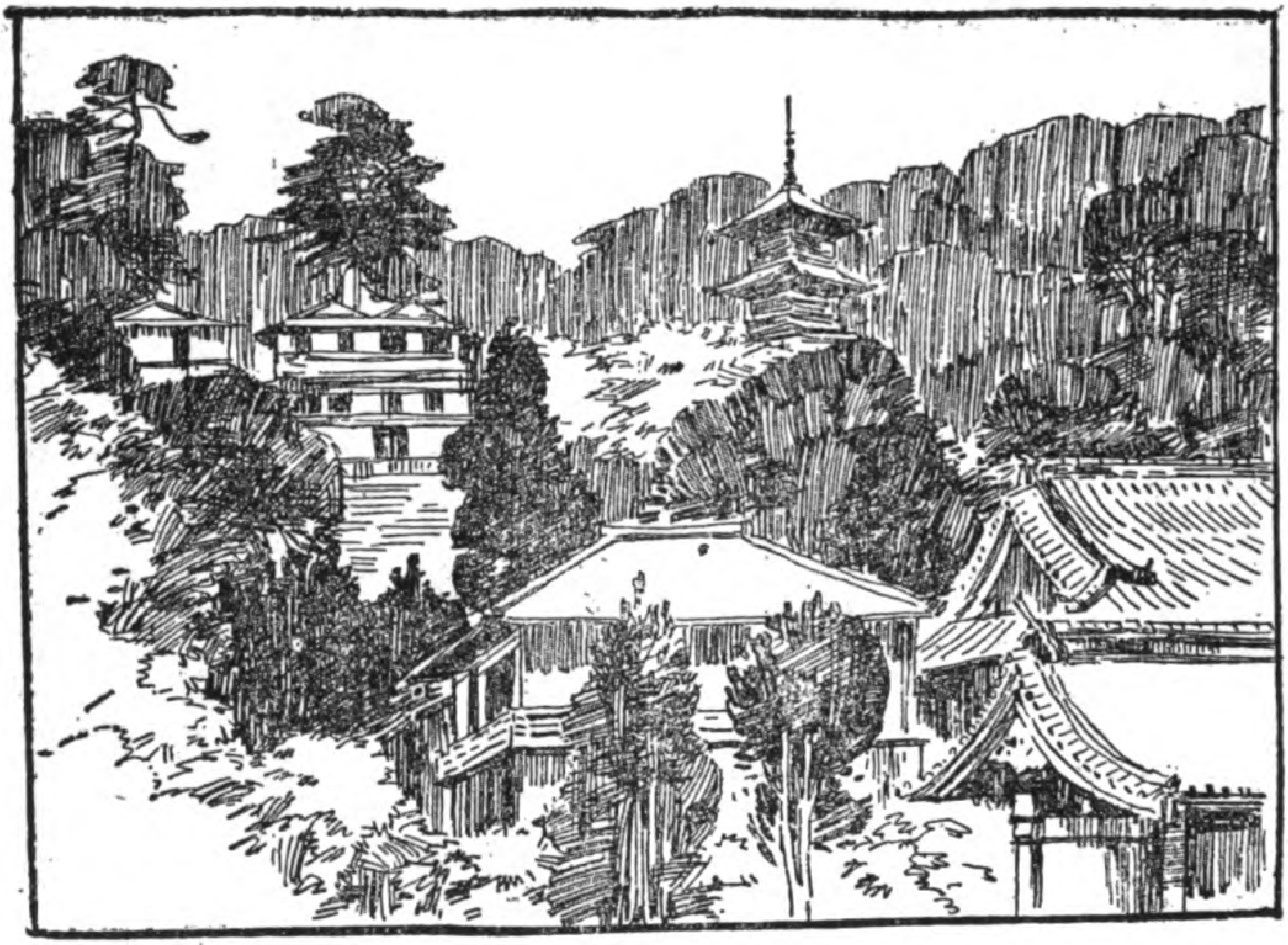


關島信夫畫

けふ迄殘しておいたのだ。まあ重いこと。一寸、周圍を計つて見る。糸をまはすと、鯨の二尺二寸五分。高さが九寸五分。今まで私の見た南瓜界の王樣だらう。
ほんとに大きいこと美しいこと、御料牧場で出來たのだらう。思ひきつて庖丁入れてしまふ。
いよ〳〵食べて見て驚いた。かたいこと、まづいこと、これぢあいくら南瓜好だつて、兄樣に笑はれた私でさへ、あまり難有からぬ。少なからず、失望してしまつた。
母樣は「あんまりながく置いたからだ」と仰せになる。さうかしら？　前のよりは、一層いゝ味であるとお〳〵しのない此目で、たしかににらんで置いたに。
叔母樣の處から、頂いてから今日でもう四十餘日。あゝ、あんまり置きすぎたのだ。
適當の食べる時を失つてしまつた。まだ〳〵といふうちに時はすぎた。

植物でもさうだ。芽をふき花をひらき、實を結ぶにも、時があるのだ。
人間だつて、やつぱり、勉強するにも、遊ぶにも、時がある。結婚するのでも、相當な時がある。
さかりをすぎ、色もあせ、香も失せて僅かに枝に殘りしうば櫻は、めづる人がない、それと同じに、胸にみなぎる、青春の若き血しほは枯れ、色なく香なきものを、たれかみかへるであらうか!!!。
あゝそれよ、たしかにそれよ、受けたるはわづか、一野菜よりに過ぎないが、「何事も時を失はぬが第一」此得たる敎へは高く尊く。
この敎訓を永久に忘れず。再びあひみぬ今年今月此日を、此時を、尊く有益に送り、ふたゝびめぐりこぬ人の春なるうち。此血しほの枯れぬあたゝかきうちに出來るだけの修養をし、勉めやう、はげまう、働かう遊びもしやう、あこがれもしやう。たゞ此身の自由な

四國名勝　德島大瀧山



るうちに、後の悔なきやうに、時を失はず。

△反覆して受けたるいましめ

打續きし雨も、名殘なう晴れて、天高うすみわたり所謂秋晴の空。太陽の柔らかい光をあびながら、柳の木の下でお洗濯すると、ほんとにいゝ氣もち、活きかへつたやうだ。あふ人もみなやつとお天氣になりまして、どうか續かしたいものでございます。」といふ。

目白の籠を、緣側へ置いたら、猫にねらはれたからこの間から玄關へ置く事としたら、一昨日の朝、いつにない、いゝ鳴き聲がするので出てみると、籠の目白をみつけて、外の友鳥が來て、格子の間から入らうとし、籠のは出やう〳〵と、あせつて居たが、その日は入らずに、逃げてしまつたので、もう來ないだらうと思つたに、昨日の朝も來たから、今朝來たら、捕へやうと、空籠に、すりゑを入れて、鳥が止り木へ止ると、

木がまはつて、入口が閉るやうに、糸をつけて、庭へ出して置いて、其傍へ籠の目白を置かうと思つて、籠をとりに玄關へ來て見ると、「まあ、いつにげたのだらう、あの愛らしい姿はない。どこから逃げたのかと調べて見る。朝餌を與へる時、籠の竹があまり細いので折れてしまつたが、こんな小さい處からは、なんぼ小さい體でも、出られないだらう、あとでお父樣に竹をこしらへて頂けばいゝと思つて、つひそのまゝにしておいた處から逃げたのだ。目白は大さう友を戀ふものださうだから、とう〳〵出てしまつたのだ。

惜しいことをした、あの可憐な目白が居なくなつて殊に淋しい。これも油斷したからの事だが……。暫時茫然として、主人なき籠紀念の其籠をみつめた外のも捕へやうなどゝ考へて、却つて逃げられてしまつた。あゝ油斷はなすまじきものよ。

それから、十分許り後、庭の桃の木あたりに囀づる聲がしたが、可愛らしい其姿は見えなかつた。

今頃は自由の身を喜んで居るだらう。友と樂しく遊んで居るだらう。籠に生れて籠に育つた鳥でも、やはり自由な處を望むのであらう。

午後町へ行つたら、田中の娘が豆屋に居た。其スタイルつたらない。島田のまげは後へひつくりかへり、びんも、たぼも、ばら〳〵にこわれ、顏の白粉は仲違ひでもしたかの樣に、彼處に一群、此處に一群、まだらまだらに、背には赤子を脊ふて居た。あの髮、あの風あの顏、あれで本人なか〳〵の得意に見えた。

色白の目の涼やかな、口元の締つた美しい人が、矢がすりのお召でも着て、文机に向つて、歌筆もつ樣なら島田もよく似あふが……、土方の娘があんな恰好して居るのでは……、おなじ島田にも幸不幸はあるものよ……、私はつく〴〵島田なるものに同情した。

「他人のふりみて我が振りなほせ、」とう〳〵あれをか

がみとして。私もあんな不釣合な事の無い様に仕様。
夜、九月十六夜の月は清く中天に懸る。澄み渡りし空の南方に當つて、一片の白雲が漂ふ。折々うす曇りのして、其間より美しい光りを放つ。それもほどなく止むと、あたり物靜かに、聞えるものは下葉に鳴くこほろぎのあはれな音ばかり。あゝ良夜。
庭下駄をはいて草の上をふむと、露がしつとりと。清い夜の空氣を、胸一杯にすひこむと、清い〳〵、ゆつたりとした心もちになる。と、何處からともなく歌ふさつまびはのこゑの、追ひ〳〵近づくのをきいた
「如何なる人の讒言にや、胡國といへる遠國へ、流され給ふぞあはれなる」……。
ゆるく、高く、よわく聲の主は門のまへに來た。私の胸の若い血しほは、あやしく波立つ。なつかしい人でゝもあるかのやうに、……けれども、それも暫時。ほそしと月を見つめながらきく。玲瓏たる其聲。
「王昭君は今ははや、住みなれし花の都を、涙とゝもにたちいづる……。」
夜は音なうふけゆく。靜かにきく心は漢の其昔、ありし其美はしき人のうへをおもひ、あはれ深く覺えつつも、身は浮世遠き月界にあそぶかの心地して、うつとりときく。あらゆる邪念欲望はあとなく失せて、無心無我の境、うたふ聲の、おひ〳〵遠く、幽かに〳〵なり、全く聞えずなつて、初めて我にかへつた。そして、再びきゝたいと思ふ。
あゝ、此瞬間の私の心ほど、清く尊く、美しいことはないのだ。限なくてらすあの月に、洗ひきよめられたる、あの月に、とけ入るかの様に、心身ともにどりなく、心地すが〳〵しう、自分といふものが、こゝに生れ變つたかのやう。
人が何と云つても、私は、さつまびはは好きだ。
自分は、女の身、ならふことが出來なければ、せめ

て、歌をきくだけでも……。

春の花見は樂しいものだ。冬の夜、若き人々打よりて、かるたにふかすも樂しひものだ。私は好きなのだ。けれども、これは愉快といふのであらう！。

今宵のやうにして、きいたびは歌は、清快といふのがあらう？……。私は前者よりも、尚、後者をとるのである。

あゝ、清快……清樂、愉快よりも、なほ、尊いものであらう。私は、清樂がすきだ。

おなじくは歌をきくにしても、何々會などゝいふ席で、雜踏したる人の中、或は電燈の下できくよりは、月の夜にひとりきくのが好きだ。この方が尊く清いのである。

電氣の光よりも、なほ尊い、月の光を仰ぎながら、きくのがすきだ。あゝ尊い月、清き光。自然の輝き。此清き、光りをあびながら、すみ渡る月をあふぎながら、ゆつたりとした心もちで、靜かに、けふしたことどもを反省してみる。

目白のかごのこと。田中の娘のこと。二つながら私にはいゝ敎訓なのだ。

油斷の報い。我身のかゞみ。

平凡なるけふの生活にも、尚この、二つの敎訓を得た。

更に月の尊さをも、深く〳〵知つた。

得たる敎へは、いまはじめてゞはないが、幾度か忘れんとした此心に、反覆々々して受けたる此敎、もはや、深く腦裡に刻まれて、忘れることはないのだ。

あゝ尊かりしけふの日よ。

（日常生活の敎訓第壹節）

女(その一)

明治四十四年 當用日記

▽**賣捌所** は各國各地の書籍雜誌店及紙類文具店到る所にあり

博文館發行の當用日記懷中日記は今に至つて多くを言ふに足らざるなり今や日本全國に於て二百萬の人士は既に之が體裁と內容とを熟知し且つ親しく座右の便に供し大に重寶せられたれば玆に重ねて大呼するの要あらんや然れども朧を得て蜀を望むは人の常情なり博文館日記の需要をして層一層ならしめんとせば**編纂、印刷、製本**の精を期せざるべからず**四十四年度**は此點に就て**遺憾なき計畫**を以て既に市場に顯はれたり、希くば倍舊の好評を賜はらんことを。

當用日記は卷頭に皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷として揭ぐ

((當用日記定價))

大形（菊判）**上製**（舶來洋紙總クロース金文字入）▲正價五十五錢 郵稅十四錢

中形（四六判）

總革製（舶來洋紙總革製金字入堅牢美本）▲正價金八拾錢 郵稅十錢

特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）▲正價金五拾錢 郵稅十錢

上製（舶來洋紙總クロース金文字入）▲正價金卅八錢 郵稅十錢

小形（菊判中截）**上製**（舶來洋紙總クロース金文字入）▲正價金三十錢 郵稅八錢

紙數各五百四十頁

附錄 ●金錢出納錄●知己人名簿●雜錄●諸統計表●米價換算早見表●諸稅則摘要●郵便電信諸規則●新式萬年曆●徵兵規則……

發兌元 東京日本橋

販賣用電話 本局二六二〇番

紳士淑女用

新案

明治四十四年

ポケット日記

A、B、C……三種



●本日記の特長は何れも特製總革を用ゆ其手當りの滑かにして三方金縁を附したる、共に見ざる逸品たり。又製本の堅牢なる、日常携帶に至便なる紳士、淑女用として優美高尚なる日記なり。

●本日記は何れも薄手の舶來用紙を用ゐ、ポケット用として携帶至便なり、尚前記三種を調製し發賣せり各種亦特殊の特色を有せり。

●附錄──金錢收支表、郵便規則、税法、年齡表、補遺記事欄等の如きは日常座右缺くべからざるものなり。

A號……(厚形)
總革製三方金縁舶來紙薄手
美本紙數四百四十頁函入り
(記入欄一日一頁宛)
正價金五十五錢
郵税金四錢

B號……(薄形)
總革製三方金縁舶來紙薄手
美本紙數二百二十頁函入り
(記入欄一日半頁宛)
正價金四十五錢
郵税金四錢

C號……(薄形)
總革製三方金縁舶來紙薄手
美本紙數四百四十頁前後季
二冊差換函入(特長普通手帳兼用)
(記入欄一日一頁宛)
正價金六十五錢
郵税金四錢

東京 博文館 本町


少女世界
洋裝菊判
紙數百廿八頁
正價金拾錢
郵稅金一錢
第五巻
第拾六號
口繪 ◎霜……田中竹園
◎霧の朝……河合新藏
○高知少女會 ○旅より（寫眞版）
○讀書會の遠足 ○運動會
◎鶯塚……巖谷小波
◎（四國敬神）巡回講話大會……沼田笠峰
◎修身百人一首……佐佐木信綱
◎病める少女より……西村渚山
◎（少女小說）窓……はつ音
◎女子學院文學會……記者
◎落葉我記……巖谷小波
◎理科筆記帳……木村小舟
◎足袋の編方……石井とみ子
◎小枝の人形……大竹竹舟
◎少女會館●十八回筆蹟
▼十二月一日發行▲
發行元
東京日本橋本町
博文館

光輝ある歷史と最新の學說

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 萩野由之君編著
東京高等師範學校教授 尾竹國觀畫

少年日本歷史讀本

洋裝頗美本
挿畫廿個
大判紙數毎編
百四十餘頁
定價一册拾八錢
郵稅一册四錢

博文館 振替口座東京二四〇番

日露戰役の結果、一躍して世界一等國の班に入りし日本帝國は、近く韓國の併合に依り、其領土著しく擴張して、國光宇内に輝く、此際國民は益〻忠君愛國の觀念を厚くし、以て帝國の名譽を尊重せざるべからず。而して此觀念を兒童の腦裡に印せしむるには光榮ある日本帝國の歷史を繙かしむるにしかず。本館玆に見る所あり、國史學の泰斗萩野文學博士に囑して日本歷史讀本の編纂を企て、最も趣味豐富なる筆致に依り、上は天地開闢より、下は日韓併合に至る迄、數十册の大部に收め、逐次刊行せんとす、謂ふに國民敎育上に資すべき點尠少ならざるべし。少年諸君は勿論一般家庭及び學校の好參考書として、無上の珍寶ならん。切に愛看を待つ。

第一編 **天の浮橋** 一月發行
第二編 **大國主命** 二月發行
第三編 **天孫·降臨** 三月發行

第四編 **橿原の宮** 四月發行
第五編以下毎月一册
又は二册宛續々發行

を述べたる二大少年叢書生る

現代専門諸大家執筆　博文館編

少年百科叢書

少年は修學の時代也、故に其一日を怠れば、百年の悔を殘さん、殊に學海の波浪滔々として漲り、嶮山幾重に峙ちて、其前途や又決して安心すべからず、然るに學海の燈臺となり、學山の栞となすべき健全なる良參考書に乏しきは、亦昭代の一缺點にあらずや。即ち此缺陷を補ふべく玆に創刊さるもの我少年百科叢書なり。嗚呼修學の一路を求むる帝國幾萬の少年諸子は、此書によりて文明の新智識を享受し、學校の教科と相俟つて更に偉大なる効果を收め得るや必せり。少年机上の寶典之を措て他に求むべからず。讀め天下の少年諸君！

洋裝細長形頗美本
紙數毎編二百七十頁
美麗口繪數葉挿入
定價一冊金貳拾八錢
郵稅一冊金四錢

第一編　先哲至言 勉學訓　一月發行
第二編　讀書法　二月發行
第三編　世界名君傳　三月發行
第四編　世界名臣傳　四月發行
第五編以下毎月一冊
又は二冊宛續々發行

東京本町　博文館

博文館女學世界編輯局編纂

家庭日常寶典

家事整理墨縄

明治四十四年 家庭日記

洋装總クロース金文字入
美本紙數五百餘頁

正價卅八錢 郵税拾錢

家庭日記は最も進歩したる。文明的なる日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、苟も我家の規模を知り我家の地位と品格と勢力とを知らんとする人の机上に缺くべからざる重寶日記なり其の内容は左の如し。

（要目）

▲收入明細表
▲支出日計表
▲出納計算及殘高表
▲家計分類出納表
▲出納分類表
▲貸附契約一覽
▲保險契約一覽
▲諸關係掛金一覽
▲租税一覽
▲年中行事豫記
▲家庭重要記錄
▲我家の家族
▲家庭紀念事項
▲戸籍表
▲崇廟祭祀日錄
▲通學要錄
▲兒童生育要錄
▲健康要錄
▲衣類目錄
▲財産目錄
▲貸借關係錄
▲音物贈答日誌
▲通俗日誌
▲親族名簿
▲傭人名簿
▲知人名簿
▲備忘錄

（附錄）

●家計安全法
月收百三十圓、七十五圓、五十圓にて見積りたる生活費の内譯

本書内容の一斑

本書は始めに一年三百六十五日の日欄を置き、七曜干支を順記し、天氣、寒暖の各座を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、食品、花暦の各項を抄記して月令の栞となし次に此の日記の特色ともいふべきは他の日記簿に類例なき約二百頁に渉る家庭重要記事を始め、交際、通信音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し兼れて財産、衣類等の品目を掲記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。猶前掲附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識にして其他これに必要なる諸規則をも網羅せり。

●家庭修養訓
●婦人の交際心得
●一年間の仕事配置
●衣類器具の整理
●日常心得草
●室内裝飾法
●看護上の注意
●結婚式上の心得
●細君小言十ヶ條
●音物贈答の注意
●四季折々の料理
●惡習慣矯正法
●盆栽の趣味
●簡易治療法
●一家經濟の枝折
●健康長壽の術
●妊産婦の心得
●火の元の用心
●衛生美容法
善惡當座占ひ

家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其内容は従來有觸れたる日記簿とは全然面目を異にし統一あり秩序あり教訓あり趣味ある日記にして眞に一家の重寶たる實質を具備せり

東京日本橋本町三 博文館 振替東京二百四十番

女（その八）



忘れ得ぬ友の數々

紅蘭女

銀絲とまがふ春雨が、咲き切つた緋桃の枝に音も無う降り濺ぐ。しつぽりぬれて、一だんと紅ました花の面の艶かさよ。恍惚り見詰めて居ると、あるとしもなきその音に誘はれて、我身も一緒に地の底ふかく落ち込むやうな氣がして、眞實に侘しい日。緋桃の花に似て美しかつたのは絢さんだつたと、偶然思ふたら、今迄微かな雨の音にしつかり囚はれてゐた私の心は何時のまにか、もう、懷しい級友の君方の上に移つてしまふた、日永のつれ／＼に、思ひ浮ぶ御俤其儘紙に語つて、華やかなりしむかしの春を偲んでみやう。

あゝ樂しく若かりしの日の思出よ!!なんて云ふと何だか、嫌にお婆さん染みて我ながら哀に成つて參りますわねえ。是でも未だ紅絹の振長き少女の身でございますことよ。オホ、、

氣高い絢子樣級中で一番年下だつたのが此方、遊歩時間によく騷いで綻のはげしかつたのも此君でした。卒業迄おさげに仕ていらつしやいましたが、あどけないお顏立ちのせいか些とも可笑しくお見えなさいませんでしたわ、最も前髮は出していらつしやいましたの。リボンは水色とか白の琥珀とか、稀には荒い縞とか、極く淡色がお好きで一文字にキユッと結んでいらつしやる。お召物はいつも紫色がゝつた物許りお用ゐでしたが、夫が又、ようくお似合ひ遊ばして一しほお色が白く見え升のよ。人に話しかけられると、屹度、「マア、左樣、マアー」とさも身に沁みた樣なお聲で應答へ遊ばしながら、美しいお眼を振り仰いで莞爾して

聽き入つていらつしやるお風姿は、眞實にお可愛いらしかつたのですよ。柔和しい、そだやかな、丁度温かい春の日のやうな性質でしたからね、誰からも愛かれていらつしやいましたわ。學科の出來榮は普通、その變り、どの課目も甲乙なしに平均して被入いましたつけ。え？お脊ですか？中肉中脊。高くもなく低くもなしと云ふ所。近頃裁縫のお稽古にお通ひ遊ばすさうですの。

先日の御手紙つては、

「私ねえ、夫りや苦しいのよ肩が凝つて〳〵。だつて一日ちく〳〵針を友なんですもの。氣がきかないでせう。おまけに今日は運が惡くて襟の形が如何してもだめなのよ。仕直し〳〵してた中に布がくた〳〵に成つちやつて泣き出し度くなりましたの、でも降した肩揚の手前泣くに泣かれず……云々」

例の輕いお筆で色々認めてあつた。けれど、私は寂しく成つて仕舞ひましたわ。絢樣、あや樣、貴女もとうとう御取り遊ばしたの？此度私が御目に懸る絢さんはあの子供々した御樣子は消えて、どことはなしに大人びた絢さんなんだわねえ。憎い〳〵年と云ふ魔物は、年どし、美しい少女の頬から若さを奪つて行くのだもの。むごいわ、ほんとに——。

つくらはぬ千代子樣此度になりふり構はない方も少ないでせう。引つまつたお束髮も、夫りや人の好き好きですから宜うございますけれど、二百三高地もいつも片方に傾き懸けて居るんですから恐入りますわ。つんつるてんにお袴をお穿きに成つて、着物が下から覗いてゐる事なんかは珍らしくございませんでした。極眞つ正直な、裏も表も無い方でしたが、如何してか皆樣に嫌はれて被入いましたわ、お筆跡ときたら、夫は夫は亂暴で、切角御手紙頂いても首かしげて大骨折りしなくつちや成りませんのよ——こんな事云ふと自分

がさも上手さうでせう、所が悲しい事には、何時も兄に、お前の字は、何だい。コンニャクの化物かい——なんて云はれるんですよ。ですからね自分の事は棚に上げて置くのですから、何卒其おつもりで——。此方は夫は〳〵熱心なクリスチャンで——一つは父樣が牧師で被入つた故かも知れませんね信者で無いわたくしを、此世に又となき最大不幸者の樣に思召しましてね、其哀れな私を救ふて神の子に仕てやるつて夢中になつて說破して下さるんですよ。



私だつて四邊寂たる、夜の床に、獨目覺めて、靜に胸に手を置いて、計り知られぬわが運命をおもひ續いて生に對するうたがひや死に對する恐怖が腦裡に閃めき出すと、不安の念がひし〳〵と迫つてきて、何かに〳〵縋つて此暗い思から逃れ度い。敎の道！それは光明の道のやうにもおもはれて懷しく信仰に生きやうかと考へた事だつて一度や二度ではございませんけれども、『此罪深い人類が安らかに生

活してゐるのは只、神のみ惠に依るのよ。神が在しまさねば光もなく食物もみのらないのよ、目の前の歡樂ばかりを求めて神に背いて居る人の死後はどんなに、苦しまなけりやならないでせう。慈悲深い神を知らぬ人程あはれなものはないわ、この世の地位や財產が何になりませうか？名譽が何に成りませうか？靈魂に不滅つて事を考へたら如何しても神に便つて救はれるやう道は無いのよ。なんて眼を据ゑて月並のお說敎を聞かされると、をかしさが先に立つて惡いと知りつゝしまひには遂失笑しちまふんです。そんな悟り開いた樣な事人にはお說き遊ばしたつて、三越の前に行けば矢張おみ足が止まるんですからね、だめ〳〵。

夫もいゝのですけれどねえ、信者以外のものは皆な惡人のやうに仰しやるんですもの、時には腹も立つて、信者に成つてあんなに偏よつて氣がせまく成るなら御免だわ——つて憎まれ口きいた事もございましたつけ。何しろ級で異彩を放つて被入つた方でしたよ。勝氣で美しい麗子樣學校一の立役者、こんなに學校中に大持の方は外にございませんでした。△△先生がきつい御贔屓、他の組の人迄あの君のディヤに成り度がつて大騷ぎやつたものですが、中原の鹿は遂に又組の某樣の手に落ちて仕舞つたんです。失望遊ばした方や、恨むで被入しやる方が幾人だか解り升まいよ。少しはお寢覺めが惡いかも知れませんねえ、恐ろしいと、何あに？餘計な心配して居るつてほんとにねえ、オホヽ、自分の事でもございませんのに……それはさうよ、實際お名にたがはじ美しい方で、丁度、紅のたまを薄絹透かして見る如なおん頰の色、襟足が拔ける程白くつて、お毛は少ない方でしたが、ふツくり良く出るのでそんなに少な相には御見え遊ばしません。マーガレツトに六吋幅のリボンも御ふさはしければ、白丈長床しき、水も垂れ相な艶々しい桃割にお結髮遊ば

しても却つて若々しくおなり遊ばして又捨て難い美しさが有りました。二重まふちの活々した瞳にも、キユツト引しまつた可愛いゝ花のつぼみの口元にも勝氣の性が彷彿いていらしやいます。ぽんぽん思つたことはなんにも構はず云つてのけるつて風、決してしづむづ何時までも呟いていらしやるやうな事はございません只本當にそのとき一時の限り——淡白な、きり〱したお氣象で氣持ちのいゝ方、私大好き。頭腦のいゝ方で、人が三十



分位かゝつてする諳誦なら。十五分も費さずに樂々と覺えておしまひになる。首席は勿論このかたの占有物。夫にお手蹟が實にお美事、小野流にさら〱と淀みなき御筆勢おてがみ頂く毎にほと〱感に堪へませんわ、つく〲見入つた上げく、さうと、御字をなぞつて見たり致し升のよ。あやかり度いなんて、餘り身の程わすれた欲望かも知れませんけれども、誰だつて、美しい物見れば羨ま

しくおのれを忘れて眞似も仕てみたいのは人情の常でせう。だから無理もないでせう？とまあ申わけを致して置きませうよ自分が可愛いものですからねえ。オホヽヽ、

扨麗子樣の事よ、お點茶やら活花のお嗜みは云はずもがな、和洋とも音樂の造詣淺からず在します――●仄かに承れば。萩咲く頃には。さる館におん輿入れ遊ばさるゝとか！根高き髷に花笄かざし給ひて晴がましう角かくしゝて、地を引く振のおん袖ながう、スラリりと立ちまさん花嫁ぶり…華やかなるべき其夜の御粧ひ！まア什麼に美麗しからう。そつと垣間見したいことと！

神經質な榮子樣面長な輪廓の正しいお人形の樣なお顏立ち、唯、お眉が强く迫つていらしやるで大變神經家らしく見え升。又實際さうなんでございますの。三四人隅に集つて小聲でひそ〳〵おはなしなんか致して居りますでせう、直と御自分のお噂ぢや無いかと思召すのでせうか、ぢろつと疑の眼をお光からせに成るんですよ。さうして、何處とはなしにお瞳が冷つこく凄味があるので誰でも凝つと見詰められると、身がすくむ樣な氣がしてその御光を避けずには居られません。八方美人だなどゝの評判もあつた樣でございましたが、私とはおざが遠く隔つて居りましたから、よくは解りませんわ。席順は中より少し下。

無邪氣な町子樣、お顏もお心持ちもふつくらと優しい方　無邪氣な方。御姉妹は一人もなく、後にも先にもお子樣と云へば町子樣お獨なので母さまはすこしの風にも當てまじと樣に秘藏していらつしつた。世間みずな可愛いゝ箱入娘と評せば當つて居りませう。時々、それは奇拔な質問をして、先生始め一級中をお笑はせに成りますの。でも、ご自分では、圓らな目を見張つてその大笑の浪の中に澄まあして直立していら

つしやるので、いよ〳〵皆が可笑しがるのです。お家で思ふ儘を振る舞つて被入る故か、いくらか我儘の點もお有りでしたけれど、罪の無い方だもんですからね。又べビーちやんがむづかつてるの位に組友も別に氣にも止めずに許して置くんです。歴史に大層趣味をおもち遊ばしましてね教科書以外にいろ〳〵調べて歴史時間には例の獨得の質問ぶりに花を咲かせていらつしやいましたづけ。それからお習字も毎度九十五點以上ばかりでした。御卒業後割烹の稽古にお出



で遊ばしますつて。近い中に腕を振つて。御馳走して下さるとの仰せなんです‥‥だから其日を待つて居りますのよ。最早涎が出やアしないかつて？マア、偉仰しやい、隨分な方ね！オホ！お招ぎ受けたらお土産持つて來て上げ樣と思つたんですけど、止めませう〳〵そんな憎まれ口仰しやるんなら――。

下町趣味の葭子樣別に粹がつてもいらつしやらず、容色とても取り立てゝ云ふ程でもございませんが、何處となく垢拔けて瀟洒のお姿日本橋の實業家のお生

れだけに、知らず識らず下町趣味に培はれて行くのでせう、お袴穿より、むしろ、縞お召の澁いものをスッと拔衣紋に着こなして、根下りの銀杏返しなんかの方が乾度よくお似合ひ遊ばすだらうと思ひますの。長唄に御堪能で、いつぞや校友會の砌、勸進帳をおやり遊ばしたが——冴えた撥音、冴えたみ聲！幾十の人とが森閑と息もつかずに靜まり返つて、其妙なる三筋の糸のひびきにさながら醉はされたかの樣——。今は毎日神妙にお裁縫、お好きな歌舞伎の替り目〲丈は見逃さないつて此間の廻狀で承はりました。ねえ、靴先輕く袴の裾を飜へしてダンスに夢中の昔が在つたとは思ひませんでせう。

一と風變つた晴樣、夢二式の表情豐かな大きい目、猥い付き度い樣なハイカラのスタイル。大抵の人はすつかりチャームされて仕舞ひます。はき〲と句切りのいゝ口のきゝ方をする方だつた。只、人の賞められるのが大嫌で何とか彼とか側から御けなし遊ばす癖がございましたのよ。しかし、此方ばかりと限らず、一體女には斯う云ふ弱點がある樣です、御たがひに戒むべき事ねえ。左樣思召さなくて？

おとなしい若枝樣、居るか居ないか解らない位靜な方、遊時間でも、敎室に殘つて、美しい頬にはらりと落ち懸る後毛を華奢な指先に搔き上げ〲、長い睫毛を伏せて編物に餘念なきは能くお見受け申しました。長い揉上げ、ゑがいたやうな新月の眉、彫むだ樣ないゝお鼻つき、細面の寂しみあるお顏立であつた。漆黑のお髮毛を嫌見のないルイザ卷に遊ばしてゐらしつたつけ——梨花一枝雨をおびた風情とでも申上げませうか。禮式の先生がいつでも、依田さんにおならひなさいと仰しやりましたわ。瘦ぎすの格好のいゝ身體に、きりつと、少し長目にお穿きに成つた袴を輕く捌いて、しづ〲と運歩をお運びになる後姿！誰だつて美し

いと見とれますわ。落ち付いて注意深くなさるのですもの、禮式の百點は無理もございませんね。涙もろいご性質で、友達の事でも我身のやうに心配して下さる優しい懐しい方。抒情文が得手で、先生がよく讀んで聞かせて下さつた物です――御心の通り涙の出るほど優しいお文章――それを伺ふのが樂みで作文の時を待ち抜きましたつけ、けれども真實にお氣の毒で堪らないんですよ。あのね、お卒業後ぢき輕からぬ胸の病にかかり給ふて、唯今は南の濱にお病軀を侘しう養つていらつしやるのでござい升の‥‥哀れ門の柳に秋風の吹かすもがな――何卒々々、此美しい花一輪、散らであれよとのみ、明暮、祈つて居りまする――。切に、切に。

人に接する時の心持

私が始終理想として心掛けて居りますことは、人に接します時に、自分の心が何時でもうらゝかな春のやうに好い心持ちをして居たい、何人に對しても同情的の心を以て接し、對手が一種の温味を感じていかにも心持が好いと思ふやうにして居たいと思ひますそれも故意によそほつて然うするのではなく、自分の心の状態が、いつも自然に然うありたいと云ふ事を理想として願て居るのでございます、併しそれは自分の健康と云ふ事に非常に關係することでありまして、體に少しでも好くない處がありますと、何うしてもさうは参りませね、それから又非常に疲れて居ると、矢張り心地も輕快になれず、他人に向つて一言云はうと思ふ場合にもマア默つて仕舞ひたくなり、笑はうと思つても笑ひたくなくなります。さうすると自分に相對した人は、何う云ふ譯でこの人は默つて居るのであるか、何う云ふ譯であの人は那麼に眞面目な顏をして居るのであるか、何故に莞爾ともしないのであるか、その人の體がどれだけ惡いのか、その人の心がどれだけ疲れて居るのかと云ふやうな同情ある觀察をするよりは、先づその顏が不快な感じさせますから私は何時誰れに遇つても、にこ〱とした顏をして快感を與へ得るやうな心の状態にあることを希望して居ります、殊に子供に接したときには、子供がどのやうに私が好まないことをしても、心地がカラリとして居たい、此點から言つて小さい子供を扱ふ教師や母親の過勞と云ふことは、教育の効果を擧ぐる上に、得策でないと思ひます。(安井哲子女史)

趣味ある室飾

微笑

何といふても霜枯時となると、世間が何となく淋味を増して來て、人の心も兎角に結ぼれがち、臺所に落す薄刃庖刀の音にも、剝き捨てた蕪の皮にも、底の方から寒の逼り來るを語り貌で、庭前の三竿の竹に宿る月の影、目前を昔に見する時雨にも、自づと哀は籠るならひ、まして南に前栽を控へ、ガラス障子立廻した日射り好き座敷には、床は何れも時節柄の寂寞のある一軸に、水仙に寒菊でも挿置ふか、チョット寒牡丹の投入を前にしたなどは、なか／＼に趣のある、地味な粧飾ではあるもの〻、一層趣味を深からしめ樣とするには棚下に盆石の一面は缺かれません、その家の主人は勿論の事、訪ひ來る人々の心に品の好い快感を與へるから、家の內に趣味が溢れて、駘蕩とした和氣が通つてゐる樣になる。內政を主宰さる〻方の心一つで、木枯の吹きすさむだ後の樣にも、春風のそよ吹く花の旦の樣にもなるもので、何も立派に華麗な飾立がしてあつても、只モー金ピカ物の行列と來ては、趣味も調和もあつたものぢやない、西洋人の家へまゐると、チット暖爐の上か、粧棚には、雜然とあらひざらい並べ立て〻あるのを好く見受けますが、その擬似でもあるまいが、近頃は日本人の家庭にも、このあらひざらい主義が見受けられる。これでは味もしやしやりもあつたものでない。その分に應じた範圍內で、それ相應な趣向を凝らして、嫌味のない、臭味のない、華美好は華美のうちに趣味を持ち、澁味好はその意に相應したところの趣を添へるので、家庭のうちに味の生て來るもので、主婦の心意氣も從つて察せられ譯、これは一事が萬事で、趣味のない家庭ほど、殺風景で、一家のうちの人々の心にも調和がないので、他人にまでも厭惡な印象を心に刻む樣になる。

そこで當節向の室內粧飾としても、棚下の飾にはチ

ロツト思付に困るもの、それには淡彩として、品のある盆石が差向面白い趣向の一である。

△日光八景のうち湯湖の瀧

この盆は右手中央より上に寄せ、相應しい岩石を見計ひて据ゑ、その裾には程好く光澤好き玉石を排らべて、粗き黒砂にて地棆を見切つて打つ。その左手には黒砂で斷崖の模樣を描き、皺紋を括る、總て繪畫の山水を描くと同じ心地で、匕と箒の違があるばかり、左右兩岸を定めて仕舞ふと、玉匕に細い白砂を含まして上より下へと、三四段に漲り落る水勢を描き出すのでその中央に小石を置き、瀧の堰かれて落つる風情を見せる。大體の形狀の調つたところで、羽を手にして修正をして、それ〴〵見切を明瞭にし、水勢の勢などもつける。そこで左手の方に紅葉四五片、赤砂で風に舞ふ風情を寫し、霞板に白砂を掬つて、瀧の下手より左にかけ、極薄くサツト撒いて、水煙と見せて描き消すこれで盆の面が一體に緊縮つて來て、調和ひ落附いてくる。この盆の景を繪に畫いて見ては、別段に之といふ程の圖柄でもなく、繪畫の上には屢々見受られるものなれど、盆石にして打つと、平面に見るばかりでなく高低や陰影のあるためでもあらうか、なか〳〵手際好く、寂しき棚下に風情を添へるものです。

△三笠山の雪

この盆は

　三笠山さしてたのめは白雪の
　　ふかき心を神やしるらむ

といふ和歌を題にして打つたもので、この歌の心を盆面に現はしてゐるので、期節物として當期に用ゐられてゐる。元來盆石は古歌とか、古詩とか、物語とかその折々に、その意を採りて、これを描き樂しみたるものが、いろ〳〵の流儀が出來、この道を指南して世を渡る者があるやうになつてからは、その流儀々々の圖に拘泥んで、自ら新しき形を描いて、工夫を凝らす樣な人がなくなつて來たので、古風にいふても、本歌

であるか、實景であるか、又は何か典據さへあるならば、他人の規矩にならはずとも、決して差支へはないはづである。又自分の想像より生み出したものでも、畫家がいろ／＼の形像を描くと一般で、整然と調和つた圖柄でありさへすれば、それで好い譯です。今日まで各流で大切にしてゐる圖面でも、素皆先人の工夫したもので、別に何の變つたところはない。夫故一通この打方さへ練習して仕舞へば、後は各人方の工夫次第で、穴勝に古風な眞似ばかりするにも及ぶまいと思ふのです。近代の思潮に相應したものを打つて見たら面白からうと思ふのです。これはたゞその一例としたまでゝ、本歌とか、題歌のついてゐるのは、數限りなくあるのです。

　そこで三笠山の盆は、左下手に大小二つの石を程好く排列べ、その根に小い玉石を恰好よく粧點つて、その根方を隱し、尙ほ粗い黑砂を匕に掬つて、盆の下手一杯に打込み、右手の方に薄くして、その前を羽を使つて、長汀曲浦といつた工合に、山の根方の曲折を見せて、殘り砂を掃つて仕舞ふ。右上手は三笠山で、中央から雲匕に白砂を含まして、圓く突込んで打ち、左の方から上へ斜に砂を引いて、強く留める。それから又右の方の山を左から右へと打下す、それから羽を使つて、山の恰好を直し、整つたなら山の周圍を綺麗に掃つて仕舞ふ。これで大體の形は揃つたといふもの、先づ大石の蔭に鳥居を据ゑ、白砂を霞板で掬つて、下手の石に濃淡よろしく振り懸け、左上手より右下手へ斜に疎に振り、總て雪降の心持を見せるのが第一、厚くても薄くても面白くないとこが修練と、工夫の要るところなのです。

　先づ此樣な風に打つて行けば、形が整ふもので、當期節の室內裝飾の一としては、これも亦チヨツト趣のあるものです。

さきそめて春めく庭の梅かえに
木枯といふ風吹なゆめ

有　功

日常衛生に對する警告

一　記　者

記者一日小説界の大家某氏を訪ふ、氏は現今文學を以て立つも、以前は醫師出身にして、一通り衛生の智識をも有する人なるが、其の説く衛生意見は、やゝ奇矯なれども、又傾聴するの價値少しとせず、依て並に其の大要を紹介することゝなしたり。

△味ふべき眞理

故國本田獨歩は死ぬ前に看病してゐる私によくこんな事を言ひました。

「肉汁を飲むのは全く厭だ、人間と言ふ者は唯體が生きてゐるためだけに物を食べるのではない。體と共に心持をも養ふ筈のもので、食物の滋養不滋養ばかりを言つて、眼で見た食物の色や形、鼻で嗅いだ香などから一種の味を感ずることを度外視し、唯腐つた血のやうな斯樣肉汁を啜るのは厭なことだ。」飲ませる治子夫人や私に恨みがましく泌々言つたものです。尚はズルホナール、カンフル酸、オピームなどいふ睡眠劑を飲むことを非常に嫌ふて、飲めば確かに效には效くが、こんな白い粉が自分の腹の中で化學作用を起してゐるかと思ふと不安で、厭な氣持で堪らない。出來る事なら罌粟の畑や、芭蕉の花の香を嗅いで笑ふてゐる中に眠りたい。こんな白い固形物で作用されて寢るのは厭だと言ふてゐましたそれで夫人や私は此睡眠劑を服ませるに非常な苦心をしたものです。蓋し獨歩は藥劑をも少し自然的に、即ち藥らしくない藥を服みたがつたのです。これは一面からいふとヤンチヤな獨歩の性格もあるし、亦た彼が文學者小説家であるといふ自家の趣味に惹着け過ぎた意見のやうにも思はれるが、半面に深く味ふて見るべき眞理があると思ひます。

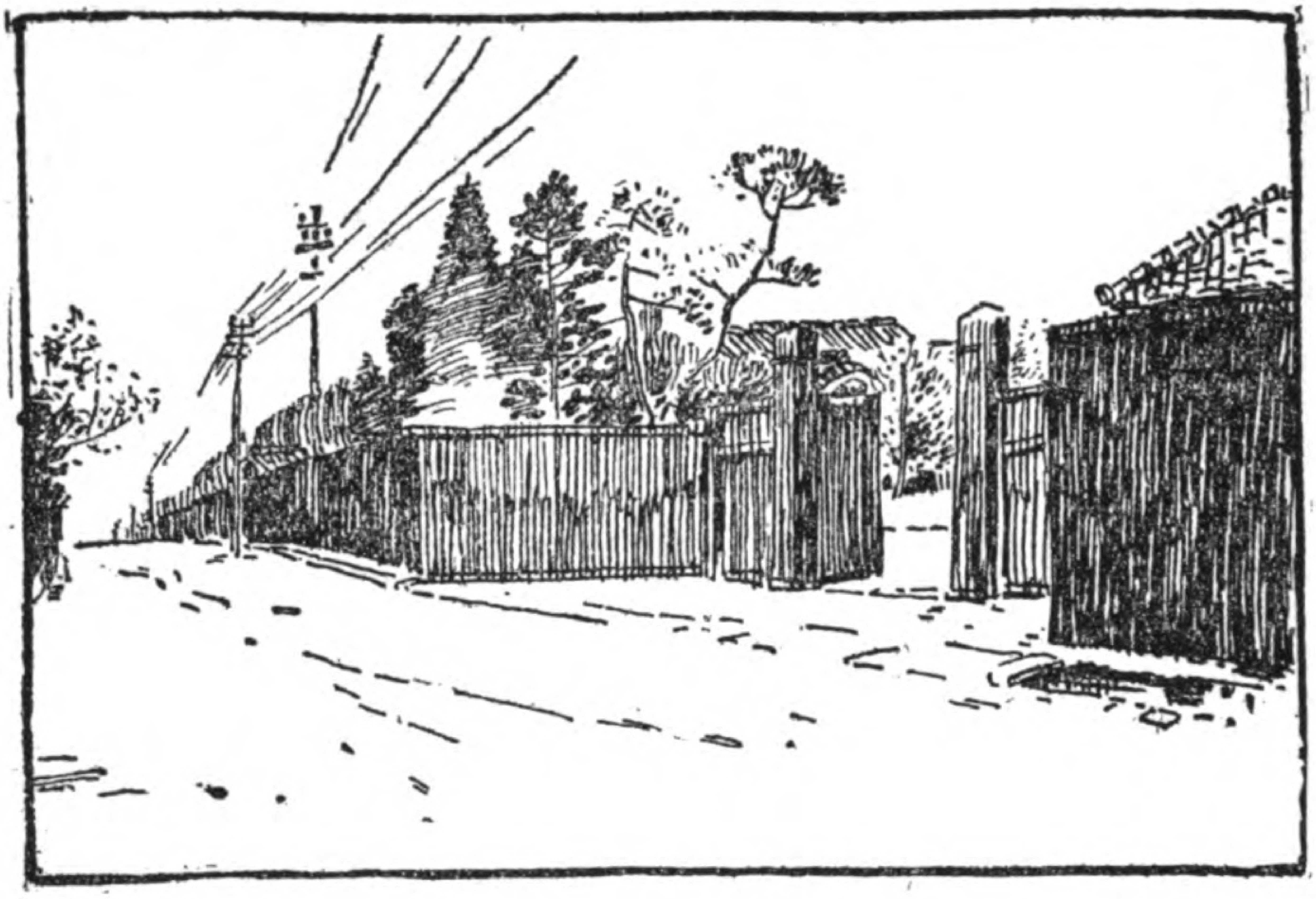
△一知半解の危險

私は今のやうに文學者になる前に、少しばかり醫者の經驗がありますが、其當時のこと、某醫學博士が親

しく私に言つて聞かせた言葉の中に、自分が診察してゐる病家で一等困るのは、○○新聞を愛讀してゐる或る中流の家で、其主婦と言ふのがもと、醫師の娘とかで、聞はゞ一知半解の醫學的智識があるため、熱が少しあると直ぐアンチピリンを、通じが少しあると直ぐヤーラッパ、オレーフ油、舍利鹽を用ひ、頭痛がすると臭剝を服むといふ風で、私の與へる藥を服む時には、病氣が手盛の藥のせいで複雜になつてゐたり、又は私の藥を服用しながら、一方で手盛の藥を用ひるといふ風で、全く始末に了へない。些とやそつと對症療法を識つてゐるのは劍呑だ。と言つてゐました。後、私が醫師となつて仕事をするやうになつてからも、其博士の言葉に幾度となく思ひ當りました。そしてこんなのは一體に中流の家庭に多いやうに思はれます。醫學の根本から知つてゐるのなら可いが、唯半可通な衛生智識で、藥を何にでも効くと信じ、矢鱈に淺薄な衛生思想を振廻して、自分一家の手輕な病氣は自分がやつて除けるなどいふ見識は餘り感心出來ません。元來が表面へ出る、又は患者に感じられる症候だけで、病原が解る筈のものではないので、熱があるから熱病、感冒だと即斷は出來ません。發熱にも消化器とか、呼吸器とかから來る多樣な原因があるのです。

△氣の毒な實例

甚だしいのになると、或小兒の下痢患者の處に行つた時、私は一度下痢劑を用ひて置いて、其後に止め藥を用はうと思ふて、處方箋を渡しました。處が其患者の母と言ふ主婦が、嘗て東京で看護婦生活をした事がある女なので、私の處方箋から直ぐ下痢劑だと知つて、今でさへこれ程に下痢してゐるものを、此上下痢劑をかけてどうするのですと、私の處方を拒んだ事がありました。で若し此主婦の言ふやうに直ぐ硝ビスのやうな止藥を用ひたとすると、既に腹の中で腐敗してゐるものが出る處を失ふて、段々重くなる。ために子供は餘程苦しまねばならぬ事になるのです。此なども半可な智識の弊害であります。



門構のいろいろ(小石川大六天德川公爵邸)

尚ほ實例を上げますと、私の友人で兩親とも健全だが、產まれる子供も〳〵皆弱い、頭ばかり大いのです。で原因を探つて見ると、その妻君が此半解な醫學智識や衛生思想をもつてゐるので、赤兒の時に、可い加減な對症療法を施し、其上痲疹が流行るから外へ出さないとか、膓窒扶斯が流行するから學校へ出さないで置くとか言ふ風で、子供は段々弱くなつて行くのです。今一つの例は私の親戚の某女で、ヒステリーの自分療法をやつてゐるうち、病氣が病氣だけに神經が餘計に亢ぶつて來て病狀を深めた例もあります。凡て皆半可な醫學、衛生思想のために起る事なのです。

△藥劑と患者の感情

勿論近來醫學界は非常に進步して來て、藥なども科學的研究の結果其効能の範圍が、次第に狹くなり、一體が分業的になりました。即ち從前ケレオソートが肺病の特効劑とされてゐたのが、其原質中から胃を傷ふ性分其他の不純分が淘汰されて、今日では其純粹な性

分だけが精製されてゐるなど、其科學的、解析的進步は結構なことながら．人間の體全體に取つてはかうした精製藥はどうかと思はれます。此で思出されるのは獨歩の肉汁觀、睡眠劑に對する意見であります。如何に消化が好い、滋養に富んでゐると言つた處で、患者の肉汁に對する感じや氣持が變であつたら、折角の消化も滋養も奏効が疑はしくなつて來る譯かと思ひます。

△反抗的に起りし自然療法

醫學や、藥學が科學的に分業的に進むのは無論好い事でありますが、全く其科學研究即ち理窟一方によつて療治するのも考物で、近頃外國でも此科學的療法に對して反抗的な療法が起つてゐます。自然療法は即ちそれであつて、藥餌療法に對する光線療法、臟器療法、音樂療法氣分療法等は其自然療に屬するものであります。畢竟藥餌療法が餘り人間を物質的に取扱ひ、又は病氣に對して神經を用ひ過ぎるやうにするので、其に反對し或は其缺點を補ふために出來た療法であると言はれませう。現に私の知つた人で、醫師から肺病の宣告をうけ到底駄目だと匕を投げられたが、當人は死なば死ねと言ふ反抗的意氣込で、醫師に何が解るものかと、其から藥どころか隨分病人にあるまじき不衛生もやりましたが、不思議に肺が固つて命を取止めた人があります。

△二木博士の經驗

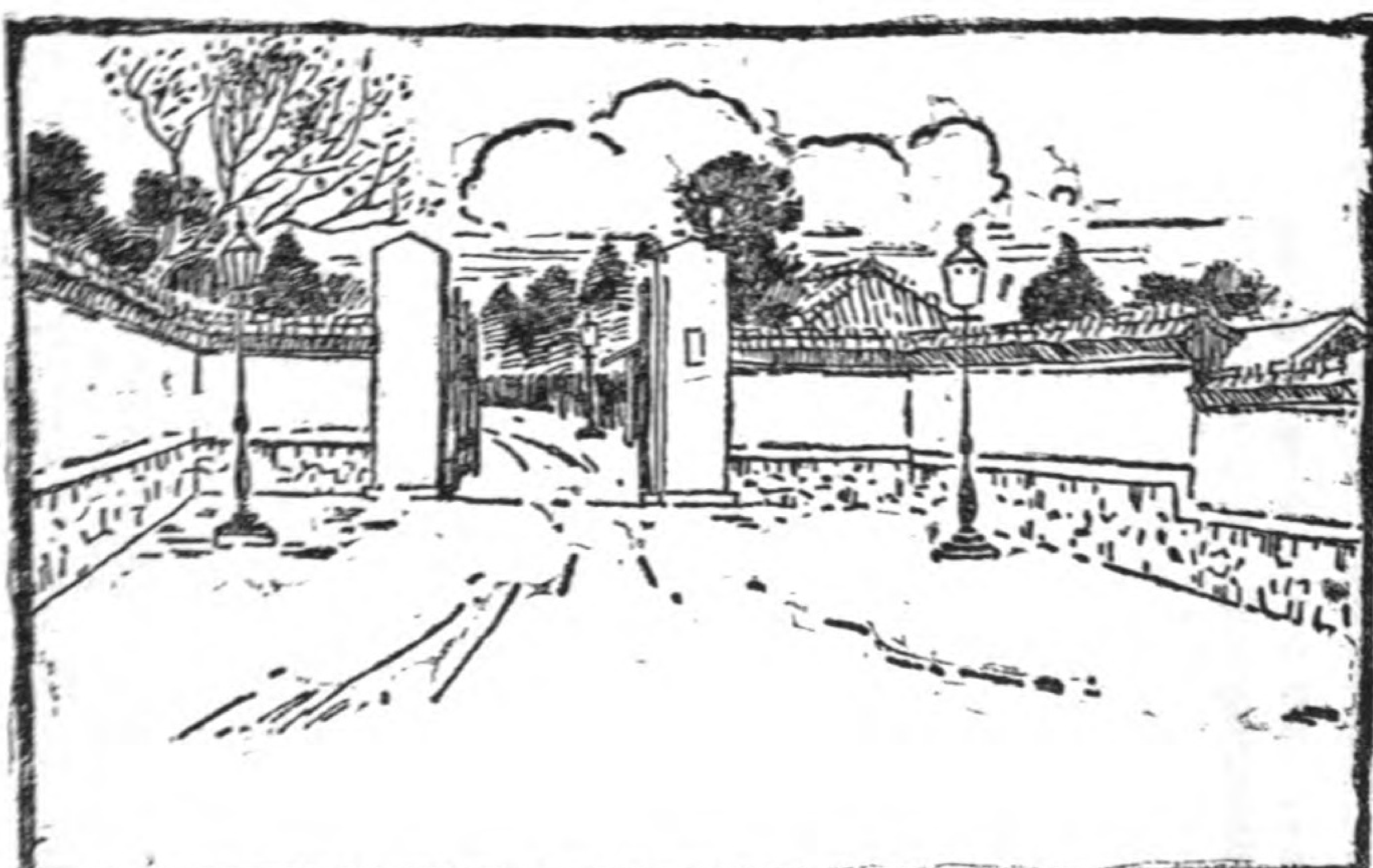
二木博士なども、嘗て仙臺の高等學校にゐる頃、極度な神經衰弱に罹つて、一年間零點の科目が四五科目もあつた程で、醫者も既う不治症だと宣告し、博士自身ももう自分は不具者だと諦めてたが、其から博士は反抗的療法、惡くいへば不攝生を行ふた。即ち眞夜半に起出して野宿する、到底人間の堪へられない程過度な勞働をする、後には寺に入つて窮屈な參禪を續ける、友人達は博士のために杞憂を抱いてゐたが、後間もなく博士の神經衰弱が全く治つたなども其一例でありま

す。

現に私の父なども、肺病に罹つて醫師に匕を投げられましたが、「人間は死に近づいて、瞼を落す間際に、グツと力んで目を見開いて死ぬものかと反抗すれば二年は生きてゐられる。」と言ふ滿らぬながら自分の哲學から、醫師の手を離れて自分で自由な生活をしましたが、其故か醫師や家人が思ふた程になく、割合に長く持ちました。

△文豪シルレルの見解

此等で見ても、科學的療法、又は其科學療法から割出した藥劑等も、病症其物には效能があるのは勿論ですが、人間の體全體に取つては如何かと思はれます。西洋の文豪でシルレルであつたか、醫師を、「彼等は單に男女の獸醫なり。」と言つたかと覺えてゐます。今の醫學が人間を餘り物質視して藥を與へ、精神の方即ち心持や氣分で病氣を治す方法を無視してゐるのを罵倒したものであります。



門構のいろいろ（麴町淺野侯爵邸）

で、二木博士なども、同樣な意見を抱いてゐられて、療治は單に病症の個處だけを重んせず、根本的に治療する事を企てゝ食物を野から取つて來るやうに、藥も餘り精製した白い粉や、黃色な液體でなく、自然に近い物を用ひるやうにするがよい、藥を服むと意識せずに藥を服むやうな方法が講じられたいものだと言はれてゐます。それで博士は神經衰弱患者に對した時など、劈頭から深呼吸をなさいと言はれるのが常です。

△學校智識の應用

要するに私は、斯う言つたからといつて、決して今の主婦となり、家庭を采配して行く婦人に、女學校で學んで科學的衞生思想を退けよといふのではない、唯生可な智識を直ぐ醫師氣取で手前勝手に應用するのは、例の生可な柔道通と同樣に飛んでもない災を招くといふこと、及び强ひて自分の醫學思想、衞生思想を實地にやつて見ようとする程なら、今少し同じ科學的にでも根本に知つた上ですべきこと、或は寧ろ藥餌や手術以外に、間違ひの少なくて而かも效果の根本的な自然療法を適用するやうにしたらばと言ふに過ぎないのです。睡眠不足から來た病氣は眠れば治る譯で、强ひて藥を仰いで餘病を起すやうな危險に近よる必要はありません。



お世辭くらぶ

上原綾子

○○さま!!! ことしの秋も更けましてねえ。

太陽は今し上野の森のかなたに落ちて黄昏の空はさながら鳩羽色のうす絹を張りつめた樣、私は海老色緞子の重いカーテンかゝげ此の窓に立つてはら〳〵こぼるゝ櫻の枯葉や破芭蕉のそよぎをながめるのが夕な〳〵の樂しみなので御座いますわ。そして肌寒の、秋風に双の袂を胸に重ねて、いつも想ひはなつかしき君のおん上へ....。

雲みだれとぶ彼方の空、あゝ○○さま、あなた今頃どうしておいで遊ばすの? もしや....もしや御縁の柱に背を凭せて矢つ張り私のする樣に長い袂を胸に疊んで夕映の名殘でも御覽あそばしてぢやないかしら....と何となくたゞ何となくそんな氣がしてなりません。

塩の香たかき磯の秋、さぞ詩に畫にふさはしいで御座いませうねえ、私の大好きな濱えんどうや濱ひるがほ、今頃はどんな姿にかはりましたらう....。○○さま、都の、秋も寂しいもので御座いますねえ、見上ぐる木々の梢からは干からびた樣な黄ばんだ葉が舞ひ落ちて、ヒヨロ長く伸びたコスモスの花が、折からの夕風にゆれるのも一しほ心細うございますわ、あゝほんとうに淋しいのねえ。

御風邪めした樣ですつて其後の御樣子は如何でゐらつしやいますか、また御咳嗽でも御出になりますの? 御案じ申上げて居りますことよ、大學の運動會の折、私が頭が痛いからと言つて永いこと池のまはりを一緒に歩いていたゞきましたわねえ、もしやあの時の寒さが御障り遊ばしたのぢや無いでせうか。

それにあの晩だけは無理にもお泊めすればよろしかつたのに、遂おほせのまゝに夜汽車なんかで御歸へし申したのが私の落度で御座いましたのよ、どうせ御體にはあはずとも、せめては私の毛織の方のコートなりと差上げたら....と後に到つて漸つと心づきました樣な次第、どうぞ御許しあそばして頂戴、嫂も何申譯がないからくれ〴〵も御詫言申上げてくれる樣にと、しきりに言つて居りますの、宥して下さいますわねえ、○○さま!!!

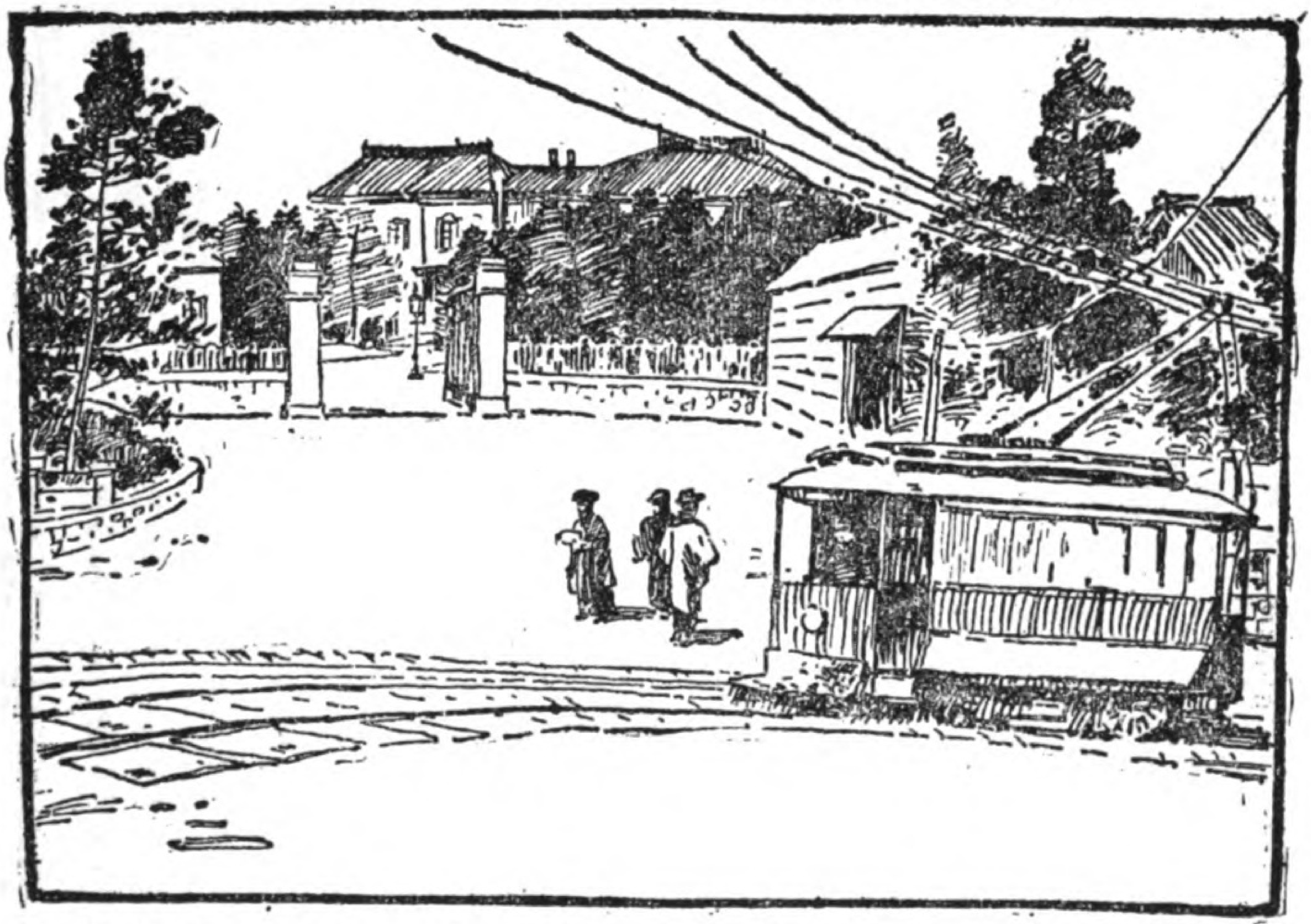
あゝ私遂御禮を申しおくれましたが昨日は何よりの好物を澤山に恐入りました、きめこまやかな○○名物、殊には○○樣が御心づくしの御贈り物、全く味が格別で御座いますわ、昨夕は早速きんとんに化けて晩餐の卓上を賑はしてくれましたのよ、家内一同この遠來の君を大

歡迎、そして姉つてば私のかほを見ていやに二ヤ〳〵わらひ乍ら

「綾さんは先月△△へゐらしつた時二晩泊めていたゞいたのね、あの時、夜中にきつとおさつ、おさつなんて寢言でもおつしやつたのにちがひ無いことよ、ですから○○さんがお氣を利かして送つて下すつたのですよ」なんて憎らしいことを申しますの。

「はゞかり樣ですけれど○○さまと御一緒の時は夜中だつて何だつて眠るひまなんか有りませんわ、一寸の間でも惜しくつて……」と私もまけ惜しみを言ひました樣なものゝ實際のところ何だか少々怪しいものね、自分でもたしかに言つたことは決して無いとも斷言はでき兼ねる樣なしまつ、オホヽヽヽ人の想ひも斯う好い具合に通じる樣なら大きに都合がよろしいぢや御座いませんかホヽヽ

門がまへのいろいろ　（小石川安藤坂上三井家）



けふの御晝には御飯に炊き込んでもらひ、晩には茶巾にいたしました

いくら「えも知れぬなつかしきものの香り私をつゝみに參りし樣おぼえ候しが」なんてKさんがおつしやつても陰膳だけでは折角の珍味も其の甲斐が御座いませんからねえ。重ねて御禮申上げます、あら、いゝえ、決しておあとを催促いたす譯では御座いませんから……。

それは扨置き、千代さまあなた此頃少しおやせ遊ばした樣ね、ホラ先日も私がぢーつと千代さまの御顏に見入つてましたら

「どうなすつて綾さん、白粉でもムラになつて？」とあなたおつしやいましたねえ、「いゝえ、さうぢやないの……、もう六時間後にはまた御別れするのね」つて私が申したのもまだ御忘れでは御座いますまい？　實はね——、實はあの時は私、こゝ

るもち御肉のこけた御頬のあたりに心付いて、何だか胸が一ぱいになつてしまひましたのよ。〇〇さま、もしや何か御心配事でも遊ばしてゐらつしやるのでは御座いませんの？　ね、どうぞ妾にばかりは何事も包まず御打明けあそばして下さらなくつて？

二人はとこしへに變へじかはらじ永劫の誓みよとかたく結ひめぐらした友垣では御座いませんか、どうぞ私を信用して頂戴。

十一月の女學世界例のとほり賑はしいのね、はら〱とかへすページの數々、けれども君のおん名はとさがし終つて遂に見出し得なかつた私の失望は‥‥。いえ、私ひとりぢや御座いません、數十萬の〇〇樣崇拜者たちの落膽は‥‥。

夜毎のそらにまたゝく星の、いづるなつかしき光の中に、わけて燦たる宵の明星、それにも似たる君のおん筆、あゝ私は――おろかしき私は人樣の御上が實に羨しう存じられます。

先夜もね帝國ホテルで一寸會が有つて娘につれられて參りましたのよ、そしたらあの御存じでせう佐竹子爵の若夫人――室町家の末の姫君――がわざ〱御席を立つて私の側までゐらしつて

「妾さま今日は大變な御願ひが御座いますが是非おきゝすみ遊ばして頂戴ね」つて何だかたゞならぬ雲の脚、私何かしらとびつくり致しましたけれども

「まあ何で御座いませうその御願とおつしやるのは‥‥。私ね、御立と氷の天ぷらとばかりは、どうしても出來ませんけれど其他のことで私の叶ふことでさへ御座いましたら‥‥」と申上げましたらまあ御返辭は斯うなので御座います、よう〱大きなお眼をあけて御らんあそばせよ。

「あの有名な〇〇子樣とあなたは御仲好でゐらつしやいますつてね、お羨しう存じますわ、御願ひと申しますのはね、妾さま、もしも今度〇〇さまが御邸へおたづねで御座いましたらどうぞちよつと一目なりと、私にのぞかして頂だいな、御電話おかけ下さればすぐ自動車でうかゞひますから」つて大眞面目でおつしやるので御座いますの、在學時代に同級でお心易くいたして居た娘は遠慮なしに

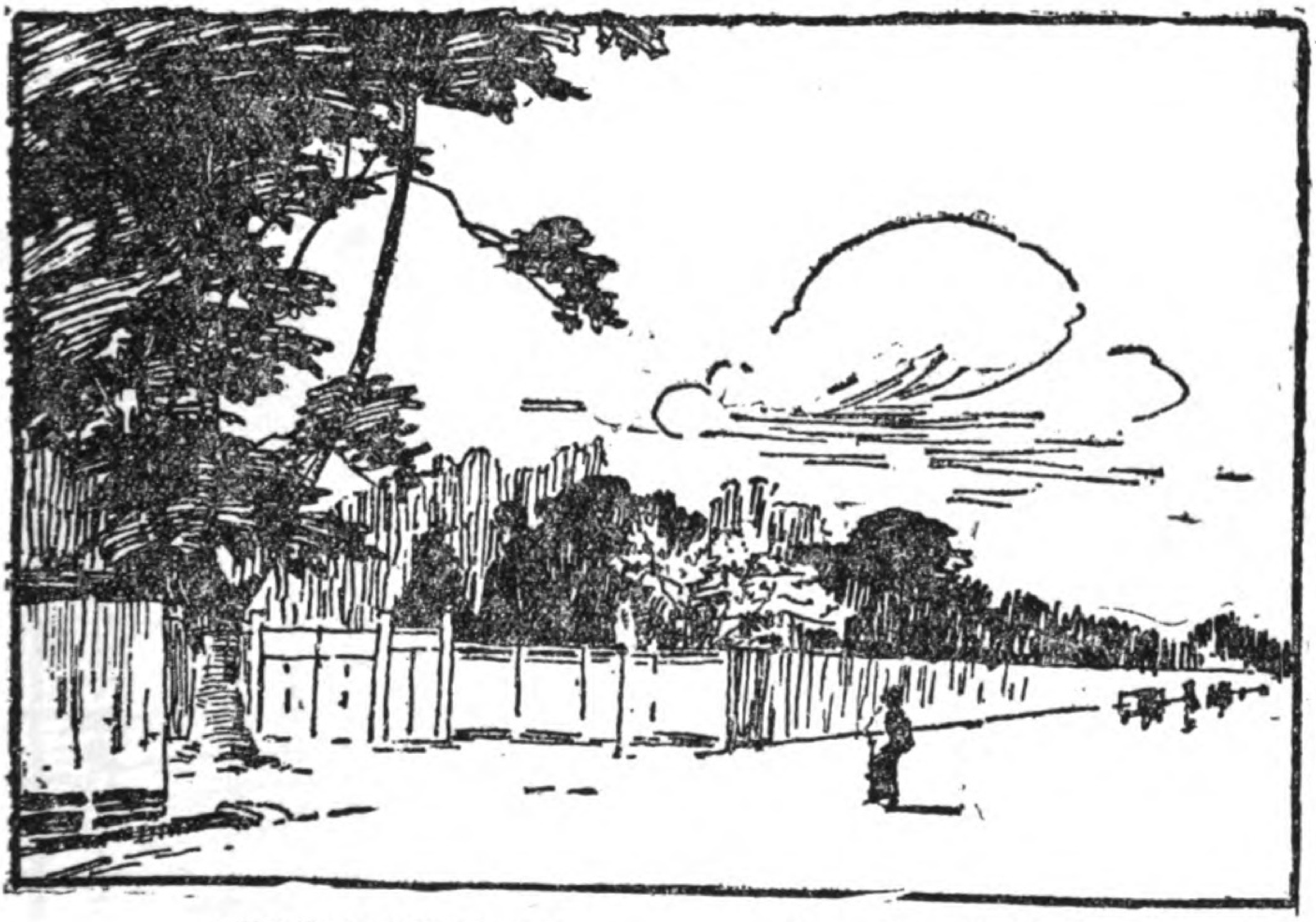
「あら麗子さんおやめ遊ばせよ、垣間見なんてレデイーの遊ばすことでは御座いませんことよ大きに品位にかゝはりますわ」なんて申しますとね

「では御小間使のつもりで御茶でも運ばしていたゞきたいわ、そして天才美人をしみ〲御側で御見上げいたしたいので御座いますわ」つて大本氣。

「そんな御美しい御小間使が御茶碗さゝげて出てゐらしつたら御主人役の私はまあ何處の穴へ入ればよろしう御座いませうかしら」つて其の場は笑つておわかれいたしましたが、ほんとうに此の頃千代さまがお越し下さる折には麗子夫人をお招き申して置いても御差支は御座いますまいね？

いえ、小間使ぢやこさいませんよ、そりや本式に應接室で御紹介申

し上げますから。
　全く何處へ參つても〇〇さまの御評判は素ばらしいものよ、小山内薫氏をこやまないくんまんと讀んだり大塚なんちよし（楠緒子）つて人は赤門出身でせうか早稲田でせうのなんて奇拔な質問を出す樣な人達でさへも〇〇さまと申せば「あゝあの△△の天才美人」とちやアんと先刻御承知なので御座いますもの、その〇〇樣に友の一人とかぞへて頂いて居る私はほんとうに幸福者でございますわ、この私にとつて何よりも何よりも大きな誇で御座いますわ、きつとよ、〇〇さま!!! いつ／＼までも……れ。
　〇〇さま、また早く御上京あそばせな、逝く秋の果敢ない淋しい想ひを、私はそれを樂しみにまぎらして居りますのよ、いたづらに流れゆく秋の日を、ことしばかりは泪の



門構のいろいろ　（王子西ヶ原古川家別邸）

眼に見返らないのもそれを待つゆゑなのでございますわ、父も母も年の内は歸京つては參りませずほんとうに此頃の宅は淋しいので御座います今朝食卓に向ひました時、例の多喜子までが
「また△△のお姉さまとかるたして遊びたいことね」なんて申して居りましたぐらゐ、かるたと云へばもう追々加留多の季節が近きましたの、御手並あざやかな一騎打、私など迚も／＼鋭い御太刀を受けとめることは叶ひませんけれど伯父や從兄たちの中には横好き連が澤山居りますから是非揉んでおやり下さいましな、さも無いことには獨り天狗の御面々どこまで增長いたすか知れませんもの。
　あの鼻を〇〇さまのオパール輝く細い御指先でポキリ折つていたゞいたら、まあどんなに胸がせい／＼い

たしませう今から樂しみで御座いますわ。

今宵は大層冷えますこと、簾を捲いて窓に立てば、銀河聲無く西に流れて公孫樹の梢がサラ〳〵鳴る。身にしみわたる秋の夜風、あゝ明日は、あのかぐや姫の舞扇の様な黄金色の落葉に歌染めて君ます空へ散らしませう。

おゝ今鳴るは上野の鐘、落葉をさそふ上野の鐘、かくてことしの秋も逝きますのねえ。

さらば君、おん身御いとひあそばせよ。

霜月すゑ　綾より

○○さまへ

奥樣の利器

暗黒な社會に處して、美しい家庭を保たうとするのは、奥樣の至難事業でございましせうけれども、決して失望なさるには及びません。私は不肖ながら是れまで隨分婦人方から御相談を受けましたが、良人の愛を失はれた奥樣は大抵いくらかの御油斷があつたやうに思はれます。例へば容貌を頼みにして家事や良人の世話を怠つたとか、學問や技藝に精力を集注して良人の職業に同情を持たなかつたとか、家政にかけては寸分の拔目がなくつても、良人を喜ばせる考へがなかつたとか、この外いろ〳〵な方面に禍の種があらうかと存じます。隨分立派な家の奥さんで新聞も讀まぬと云ふやうな方もございますが、あれでは全然良人の話し相手にならないから、さぞ張り合ひがなからうと存じます。先づ一通り世の中の事を知り、男性特に良人の性質を深く了解して、事毎に同情を以て過するより外道はありませんでせう。それから壯健は大切な利器なので、いくら利發でも、毎日青い顔ばかりして居てはどの位良人に不愉快を感ぜしめるか知れません。壯健であつれば老いても意氣が壯んですから、良人は自然引き付けられます。身體と心の養ひに注意深い婦人に幸福の多いことは、多數の婦人の身の上に見て確かだと申して宜しいでせう。（小崎千代子夫人）

夜長のつれぐに

みそつくし

記者曰く、この文は大分亂暴なものだ、殊に千代子さんに關する噂なんか、大概惡口で持切だ、まあ人情からいふと、こんなものは沒書にして仕舞たいのだ、けれどれ、褒める人のばかり出して譏る人のを出さないのは公平な所置ぢやないのみならず、本當をいふと惡口する人が多ければ多いだけそれ丈け千代子さんの爲になるのであるから、どうぞ皆さん續々と惡口を仰つて下さい、又千代子さんとても、こんな事位で閉口する樣な、そんなお姫さまでもありますまいから。

朝日障子にあたりて、蜻蛉の影暖かなり。子規の文其まゝのよい時候になりました事。でももう道端の、野菊もさかりすぎて、何かといふうちに、また春ですわね。いやですわ。また一つ年をとるの……かう上に、廿といふ字がつくのが、私なさけない樣ないつまでも、此十の字でわかれともない。でももう、二月立てはこの十代にも永久に別れなければならないと仰るの。えゝ、それや、いやでも應でもお別れよ。さうですとも、けれど、いられない事はありません。御覽遊ばせ、現代になくてならない樣に、ときめき給ふ、其の蓮香樣とやら、內藤千代子樣とやらを……去年も十八、ことしも十八、いつまで立つても、お年を御とり遊さないぢやありませんか、さうしていつになつても、華やかな、少女のほこりに醉はされて、いつまでも〳〵大びらに御自慢げにお出になるぢやありませんか。私、きつと皆さんかうだと思ひますわ。

私達のクラスの方が二三人集まつてもすぐ御噂致しましたつけ。冬になりて外は白雪皚々、電車の冷たいレールをきしる音が凍つた世界に響き渡る時など。

勢のよい、二年三年の人達は、運動場に飛び出して、雪ぶつけに夢中なんでせう。其頃、圖書室といふよりは、暖室といつてもよい。圖書閱覽會に、イングリッシュの先生の樣でもない、いつだつたか頸の周圍に、腫物が出來て、カラーが出來ないので、黒紋付の木綿の羽織に小倉の袴で入らしたり、洋服の時もいつもお醫者樣のもつ樣な手提げのカバンを持つて入らつしやいますの。全くかう申しちや失禮ですが田舍の一寸よい藪位のスタイルでしたわ。先生其の中に何がはいつて居りますの、と伺ひましたら、オホ……御辨當ですつて。皆して大笑ひ致しましたつけ。

其先生がどん〳〵どんどん〳〵ストーブも割れよと許り、石炭をなげ込むので、眞赤に燃もやけて、何だか怖い樣ですの。室中熱くなつて、きたともう熱せられた、空氣は膨脹して天井でつかへているんでせう。

正午の放課の鐘が鳴ると、待ちかれた人達は、恰も冷たい空氣の流れ込む樣に、此の部屋に流れ込むのでした。本をみるとは名許り、多くあたりに、否ストーブ會議にでした。それやもう、一番年寄りの五年生な

んですもの、だれが雪の中をかけまはるものですか。勿論私なんか熱心な讀書家でしたもの、今だつてさうよ。曰くI曰くS曰くTなんてもう、毎日の御常連なんです。よみかけの本をとられない様に、はいるとすぐ、一人は國文學全史の藤岡博士に夢中だし、一人は芳賀博士の月雪花を引ぱり出す。源氏を引くりかへしたり、詩集を出して居たり、ことしの五年もやつてるんでせうね。一遍某ドクトルの先生に、「雑誌を見に來る人は出て下さい」と言はれましたつけ。いゝ氣味雑誌を引くり返し、令嬢鏡の、品評に餘念のない人達なんか、この勉強家の私達にいゝ迷惑なので、されどそんな事いつても端から「一寸貴女内藤千代子どう思ふの」と話かけられるとつい平安朝史から目もそれて、「さうね」と來るんですもの。

「確にこれや、假面を被つてる男子だと思ふの」「それにしちや、あんまりよく女の事を知りすぎてるぢやありませんか」「といつてまた實際十七の少女なら、よくもあんなに筆がまはるからつて呆れかへるわ」隨分火の手は盛んになる。

「皆さん實際、千代子はいるんですとさ。この間内の從兄が、鵠沼にいつてみるといひましたよ。よく出て來る妹れ、本名はおかめちやんといつて、それは〳〵可愛方なのだつて。それから煙草屋の看板娘のお信ちやんも、確にそれは、鵠沼一の美人だつて、いつてよ。」と又一人が口を出す。「まあさう。きつと千代子の人氣は今素敵だから、避暑客や、遊來客や、澤山ゆくでせう。鵠沼の名物娘で、こゝの土地の今に金箱と崇められてよ。」と仔細らしく首をひねつて、いふKさんのをかしさ、皆どつと笑ふ。「否私が聞いたのは、千代さんの兄樣とか、從兄とか、のらくら學校の生徒で……」「あらのらくら學校て何？」「貴女知らないの、まあ野暮ね、早稲田ぢやありませんか、其文科なんですとさ、でね、千代さんの名にして投書するのだといふのよ。だから御覧なさい、ハーモニカにあつたのなんか、「幸夫さん覺えてろ」だの「ざまみろ」、だの何といふ亂暴な、高島田の令孃の、あられもない、お柏餅の餡粉を顔になげつけたり、うそ〳〵確に男子だわ」とSさんも力む。「オホ……千代子さん、をかしいでせう、ほんとに餘計なお世話よ。確にしろ、ほんとにしろ、誌上の千代子は千代子でおけばよいぢやありませんかね。ストーブ會議の議論は、今日の議題、内藤千代子論で盛んでした。眞面目に讀んでた人達も、一人より二人より、ぐるりと周圍をとりまく皆の顔は、上氣して美しい櫻色にそめられ、リボンが幽かに、ゆれている。「どんな人だか見てやりたい」「それぢや一つ來年は、鵠沼にお出かけ遊したらどう？」、「でも實際よくもあゝ、筆がすべるのね、よく見れば、ありふれた材料をモデルにして、あゝも。私感心してしまふのよ」とグレーの墓畔吟を一心に寫してたペンシルをおいて、私がいふと、「おゝいやだ、あんなの私大嫌だわ」「もしあの文がほんとだとすると、餘程お母樣もあまいんだ、聞けばお針にいつても、裁縫はそつちのけ、文許り書いてるつて」「見る度に腹が立つ。あの人のおかげで幾人の人がチヤームされて、迷されたかしれやしない」「お上手で羨

ましいとか、何とかいふ人はきつと、あゝいふ風に、自分もどしく男と交際したい人がないとも限らない」「オホ……さういふ貴女が思召すのぢやないの」

「あらいやだ……あなたは千代子さんに似ててよ」「それは難有う。そうですれまけない處や、短氣なところや、口惡は似てるやうだけれど、私憚んながら、いや、悲しい事には、男の友達は一人もいないの！あの方みたいに優しい詩的な、手紙をよこしてくれる。それこそ二本線の方でも、ペンの學校の人でもいゝから一人でもあるといゝのれ。全く淋しいわ。「樣々に思ひ餘りて、兄君の、一人はほしき此夕哉」、同情



して頂戴、審弊な兩親や、少さな妹や弟話し相手になりやしないの、皆さんが兄樣とか、從兄とかいふと、癪よ」「誰か、私の氣にあふ樣な、やさしい話し相手の人を世話して頂戴オホ……」とすまして横をむいておりました。「まあお世話しませうか貴女の未來の…………」ドメンとあいた扉の響、皆の首は一緒に口入にむきました、先生がはいつてらしたら急に議論も水をかけた樣、こそこそと皆ストーブの傍を離れてしまひました。きつとかういふ、噂は至る所に、あるんだらうと思ひます。さぞれ香さま、くしやみを續け樣に遊したでせう。此時には、お優しいお母樣が「千

代や、風を引きやしないの」と御心配なさりやしなかつて。でもれ、千代子さん、私ひとつ「嫌な」どなつて上げたい事は、嬢ちやまとか、嬢様とかいふのよ、貴女にも似合はない、何だか悪あつたらしい、云ひ方ぢやありませんか、はあさやまなんて、おゝいや、胸が悪くなるわ。之許りはお止め遊ばせ。もうすぐに、貴女のお好きなお正月も参りますわれ。

歌留多……お正月日記……細谷先生と連絡されて、あの先生も貴女にあつぢや、兜をぬいで降参でせう。まあ、何でもいゝわ、千代子さん、處女のほこりを、出來る丈け發揮しておゝき遊ばせ、今のうちが花よ、なんて、何だか、變笑い、これでも今年女学校を卒業した、鬼も十八の娘なのよ。オホ……むしの聲も細くなりました事、鵠沼の秋や如何に、松葉かきよせたく烟はすみ渡つた空高くゆくのでせうれあゝ、かくして秋もゆくのでせうか。はかないものね。

談話の心掛け

日本では一般に「もの云へば唇寒し秋の風」の觀念が廣く且つ深く人々の頭腦を支配して居ります。就中婦人の方は絶對に何事に就いても決して語らぬと初めつから定めてゐらつしやる方も尠くない樣に思ひます。明治になりまして此方、餘程萬事進歩して來たのに、尙ほ斯んな事が實際に御座いますのです。

勿論婦人が餘りに喋々するのは善くありませんが、今日の良妻賢母たる人達が一口二口の受答が出來ないでも困るぢやありませんか。又た「物云へば唇寒し」は古今の眞理ではありませうが、此れとても程度の問題では無からうかと存じます。

人は色々善い事をして社會に出來る丈けの貢獻をせねばなりませんと共に、一方に於いては出來る丈け幸福に此の世を暮さねばなりません。幸福に暮す事は色々ありませうが、交際は確に其の一であります。私は交際は天より特に人間に賦與したる賜物と信じて居ります。併し交際に於ける幸福は談話の如何に依り互に意思を疏通しけなれば好結果を得る事はできません。夫れに就ても談話の心掛けの人生の幸福と大關係ある事がよく判ります。假令ば婦人が互に訪問しても、たゞ茶菓を出す丈けで更に談話に興味がなければ、互に忙しき時間を費す丈けの甲斐がありません。互に意中を陳べ、意思を交換し、又世間の出來事をも知り、見聞を廣め、心を大きくし、考へを新くしてこそ興味もあり利益をも受けるのであります。（鳩山博士夫人）

交友より得たる様々の教訓

櫻子

綴れさせてふ蟲の音に勵まされては、自然に針の運びもはかどりてもう飾り紐附ける計り、今年五つの華子が七五三のお祝ひにと、態々母様から小包で送て下さつた目覺むる樣な友染縮緬、猩紅色地に白、鶸、緑とり〲の亂菊の大模樣、間々を匹田であしらつて振るひつきたき樣な珍柄、肝腎の華子より私が先づ見惚れて了つて、衣服に仕樣か？被布にし樣か？散々思ひ煩つた上、矢張りお被布の方が晴々しくて可いと決定すると直ぐに裁つて縫ひ初めたはお晝少し前。

「甚だ現金だね」

つて先刻も學校からお戻りの良人に笑はれたり、冷やかされたり、だつて早く之れを着た華子の可愛い姿が見度いんですもの、而して思ひは同じ母様の許へ直ぐに寫眞して送つて上げましやう。

飾り紐は何麼色が似合ふかしら？夜では色の配合が判然しないから、殘り惜しいけれど明朝の事にし樣、指貫をカチリと針箱に投り込んで時計を見ると九時が少し過ぎ、今夜は開峽樓に橋本先生の送別會があるので、六時頃良人はお出ましになつた。お裁縫に熱中して居た時は夢中だつたけれど、田舎も同じ場末の寂しさ、逝く秋を惜しみ顔に啼き交はす蟲の聲のみ哀れに聞えて、まあ何といふ靜けさだらう！。

人戀ひしさに衝と立つて茶の間を開けると、之れはしたり、短艇漕ぎで有名な清やは、雜巾も針箱も投り出した儘、盛んに沈沒しかけて居る、道理で先刻から咳一つ聞えないと思つた、晝間の疲れに若い身空では無理もない、良人がお歸りまでにはまだ間がある、今少し斯うして寢かして置いてやりませう、更け行く夜寒むに風邪ひいてはと、被て居た銘仙の羽織を脱いで後ろから秘つと掛けてやる、今に目が覺めたらオホオホ〱〱嘸驚くだらう。

忽ち靜寂の境を破つて、何處からか尺八の音が聞えて來る、一高一低、曲は判然分からないけれど、餘韻嫋々として身も心も引き附けられる樣、思はず立ち上つて縁の雨戸を一枚靜かに開けると、さつと差し込む月の光、おゝ、さう〳〵、後のお月見が明後日だつて今朝八百玉が臺所で滑やに話して居たつけ。爽やかな風がさや〳〵と稻田の上を吹き渡つて來て私の鬢の後毛をなぶる、そこはかとなく露が煙むつてしつとりと、野も山も家も森も薄雲に包まれた樣、あれ雲がと思ふと又さつと蒼く映す月の影、尺八の音はいつしか歇んだ。

つひ二三日前、帝大の文科に居る一郎さんから、自筆の美くしい繪はがきに、

萩桔梗花野の露路踏みわけて
　月の宮居に歌拾ひてん、

月にあこがれて何處までも何處までも行きたい
そして露となつて消えたいね、姉樣はゝ。

なんて、浪漫的な事書いてお寄こしだつたけれど、全く此麼夜には露となつて消えても見たい、あの月の御國にさまよふ事が出來たら、どんなに嬉しいだらう。

恍惚と袂を抱いて、凝つと月を見入つてると、何だかもう胸が一杯になつて、心はいつしか故山に走る、噫、遊子の心誰れか知る？かゝる時、かゝる夜、思へば遠し故郷の空、あゝ我が父母如何に在す、と無心で歌つた學生時代がそゞろ偲ばれて、友なつかしい、故郷戀ひしい、わけても御年老い給へし父樣母樣、今頃は何して被居るでせうね……、千里眼の千鶴子さんではないけれど、歴々と眼に浮ぶ。

父樣は乾度、お縁先近く端居して、月光を浴びながら、獨酌の杯を擧げて、作詩に熱中して被居るに違ひないわ、あのお床の間には、矢張り中村敬字先生の、秋風の辭の軸が掛かつてるかしらゝ。

秋風颯々起、秋葉飄々飛。
秋蟲聲不息、秋月光入幃。
燈前一卷書、夜永味轉永。
此身非塵界、我心愛消浮。

私は此時が大好きで、今時分よく月にうそぶいては微吟したものだつた、私の詩吟……、一寸有名なのよ、聞かせて頂戴つて？、否やですよ、澤山コンミツシヨンを頂かなくてはね、オホヽヽヽヽヽヽ。

母様!!、私は母様の事を思ふと、もう〳〵たまらなくなり升、二十六にもなつて何といふ意氣地の無いつてお笑ひになるかも知れないけれど、天にも地にも懸換のない一人娘の私を、思ひ切つて山河數百里の遠くに離して置かなくてはならぬ運命……まあ運命でせうね……に甘んじて諦きらめて被居るお心が、哀れにもお氣の毒ですわ、母と娘、男親とは又格別の情愛があり升もの、あゝ母様!!、電燈華やかに輝くお部屋で、少し脊中の猫脊にして、お好きな釋伽八相記でも、讀み耽けつてお出で遊ばすかしら？。

日一日、冷寒肌に迫り行く今日此頃、夫れは松も春やもお附き申しては居るけれど、何としたつて親身でなくてはね……、噫お側に居て思ふ樣奉仕する事が出來たら……、

此間もお便の末に、

「私達は年はとつても丈夫だから案じない樣に、
お前さんは日頃から餘りすこやかではない身、
氣を附けなくては可けませんよ」

だつて、勿體ない、今更ながらたとへ樣もない親の慈悲、私は思はずお手紙を顔にあてゝ泣いてしまつたつけ。

夫れにしても、故郷に居た時は何といふ淺墓な心だつたらう……、お友達の靜江さん、道代さん、皆それぞれにお嫁に居らして、樂しさうに新世帶をお持ちになつてるのが、もう〳〵羨しくて、幼ない時から居附きの家よりも、自分の思ふ儘に切り廻す事の出來る家庭を作つて見度いと、何麼に良人の卒業を待ち焦ねたらう、二歳の道夫が母とは名ばかり、比較的順境に育つて、娘氣の失せない私は、浮世の波風の荒い事など、人に聞いたり、書物で見たりして、多少會得して居る積りでも、どうして實際が分からう……、だから、却つて其渦中に捲き込まれるのが又樂しみな樣な氣が

して……、所謂、實社會を知らぬ空想であつた。

良人が學校を卒業したのは、三十九年の三月、囚はれの小羊が、檻を飛び出した樣な心地で、欣々と、良人に伴はれ、母樣に送られて、都から程遠からぬ、任地に赴むいたは、春や昔のもう五年前。

「一通りは世帶道具も揃つた樣だし、いつまで居てもきりがない、私はもう歸國り升」

つて、母樣がおつしやつた時、私はどんなに心細かつたか、夫れよりも、ステーションまでお見送りした時、わけもなく胸が迫つて、思はずせぐり來る涙を、秘つと手巾で拭いて居たのを、車掌に見つけられて、眞實に極りが惡かつたつけ。

又なき者に愛して下さる、良人の心を身一つに締めて私は甚だ幸福だつた、家庭の女王として、思ふ樣模範的にやつて行かうと、期待して居た新家庭、夫れは成程、樂しかつたが、又、苦い經驗も多々あつた、

來客の應接、人を外らさぬまでの愛嬌、出入の商人との懸引、一に皆主婦の頭に懸かつて來る、尤も心を痛めたは月々の經濟、如何しても足らはぬ勝ちになつて、全く泣いても追付かない樣な時もあつた、實家に居れば、

「母樣、之れはどうしませうね」

などゝ、お縋り申す事も出來るけれど、何處を見ても他人ばかりの間に立つて、今更そんな心弱い事も云つて居られない。

主婦としての資格は十分と、密かに誇つて居た私も、いざとなると全で零だつた、今考へても自分ながら冷汗の流れるやうな事が澤山あるんだもの、人目にもさぞ可笑かつたでせう、

「お姫樣育ちの奥樣」

つて影口おつしやつた方もあつたとやら。

「お姫樣育ちの奥樣」……私は此噂を耳にした時、腹は立たなかつたけれど、殘念だつた。

私はまだ修養が積まぬ、經驗が淺い、一人娘の氣隨氣儘に、他人の中と云つては、いつぞや伯父樣の御法事に母樣の代理として、五里許り離れた片田舍へ行つ

て、二夜宿まつたが後にも先にもたつた一度、自分で満足して誇つて居た事も、考へれば徒らに机上の空論であつたものを。

今まで空々に看過して來た日常の些事も深く味ぢはへば無限の教訓が含まれて居るではないか、氣が注かなかつた、不注意だつたと、幾分悟り得た私は、見るもの、聴くもの、善きにつけ、悪しきに附け、一々採つて自分の修養に資する事を惜しまなかつた、其甲斐あつてか、今ではどうやら年の効もあるかも知れないけれど、押しも押されもせぬ一かどの主婦となり得た積り……オホ〳〵〳〵



オホ多少、自惚れかも知れないけれど……、自惚れと何とかは誰れにでもあるつて、口の悪い、何誰？其麽事おつしやるのは。

良人の職務上種々の會合にも出なくてはならぬ私は、自然多くの奥様方とも御交際する、年配もずつと多い、十分に世慣れた方達の中に交じつて、ずゐぶん氣兼ねもしました、夫れも

修養の一つと思へば辛らくもない、中にはほんとに趣味の低くい、人格の下劣なお話しにならない樣な方も無いではないが、私は快く御交際して居る、皆樣は私を評して交際家だつておつしやるとか。

交際家なんて、そんな事は兎に角、私は人樣に接するに、天眞爛漫……と云つても加減はあるけれど……そして親切と、此二つを金科玉條として居る、偽の聲容は剝げる時があり升、誰れにでも親切と云ふ事は至難かも知れないけれど、私は出來る丈そう心懸けて居る積り、誠の前には刃向ふ惡魔はない、若しあつても、屹度いつかしら向ふから屈服して來升。

熊田さんの奥樣、お年は三十九、男のお子ばかり、十八を頭に四人、普通なら甘く見られ勝ちな女親を、此家のお子達は皆怖れていらつしやる、以て推す可しでせう、色の淺黒い、目に劍のある、擧動のはきはきした方、心弱い私は、始めは親しみ難い方と思つて居たけれど、御交際して見れば決して惡氣のある人ではない、江戸つ子氣質の思つた事は、何でもづけ〳〵おつしやると云ふ風だつたから、仲間の奥樣方は皆敬遠主義を採つて居らつしやる、私に、「お姫樣育ちの奥樣」と云ふ、有り難い仇名を下すつたのは此奥樣、でも私は三年の間、口爭ひ一つせず神妙に交際してました。奥樣も私を妹か何ぞの樣にお世話して下さる、華子の生れた時など、一切萬端、親切に面倒見てお宮詣りまで連れて行つて下さる、ですから外の方達は、二人の仲のよさを、さも〳〵奇蹟の樣に云ひ觸らして居らしたとか、此地へ轉任の時も、誰れよりも名殘を惜しんで下さいました、未だに文通して居るのは此奥樣お一人です。

私が眞實敬服して居る奥樣は、安井の清香樣だ、お生れは岡山、其處の宗教學校を、優等で御卒業になつたと聞きました、まだ漸つと二十を一つ出た許り、去年の五月、今の旦那樣をお迎へになつた、エヽ私と同じ矢つ張御養子です。

丈のスラリとした、瘦形の、柳の眉、星の瞳、足らはぬ筆で形容するよりも、清方の美人畫から拔け出し

た様な方と云へば、大概お察しになれるでせう。

お國には御両親、夫れにお祖父様、お祖母様もお丈夫でいらつしやるんですつて、おまけに屈指の富豪だつて云ふ噂です、だから夫れこそ、手中の珠と秘蔵がられてだつたでせう、でも此地にお出でになつてからは、女中もお置きにならず、洗ひ濯ぎまで、一切自分で處理して、冬なんか、玉の様な指を、ひゞだらけにして居らつしやるんです、旦那様見兼ねて、



「女中を置かうか」とおつしやつても、

「大丈夫ですよ。二人ばかしの家に、不經濟」つて笑つてらつしやる。

交際振もなかなかお上手で、誰とならは愛嬌がこぼれる様、旦那様とのお仲の睦まじい事つたら、外目にも羨しい位、あら、お宅だつてゝですつて？　エ　夫れやもうスヰトホームで有名なんですもの……オホヽオホヽ。

いつでも私は清香様のお宅へ上がると歸るのも遂わすれて了ふ。御自分が人並勝れた美人でいらつして、

その上富豪の愛娘とお生れになつても、誇るなどゝ云ふ氣色は露程もお見せにならない、ほんとにお若いにあんなによく出來た方は少ない、私なんかまだ〳〵修養が足りない、一かどの主婦だなんて威張つて居ないで、氣を注けませうよ。

先夜、良人の先輩松川さんが遊びに居らした時、私もお仲間入りして樣々の浮世話に笑ひ興じた擧句、不圖、人格といふ事が話題に上つた。

學識深い松川さんの人格論、私は默して傾聽してました、滔々と自己の所說を述べてらした松川さんは、巻煙草の灰を一寸指先で拂つて、私に向ひ、

「奥樣、貴女は實に好い人格をお持ちですな、良人の感化か、境遇が然らしめたか、兎に角僕は敬服して居る」

つて被仰た、私は御返事に窮して、そつと良人の方に目をやると、默つて微笑して居らした。

果して私は可い人格を持つてるかしらゝ。

自分では認知して居ないけれど、假にも崇拜して居る方から、此一言を聞いた時、千萬金を得たにも増して、云ひしらず嬉しかつた。

若し多少私に高尚な人格が備はつて居るとすれば、夫れは良人の感化もあらう、境遇も然らしめたに違ひない、けれども私はより以上、父樣、母樣の感化と、お答へするに躊躇しない、

父樣は、板倉藩のお附儒者、曲つた事は一寸でも厭いと云ふ嚴格な古武士氣質、母樣は反對に、いつも、莞爾やかに、溫容人に接すと云つた風、側で見て居ても心地がよい方、ですから此兩者の感化が態度、私と云ふものに、金や力で求め難い、美くしい人格を授けて下すつたに違ひない、親の光は七光りとやら、ほんに何と感謝して可いか分からない。

去年の暮、都で名高い肖像畫の泰斗、S先生が來峽なすつた時、良人とも相談して、お兩親の肖像を描いて頂いた、父樣が眦の皺、母樣の左の口尻の黒子まではつきりと、我れながら見惚れるばかし生き寫しに出來上つた時のうれしさなつかしさ、早速額に仕立て入

疊のお座敷に掲げて置き升、而して私は朝夕に其前に跪づいて、百年の御壽命を祈る事を缺かさない、いつとはなしに、道夫も華子も、

『お早う御座い升』、『お寢すみ遊せば』、つて、お祖父樣、お祖母樣に御挨拶申し上げる樣になりました。

きのふ、屆いた小包を開いた時、お祝ひの反物の外に、道夫が前々がらお強請りして置いた、小波のお伽噺、繪具一式、夫れから華子には可愛らしい西洋人形、良人の大好きな松月の珍菓、綾信夫まで入れてあつた、

『嬉ちいなうれちいな』つて、人形に頬摺りしてよろこんで居た華子は、何と思つたかお座敷へ駈けて行つて、紅葉の樣な兩手を揃へて、

『お祖父樣、お祖母樣、いろ〱ありがたう御座い升』

一生懸命にお禮を云つてる、私はホロリと爲ました、神の如き幼き者の心にも、深き情は身に沁みると見える、老の身の便り少くお暮らしになつてるお側へ、噫、何時になつたら行けるかしら?。

颯々と吹く風が冷いやりと、おゝ薄ら寒いこと、先刻、淸やに羽織を掛けてやつた儘だつたのね。父樣や母樣も、最う屹度御寢なつたでせう。夫れから夫れと果てしない思に耽けつて、大分時間も過ぎてしまつた、どれお茶でも沸かして、良人のお歸待ちませう。

さるにても鎖すに惜しき良夜よと、仰げば、月は天心に冴えに冴えて、一點の浮雲だになく、玲瓏と輝き渡る神々しさ。俯せば、蟲の音叢に、雨かと許り繁く灑いで遊子の悲愁も知らず顏。サラ〱と搖らめく葉陰に、白露が玉と亂れて、靜かに閑かに夜は更けて行く」





年の暮のマダム

内藤千代

（楽しい私のホーム）

朝の霜がじり〳〵と融けて、屋根からポタリ〳〵、水晶のやうな雫がたれて落ちる。瑠璃を透して見るやうな美しい日和である、お隣家では煤はきではたく〳〵大さわぎ、あの小母様は随分面白い人、先達ても漬菜を漬けるのに、砂地の畑のでどろのついてなかつたをい〻事に、洗ひもせず、そのま〻つけこんで了つたんでせう、そうしたら土くさくて食べられないと云ひ云ひ、我家へも下さるんですもの、御返禮の上げ様に困るわ。

昨夜きよを相手にお餅を切つたので、庖丁のまめが出來て痛くて〳〵仕様がない。篤様は讀書、私はお傍で熨板を前に坐る。今日あたり母様へ手紙書かなければすまないわ、いつも篤様が御歸省なさると母様がお出掛、何だか篤様を避けてるやうでわるかないかと思ふ。

私、篤様が、「お母様」と手をついて御挨拶なさるのを見ると、あ〻お氣の毒な？　とつく〳〵胸がせまる、それや母様だつて「篤さん、篤さん」とあんなに丁寧にして被居るのだけれど……。

今年の夏は、しばらく御一緒に居られると思つてたら意外にも篤様、お友達の方と水戸の大洗へ行つてお了ひなすつたんですもの、私の心も知らないで……いろ〳〵な事考へる。

小林の雪ちやんもいまは渡邊の師範科の生徒で、ハイカラなローマに米琉の羽織、見ちがへるやうになつて二三日前、たづれて來られた時にはびつくりした、篤様つてば挨拶されても妙なお顔して飛んでもない返事してゐらつしやるので笑つて了つた。

學校では若月先生が辭職なさる、本庄先生は〇〇へ御轉任になつた、あの先生の事だもの、あの上またどんな高襟におなりなすつたらう

篤様と兄弟同様の御間合の本田さん、小松さんは、前後して同じ御病氣で、大學病院のベツトの上、御魂は永久に天にかへつた。

私はそれをきいた時、とめ度なし涙が出た。

あ〻快活だつた本田さん、あの温厚な小松さん。

「奥様……」と有仰り〳〵したお聲は、あり〳〵耳に殘つて居る……い

まにも笑ひながらがらりと障子をお開けに成はしないかと思はれる。

もう胸が一ぱいになつて、みられじと俯いて、、、ものゝましな使つてゐると同じ想ひか貴様がよいと、

「あゝ本田も死んだ、小松も死んだ、三人の中で僕一人殘されたんだ。今度は僕の番かも知れないね」

「いやだ貴様」たゞさへ悲しかつたところ、たまらなくなつて泣き伏したる。

「おい、何だ、困るぢやないか、千代さん、何だ、おい、串戯ぢやない」

△

翌、食後の林檎を食べて居たら、法科の西山様て方がゐらした。政治科の三回生とかれてきいてた、マント着て背の高い眼の細い美しいお髭のある人。あまり突然の御來訪に、羽織着替る間もなかつたが、それは男らしく快活な方。

「あゝ奥様ですか、お邪魔します。毎度みんなからお噂は承はつて居ました、どうか末長く、」なんてなか〳〵お如才ない。貴様はお書齋へとおつれ遊ばす。

紅茶いれて持つて行つたら、引とめられて、夏の大洗の話が出て大笑ひする。

「僕等二人はね、延期組でせう、金子君ばかり試験をすませて來たんだから、實際淋しかつたんですがね、僕等の勉強時間中金子君手持無沙汰で困つて居ましたよ、そこへ婦人連中がつけこんだんです」西山様は貴様の事を内藤とは言はず矢張り金子君々々と被仰る可笑しい。

「その中で光子さんと云ふのです、〇〇〇女學校の生徒だつて、十八だつてましたが、さうね、丁度奥様ぐらゐでしたね、奥様も調子がいゝがその女も實に交際上手で、玉をまろばすやうな聲出して金子さん、あのへんな假色つかつて

朝など金子君が散歩に出ると、直ぐ後からついてくんです、いやとも海岸で逢ひませう、にげて來るわけにも行かないから一緒に話ながら歩いたりする、それがまた評判になつて旅館中の……」

「まあれホヽヽヽ」

「ついにはだん〳〵進歩して、室にも遊びに來るやうになつたんですね、君が居るからあれが來る、うるさくて仕様がないなんて、その小林つて奴なんか露骨でしたからね、へゝゝゝゝ」

「あら、皆さんして、そんなに良人をおいぢめ遊ばしたの？　よく家へかへりたいつて泣きませんでしたことホゝゝゝ」

「歸りたかつたのかも知れませんよ、それで金子君が轉宿を云ひ出したんでせう、とう〳〵半里ばかりへだつた〇〇へ引こして、いやところが今度の旅館は客が立てこんでちつとも勉強なんか出來んです、おかげて今年もビリでした……」

「及第さへあそばせば結構よ、」

「これは恐れ入ります。あの令嬢に奥様を一日みせつけてやりたかつ

たれ、金子君には細君があると云つても、みんな本気にせんですもの。金子君も得なひとです。」

「オイ、君！　もう金子々々と言つて呉れるな、ちつとはマダムの手前もあるかられ、ヘヽヽヽそして君もう下らない事云のはよし給へよ」

マア萬様とした事がほんとにいやだわれ

「さう／＼もう金子君ぢやなかつたれ、失敬々々そりやさうと、あゝ奥様、柳君柳君御存じでせう、あの柳君の細君がれ非常に貴女のことを賞めて居ました。遂つたらよろしくいつてくれ／＼も云はれて來ました、」

「御串戯ばつかり、私、柳様の奥様なんかぞんじません、」



「でも先方ぢや知つてるのですよ。先達てゝね、がうなんです何て可愛い奥様でせう、そつと頬ずりでもしたいやうふ、私はほんとに氣に入つて了ひました、あんな方妹にしてみたいの、男に生れなかつたのが口惜しいのと、大變な熱度なんです。白状すれば僕だつて今日は一つその奥様を探検のつもりで」

「まあ、いゝ様にお弄り遊ばせ。」

干瓢つかつてお汁粉こしらへる。どうかと思つて差出したが、

「これは大好物ですつて御遠慮なく召し上つて下すつたので、ほんとにうれしかつた。萬様もしばらく甘い菓子を食べないと氣のぼうつとして了ふと云ふ一人だ ビールならたまには

御自分から飲ることもあるけれど、おそばかりは眞平だつて。それで飲れないんぢやないですつて。いざとなれば五合ぐらゐ飲める、また不思議にちつとも酔ふと云ふ事がなくつて、いつも宴會では友人の介抱役だとこぼしてゐらしたつけ。私はうれしい、殿方はお酒がいけないと、やつぱり馬鹿にされるやうな傾があるんですもの、けれどももしや飲りつけてお好きになつて了つたらどうしやう、とつまらぬ事も心配になる。もう愉快にお遊びなすつて午頃お歸り、送り出て玄關に手をつくと、五六間も先行つてらつしやる。

篤様この頃はお言葉が亂暴になつて

「馬鹿な事云ふな」「おい、千代さんちつと氣をつけなくつちや困る、」

なんて有仰る、此間○○伯の若様だと云ふお友達のいらした時は、「千代子、千代子、」とお呼びになつた。篤様に呼び捨にされたのはそれが始めて。何だかうれしいやうな悲しい氣がした。これからもういつでも千代と呼んで頂戴とお願ひしたら笑つてゐらした。皆さんの前ではわざとあらい言葉を使つたり、何でもない事叱つたりなさるのが癖で、だから私もその手心で居るのね、

「内藤君の細君は良人をさしおいて、友人にばかりよくしてる。人の妻としてあまりになれ／＼し過ぎる」なんて云ふ人もあるさうだ。

我は人妻――人妻なればこそ……何誰にでも親切にして上げる事か出來ますわ、奥様々々と云つて下さるものを、私床の間の置き物然と澄まして居る事はどうしても出來ないんですもの。無邪氣で一緒になつてさわぐのが好き。

お書齋へ茶器を片づけにもどると、椽側の椅子によつてらした篤様が

「千代さんは來年厄年だねえ、僕も」

と不意に。

「あら、さうですのねえ」

「喉がかわいた、紅茶を一杯、否冷卸てゝもいゝ。」

差出すカップを受とりながら、一寸私の手にさわつてみて、

「千代さんの手はいやにあたゝかい？」

「さうでせうか」

「手の冷たいものはハートが燃えてるツてね、」

「あら？」

△

二三日つめて肩を使つた故か、今日は歯が痛くてお針も手につかない困るわねえ、お正月だと云ふのにまた頬がはれ出しちやあ？

手水鉢の南天が美しいこと、まぶしい茶の間の日あたりで新聞を讀んで居たが、それにも飽きて目を閉ぢると、ふと二郎さんの顔がうき出した。二郎さんは私の從兄で、一昨年中學の四年生で肺で死んだ、私はよくケレオソートの丸藥もらつてむし歯のうろへ入れたつけ、それは奇妙によくなほる。そのせいか私何だかあの藥の香が好きがつた……。

篤様はこの間から障子の張り替へ引受けて下すつたのに、また今日も

何處かへ遊びに行つてお了ひなすつた。ほんとに困る坊ちやまだ、男はのん氣でいゝ。

爺やが門松と庭の手入れに來た、この爺やはまだ私な「お嬢様、お嬢さま。」つてくせがぬけない。「あゝお母様もう御安心だな、お前さまがこんな立派な嫁さまにならしやつて……」なんてこの丸髷が目にはいらないのだらうか。

あゝ私もかうしちや居られない、もういゝわ、篤様なんか當にして居ずとも、と糊をこしらへ棧をはらつてたら、何時の間にかおかへりになつて、だまつて笑つてゐらつしやる。

お晝飯にお好きな到來の黒豆があつたけれど、篤様外來でお菓子はかり食つてゐらつしやるもんだから、些とも食がお進みなさらない、お茶碗は小さいが四つも代へる自分が恥かしかつた。

縫ひかけた小父様の紋附羽織出すと、篤様もきよも止した方がいゝ〳〵つて止めたけれど、これ仕上げて了はれば、安眠も出來ないと云ふわけですもの、あゝ早く〳〵縫上げてるつぱりしたい。何でもたのまれゝばことわる術を知らぬ私、みんな引うけこんだので、肩をはらしていまに至るまでこんな羽織になやまされてる。



四時過ぎやつと漸く仕終へて、火のしの炭をそへる。障子も眞白く夕陽に映えた。縫目のあと新らしく、庭先もきれいになりました。夕方一寸門外へ出て見る、松の葉の千代のみどり、氣持の好いそぎ竹〳〵飾り、あゝ松立てゝむかへぬ門もなかりけり、誰が里よりと春やまどはむ。

△

いよ〳〵大晦日なつて了つた

早朝から御馳走のこしらへなする、田作ないッたら手に骨を立ててその痛さ……ノート片手に大車輪、「時的なマダム振りさ」なんて篤様のお口の惡るあれもこれもとまご〳〵して一時過ぎにお晝飯頂く。

お勝さんが來た、お勝さんてば隨分な、一昨日まはつて來て、奥様は

お婆もちがおよろしいから今日結はせて頂いてもいゝでせうなんて、あんまり馬鹿にしてゐるから、怒てやつたので、何だかきまりがわるい。

私の好みは前髪ふつくり、思切つて髱出して鬢じりのきりゝと上つた手柄は樺色、朱の中插、鬢かきうけとつてふはりとかくと、根元に金脚の本珊瑚を斜めに深くさしこんでくれる。直ぐにも合せ鏡をしてみたかつたが、わざとそしらぬ風で立つて了ふ。

例年の通りお歳暮出すと、どうも〳〵恐れ入りますを幾度もくり返しては奥様、御機嫌よくよい年をおむかへ遊ばせ……。

私は何だか悲しくなつて、あの外にもう一つ半襟でもつけてやればよかつたと思つた。逝く年ー　と云ふ感がひし〳〵身にせまる。

お床の軸は應擧の松鶴、お三寶の鏡餅、生花は元旦に插すべきものだと云ふけれど、松の根じめに笹龍膽の若葉、ホヽ手まはしのいゝこと。

違ひ棚の上には燃ゆるやうな椿を一輪。海老色に金の枠、クローバアーの刺繍のある大切な寫眞ブツクに、其處に重ねて、もうこれでいつお客様がお出になつてもいゝ。

富子様からお手紙が來た、寮舍生活なんぞしてゐらつしやる方は氣樂だわれえ　めづらしい桃代様のことが書いてある、桃代様……六月嫁らした桃代様は、お望み通りの陸軍士官だとか、それが職員錄にものつて居ないし、何だか……虚榮心につけこまれて、だまされたやうな結婚なすつのだとやら、御實家の財産などうとやらあゝ私は桃代様のため、その一大懸報の事實でなからん事を祈る……。

女の運命は何てはかないものなんでせう。

夕方お風呂がわいたので申上げに行くと、お書齋はカラツポだ、毎日毎日何たしに被居るんでせう、お友人つてそんなにもいゝものがしら？

明日の着物など箪笥から出して取り揃へておく。

晩餐にお定りのお蕎麥を味ひながら、篤様と顔見合せて笑つて了つた

みればみる程まあきよの顔つたら……頬なんかまるで川越いものふかしたてのやう、針でついたら紫色の血がほとばしりはしないかと思はれる、私にねがつて許しをうけた高島田、紫しぼりのちりめんの丈長、根に巻いたとこが素敵だわ、つまみ細工の兩ざし、金きせの髱どめ。いつもの銀杏返しの方がいくらよく似合か知れやしないつても二十一の初島田自分ちやどんなに嬉しい事なんだらう。

ホヽヽヽ篤様がいらしてから私のことを、「奥様」と云ひ出したのは此女が始め、それまではよく、「お嬢さん、お嬢さん、またお母様によけいな事ばかり云つけましたれ。私しや大嫌ひツ」「意地悪嬢様ツ」なんて唇をつき出したくせに、どうして眞面目くさつて「奥様」ツて呼ばれるかと可笑しくなる。

大晦日に早く寢ると老けると云ふ、僕は百八の鐘を聽くつて篤様、雜誌もつて炬燵におはいりなさる、私は机の上に通ひをならべて、野暮な計算をぱち〳〵やる、本箱の上に一輪、黄のにほひを吐く福壽草、鐵瓶の音蕭々と。

いよ〳〵思出多き今年も盡きる、處女の生活を脱してすでに一年、省みればげに……あゝ逝く年の恨みつきじな。

往く年の惜しくもあるかな増鏡
みる影さへに暮れぬと思へば　紀貫之

京都の女學校

潮　風

鴨川の水に洗はれたる京都の女に獨得の色彩のあるは爭へぬ事であらう。記者はかつて同地に八年を送つたが、何しろ小學の頃であつたから、京女を云々する事など思ひもよらぬ。處が今度京都府教育會の主催で、全國學生雄辯會なるものを開かるゝ運びとなり、西下して、十數年ぶりに、この山紫水明の都に入つた。宿痾の爲に外出は車を用ゐたゞ車上から瞥見したに過ぎぬから、何で深い觀察が出來やう。たゞ演説會當日の午前府立第一高等女學校を訪ふて、河原校長の談を聞き、かつ校内隈なく參觀したから、こゝにしばらく管見を記す次第である。

▲三代續いて入學

それは霜が降り初めてから二日目の朝。碧落高く澄んで、秋の氣は乾坤に滿ち、朝の光は爽眞の金線を四周の山々に投げかけてゐた。丸太町の電車通りを車は音もなく飛むだ。仙洞御所の深い翠に對して、そゝり立つ木造の巨館、薄つぺらなペンキ塗りなどでなくて、飽くまで重々しい建物であつたのはまづ嬉しかつた。

校長室で河原校長に會ふ。校長の名は記者は以前から知つてゐる。もう勤續十五年以上の舊。眉月が刷みつけた眼もとの小皺には質が溢れ溢れて情が滿ちてゐる。女學校長として申分なき型である。女子教育に携はる人は双鬢に霜をおくに及んで始めて重き權威を添へる。つやゝかなる頭髪をチックで一絲紊さず分けて、金ブチ眼鏡なぞ光らしたのは、何となく生々しく見えてならないものである。

雜談してゐると、羽織の紐に一方が千切れてブラ下り、煙管を拔いた短背貫を左の腰にさし、善く云へば脱俗、悪く云へば多少大童になつた鶴髪の老人がツカ〳〵と入つてきた。校長と一言二言話をする。明石——講話會——などの言葉が耳に留つた。

「ぢやどうか願ひます」

と一言遺して、飄然と出て去つた。此の人こそ誰あらう。五たびまで講書始めに國書進講の榮を擔つた國學者、猪熊夏樹氏であつた。氏も齡すでに廿年に垂んとして、老を忘れて姫小松を育てゝゐる。

校長より聞くが儘を記せば、明治五年七十八名の生徒を集めて、「新英學校女紅場」なるものを起したのが本校の起原で、日本の女子教育界で古いうちの一つである。爾來約四十年。校名六たび變つたが、根本の主義思想は一貫して今日に至つた。すでに幾度か兩陛下の御臨幸も賜はり、其外各宮殿下はじめ内外の名流の來校せられた數は夥しいものだと云ふ。

學生は中流以上の家庭のもの大多數を占め、無論京都府下と近縣の者が澤山だが、兵庫、岡山などの縣の者も侮りがたき數を示して居る

面から此方は一層總領家の子女である。その理由は遠く最初にあるので、當時兵庫縣下などでは女子教育は非常に虐待されて、寧ろ不必要と觀られて居つた。そこで心ある人々はその娘を、遙かに京都に學ばした。一度びこゝに教へを受けた者は卒業後他に嫁しても母校の面影を忘れ兼れて、その娘をわざ〳〵京都に遣る。そこでいま詮しても入學志願者が多いのだと云ふ。最初の卒業生は年長者であつたから、親子孫の三代續いてこゝのお世話になつてゐるさうな。現今ではこんな例はザラにあるまい。

▲元氣と病氣

河原校長と廊下を歩き乍ら校風について聞く。

此學校の校風は一言にして盡すと「質素儉約」の四字である。「京の着倒れ」と噂を取つた中にあつて、毅然として、この旗印を翻へしてゐる勇氣は確かにエライ。東京に海老茶袴が流行し始めても、之を用ゐず考案をめぐらして、こゝに獨得のものを創出した。地はメリンス。色は古代紫。染方に秘傳があつて、他では眞似が出來ぬ樣になつてゐるのと、行燈袴でなくて、低い乍らも襠がある二點がその長所である。

衣服を木綿と限つた外には別に區々たる制限をしないが、生徒間の自治の精神が發達してゐて、華美に趨かせぬ樣にする。リボンなども、下級生の間こそ、多少つける者もあるが、上級になるに從つて、その數を減じ、四五年級では殆んど。絶無と云ふ奇なる現象を呈する。二インチのリボン春風に舞ふが如き美觀は京都では見られぬ。

學校では生徒に冷水摩擦と深呼吸と皆勤とを奬勵してゐる。一學年を通じ一時間も缺席しない生徒は毎年多くて百中の二十五六。少くて二十位だ。處がかの日露戰爭當時は一躍して三十三なるレコードを示した。之は何の故であるか。戰爭と云ふ刺戟があつて、元氣が充進して居つたからではあるまいか。

記者は病にとりつかれて、病氣哲學を研究し、多くの病氣は惰氣と短氣とによつて生じ、元氣と呑氣によつて快癒するものであると思つた。云ひ換へれば、元氣で呑氣であれば病氣に罹る事なく、よしかゝつても輕くしてすぐ癒るが、惰氣と短氣のものゝ病勢は加速度で進行するのだと思ふのである。第一高等女學校生が精神に弛みのなかつた折に、健康であつた事は、我が主張に裏書をしたものとして非常に愉快であつた。

廣い校内を痛い足を引きずつて參觀する。大講堂や、御殿は立派であつた。作法室附屬の棚には、陶器製の西洋料理が恭しく皿に盛られてあつた。オムレツもビフテキも、これでは齒どころかナイフの刄も立たん。これを前に据ゑて實習する生徒諸君のその顏附が見たかつた。

▲寄宿舍

本校の生徒は定員八百名。學年末になつても七百名内外のよし。

高等女學校としてこんなに多數の生徒のある學校は少ない。從つて寄宿舍にも百數十名を收容して居る。

寄宿舍は荒神通りと云ふ通りを挾んで學校に對す。珍らしいのは學校から寄宿舍の玄關まで、通りの下を穿つてトンネルが出來てゐる事だ。

河原校長に導かれてこのトンネルをぬけて寮舍を觀る。著しく感じたのは、東京の高等師範で見た樣に質素なことであつた。一寸目先きの變つてゐるのは、生徒仲間でお互に嚴禁な言葉を口にするとボールドに書き出される事である。例へば「すかんたらしい」、「すかん人!」、「けつたいな」などの下卑たもので、時によつて流行があり、一つ退治すれば、また一つ發生する。なか／＼世話なものであるさうな。

之を要するに東京の諸女學校は種々花々しい特色があつて、運動會に鳴る處あり。ハイカラに名高きあり。活潑で評判なるもある。處が本校の如きは、極くジミでこれと云つて人の眼を奪はぬが、着々として効果をあげてゐる。名を捨てゝ實を取るは賢者の爲す處で無爲にして化するは智者の採る處、女子教育は寧ろ此樣に、「平凡なる非凡」であつてほしい。

二時間の參觀に其夜演説に一ヒントを得て、正午近くこゝを辭した。

▲お事始めの料理

みなさまがたが大空にむかひますと、おうちで好く「お事汁」といふものをこしらへてめしあがるでせう、あれは御事始の式のかたみで以前は總て教職もめでたく終りまして、いよいよ正月のしたくにでもとりかゝらうといふ場合になるので、十二月八日にこの祝をいたしたものです。今日残つております「お事汁」でも、いろいろ田畑からとりいれた野菜類を、ゴチャゴチャと入れ、お汁を立てますのですから、いろいろのものから出る味で、なかなかけつこうなものです。それを今本式のお事始の献立を御らんに入れまして、皆様の應用あそばす材料にいたしませう。

○お事始の献立の目錄

○膾　蛤、鉄打大根の三杯酢

○汁　つみ入、芋、牛蒡、にんじん、こんにやく、焼豆腐　小豆のなみみそじたて、

○平　入ッ頭、まきはんぺん、あつやきたまご、椎茸、芹、

○猪口　数の子にはながつを

○香物　浅漬、　○御飯

別に

○向附　海鼠の三杯酢、

○吸物　鱈昆布、

○小皿　巻鯣、

お膳にお盃を打ち、御銚子を添ゆ

そこで此献立の仕様をザット記しませう、

膾の蛤はむきみの大きなのばかりをえらんで、ザットゆで、煽りゆで過ぎるとかたくなるし、味がぬけます、それに大根をさゝぎりにいたして、鹽をふりかけてもみ、それを洗つて絞り、好くほぐしてはまぐりと混合せ、さんばいずをかける。

平の巻半片といふのは、なみの蒲鉾とおなじ事で、魚の身をたゝいて好くすり、うらごしにかけて、つくいもを少し交ぜてつなぎとし、すだれを水に浸したのに巻いて蒸したのです。それに入ッ頭のかはをむき、刻んでからしをみづであらひ、むしあがつたら、だしに醤油とみりん少し入れて煮上るのです。厚焼玉子も別に變つた事はないので、中粒の玉子五ッに、だし五勺、にきり二勺、しやうゆ二勺を好くまぜあはせ、たまご焼鍋へあぶらを引いて火にかけ、下火の方はなるたけよわくして、上にブリキ板に炭火を載せ、鍋から三四寸離しておくのです。このたまごやきは只上火と下火のかげんばかりです。

汁はこの献立にはなくてならぬ一品で、ほかはいかやうに變更しましても構ひませんが、これはお事汁といふ位でぜひともつけますもので、いも、にんじん、こんにやく、やきどうふ、あづきを皆ゆでゝ、その日にありあはせのさかなのうちで、脂の無いのをえらみ、つみいれをこしらへ、並みそでお汁を仕立てゝ皆入れてずッと煮るのです。しかし惣菜にこればかりお拵へにでもなるのならいろいろの具をゆでたのをみそしるに入れてから、濃目になるくらゐまで好く煮る方が、日用のものとしてはおいしうございます。

數の子は一晩しろみづに浸けておいてから、好く水で洗ひ上げ、厭なにほひのない樣にして又鹽水に入れて洗ふのです。それから笊へ上げ、水が切れて仕舞つてから、醬油をかけておき、花がつをゝかけて出すのです。これは誰も知り切つた事ですが、いつもあらひあげた數の子をもう一度鹽水で洗ひ、水を切つておく事をしないものですから、同じ品でも味がよろしうございませんのです。

向附は別にいふ程の事もありません。巻鯣をこしらへますには、するめの足を取つて、巻き、糸で括つてゆで、冷てから小口より輪切にしてつけるのです。

鱈昆布のたらは成るべくなまのを鹽にした方が味がよろしいので、ザツトゆでゝから使ひます。

△歳暮に使ふ重詰

何方へまゐりましても、暮におしつまつてまゐりますと、歳暮に何を上げたら好からうか、さくれんも何々で、毎年同じなものも、何だか氣が利かないやうだなどゝ、毎時考案におくるしみのごやうす、かういふ時に重詰を使ひますと、何方樣でも重寶の品故、トンダ賞贊に預かり面目を施します樣です。これも先前より仕來つたものださうで、大概これに使ひますぢうばこは、八寸重の二段物で、中に入れますものは、いづれも生のものばかりです。先づ詰め樣は此樣な風で、

上箱には　鴨の作身、貝の柱、半片、白瀧、花慈姑、筍、松茸、芹、銀杏、

下箱には　味噌二色、鮟鱇、獨活、松露、

といつた風に、其おり〳〵の品物をみはからひまして、下に芹を敷き、松葉をならべてから、外の物を詰める。若し極押詰まつてからのつかひものなら、下敷は正月の用意にもと、菜を敷いて、その上に鳥の肉を入れ、それから魚は何でも其時の物を詰合せて差支へはありませんので、このやりかたも品物の配合しだいで、どういふふうにもはからはれるものですから、チヨツトめさきが變つておもしろからうと思ひます。

紹介

△花　川上農學士・森農學士共著

著者等は札幌農科大學の出身にして、花學數年其間偉麗なる北海の天地に放浪して自然と親み、花を賞するの念極めて深く、乃ち放課の餘暇を以て四季の花に對し賞花の記錄を成し以て此の書の始めを成せり、蓋し花は自然の珠玉にして造花の美は文中に萃まる、本書は植物學上の花に文學趣味を加へ、人をして愛花の情を引立たしむべくつくり成されたるものにて、花の盛裝したる寫眞帖、否、名の美はしき人名錄ともいふべし。（定價一圓七十錢日本橋十軒店裳華房發行）

△婦人問題　上杉愼吉著

著者は歐米に官遊すること數年其間熱火の如き婦人の運動狀態を目擊し、又幾多の著術論文を見て同胞の爲めに一片の憂心禁ずる能はず、こゝにその衷心を披瀝したるもの即ち本書なり、著者の說は、日本現今の社會に穩健なる婦人問題の解答を與へんと試むるものにして、急進にして噪急なる思想行爲を抑ゆると同時に又沈滯姑息の行爲を引立てんとするに似たり、要するに穩健着實なる婦人問題の解をといふべし（價一圓神田南神保町三書樓發行）

△日蓮論　木下尚江著

著者は宗教改革者たる日蓮上人が、時の社會の壓迫によりて十分其天分を發揮する事能はざりし所以を感じて頗る遺憾となし、こゝに英雄僧日蓮の性格天分に就て縱橫の說述をなし大にその面目を發揮せんとしたるものなり。（定價四十五錢本鄕文英堂發行）

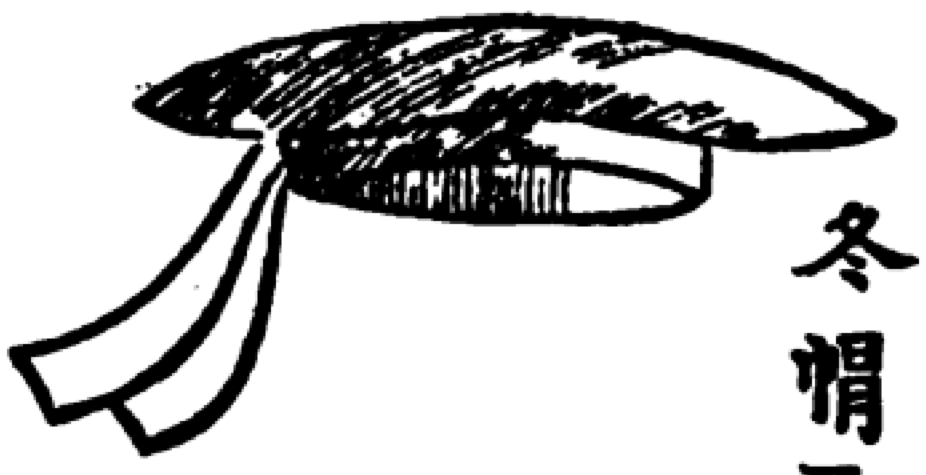
手輕に出來る子供の洋服

裁縫專門女子共立會 松江美佐子

△男女兒用 ケープ及冬帽子

此のケープとは丈の短かい場合の事で、すらつと長いのはマントと拵へますマントは丈の長くなる爲に、裁方も縫方もこれと少々變つて參りますが、本號には先づケープの拵へ方を記す事に致します。地質は、幼兒又は女兒などには、ビロード、薄ラシャの類を用ひ、男兒には右の外にラシア或はメルトン類を用ひます、裏は上等にすれば甲斐絹類を用ひますが、普通には毛繻子或はイタリナネル位で宜しう御座います。

△冬帽子



第一圖

尙冬帽の地質は、ケープ又は外套と同色に致します、裏には毛繻子類を用ひます、飾りは成るべく淡白に、只鉢卷のぐるりに、リボンを宛て〻後へ下げるとか、結んで横へつける位に致します。

此のリボンの色も成るべくは、帽子と同色のものを撰ぶ方が宜しう御座います。



第二圖 洋服の上にケープを着たる圖

△形紙の拵へ方

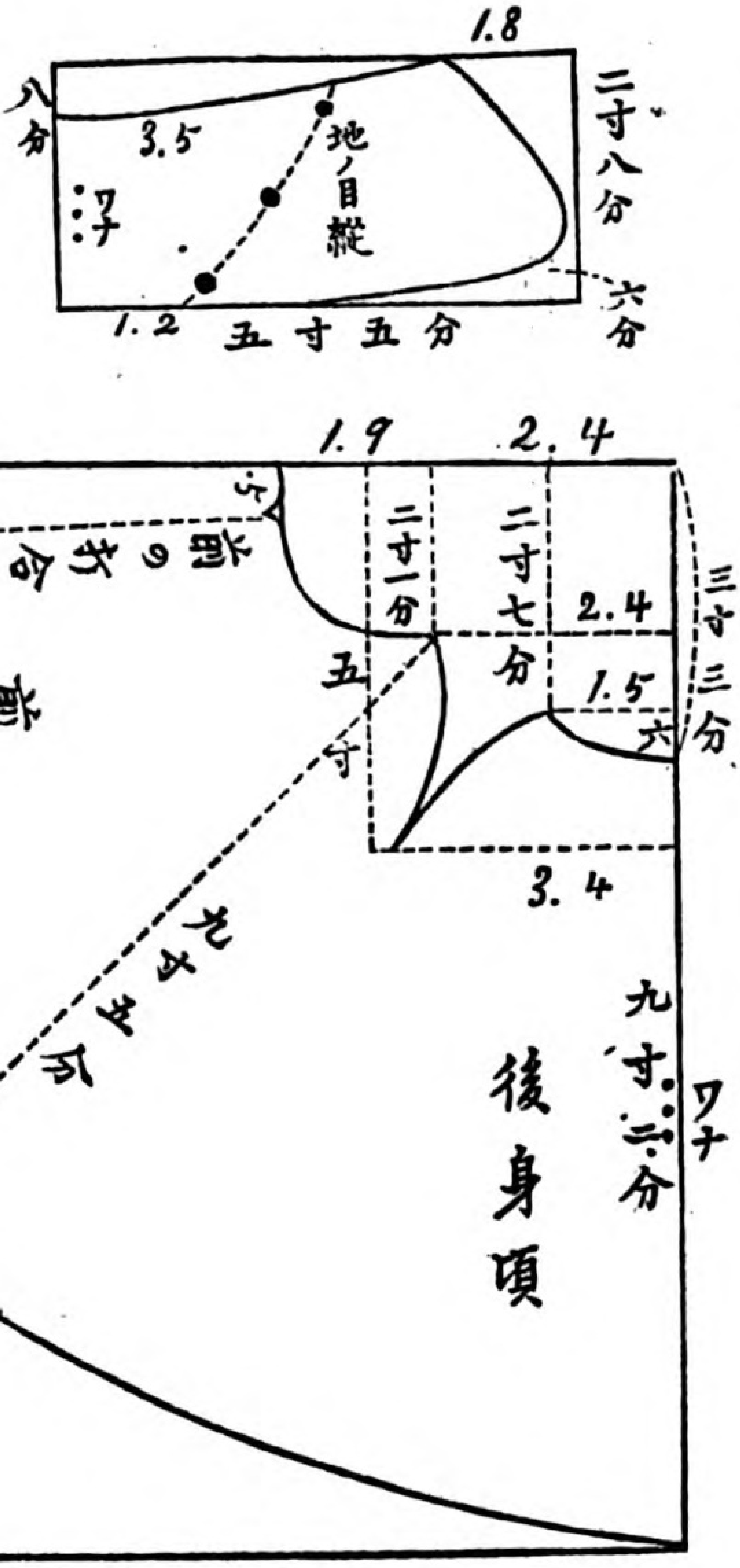
ケープの爲めに、先づ第三圖の通り四角の紙を二枚拵へ、夫れより、各所を何れも寸法通りに裁ち落します。

尙ケープは只の洋服類と違ひ衿廻りをゆつくり致してありますから七八歳まではこのま〻で用ふる事が出來ます、然し若し衿肩の處を加減なさろうと思へば前後で少しづ〻、即ち前のアゴダリが一寸九分の處を一寸七八分に、アゴ巾が二寸一分の所を二すづまりに、後も背の方で此れと同樣に詰めます。

又丈のみを伸縮なさるには、裾全體で三寸なり四寸なり加減なされば宜しいのでございます、若し子供に應じて正しく製圖の方法で裁ちたいと思はる〻方は秤りの注意と申す所を御覽下さい。

第三圖

四五才用ケープ形紙の拵方

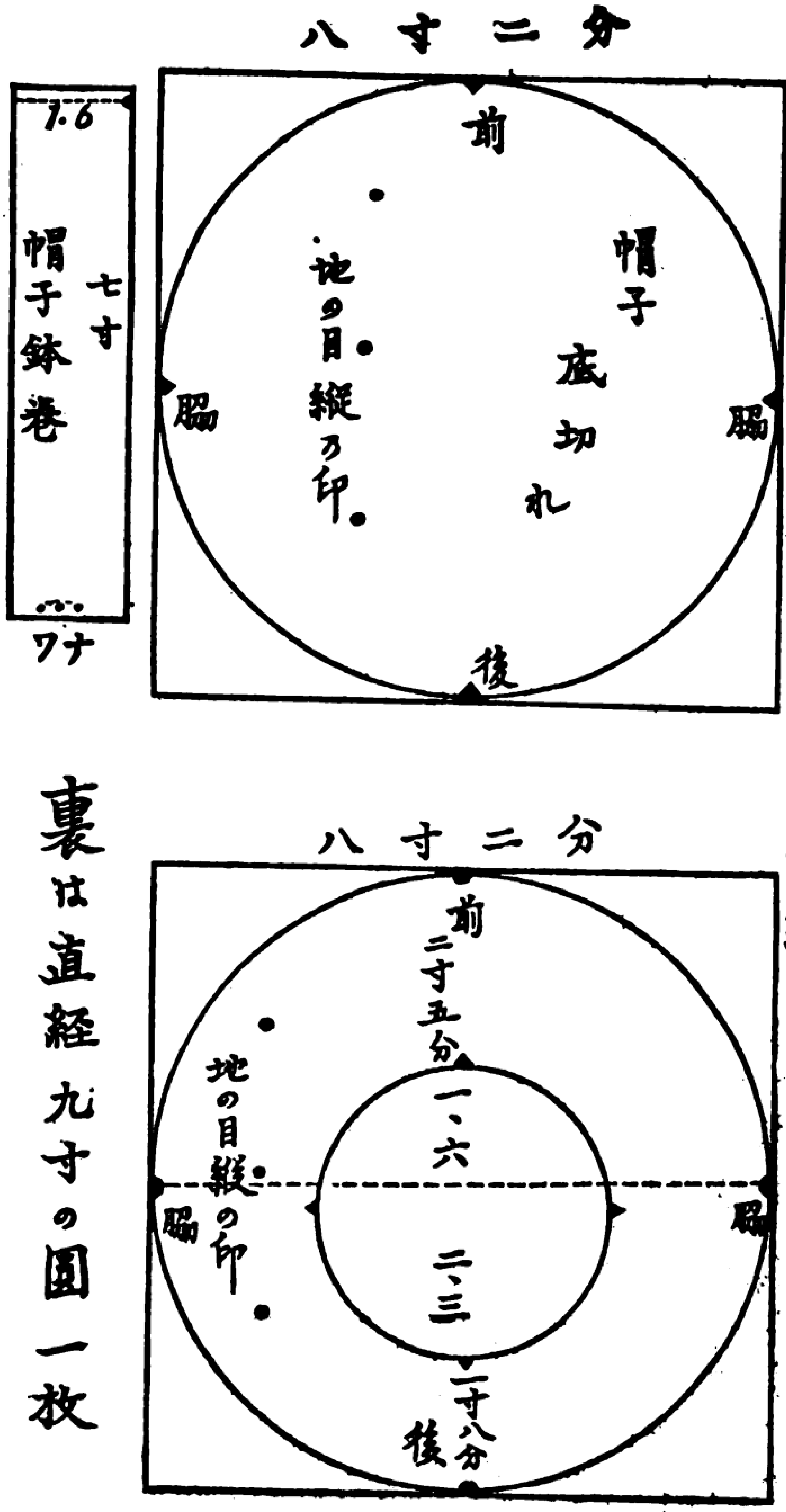


次に帽子の形紙を拵へます此は先づ第四圖の通り、三つの四角い紙を拵へ、鉢卷だけは其のまゝにして底切れ及縁側は正しくまんまろの形に致します、そして此の底切れ及縁側の大きさは頭の大小に拘らず大きくも少さくも適宜になさつて宜しう御座います。次に縁側の中をくり拔くのでありますが、これと鉢卷の寸法は子供の頭廻りによつて違つて參ります。第四圖にはかりに、一尺三寸五分の頭廻りに出來上る寸法を示して置きましたが、若し此のくり拔き方を全體に一分通り即ち直徑を二分大きくあけますなら六分程寸法が長くなります故、其の積りで伸縮なされば宜しう御座います。そして前と後

の差は七分に致します、鉢巻の寸法はつむりの廻りより縫代を加へますかやうにして形紙が出來ましたら、ケープも帽子も圖を見て各所にある切込み及び地の目縦の印に注意して落ちのないやうによくつけて置きます。

第四圖

五才冬帽子形紙の



△切れ地に形紙を宛てゝ裁つ心得

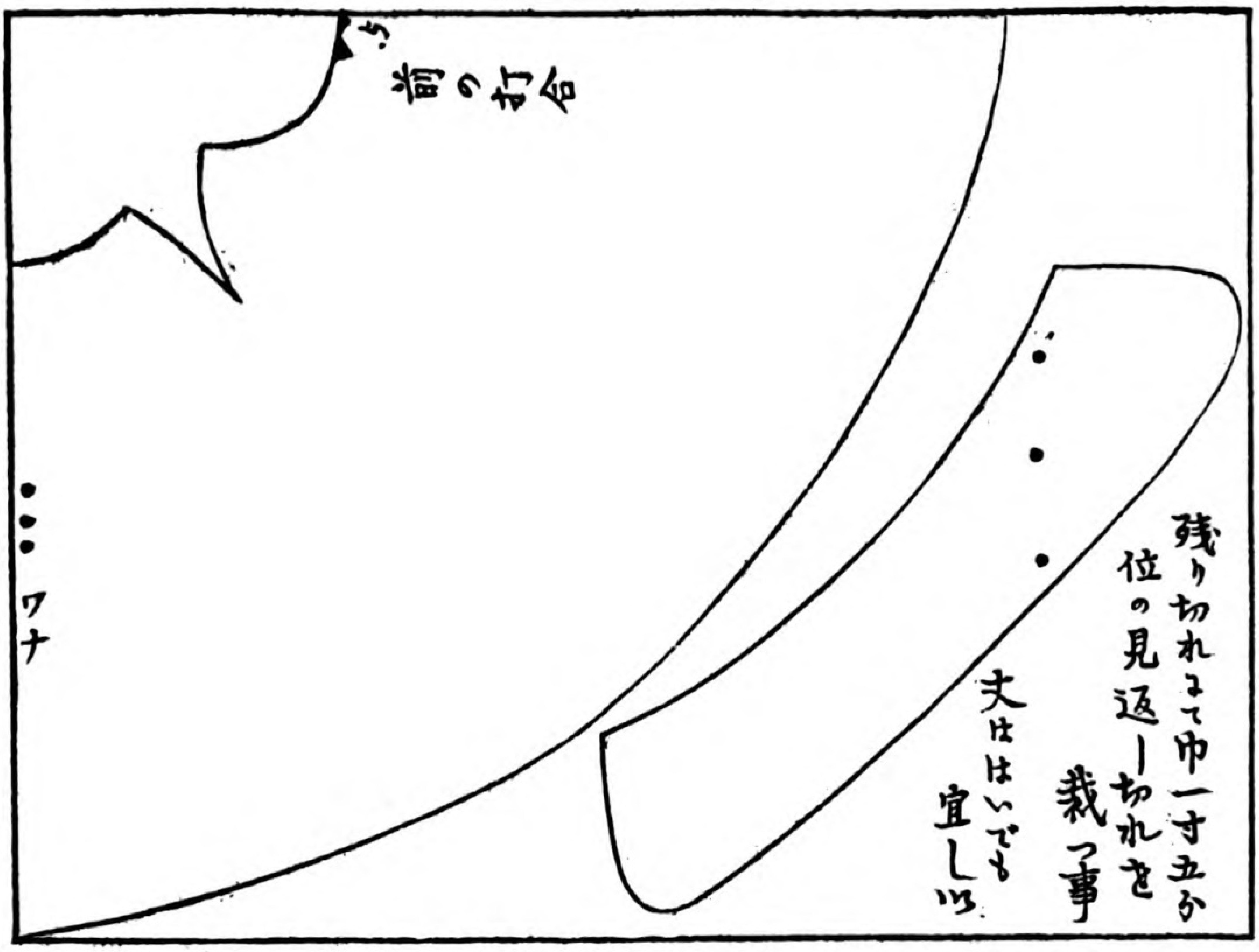
第五圖の通り、切地を縦に二つ折として其ワナの方へ形紙のワナの方即ち後を宛て、其他も正しく針を打つて形紙通りに裁ちます、尚折衿は圖の通り地の目縦の印に注意してつまり裏後が真斜になるやうに裁ちます、若し耳頭がラシャの場合には折衿の表だけビロードに致しても宜しう御座います、尚全體をビロードで裁つ場合には巾がせまう御座いますから、横地で裁つて宜しう御座います。尚裏は丈を竪で二分短かく巾も前巾を上下前共一寸づゝせまく裁ちます。

第五圖

四五歳用ケープの裁方巾三尺三寸以上即ちラシャ巾ならば一尺三寸の用布にてよし

又巾一尺三四寸即ちビロードなどの場合には横地で裁ちます故三尺三四寸を要します、

折衿は圖の通り必ず斜地で裁ちます、



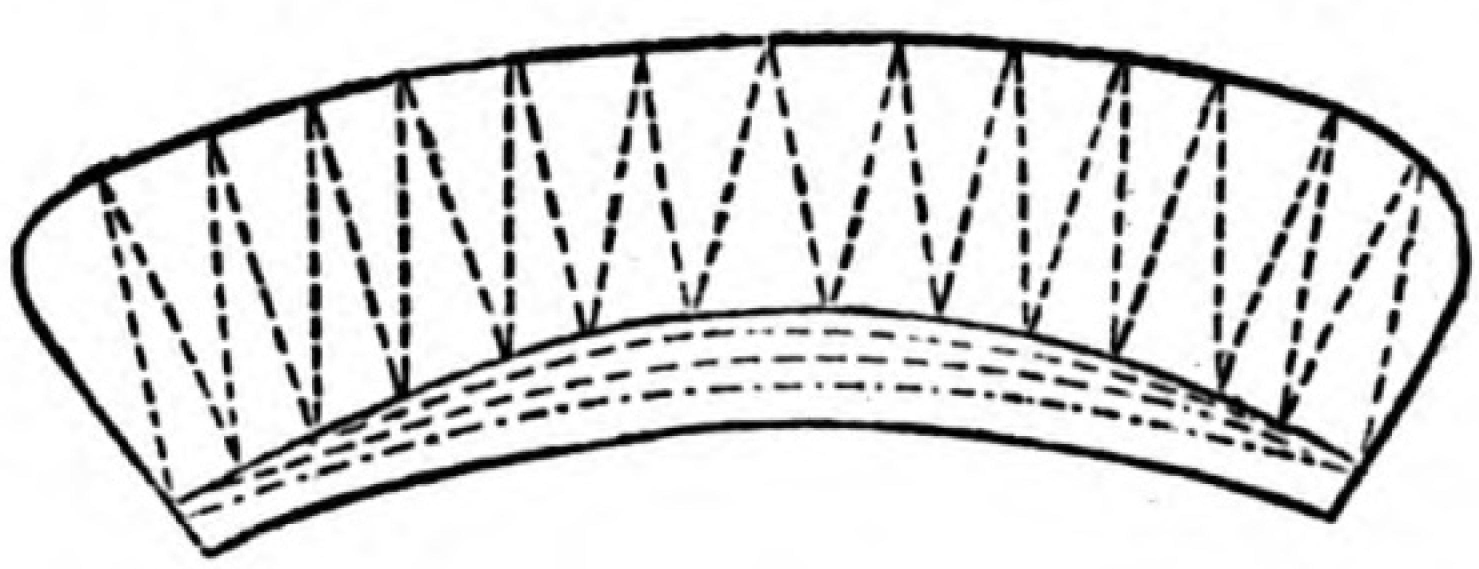
裁ち終りましたら縫方の時に必要な前の打合の印を糸で上下前共につけて置きます、次に帽子は形紙の通り一枚づゝ裁つて前後兩脇によく合印をして置きます。次に裏切れは九十の四角をまんまるく裁つたもの一枚と鉢卷の裏に用ふる巾一寸三四分丈は表と同様のもの一枚あれば宜しう御座います。

△ケープ裁方順序

先づ第一に、裏の上下前に、表切れで見返しをつけます此の見返しは、身頃及び折衿を取つた殘りで、巾一寸五分丈は前丈と同様のものを取ります此端へ、裏身頃を二分五厘折つてのせミシンをかけます、夫れより、裏表を合して、衿廻りだけを殘し、即ち前の打合の切込から同じく切込まで、前及び裾を通じてぐるりと縫ひ合します、但し前の上部は角を一寸圓く致します、尙裏の丈が二分短かくなつて居る分は、表全體でいせて縫合し、表へ返して正しく致しますなら、一分だけ表で裏へのぞくやうになります、夫より此の所へぐるりと飾ミシンをかけ、次に肩ぐせを縫ひます、此縫代は兩方へ割つて鏝を當て前の打合から打合までの衿丈を計ります、若し子供が居れば、假に着せて見て、衿具合を見、短かければ心持前でくり、長けれ

げ肩で縫ひ込んで衿丈を極め、夫より肩ぐせの縫代をとぢ合します。但し上部は五分程とぢ殘す事、次に折衿を拵へます。折衿は先づ裏の方へミシン地を宛て、(但し地も裏表切れと同様斜地で裁つ事)よく綴ぢ合し外側三方は、表よりも一分通りせまく裁ち切り、下圖の通りチョークで印をつけて、其の通りをミシンで刺します、夫れより表と合してしつけをかけ、表のゆるいのは全體でいせて一分縫代で縫合し此の縫代はあまり厚くなりますから裏の方をしん地共、糸ぎりに切り落し表へ返して正しく躾をかけて飾ミシンをかけます。

此飾ミシンは縫代をはづしてかけます。夫より此の表のまん中と、身頃の表の後の眞中と合して針をうち、折衿の端が前の打合の處へ丁度來るやうにしてしつけをかけ、ミシンをかけ鏝にて割り、割つた上へ身頃の裏をのせてしつけをかけ、叮嚀にすれば此の端を折衿のしん地だけにあらくまつりつけ、次に折衿の裏を細かくまつりつけます、最後に折衿の上前へホツクを一つ下前にホツクかけをつけ、次に衿の付根にボタンを一ツ夫より下は一寸八分置きに三ツ位つけます。



△帽子裁方順序

先づ第一に、帽子の底切れ及び縁側に、イタリヤネルの裏打を致します。次にこの二つを合して一分五厘位の縫代で縫合し、縫代は鏝にて割り此處へ、細い針金を入れてよく縫らします。夫れより鉢卷の切れに合してかたきしんを拵へますこれはボール紙一枚にシン地二枚位を張つて用ひます。巾は一寸二分に致します。夫れより鉢卷の切れ及び此しんを輪にぬひ、先づ鉢卷切れ一枚を、先の縁側へ縫ひ此縫代は二分になし折りは鏝にて縁側の方へ折り、此の縫代の端としん地の一方の端と合してとぢ合し、即ち鉢卷の縫合し目より二分だけ、シンが奥になるやうになし、鉢卷の表切れはシン切りに裏へ折つてシンを通して四五分の針目で、表へ少さく針を出しながらとぢつけます。

次に底の裏切れは、ぐるりを平均にヒダ取り、鉢卷の寸法通りにちゞめ、此れを鉢卷切れの、表から折り返つた端とつき合せぐらゐにして大針の返し針にてシンへとぢつけ、それより鉢卷の裏をつけます。此れは先づ表の通り輪に縫ひ、一方の端は細く二つ折にしてミシンをかけ一方の端は二分程折つて、一分五厘程奥へまつりつけます、かやうにして出來上りましたなら、リボンを宛てゝ、結ぶとも下げる共お好通りになさつて宜しうございます。

△注　意

右之通り記して置きましたが、尚ケープを正しく製圖の方法で裁ちたいと思はるゝ方及びマントの裁方、縫方等を知りたいと思はるゝ方は日本橋區檜正町壹番地服部書店發行「子供西洋服の拵へ方」を御覽になれば委しく記してあります。同書には凡三十餘種の形紙に就て形紙の拵へ方から縫方まで、總て極委敷記してありますから種々の形をなさりたいと思はるゝ方爲は、これを御覽なさる方が宜しうございます。



和歌

佐々木信綱先生選

一等 ○ 紀伊 みさを子

今あらば七つにやならんをさな子のうつしゑを見て涙こぼるゝ

評 天眞流露。つくりかざらずうたへる中に深きあはれこもれり。

二等 ○ 本郷 横田さくへ

きずつきし鳥さ青なる湖に落ちぬさびしき山の夕暮の色

評 原作さ青なる湖に手負ひし鳥おちぬとあり。手負ひしの句けものめきたるを以て改む。

二等 ○ 若狭 津田たき子

煤煙の空に小さく日のにごる大都の秋もさみしかりけり

評 都會の秋、にぎはしき中のさびしみをよく歌ひ出られたり。

三等 ○ 堺 さくら子

木洩日は兎の箱に薄ら照る落葉に住める森の家かな

評 着想奇警なるをもて採る。

三等 ○ 淺草 渡邊ふみ子

木枯はけもの〻如く嘯きて月かげ白き街を走りぬ

評 凄愴の氣、人をおそふ心地す。

三等 ○ 東京 宇津美子

越路より梨子送り來し夕ふと姉の老いゆく秋に泣かるる

評 初句越後よりとあり。たゞ一字ながら越路といふ方詩趣あるやうにきこゆ。

秀逸

○ 大阪 さみどり

物を縫ふ母と興ずる妹の中に淋しく物を思ひぬ

評 まゝしき母とすまへる悲しき家庭をうたへるなるべし。

○ 熊本 ふみ

古郷は南の縁に我母の針持ちまさむ小春日の朝

評 やすらかなれど新らしからず。

○淋しくも月は匂へり山かげの霧ふる町を背くてらして　横濱　小豆澤しげ子

○秋の天巨人のごとも岩のごともくろ雲たちぬまろき山の上　米國　村越光子

○神無月胸の毛紅き小鳥等のあしたを來鳴く山陰の家　下關　小田きく子

評　庭には山茶花なども咲くらむ。

○綿入れて夜寒むの衣くけぬれど恭のまろうどはまだおはします　濃御影　山田靜子

評　家刀自の嘗しびきこそと思ひやらる

○宵月や木葉さゆらぐ秋風に誘はれ出る胸の悲しみ　武藏　榎原芳江

評　原作一二句宵月に木の葉の動く

⊙わかき夢のそゞろ身にしむ秋の夜や琴柱はづしてあめの音聞く　東京　白菊

評　一二句考へたる句なるべけれど今すこしと思はる。

⊙夕雲は赤く流れぬ鳥もみな行く野のはてに我も行かまし　小樽　上原ちよ子

○夕されば柱によりて下町の遠ひゞき聞く秋はさびしき　京都　小林靜眉子

佳作

○南天の實は赤らみぬ鵯あまた來り興ずる眞晝時かな　筑前　川口菊子

○更たけて夜蕎麥賣る聲さびれゆく場末の町の年の暮かな　福岡　西原千代子

○月おぼろよき人集ひて琴をいる灯匂ふ秋の夜の家　佐渡　木岡絲子

○赤き青きよそほひうせてものみなは霜まつさまの野のけしきかな　越後　田鶴子

○嬉しさをつゝみかねても笑むごとくそよぐ月夜の白き花かな　福岡　大庭たか子

○野分やみし刀根の水際にうらがれてかなしう細りをみなへし咲く　下總　月沖百合枝

○眠りより覺めんとすなり我村は鷄の音毎にきりは消行きて　神戸　岡本靜子

○秋風に庭の柿の葉みな散りて野路行く人を常に見るかな　千葉　名加子

○雨のまゝ暮るゝ巣鴨に囚車ゆく其の響きにも木の實こぼるゝ　淺草　村尾みさゑ

○灰色の寂しき花を見出けり君と別れし野路の夕ぐれ　横濱　吉川志佐子

○　越後　杉山ちせ子
雁がねにめさめてさくる乳すはせむれなでられぬ夢見あしさに

○　日本橋　舘小舟
夜ごと〳〵消えほそり行く蟲の音を聞き給はずや秋のかなしみ

○　横濱　村瀬孤子
この夜さを君や歩哨の一と時とふと見し空の月あかりかな

○　美作　田づる子
木がらしよ心して吹け故郷の母在す宿かたむける宿

○　横濱　日比きよ子
君居ます東の空に一群の雁なき行ぞ戀しかりける

○　東京　野菊女
水すみてさむさおぼゆる秋の朝日かげあびつゝ眞砂路をゆく

○　神奈川　小泉富江
今日もまた雨に淋しき秋の日の眞午靜かにびはの音きこゆ

○　札幌　俣野恭子
電のきらめき青き夕暗の草の原による狂ひ女の笑み

○　仙臺　南滴壽子
中舗の高く聳えし灰色の場末の町に冬は來にけり

○　大阪　千草
月落ちし隣家の庭に人群れて何をか議する古羅馬の秋

○　美濃　酒井登美子
秋の日影嬉々とる子の頰にませばわりなく物のあはれをおぼゆ

○　金澤　原ゆり子
小春日や青き空ゆく白雲の美き影はふ大和田の原

○　神戸　森中かず子
胸のとにかけし鏡は誰の來てすがたうつすぞ自らに問へ

○　京都　志田澄子
いざゝらばさらばと君をみ送りてかへる夜道の汽笛かなしも

○　名古屋　綾路
くりの實の庇うつ音たえ〴〵に夜のかねひゞく山寺の秋

○　小石川　中野白露
栗の實の軒端におつる音くれて秋風さむし鷄頭の花

○　横濱　安川ひさ子
草木みな御袖によりて秋姫と別れ惜しむや野邊の朝露

○　大阪　愛花
しみ〴〵と姥が涙の物語り聞きぬ山路の掛茶屋にして

○　大阪　荒木よし
夕ざれば紅葉みだるゝ鐘宗につゞく細路のほの白き色

○　布哇　淺海薫の人
船等みな煙吐き居ぬ靜かなる朝の空氣の港の中に

○　柏木　露香
木立深うひともと咲けり女郎花古き御堂のたそがれの路

○　東京　大淵きく枝
てりそへる月をば夜々の友としてきぬたうつなり村の少女子

○　神戸　梶原みつゑ
疲れたる身をよこたへて旅の宿文かきをれば雁なきわたる

○　麹町　牧野銀杏子
行秋の午後の日影に落ちたきつ瀬のはやなみのひやゝかに鳴る

○　赤坂　田中靜子
珍らしき秋のみのりをよろこびてうたひさゞめく山里の家

○　横濱　原　菊子
植込にこがらなどきて囀れりもの靜かなる小春日の庭

○　廣島　小川　若花
百舌啼けば我古里をさま〳〵に思ひなやみぬ初霜の朝

○　三河　百瀬　正
煙突の彼方に浮ぶ白き雲やゝ黄ばみて秋痛ましき

○　山梨　玉　琴
風なくて落る病葉音もなくいとゞ淋しき初冬の園

○　岐阜　濱郷　とし
白紙すく美濃の少女が唄きよし小川の岸のコスモスの花

○　三島　達山　雪子
猿らが木の實とり集む空洞木に酒醸むらしも木の實とりつむ

○　京都　大井　光子
夕されば窓に凭れて寺の鐘みちてくれゆく故郷おもふ

○　府下　雲井　露子
エプロンに涙ふきつゝ羊守るをとめは去りぬ夕日の牧場

○　弘前　百合　佳芽子
月の宴こき緋の帶の七人がつゝみ拍子に菊の香ゆらぐ

○　愛知　ますみ
風寒き夕の欄に眞白帆の影消ゆるまで眺めつるかな

○　四阪島　渡邊　椿子
川下の夕日彩霞うすれ行きてゆるき瀬いそぐ宇治の柴舟

○　千葉　加瀬　嘉子
冬來れば南緣にいでゝ人形のちさき衣など縫ひたりし我

○　土佐　吳尾　峰子
蟲鳴きて秋雨ふりて菊枯れて今年の秋もいつしか消えぬ

○　大阪　ちどり
すむ空を見つめてあればわが瞳奪ふが如も秋の日のくれぬ

○　豐後　菅原　芳子
枯れ葦のそよぐ岸邊に千鳥追ふ浦の少女に夕時雨する

○　横濱　草ひばり
湖沿の町は眠りて月ほそくやゝ傾きぬ水鷄しばなく

○　宇都宮　柏崎　明
初秋の山のふもとに咲きける家にさびしく灯はともりけり

○　和泉　岡野　千代枝子
いつはりて日記もしるしつわれにさへ偽ることのいと多きかな

○　京都　ふみ子
姉君の嫁ぎし姿白菊の花にもまして美しかりき

○　河内　林若　柳野子
み佛の家への道に入りし身の罪なき世ともいまは思はず

○　兵庫　富士田　草子
秋の水に夜每落ち來し夕づゝの生れて咲きぬ水仙の花

○　讃岐　浮　草子
調ひしなるの遠音をきゝながら衣はりほす秋日和かな

○　攝津　和久　かつ子
秋の微雨いとなめらかにぬらしきぬみ寺にのぼる石のきざはし

○　横濱　藤森　町子
小波の寄せ來る岸にたゝずみて遠き御國の兄を思ひぬ

○　神戸　石川　まき子
白銀の花のさし櫛うちなけり秋の灯をうけ椅子の欄に

○ 福岡 許斐やそ女
まのあたり歌麿が絵の人を見ぬ奈良は春日野紅葉散るかげ

○ 牛込 平塚白百合
夢をだに美しう見よかにかくにたらはぬ家に生れしわが子よ

○ 豊原 山口天郁子
赤に黄に落葉の形さま〳〵に散り来る庭に我はさまよふ

○ 徳島 小川白菫
菊の花あまた咲きたるかたはらにしばしとめたる乳母車かな

○ 福岡 浦田とも子
月よみは真綿の雲につゝまれて傘の中よりにぶき目あげぬ

○ 群馬 林きみ子
一本の柳小高き枯野原鳴かぬ烏の影のさびしさ

○ 岐阜 牧田しげ子
故郷はわれ生める國野に水に愛の光のたゞよへる國

○ 東京 竹内とみ子
我が指の金剛石の光より生れしかとも冬の月見る

○ 兵庫 古和銀子
赤き花咲きみだれたる砂山に登りて青き海を見るかな

○ 山形 本間しげ子
もろともに月見し去年の歓楽の今は淋しく野邊になくかな

○ 越後 北岡空蝉
たはぶれに結ひて見たる桃割の髪にふさはぬ姿恥し

○ 伯耆 佐々木とさ子
吾が欲りし美しき衣子等に着せてうれしうなりぬ吾は子の母

○ 京都 高木紅露
星の子の落しゆきつる菊一つ淋しく匂ふ初霜の道

○ 羽前 野口菊子
なつかしきなぐさめ言を耳にして思ふがまゝに泣くがうれしき

○ 門司 瀬宮はるみ
すてられし我かのごとく山茶花の花散る夕傷ましきかな

○ 舞鶴 なでしこ
新しき墳墓に露の少しよて手向けの花に悲しみの湧く

○ 神戸 井口久我子
霧のなかに月あるらしの春の夜は遠鳴る海のひゞきに明けぬ

○ 近江 浅野重子
晩秋の夜はかさ〳〵と落葉す君を思ひて淋しき夜かな

○ 福岡 岡田雅子
夕げたく里の煙に日は暮れて尾花が末に淡き月見ゆ

○ 大阪 みどり
そのかみは故なきことに興じつゝ笑ひはなやぐ少女なりしが

○ 出雲 長野房枝
晩秋や文書く窓に興そへて風無き庭に桐の葉落ちぬ

○ 徳島 中尾たみの
きり〳〵と時計のねじの鳴る音に似る百舌鳥啼きて秋寒のます

○ 堺 清水雪子
山深く友なつかしみ名を呼べばこだまにかへすひえどりのこゑ

○ 青森 小野寺みのゑ
わが二十人のねだみを聞くことも少くなりて心寂しき

○ 下野 片岡孤子女史
さふらんのにほひするどき板敷の下に蟲鳴く夜明けのころを



日記文

霜月の一日

東京　わか紫

よべの雨が名殘なくあがつて美しく晴れた。山茶花の花を四十雀がつゝついては散らして居る。今日は花枝様がお暇乞にいらつしやる筈なので、奥座敷を掃除して置く。日當りの良い緣側で、お祖母様の白髮を拔いて上げたら、御褒美にとカステラを下さつた。いつ迄、子供だと思つていらつしやるのだらう。夕方になつて花枝様が御見えになる。「只今迄は長々とお世話様になりまして、何卒この後とも御見捨てなく」と、いつも笑談ばかり言つてらつしやるお口で、スラ〳〵と淀みなく御挨拶なさる。最う一軒參らなければなりませんからと、お起ちになる。餘りに御愛想もなくて殘念だつたけれど、お引止めする譯にも行かないので、玄關迄お見送りして、「あちらからもお便りをきつとよ」と念を押すと、「貴女もお忘れなくね」とニッコリ。露を浮べたお目ながら、何處となく希望に輝いた眸をジーッと伏せて、「御機嫌よう」と車にお乘りになる。行手に光り滿ち〳〵た花枝様の後姿の見えずなる迄、門に立ちて、幸多くお榮え遊ばせよと祈る。（一等）

落葉日記

信濃　ときわ木

白菊を持つて母様のお墓へ詣る。今度は久しく御不沙汰したので、先の花はすつかり散つてしまつて花筒が寂しい。銀杏の葉が落ちてそこら一面眞黄色。見上げると二本の大銀杏が金色に映えて、儼然と聳え立つて居る。風があるので絕えずハラ〳〵と落ちて來る。母様の墓前に坐つて落葉の中から墨色の濃い墓標をぢつと見詰めて居ると、何だか寂しいともつかず、悲しいともつかず、妙に夢の樣にぼうッとなつて了つて淚も出ない。

前の道を通る人聲にフッと氣が付いて見れば、もう、日は沈んで薄い月が出て居るのに驚いて、今更の樣に又沁々と墓標を眺める。見かへりがちに、とぼ〳〵と落葉の中を出た。寒い風が身を襲ふて山が急に曇つて來た。今夜は時雨になるかも知れない。（二等）

雪降る夜

千住　竹内とみ子

お風呂から上ると直ぐ、冷たいお廊下を踏むでお部屋へ行く。靈氣な玉火屋の光を浴びて、母様は待ち侘びたやうに火鉢の灰を搔きならして被居る。「マア長いお湯だねえ」と、笑ひ乍ら二人は膳を圍んで坐る。母様はお箸を上げ乍ら「今夜は淋しいから久し振りで千鳥でも合はせやう」と仰有る。正面の床側に嘗ては二面並べてあつた爪琴の一つは除かれて、青銅の一輪差に山茶花のみが侘びし氣に匂ふて居る。おゝ懐かしい姉様――未だ家にも人にも馴れないで、今夜のやうに雪の降る晩には針持つ手もたゆたひ勝ちに、嘸ぞ此方の事など思ふて居られやう、と、

忘れられて居た淋しみが、ふと胸に湧いて、私は何とはなしに涙ぐむだ。(三等)

小春日

熊本 白萩

柱時計が二つ鳴つた。先刻羽織を脱いだのに顔が火照つて仕様がない。今少しで袷を絎けて仕舞ふのだけど、針を置いて縁に出る。高く／＼澄み切つた空に清々しい昼月の影が淡く浮いてゐる。彼方の籬回の籬は紅葉に美はしう彩られてゐる。噫、秋々、十坪の庭にも豊かしい秋の色はゆらいでゐる。ヒラ／＼と落葉が零れる。沁み入る様な寂しい秋の氣に恍惚と我を忘れて佇んだ。

お姉様と何時の間にか遊美ちやんが歸つて來て、袂に纏りながら、今日の日曜には是非山へ連れて行つて頂戴、と、可愛い笑顔……。學校の歸途に摘んだらしい可憐の野菊が、お下髪に挿されて萎れて居る。(秀逸)

農村日記

埼玉 内田露子

二日 快晴 妹の仕度をすまして學校へやる。露のある桑葉を除けながら行く秋雲が綿に浮いて美しい。野菊の花が道を閉いで居る中を山の畑へ急ぐのが見える。掘りかへされた土の處々に紫のリンドウの花が可愛らしく咲いて居る。

正午迄に中分過耕作し終る。秋草の上で飯を喰べる。周囲の雜木林の紅葉を見ながら、ほんとに秩父つて山だらけな所だ。彼の山一つ越した

ら廣い海と云ふものも、永い／＼線路を走る汽車も、黄波千里の平野も見えるだらうに、あゝ山がいやだ都へ出たいと、下らぬ事に想を走らせる。

夜一時迄、女學世界を讀み耽ける。疲れた身の歎きゝつゝN様に御便りを書く。(秀逸)

まよひ

相模 やよ子

冷めたい秋風が身にしむやうに寒い。袷の上に羽織をきる。昨夜れむれなかつたせいか、頭の重いこと。窓によつて萩の露のホロリ／＼落つるのを、無心にみつめてゐると、婢が「お父様がお召しで御座います」と呼びに來た。あゝいよ／＼御返事申上げなければならない、伯母様はこんな良縁はない、はやく嫁いた方がお前の幸福だよつて、頻りに、昨日も言つて入らした。冷めたいホームに泣いて暮らすよりは、やさしい夫の愛を、一身に集める身となつたら、どんなに幸多い事だらう。けれども、若し母様のやうに薄命に泣いて、悲慘な世を終るやうな身になつたら。あゝいやだ／＼、其を思ふとほんとに私は、何うして可いのだか、分からなくなつてしまふ。(秀逸)

姉上の結婚

東京 渡邊とみ

十一月六日。姉上の婚期も愈々明日となつた。母上と三人、茶の間で種々の物語に耽る。「早いものだれ、私のお乳に取付いてゐたのは、まだ昨日の様だのに」不意と母上はかう言つて笑はれた。姉上も微笑まれた。私には笑へなかつた。滿足氣な母上の、光澤のない髪の毛と、瘦し

まうな姉上の美しい綠の髮とを見比べた。噫、母上にも曾ては姉上の様な時代があつたのだ、而して姉上にもやがては母上の様な時代が來るのだ。

時代と運命—の語が今更の様にひし〳〵と感ぜられた。

黃ばんだ、弱々しげな日光が窓硝子を通して靜かに射る。風とては殆んど無い、穩やかな秋の日の午後である。

敎室日記の一節

小石川　小川すみ子

二日　鐘子さんが「コスモスの丈一丈や秋の風」といふ句を書いて「さあ」と言つて自分の手に渡す。「結構です、丈一丈やが振つてゐます」と評をつけて返す。先生が見えたので、眞面目になる。

今度は自分が「武藏野や僧一人行く秋のくれ」と書いて渡すと、「晩秋の景がよくみえます、佳作」と評してよこす。自分ながらをかしくなつた。

四日　花枝さんが「何かいつて頂戴」とそばへ來る。「平安朝の婦人は蠟細工ですつて、現代の婦人はれエキスプレツシヨンですつて、外形必ず美ならずとも中に漲る血あり、何事かなさん〳〵の念が燃んで活氣に充ちて居る。」と言ふと、「氣に入つた〳〵」と、滿足して去る。午後は鐘子さんと花枝さんと三人して美と善との性質を論じた。

秋のひかり

大阪　千代女

黃色に色づいた桐の葉に、淋しい秋の日光が斜に照りつけると、私はあゝ又暮れるのだと思ふ。覆いて家へ入ると、もう中は暗くなつて居る。

井戸端に鳴きしきる虫の聲が聞える。抱いて居た、生れてから三月ばかりの和ちやんを、靜かに眠らせてランプに火をつける、ウーと火のつく音も秋の夕べと云ふ感を起させて、靜かだ。今閉ぢた雜誌に、秋風が通つて居る。外へ出ると御飯を炊く竈の烟が、すつきりと晴れた秋の空に解け込むように軒に漂ふて居る。あゝ又今日も暮れた、明日もよいお天氣らしい。

收穫日記

靜岡　梅子

溫い寢床に面白い夢を見て居ると、又起された、臺所はお母さんがして下さるから、草履引かけて南の田へゆく。まだ薄暗い空には、星の瞬が頻りである、踏みしめる足先が、ヒリ〳〵痛い、稻の上には霜らしい物さへ見える。田では下男達が籾干すのに大騷してゐる。五百幾十枚の莚を並べて、籾を干すのだから可なり面倒だ。やつと干してしまふと、山の上へまぶしい朝日が現れた。家へ歸つて賑やかな朝飯がすむと、男は皆野へ行つてしまふ。

そのうちに雇つて置いた稻こぎの女が二人來た。一人は十五六の少女で、こはれた枕割に赤い鹿の子が穢なかつた。一人は三十餘り、五つ許りの男の子を連れてゐた。晝道傳ひに田を敎へてやつて、私は家へ歸へる。下男達の辨當こしらへと、干した籾を夕方までに三度攪げ直すのがお母樣と私の仕事。

夕方西の空の底が變に暗くなつた、どうも怪しいなあと、隣の小父さんが言つた、二三日も降つて吳れると私だけは有がたい。

雨の日

札幌　俣野恭子

朝、サラ〳〵と冷たい音がして又闇になつた。一葉々々さゝやかな音たてゝ、紅葉が散る。悴しい日だ。律子様は此様な日がお好きだつた、と思ふと、又涙が湧いて來る。霞がかつたお召、緋のおみ帶、ハイカラなローヤ巻の姿が歴々と眼の前に、チラつくので、堪らなくなつてオルガンに向ふ。

「今日までも、もろともに。
ながめし窓の、ゆふ日かげ、」

夜、讀みさしの獨の葉をハタと伏せた、微かに雨がきこえて、暗にも紅葉は散つて居る。

背貝摺の書籍から三つ四つ取つて火に落す、鋭い音が鼻を打つ、すうと上る白い煙の中から、獨の寫眞み見詰めて又律子様の事を思つて。あの四人のうち幸枝様、文様は結婚されて華やかな家庭の女王となつて居られるのに、律子様はと思ふと、しみ〴〵淋しくなつた。

田舎の一日

駿河　若葉

六日、試ひし如き小春日和、朝早く佛壇へ香花を捧げ參らす。亡祖父の忌日なればなり。十時洗濯、絲繰りに舞ふ。魚屋來る。鰺を料理す。郵便來る、靜岡の姉よりより。午後は母と四疊半にて裁縫、冬物の支度なり。三時鈴子さま近くお嫁ぎ玉ふ由母より承る。幸に琴瑟和し玉へと祈る。五寸の樹頭より微風吹く、木の葉頻りに飛ぶ。盆栽の楓美しう紅葉す。五寸の樹にも秋は訪づるゝなり。父は相變らず園藝の手入、例の水仙は青き芽を出しぬ、菊花眞盛り。

この夕、夕焼美し。この頃の落日は人をしてゆるやかなる満足を覺えしむ。明日も快晴ならん。夜、雑誌など繙いて思はず時を移し、寢につきしは十時過なりき。

小春日和

金澤　美穗子

何の風情もないけれど、絲の目美くし小庭には小春の日が暖かに照り渡つて居る。生き残つた蠅が夢のやうに障子を打つて、小さな音をたてて居る。緣側に並べた座ぶとんのポカ〳〵とあたゝかいのに坐つて日向ボッコをしながら「落花の雪にふみ迷ふ交野の春の櫻狩り、紅葉の錦をきてかへる、嵐の山の秋の暮、ましてや恩愛のちぎり淺からぬ……。」と、大好きなのを小聲にいつてると、母様が、「私がれ小學校の時分、何でも視學官がいらつしやるつて大騷ぎした事があつたの。その時にそれを諳誦して大變ほめられたつけ、まだ覺えて居るよ。」と仰有る。私はぢつと母様の忙しさうにしてらつしやる御仕事の手元を見ながら、母様の少女時代を想像して獨りほゝゑみました。

秋の光り

東京　大家きくゑ

兄上の洋服や靴を揃へて置いて、私は朝のお化粧をするため、柔かい秋の日光を受けた南緣に鏡臺を持ち出した。百舌鳥が一聲勇ましく鳴いたので、ふと頭をあげると、垣根の萩が、露一升に花一升で枝もたわゝに、眞珠の様な白玉がホロ〳〵と落ちる。九つになる妹のスミちやんは燃える様な緋のリボンをかけ、弟の登は日の丸に日韓併合の四字を彩つた旗を持つて、「今日の聖き日は大君の生れ給ひし聖き日なり」と活き活きした聲で唱ひながら輝げる様に學校の方へ走つて行つた。私は生氣に滿ちた此の國民と、皇化のあまねきに、思はず嬉し涙を落した。

ねだられ日記

信濃　菊香

あら又花がねだり出した。これではやりきれない。一斤の御菓子が二日しかないのだもの。といつて近所の手前泣かしてもおけず、松やに買せて又明治堂へやる。

裏門から勢よく歸つて來た兄の一郎。蔵具皮鞭で當選の番を貰つたから是非御褒美をとの注文。いくらなだめてもすかしても聞かばこそ、地だんだふむやら、反つ返るやら、果ては大聲上げて泣き出す。御父樣に伺ふまでといへば、買ひに行く約束で、青木君が外に待つて居るといふ。鳥籠の口があいて一羽飛び出した。

地震

東京　幸子

廿五日、午前三時中强震があつた。家は三階なので動搖が劇しい。足が惡くつて兩杖でなければ歩けない妹も、地震の時ばかりは一番先に跳ね起きて、ひき蛙の樣にピョン〳〵手をついて歩く。みんな二階で寢るから階子段の混雜つたらない、十人の家内が一時に降り樣と周章狼狽、まごついて居る中に地震の方はいつか止んで了つた。お祖母樣は、「九は病、五七の雨に四つ日照。六つ八つなれば風が吹くなり、今打つたのは三時中、昔の七つだから雨だ」と有仰る、果して五分許り經つたら雨が降り出したので、老人の言ふ事だなんて馬鹿にするものではないと思つた。其内に安政七年十一月九日の朝、お祖母樣がお釜を洗つてゐたら大地震があつて、磨き砂のついたタワシを持つたまゝ外へ飛び出したと、其當時の話を具々となさるので　私は眠い眼をこすり〳〵生返辞をしながら聞いてゐた。

嬉しまぎれ

豊原　山口天都子

郵便と、甲高な聲がした。障子を開けて見たら小包。受取の印を押さうと思つて家早く机の中を探したが、氣が急く作爲か見付らない。配達人は普通小包だといつて置き放しに出て行つた。それを幸ひにして取る手も早く小包を開けた。中身はホワイトローズに優る簪。先頃の案内狀には今東京でこれが流行だと書いてあつた。指して試たさに、直と廂髮を崩して、態々銀杏返に結ひ始めた。寫眞でも寫す時の花の樣に其の簪を麗々しく大事に持つて鏡の前に坐つた。結ひ馴れない作爲か妙に格好が變に思はれる。元の廂に結ひ返さうか、それとも、この簪を今指さずに後まで暫く仕舞て置かうか、さうしたら、その内に流行がすぎて了ふかしらと色々氣を採んだ。

夕暮の記

愛知　早川麻子

八日　生花會の歸途麻子さんに會つた。强いられて少時お邪魔をして居る中に、夕暮になつた。早速お家を出て歸ると、力なげな冬の夕陽は細く長く、神島の町を照して居る。町を出る時分にはもう衆の聲も聞えない。靜かな冬の街道を何處からか、入相の鐘が響き渡つて。向くともなく後を振向くと、日は早や西山に落ちてゐた。

二十日　家の定さんは鍬を提げて、土まみれな脚絆をはいて歸つて來る。日は鈴鹿山に沈みかゝつて、餘光は赤く土藏の白壁に映つて居たが奥入部の裏口から青い煙が出たかと思ふと、もうメツプリ暮れ果てた。



美文

幹事會

神田柏子

今日は午後から幹事會が有る筈、生れて初めての幹事故、心配でならない。皆様さぞかしお綺麗にして御出の事であらう。遲くなつたので急いで車をお茶水に走らす。例に依て花井様の御早い事。まだ辻様はお見えにならない。丁度一時半頃皆様御揃ひになつた。幹事の下相談なんて實に笑かしいものだ。會費は今迄三十錢だつたが、今果物が高いから五十錢に上げませうか、然し高すぎて是が例になつてはといふ所から、鬪様の發起で五錢上げとして振つて居る。肝腎の一時間かゝるやかゝらず、後の四時間は雜談に走つてしまふた。ふと一人がもう五時よといふと思ひ出した様に皆衿かき合せ、一様に手をかざす。何といふ皆様の御手の美しいことだらう。ダイヤ、眞珠、ルビー等思ひ〳〵の寶石が我劣らじと光つて居る。思はず自分は手を引てしまふ。澁紙の様な手を引かる度に氣のつまる思ひがした。丁度火點もし頃、五臺の車は東と西に分れた。皆様に遲くまで車を待たして、家では何といふて居るだらう。心配な。(一等)

心配の變遷

四谷紅葉

母上の手づから小さき蝶々に結び給はりて、「そなた枕をはづすまいぞや、其髮あす迄保たさば襃美とせんに」とのたふとぞ。却々に氣にかかりて臥床に入りてもさすがに容易くは得寢付かれざりき。

いつも心して豫習してすら、兎角に誤り勝なる不得手の學課を、久方振に伯母君などの來給ひし折など、つひ〳〵下調も怠りてあけの日は心ならずも鳳様はせしものゝ、あの先生の御目の光らん折何と答へまつらんかと、安き心もなく過せし折もありき。

彌々奧入ときまりし其前晩より三々九度の盃手にする迄の心持、誰しも一度は經驗あるべし。(二等)

同窓の友

京橋幸子

上野行の電車に乘る。ふと向側を見ると、まあ!露さんが!!二人の視線と視線とがパッタリとあふ。私はハッと膝へ眼を落す。學校で仲のよかつた二人は、ふとした事から口もきかなくつて、卒業の時も默つて別れたあれからもう一年! 今かうして遇つて見ると怨みは消えてさすがに懷しい。眼を上ると露さんもぢつと私を見てゐらつしやる。思ひなしか其お瞳には情を含んでゐる。露さんと呼んで其隣りへ並びたかつたけれど、足は重りをのせられた様に動かない。二人の間には越え難い溝が

出來て了つたのだ。須田町へ來た時つと立つた霧さんは、私にお辭儀をして下りて了つた。後で、あゝ霧さんもやつぱり私と同じ思ひをしてゐらしたのだと思ふて、言葉を交さなかつたのが口惜しくて、後姿の見えなくなる迄見送つた。(三等)

かへり路

信濃　ときわ木

果敢く話につきせぬ名殘りを惜みつゝ、さらばとばかり、ステーションさして夕ぐれの路をいそいだ。

例の赤切符買つて乘り、矢の如く走る列車の窓から、後になり行く下諏訪を眺めると、湖水には數々をなした町の燈火が流れて、さながらの水晶宮。

鹽尻へ來た頃、まんまるな月が出た茅の軒に柿紅葉の散るのが見える。

松本々々とよぶ驛夫の聲に驚かされて、狼てゝ衿かき合せ、千代田袋を引よせた。車中には長途のつかれか夜舟漕ぎ給ふ君も少なくない。(秀逸)

曉の渡し

東京　わか紫

有明の月淡く影さした川岸に、ギーく〳〵と櫓の音が冴えて聞こえ出した。「ソーラ」、着きますだ船頭は櫂と竿を替へて舟をクルリと廻はした。「ホーラシヨ」と聲らしいお醫者樣が大きなカバンを下げて岸にをどり上つた。と舟はユラ〳〵とゆれて三尺程岸から離れる。鎭守の森が白んで鳥が二羽バタ〳〵と飛び出す。「霧さん氣の毒だが頼むぜ」、東京らしい若者が乘つた。「オーヨウがすとも」、「この霧ぢや國分寄へるだらうな」、「何あに慣れつこでさあ」、煙草入を腰にはさんで「いゝかれお客さん」、又ギー〳〵と靜な曉を破つて。霧さんの腕は動き出した。(秀逸)

姉の里がへり

牛込　平塚　つげ枝子

掃除もすつかり出來た。茶室への通ひ路にはわざと色よい紅葉を二三片苔の上に落した。お迎へには弟と妹と爺が車をそろへて一時間も前から出かけた。

母樣は何日になく落付いてゐらつしやらない餘手にお肉かと思ふと茶の間へ。二時がなると一寸お腰が落ち付いたので、お縁へ行くとみち代、一人旅にやつて三人になつて歸つてくるなんて家も大騷ぎだれ、彼嬢はどんないゝ子だらう、寫眞より十倍もなんて云つて來たのだからと如何にもおうれしさう。

お父樣はと見れば庭をあちこちやつぱり待遠しさうに停車場の方を見てゐられる。時計を見るともう一分。待ちあぐんで心持まがつた遠棚の盆栽物を通して縁に出ると、菊の花壇をゆう〳〵とんでる蜻蛉迄非常にまだるつこい。(秀逸)

秋風

豊子

秋風吹きそめぬ。一日、百舌の聲をきいてより、いとゞ秋めいてけり。

花の頃、友と日ごと摘拾ひし餅が岡の邊、昨日の姿今いづこ。あはれその花の影。

あゝ一陣の秋風、枯葉を玩ぶ者、悲哀の曲か、呪ひの歌か。花の時、花に舞ひ香に醉ひし胡蝶の面影あはれや。

花は枯れはてゝ、風に翅の支ふべくもあらず、吹かるゝまゝに漂ふ如き見ては、そゞろ昨日の榮華のしのばるゝ。

初旅

相模やよ子

朝から秋雨がシトシトふつてゐる。一夜の雨で桔梗の落葉も色があせたやう。昨日も行つてきたけれど、もう一度母様のお墓へいつてみたい、縁にたつてぼんやり考へてゐると、靴音たかく格子があいて、「荷物はいゝか、九時の夜行にしたぞ」勇ましい夫のお聲。あゝ八時間の後にはすみなれた都をあとに異郷の空、竹敷のはなれ島へ……なんだかむやみに悲しくなる。泣き顔みせてはお手傳ひの姑様に御心配かけるばかりと、がまんをすればする程はまつ毛を溢れさう。あゝ生れてはじめての長い旅、今宵結ぶ草枕の夢はどんなであらう。

夕暮れ

星野すみ子

木々の葉は散つて、秋は去つた。鉄の様な柘榴の木には、取り残された實が三つ四つ、「霜に萎びてついて居る。光の薄い冬の日は、西へ西へと流れて、こゝ場末の街の夕ぐれは迫つて來た。忙しくきしる牛乳配達の車の音も、高く賣り叫ぶ豆腐やの聲も遠ざかつて、灰花の暮色につゝまれた街は、次第に寂びれて行く。落葉集めて焚く煙の、吹く風に亂さるるのを見て、思はず私は首すくめた。

歳暮の街

本郷彌生

あはれ歳は暮れんとす。行き通ひ繁き都大路は、春まつ飾賑々しく、走るが如き人の足、飛ぶ如き滿員電車、物賣る人の聲、實に都の暮れこそ忙はしけれ。

美々しき絹あがなふて春を待つ人は嬉しからんも、露店にひさぐちん餅を背に買ふ稚子にせがまれても思ふにまかせぬ親の心はいかに。時は刻々にせまり行く。

晩秋

駿河若葉

鈍い夕日を浴ひながら私は鎮守の大銀杏の許に立つた。日は今山の端に舂いたばかり、鳥居の影が長く長く地に曳く。

あゝ秋も老いた。木の葉は大分散つて了つた。梢は枯木のやうに、枝の間から空が覗かれる。何の樹か知らないが美しう色づいてゐる。落葉は彼處に一團、此方に一團、

銀杏の葉がはらはらと散る。手を翳して高い梢を仰ぐと、まゝ葉が舞ひ散る。

紅葉狩

芝みよ子

行けども行けども林はつきず。右も左も緑したゝる許の松や杉のみにて、紅匂ふ色は見えず。「兄上よ、たづぬる林は如何に、まだ遠きや。」など餘の言へば、妾も何とはなしに、あくがれし心うすらぐ樣なり。獨り元氣よきは兄上は「さないひぞ、今少しぞ」とのたまふに力得て、小草の蓬分けつゝ行くに、やがて眼界廣くなり、ぱつと明るきに驚きて見れば、あな嬉し大きなる小さなる打まぐりたる木々の梢は黄色にから紅に所々に緑の木の交るは一入めでたし。下には山の裾めぐり來る名無川。丸き小石につまづきつゝ走る水をくゞる三片五片。古の名歌もおもはる。

親心

藤岡あや子

千代子を守に負ぶはして。出した秋の朝日はの靜かに小庭の盆栽一面に照して居る。お緣を拭き終つて、床の生け花を一寸直ほし、障子を明けはなして一寸落付く。お乳が張つて來た千代子は歸らない。そこへらに居るかと外を見渡はしても居ない。早く歸る樣にとあれだけ云つて有るに、あの守にも困る。自分で面白い事でもあるといつ迄も歸らないので……。縫ひかけの羽織を出しても手につかぬ。人が大きな聲をして走つたので胸の動悸が高ぶる。電車にでもぶつかりはしないかと心配でならぬ。外は元の通り靜かになつた。

冬の朝

牛込輝子

河向ひの草屋から、朝げの煙がゆるやかに昇る。「お爺さんお早う」「オヽ大層とんかせいが出るのう」。こんな事を話しながら、二人は眞白に置いた霜の河原道に、二筋の車のわだちを殘して、西と東に別れた。何所かでコケッコウと鷄のなく聲がする。

秋晴の日

三河貞子

「おばちやん」、「おや文ちやんお一人！ 母樣は」、「今あとからいらしてよ」、眞赤のリボンを前に大きくつけて、ふさ〳〵した毛がかたをなでゝゐる。「文ちやんお花取りに行きませう。」大柄な友染のお被布の上からふんわり抱いて庭下駄はいて下り立つた。亦白黄さま〴〵に艷を競つて咲き揃つてゐるのをうつとり見てると、「あつおばちやんあそこに蝶々が飛むでてよ」。お人形の樣な手を指差をする。まあその目！ 口!! 私もほんとにこんな子供が欲しいと思はず頬に顏を當つた。「奥さん大層よいお天氣でございますればはつと振り返ると、咲き亂れたダーリヤ畑の所に、芳野の奥さん――文ちやんの母樣はにつこり立つて居られた。

冬の朝

神戸百合香

おゝ冷たい事。今朝は畑に霜が眞白に降つた。裏の折戸開いて小道づたひに天神のお社へ参詣する。自分の鳴らす鰐鈴と拍手の音が澄んだ朝の大氣に靜に漂ふて行く。社前に額づいて居ると、頭上にザーと一しきり松風の音。立ち上つて境内を彷徨ふと、掃目美しうはき淨められた地上に、山茶花の紅い花瓣が二三片散りしいてゐる。老松の幹によつて

眺めると、前の樹林を通して白い波がしらがチラ〲見えて、磯うつ音が夢さうに聞えて來る。朝來の風に其處の褄に溜つてゐる枯葉のからからなるのを、羽織の袖かき合せて只ぢつと聞いた（須磨にて）

順禮

徳島　中村玉野女

下駄を穿いて裏口へ出るともう日は暮れかけてゐた。門先の落葉した櫻の木の蔭にぼろ〲の袷を着た女の子が一人シヨンボリと立つてゐる。私が門を出ると默つた儘ヂロ〲と私の顔を見上げてもじ〲してゐる。「お前どうしたの、お母さんも姉さんも居ないの」「あゝ死んぢまつたの…妾一人順禮してるの」かう答へた儘矢張り凝と突立つてゐる。私は可哀相になつて挿してゐたリボンをちぎれた前髪に挿して遣ると、さも嬉し相に手を髪に當てゝ輕く叩頭した儘向ふへ行つて了つた。父も母もなく一人淋しく暮してゐる私には、此順禮の子が一層可哀相に思はれて、丘に、近ひ細径をトボ〲辿つて行く後姿を見送つてゐると、冷たい涙が頬を傳つて零れ出た。

冬の夜

岩國　あい子

星は澄みきつた空にぴか〲と輝て居る。天の川まではつきり見える。冷い夜風がすうと身にしみ渡る。思はずぶる〲と身顫した。此の廣々した清い空を眺めると、無限の感に打たる異感に襲れむたも、此の尊い自然の美に接しては、いつの間にか美化する樣な氣がする。

千有餘年前、ナザレの賤者がユダヤの一小村ベツレヘムのサマブネの中に生れ給ひし夜もちようど今夜の樣だつたらう又ユダヤの野に羊の群を守つて居た牧人に天使が顯れ夜中もやはり此の夜の樣に美しく星が輝いて居たであらう。

星へは昔が忍れて懐しい。クリスマスも、も早直である。

雨の寄宿舎

横濱　李花子

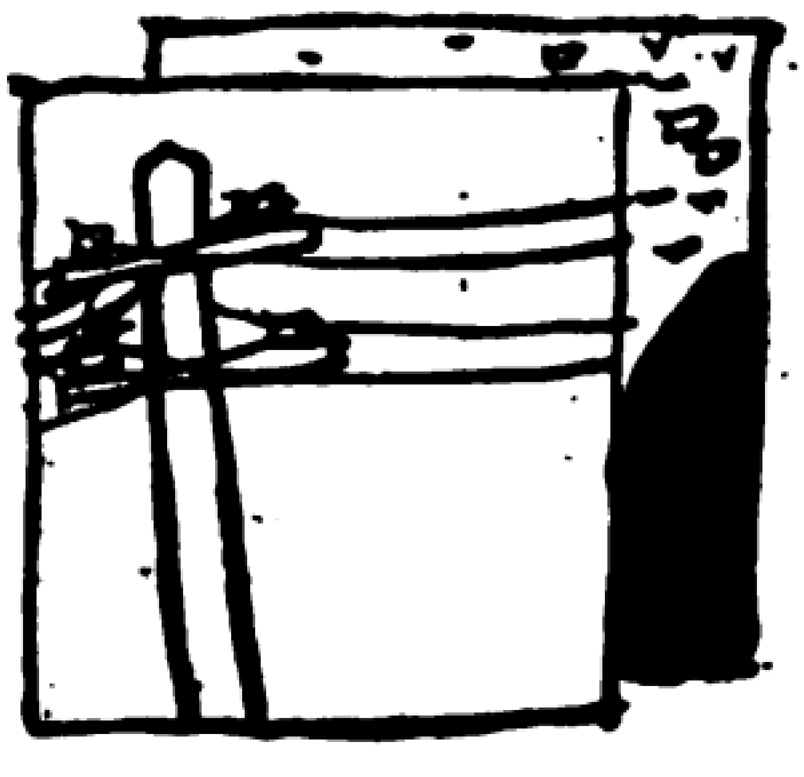
亞鉛屋根に落つる雨だれの音、向ふの仕事部屋からもれて來る小唄のひゞき、物の音といつては、其れ許り、何と云ふ寂しい日であらう。二百あまりの活氣に充ちた少女の姿は、何處に隱されてしまつたのかしら。すき透る樣な、その聲は何うして此所には、ひゞいて、來ないのだらう。靜かに眼を、ひらいて味もない白い電氣の球を見上げた。何のインプレッションもない。けれど、あきもしない。いつまでも、こんな狀態でありたいと、思つた。

友の愛兒

小石川　小川すみ子

芳ちやんか、今か三歳の可愛ざかり、「叔母ちやん〲」と自分の袂にもつれて居る。

自分が辭して歸らうとすると、「叔母ちやんイターイ」と泣き出してあとを追ふ。どこまで來ても歸らうとはいはぬ。愈別れる筈で美しい林檎買つてにぎらせると、反て、別れを拒む。「困つたね」と自分は、ついて來た女中と子供を中に往來に立すちくんだ。



書簡文

別れし友に

ひなぎく

言はぬは言ふに優るとかや。千萬無量の感慨を只「御機嫌よう」の一言にをさめて送り參らせし切なさ。筆紙のよく盡す所に候はず。久しく住みなれし地を去らんとする際、多くの同僚まては數へ子に送られ給ふ君の胸中推し參らせては、さしぐむ涙そと押し拭ひ候。あゝされど君は自制の人にて御座し候よ。日頃情にもろき人とも思はれぬ許り心強くも笑顔もて別れ行き給ひし君、草の島境をはなるゝや熱き涙瀧つせと流れけん。汽笛一聲空しき烟を殘して、すげなく走り行く車、恨めしげに見送り、打ち送れて、プラットホームを出で候へども、我無言是無言、おのがじゝ樣々の感想に打たれつゝ歸途につき候ひき。並べし机も一つ數を減じ候。夕暮など淋しさ一としほ身にしみ候。

御境遇も全くかはり、風土も異る都にのぼり給ふ御事なれば、殊に御身おいとひ遊ばされ候樣念じ上候。（一等）

福引の模樣を

駿河　若葉

花子さま天長節には處女會の大會がありましたよ。福引の餘興は隨分面白うございました。私の引きましたのは日韓合邦といふ題で、畫帖に牛匁、時節柄面白いでせう。鈴子さんのはわしとお前は只二人といふので、鍋よ。高子さんのは私しやあなたのそばがよいで千壽鈔。幸子さんのは女子に貴ふべきはといふので太い竿が三本、操といふ謎だそうです。平片先生が思ふちやゐれど言ひ憎いといふ鐵に當つて、羽織の紐を取られたのは嗚呆でした。太田先生のは峰の松風、琴でも出るのかしらとみんな見てゐましたら、峰の松風音ばかりといつて馬穴を戴くんでせう。それはお腹の皮をよりましたよ。都の天長節の有樣何本詳しくお知らせ下さい。待つてゐますよ。（二等）

ひなの從妹に

やればせを

今日母を無理に三越まで引張り出し候。偶に參り候ても、彼の帯も、此の衣もと、垂艇三尺―。とかくに顧みがちに候を、日に〳〵眺めながら平然たる女店員には、ほと〳〵感じ入り申候。早や御罔近らしき模樣の御羽織無しの御高髷、母君とひそ〳〵語らせ乍ら歩み給ふも候へば、さして御買物もおはしまさぬ樣なる、殿方の厳めしき御髭、眺め候ては、思はず首傾けられ申候。緣無しのお眼鏡に金の鎖の美樣が、實用切三つ四つ持ち給ひて思案の御樣子見參らせては、何時迄も〳〵氣保りにて居まほしう、老輩も皆にあらじと存へ申候。「この衿を一つば下さい」とステの衿一掛に、貴耕の財布摑み出す人も見受け候なれば、流樣、ゆめ〳〵御力な落し給ひそ。ハイカラ君も私らも三越にとりては皆同一の客に御座候。かしく。（三等）

冬になるとて

大阪　千代女

冬になるとて、私は心が急いで仕方がございません。あれも縫はればならぬ、これもせればならぬと、心のみ急がれて、針を取ると、チリンチリンとすぐ豆腐賣りの鈴が聞える。起つて障子の間から西の空を見ると何の夕燒もなく、鉛色の雲が重り合つて、そして暮れて行つて了ひます。あつけないと言ふよりは、何の言葉もございません。あゝもうすぐ冬です。夏には秋になるとて、急いだ私、今は冬になるとて急いで居ます。もう蟲の音も聞えなくなりました。冷めたい灰色の冬も並二旬か三旬の中に參りませう。（秀逸）

友へ返し

牛込　平塚白百合

仰せの如く私も冬物と盥樣掃ひにて日も足らぬがちに、障子張りなども奥座敷のみ漸く手がけたる位。お互樣に昔の空想は破れてしまひました。ヴァイオリンも何時袋から出ます事やら、只嫁入りの荷物となつた名器。しみじみ、太くなりゆく指を見ながら、過去の華やかさをなつかしむ事もございます。けれど師のおほせの、人はパンのみにて生くるものにあらず、私はこんな淋い、而して足らず勝ちな中にも心の滿足はございます。同窓會にもついご無沙汰がちでです。君子樣や土井樣から大凡はお知らせ下さいますので、クラスメートの御近狀も薄々は承知いたしますものゝ、まだ修養の足りぬ私、華やかな皆樣にお目に掛つて、失なせびろやうな事でもと存じまして。庭の片隅に手作りの菊が末枯れて參りました。これからの收穫時は嘸どお忙がしくゐらせられませう。雜木の陰から見える富士が眞白でございます。今朝などのお寒さは薄氷でも張つたのかと存じました。時節柄御身お厭ひあそばしませ。（秀逸）

同窓の友へ

豐原　山口天都子

ねえ、貴女もう一度宇都宮時代を復活させたいのね。彼時の若さ、彼時の嬉さ、つまらぬ話ですが今時分、沁々と味つて試たいと斯ふ私は切に思つて居ます。五十二名、當年の英雄兒、いやお轉婆　今いづこ、廣廣した雲雀野の中の母校を貴女は戀しくはありませんか。彼時のローマンチツクな色彩が今もなほ眼の前を流れて居ますよ。離合集散は世の常と申せ、私は此頃、黄に濁つた海の淋しい夕和を見るに堪へなくなりました。あゝ、下野の山の奥が戀しい。豐原はよい處でしよう。私の古巣ですわ。高尾姬の碑、天狗岩、依然として形は昔と變りますまい。青い山透明の水、[illegible]川を圍んだ翠緑は私のなつかしい印象の一つです。御地の樣子、何か變つた事をお知らせ下さいな。（秀逸）

病院より

淺草　村尾みさを

夕燒の色は淡々と雲間に輝き始めました。電車の響きもなく人通りの少くない病院の周圍は、いと靜かに暮れてゆく病院の窓の、白いカーテンの間から痩せ衰へた女が、暮色の濃い西の空を仰いで、涙を流してゐるのは、今日の姿なのよ。

靜江様、妾は一ヶ月前から白い寢臺に身を寄せてゐます。斯様に寢臺に昇り横たはつてゐると、背は痛むし、外の景色は見たいし、一寸なり立つて見やうと思つて、たび〳〵立ちかけてみますが、足に力が無くて立つ事は出來ないのよ、あゝ何故こんなに痩衰へたのかと足を兩手に抱いて見ますと、足は冷たく、氣持惡い程細くなつてゐるのです。

仕方なく寢臺に横つたまゝ、日光の變化を見たり、硝子戸越しに雨の音調を聞いて、毎日泣いてゐます。

都の友に

鈴木白萩

花に紅葉に浮かれ歩く都の秋が偲ばれます、華やかに舞ふた若い人の姿なんか思ひ浮べると、一とたび斷念めた胸も再び燃え立つて、たまらなくなります。けれども、嗚、けれども、束縛の袴穿いて朝な夕なに往來する野路に、草刈る田舍少女の姿を見ては、是迄にして戴いた父母の恩、身の幸を思はずには居られません、まして夕陽の山の端に暮く頃同じ道を歸り來れば、門に迎ふる、彼の音 あゝ母が、四十路の母が、私の爲めに横に上る慈愛を思ふと奈何して、感謝せずに居られませう。

嗚、最早私は全然諦りました、昔の華美ではありません、今度お目にかゝつたら嘸ぞ吃驚遊ばすことでせう。時々はお便り下さいれ、待つてゐますから。左様なら。

友の許に

東京　幸子

寂しい虫の音を聞きながら再三御手紙を讀み返しました、思出はそれからそれへと湧いて來ます。お互ひに學校時代には前途有望の才媛と囃された二人、今は共に現實の力に押へられる身となりましたのね。あの頃讀むだ雜誌は趣味や早稻田文學など許り、婦人雜誌なんか平凡だわなんて手に取つた事のなかつた私、いつの間にやら自分から求めて婦人雜誌を讀むやうになり、料理法などが載せてあると、今度はこれをこしらへやうといふ風になつて了ひました。本を讀み始めると際限がなくて困ると母に叱られた私でしたのに、此頃ではもう自分から、あゝ本許り讀むでては不可い、女だのにお針を持たなくてはと讀みかけた本を抛り出して了ひます。平凡化したんでせうか、それでも澄んだ秋の空に飛ぶ白いちぎれ雲を仰ぐ時など、若い血汐の沸き返る事もありますわ。やつぱり誰よりも靜様の御便りが一番お懐しうございます。どうぞ、お近いうち復た御手紙を下さいませ。

競技の敗北を報ずる文

小石川　小川すみ子

嗚呼、口惜し、紅は七、白は十三。それでも私共は決して負けたやうには思はれませぬのですけれども、皆様が白が勝つたと申します。何う致しませう、遙かに聲援して下すつた電文の「ヒツシヨウヲイノル」との折角の御心に對して、面目無い次第です。

例の室で、出演者一同歌留に心を鎮めた事、靜まり返つて神の如く清くなつた心を、降るが如き紅ハンカチーフ、沸くが如き喝采の聲に迎へられて競技場に立つた事などを想出すと、私共はそれが過去の事とは思はれませぬ。今現在、否、今なら勝負を爭はんとして居る時とより思はれません。今一度祈つて下さいませ。此度會稽の恥を雪いで見せます。

東都の友へ

島根　岡田しづ子

夏子様昨夜歸宅致しました。貴女と大抵私の歸郷の原因は御察しの事と思ひます。私の理想は餘りに高過ぎました。父や母は私の心を能く知りぬいて居ました。私が父母の意なに従つたのも無理では有ますまい。

夏子様梅木に春がある様に、私達も春の身で御座いませう、春をあだに過したら、末は涙の生涯です。私は境遇に従ひました。失禮ながら、方子様や年子様方の様な理想の高い方の事を思つて御覧なさい、小説の様な夢ばかり見て居らつしやる、其の夢の覺めた時は既に遲咲きの花で手折る人はまれでせう、或は夢見る人は幸福かも知れませんが。

夏子様貴女は私と同じ道を歩まれる方と信じますので、かういふ手紙差上げるのです。ちと、貴女の所感をも伺ひたいものです。

海邊より都の母へ

千住　竹内とみ子

乳母の家は此所の網主とやらで、海山の船が宵から網を伏せに海へ出ます。そして曉の明星が氏神様の森の上まで行つた頃に歸つて來ます。それから、大勢の男女が寄つてたかつて引揚げる網にはいろ〳〵なお魚が朝日に輝いて、それは〳〵見事なもので御座います。大きな鯛や章魚などが掛かりますと、中々拔けなくて網の目を破つたり致しますので家では毎日干し乍ら繕つて居ります。文ちやんも此所へ來てからお魚の名を幾つか覺えましたよ。昨日も美しい藻草に交つた淡桃色の枝を見て母様の根掛けにする珊瑚だと言つて喜んで居りましたつけ。いづれ此の次のお便りには海邊の生活を日記に綴つてお送り申しませう。

入營せる夫へ

信濃　ときは木

御手紙拜見。御機嫌うるはしく御入營遊ばされ、何よりの御事に存じ候。仰せまでもなく、姑御様の御上は勿論、お留守中一切の出來事も、及ばずながら引受けて、御心配なきやう取計ひ申すべく候間、家事には少しも御懸念なく御勤め大切におつくし遊ばさるる様祈り上げ參らせ候。

いかに國民の義務とはいへ、お慣れ遊ばさぬ兵營生活、嘸ぞかし御骨の折れる事よと思へば、女々しき愚痴なれど、御いたはしき心地せられ候。何卒々々、御身御大切に、殊に御地は寒氣ひとしほ嚴しき由なれば呉々も御注意遊ばされ度ねんじ參らせ候。かしこ。

山國より

信濃　淺輪久子

姉様いつもながらの嬉しいお便り、ほんとに有がたうよ。長閑かな海岸に面したお縁の柱に倚つて、詩集に親まれる桃割の美しいお姿が偲ばれて、お懐しさに胸が躍ります。私は貴女の住はれる温い〳〵海邊かな南國が、羨ましくなりません。北國の當地にはもう蕭條たる冬のシーズンが目前に迫つて、見渡す信濃連山の中腹から上は、處々、雪に白くなつてゐます。

昨日は珍らしく好い日和でしたから、日曜を幸ひ、弟妹等と東城山に遊びました。東城山！、貴女覺えて被居いませう。ホラ幼い時二人で茸狩りに行つて、面白さに日の暮れたも知らず、段々道が判らなくて吃

度狐に化かされたんだと泣き乍ら、それでも實際けだつて、眉に唾をつけて道を探しましたつけれ…。その昔なつかしい山の紅葉を手折つて歸途の土產にしました。こゝに封じ込めた紅の葉に、信山の晩秋をお偲び下さい左樣なら。

寄宿舎より姉へ

土浦　稻葉喜代子

夜に入りて歸舍致し候。母なき身の母とも賴む姉上樣よりのお便りおなつかしう急ぎ拜し參らせ候。親よりも情ぞ優る詞はしのお玉章、幾度ながら嬉しさに胸とかき抱きて泣き申候。旅のあらましは、送り參らせし名所繪葉書にある通りにて候。今年は去年より長の路を徒歩あるき致し歸りて皆樣の足の痛むを託ち居候に引換へ、私は姉上樣の御念じにていと健かにて罷在候間、御心配下さるまじく候。今年の愉みは限りなかりし樂しさを親しく旅物語りに申上げ得ざるにて候、是より食事と入浴とを致し、夢になり姉上樣とお話いたし度、早く床に臥し申す可く候旅中のくさ〴〵は改めて明日認め參らす可く、今宵は是にて失禮仕る可く候。あら〳〵。かしこ。

鎌倉より

東京　靜雨

思ひがけなくも姉の誘ふにまかせ、此處鎌倉に參り候。とくより一度は觀光致し度と存じ居り候折からなれば一しほ嬉しく、まづ八幡宮を拜し、貴重なる寶物を拜觀致し候。靜女の片袖、其の鼓などゝながめ居るうち、そゞろ歷史を思ひ出でゝ、あゝかの時用ひ給ひし舞衣なるか、これは彼處の戰に功名ありし太刀なるかと、深く昔の偲ばれて候、國史などを調べんとする者にとりては、こよなき便宜の地と存じ候。

これより長谷の方に遊び候まゝ、委しくは何れ彼處にて申上候。先は取敢ず右まで。かしこ。

友の許へ

岐阜　野菊

親戚の處へ轉宿仕り候。こゝはかの其頃に金波ただよふ風情はなきも呼べば答へん許りの稻葉山、青葉交りにもみづる木々の梢の美しき今日此頃の眺めはまた一しほにて、田園の生活にのみ目馴れし此身には、まこと珍らしきわけくれに候。御地の秋やいかに、暫く御目もじもいたさねまゝに、御なつかしさやる方なく、相共にこの景色愛でんにはと、そゞろに西の空のみ偲ばれ申候、當地の菊も、本年はとりわけ見事の由御暇もおはし候はば、御見物かた〴〵、ぜひ一度御遊來下され度、わが心くませ給はばいではやく。かしこ。

奈良より

美穗子

節子樣。詩趣に富んだ奈良の秋を見すてゝ、龍田姬樣は昨日旅立ちなさいました。萩もすゝきも刈りつくされた庭には、たゞまつ日の菊が獨り高いかをり放つて居る許りでございます。きのふけふ秋に迷ふ鹿の聲の寂しさ。節樣は鹿の聲がお好きでしたわねエ。老けて行く都の秋はいかゞでございますの。御ひまの折には御たより下さいましな。樂しみにして待つて居りますわ。

讀者倶樂部

▲音樂に趣味を持つて居らつしやる皆様、私も下手の横好とやらで大變に好きでございますから、新潟樂器様の御歌の組り樂譜の交換をいたしたうございます、どうか皆様の一番御好きの歌を御教へ下さいまし、譜だけでも宜いのですから、本を御送り下さればすぐに寫して又御送返し致します、御禮には私の持つて居ます譜或は名所繪葉書でも外の繪でも雜誌でも御のぞみのを御送りいたします。――(茨木市萬町川端まつゑ)

▲待ちかれた女學世界がとゞいたので、口繪も見ないで本文を見ると、若葉さんのお書きになつた「結婚後の三年」と云ふのがある、何氣なく讀んで居ると、まあ「懷文」が!!、三年の昔まだ私が女學校の三年生の時、女子大學國文科出の國語の先生があつた、御名前は伊藤つれ子と被仰た、稀やさしい先生で、伊藤先生と云ふのが他に二人もあつたので、つれ子先生と云ふて居た、

或時皆さん作文をうつさして上げますと云て、この懷文をうつさして下すつて、よく女子大學の有様を聞かして下すつた。こゝに書いてある若葉さんとかはもしか伊藤先生と同級の方ぢやないのかしら、つれ子先生はたしか一昨年結婚遊ばしたやうに聞いてる、ほんとに優しい、なつかしい先生だつた、今頃はどうして被入るだらう?。(明石の浦にて千草女)

▲私は小學を終へて後、家事手傳の暇には繪畫を學ぶのを無二の樂しみとして居りますが、今度京都の方へ參りたいと思ふのですが、一向つてがなくてよわつて居ります、もし諸姉様の内で、京都著名の畫家に御世話下さる方がありましたら、どうか下名迄御一報下さいませ、委しき事は手紙で御依頼致します、(大阪　南區天王寺石ヶ辻町菊地英枝)

▲松風様の「孤人の妻」をよんで、身もかたくなりました、私なんども窮境に沈んでゐた時、松風さまの様な決心があつたならば、どんなに良人もよろこび勇んで事をなし、又家にありてはさぞ慰安をあたへたであらうかと、今更殘念でたまりません、(釜山むらさき)

▲朝顏種子の實費分讓、之れは第五種郵便税壹錢切手壹枚にてもお讓り致しますもの、亦壹錢五厘位のものも、御座りますが、併しマア、一寸人様にも見て頂うと思ふような種類は、壹錢拾錢以上と御承知を願ひます、他の草花種子や球根苗類などと朝顏種子との交換にも應じます、但當利業者へは分讓お斷り致します(信濃三留野青木恒子)

▲皆々様、私は支那人で御座いますが、昨年の四月から女學世界の愛讀者です、何卒宜しく御交際を願み升、又繪端書の交換を願みます(麻布市兵衛町二丁目十二番地陳方施岸士女)

▲神に祈願することにつき、祈禱料のことをお尋ねになる方が有りますが、それはいりませぬ、神は至誠をのみうけたまふ、全快したり又少しでも苦痛が去るならば、神に仕ふる我はそれ以上の喜びはありませぬ。それよりも心清らに家をおさめ、身をおさめ、尊き神の活動を悟り如何なる場合にも安心立命の境にありても迷はず、又神の存在をたしかにして、樂しき一生を送られたらば、神は百拜千拜するよりも喜び給ふことたしかにおうけあひ致します、其厚き信仰を作るには、私ごとき無學者にも別にむづかしきことではなくて、たゞ至誠があればいゝのです、(大和生駒郡安堵村天つ神社内神の使女)

▲白菊様、毛髪食餌法御實行中なるもその効なしとか、さもあるべき事です、何故なれば同じ毛髪脱落症でも、御體質により、原因により、食餌法も異ります、御許様はもしや反對の食餌法を御實行なのぢやないでせうか、どうか御自分の御體質をとくと御研究なすつて、適當なる

含羞故を御實行あらんことを祈ります、(幽峡南)

▲小學校に親しかつた方でも、異ふ女學校へはいつてしまふと知らず〱に遠々しくなるものですが、讀者俱樂部の御蔭で、一昔しまへの友類朱様と文通が出來る様になつて嬉しくつて嬉しくつて(深川さつき)

▲東京の菊枝様、何だかおなつかしく存じます、私は百里へだたる花の都に同じ趣味の友を得たかと思ふと、嬉しく存じます、私のわづかの筆をあれほどまでにお思ひ下されて、今宵はるか東の空をながめておなつかしく存じました、何卒誌上で御交際を御願ひ致します。(讃岐の睡蓮)

▲去らでだに物淋しき秋の夕暮を、まして心の友も無き客窓に、あゝ妾は氣が狂ふのでは無いかと思ふ位ひむしみ〱と戀しき古里戀しさの氣がします、夫れに亦妾の天にも地にも只一人のお姉様と賴んで居る寺井竹子の君(大久保邊に居るとも聞き一時女子職業學校にも居られたと聞く〱)は今何處にどうして居らるゝのでせう、どうか誌上の御姉様達、若しも竹子の君を御存知の御方は昨今の御消息教へて下さいよ。(米國にてスクールガール)

▲皆さんの中に「寫く手紙」(本誌増刊)お持ちの方はどうぞおゆづり下さい、又お借り致してもよろしうございます、お禮として名所繪葉書を進呈します。(大阪市南區鰻谷西町六貫江芙蓉子)

▲誌友の皆様どうぞ下名へ名所ゑはがき御送り下さいまし、きつと相當の御禮致します。(富山縣射水郡小杉町宮崎つる子)

▲皆姉様達の内に、本誌四月號と昨年の七月號を御不用の御方がありましたら、何卒二三日お貸し下さいまし、御禮には當地名所繪葉書にて致します。(德島市寺本町福井トメ子)

▲諸姉様の内、日本の稀古い切手御所有の方は、私の保存の外國切手各種と御交換下さいませな、其他何でもよろしいから記念切手が御座いましたら御惠み下さい、切手御不用の御方へも雜誌、繪葉書等で御禮致します。(神戸市中山手通り一丁目四十六ノ十四岸本敏子)

▲記者様、普通原稿紙とは何字詰何行のものでせうか、又一枚のですか中枚のですか、お教へ下さいまし。(千葉淑花)——二十字詰二十行

▲記者様に伺ひます、シンガーミシン裁縫學院は試驗がございますか、何の位の程度でございますか、(麻布の一少女)——同院はもう廢校になりました。

▲在米國中野秀子様、先日ははる〲と美しきゑはがき御送り下さいまして有がたく御禮申上ます、どうぞ繪ハガキの交換のみならず御文通をも御ねがひ致します。(京都府谷都子)

▲諸姉様の内で、料理に熱心のお方ありませんか、私は料理法が拙くて困つてます、お互様に研究いたしたく存じます故、御同好の方はどうぞ御交際下さつて教へて頂けませんでせうか。(東京代々木秀子)

▲三十七年三月、六月、九月、三十八年四月、三十九年七月、四十年十月、四十一年一月、四十二年一月、九月の増刊、都合九册入用です、御一人にて九册とも御持ちの方に限り御讓り下さいませんか、誌上にて御住所御姓名御もらし下さい、私より早速手紙で御願ひ致します。(東京の蘭子)

▲記者様、美文、有益な實談其他を同封で送つてよろしう御座いますか。(千葉縣愛讀女)——同封でもよろしい但用紙は別々に願ひます。

▲赤坂松の葉様より「こゝろの日記」お送り下され、厚く御禮申上候、南洋果實お送り申すべき約束之處、御住所不明に付、至急御知らせ下され度、早速御送りいたし候。(小笠原島母島沖口れい子)

▲日本女子商業學校に入學致したいと思ひますが、學校は何處にありますか。(戸村光子)——麴町區市ヶ谷見附内にあります。

▲九卷七號の「寫く手紙」御もちの方は御ゆづ

り下さいませんか、相當の代價なり御禮なり差すいたします、御都合によつてはお貸し下さつてもよろしう御座います。(信州埴科郡南條村ポ瀧ゆり子)

▲戸板裁縫女學校の所在地及其他入學に付ての詳細を御教示なし賜はり度。(紀伊高野山麓愛讀者)――芝區三田四國町同校へ照會下さい。

▲女子美術學校は何處にありますか、(山形の芳子)――本郷區菊坂町にあります。

▲米國の福島千代樣、深雪樣、私不束者ですが御交際を願ひます、御差支なくば御伺ひ申度事が御座いますから、恐入りますが一度下名へ御手紙下さい。(臺灣臺南市円ノ四五森下義子)

▲記者樣、和歌と俳句とを同じ一枚のはがきに書いては無効ですか。(信州菊雪)――一方が無効になります。

▲懐しい／＼諸姉上樣方、御地の風景名所繪葉書と私の地方の繪葉書と交換を願ひます。(丹後與謝郡府中村江尻宮淺茂子)

▲皆樣、私は命と賴む兒に死に分れて、佐渡ヶ島にさびしく住んで居る者であります、哀れと思召して御交際下さいな、私高山樗牛先生の文大すきです、瀧口入道やわがそでの記などほんとに嚙ひつきたい樣だわ。(佐渡の一女)

▲在米の諸姉上樣に御願ひ申上げます、私は丹波の山奥にすむ十六歳の少女ですが、現在の女學校を卒業後渡米して獨立がしたいと思ひます、何かお金儲けにいゝ仕事は御座いますまいか、英語知らないと不自由で御座いませうか、御教へ下さいませ。(丹波靜谷美夢)

▲私は野菊樣、綾子樣、千代子樣を本誌文壇の三幅對だと存じます、千代子樣を爛漫たる櫻に例ふれば野菊樣は霜におぢず色にほころ白菊の花、雪に香りをはなつて氣高く咲いていらつしやるのが綾子樣。(鹿兒島つや子)

▲先日は御返事下さいまして有り難うございます、早速プランセットを求めて名と年とを尋れましたら、「とく子十二」と出ましたので、大笑でした、延引乍御禮申上ます。(――大阪愛讀者)

▲大阪の米澤きみ子樣、朝顏の種子おめぐみ下され難有うございました、御禮と云ふ程の物でもございませんが、何か差上げたいと思つて居りますけれども、消印の爲め御住所が不明で困つて居ります、御手數ながら今一度御知らせ下さいまし。(越後柏崎下町橋木とふ)

▲十一月のへ運動會の記をお出しになりました百合香樣は、もしや田方郡立三島高等女學校の御出身ではありませんか、運動會の記を讀みまして一々思ひ當る事ばかりでございます、誠におなつかしう存じます、百合香樣は第六回の卒業でいらつしやるでせう、もしや光子樣ではございませんか、おなつかしうございます、光子さまでいらしつたら御知らせ下さいまし。(三島愛子)

▲記者樣、私先日千駄ヶ谷カーネーション樣から御斬新なものいたゞきましたので、直接にお禮が申上げ度いので御座いますが、御住居も實のお名もわかりませんので、まことに困つて居りますから、失禮ですが誌上で御知らせ下さいまし。(吉備の里にてなでしこ)

▲記者樣、圖書傳習所は今も神田の三崎町ですか、そして名は變りませんでせうか、こゝは寄宿舎の設備がございませんか。(笑子)――三崎町にありて名も元の如し、寄宿舎は有ません。

▲十一月の本誌名無草樣の、母親の嫁穿鑿何といふ御美しい御筆なのでせうねえ、情にたかい御兄樣、御ふで走らすあなたの御風姿偲ばれて御懐しさはこの胸一ぱいです、始めから終り迄どんなに嬉しく讀みましたでせう、又この次に何卒御作り遊ばして喜ばして下さいませ。(佐倉のおとめ)

▲米國ユタ州に居られます信子樣、私米國と承りますと、去る日親類の一人が參りましたから一時におなつかしくなりますの、何卒私如き者にても繪葉書交換玉章いづれにても御交際遊

ばして下さいませ。(福井市吉野上町四十三大村靜子)

▲皆々樣の御友情厚く御禮申ます、此後ともよろしく御交りを御願ひいたします。(京都市佛光寺通り御幸町西へ入米田淋子)

▲前號口繪に掲げたる 津野田少佐夫妻の寫眞は、新婚とせしは事實相違に付き取消す。(記者)

▲吉野上市の学木喜美子さま、妾し大和の東隅に居る一少女ですから、以後何卒親しう、お交りを願ひます。吉野山の繪はがきがありますれば、送つて頂戴ね、必ず返禮は致します。(山邊郡東里村小原の巽晴美子)

▲日常生活の教訓良い名前では有りませんか、皆數へ草ばかりですわ、十一月號の口繪の美しい事、夕陽、秋色、ほんとにきれいだこと、内藤蔭青樣の御作が見えないでがつかり致しました、御氣分でも御惡かつたのですか、御身御大切に遊ばす樣願升。(相模小田原町綠町花子)

▲入營準の讀本御持ちの方は何卒御ゆづり下さいませ、又この本を賣つて居る店が御座いますれば、御迷惑でせうけれど、御知らせ下さい御願申し上ます。(滋賀秀子)

▲此倶樂部に御厄介になりましたところ、案外に皆樣の大歡迎大賛成をうけ、大層仕事が出來ましてまことにありがたう存じます、なほ御暇に少しでも收入を得たいと御思ひの方はどしどし御申込下さい、まことにきれいなてがらな編物でございます。(麹町區紀尾井町六番地田路たけ子)

▲宅に眞白の少さな支那犬が居り升が、此度都合により御愛犬家に御讓り致し度うござい升、本年二歳の牝です、お思召がございますれば、御一報頂き次第、寫眞にてお目にかけます。(東京市本郷區千駄木坂下町五十番地内柳川)

▲皆樣、藤村詩集御所持の方は、私の柿崎博士の復活の曙光と御交換下さいませんか、それからいたづら小僧日記、或はおてんば娘日記御所持の方は、徒然草文段抄と御交換下さいませんか、兩方共本は綺麗で御座います、お望の方は次號の此欄で御住所御知らせ下さい。(淺草にてまはぎ)

▲もし内藤樣の「スヰートホーム」ののつてる四月號御もちの方ば、何卒御めぐみ下さいませんか、御禮は必といたします。(佐賀縣藤津郡鹿島村字城内立石縣子)

▲古く手紙をお持ちの方は御惠み下さいませんでせうか、御禮として家庭小説斷腸花を御送り致します。(兵庫縣氷上郡和田村若林靜子)

▲藤蔭青樣と花散里樣との御作を集めて本にしていたゞきたうございます、今迄本誌で拜見しましたのは勿論、新たに御作り遊したのも、そしてその中へ御うつしゑや御手蹟出して下さつたら、私ほんとにうれしく思ひます。(南の國柏葉)

▲靜岡の菅島いと子樣、髮の毛の手當について色々と御教へ下さいまして、まことにありがたうございます、誠に申しかねますが、五倍子の粉を水から煎じますのは、一度分は粉どれだけ位に水をどれだけ位入れるのでございますか、又一度用ひたのは捨てゝ又取り變へるのでございますか、此の二つをどうか御知らせ下さいませ。(喜子)

▲記者樣、畫家にて、湘煙女史と申すお方は御座いますか、御所は何處で、御姓名は何と申されますか。(名古屋長者町二丁目三六京橋やす子)——畫家のは榊原蕉園さんでせう、御所は下谷區上野櫻木町十九番地です、尚京都にも上村松園さんといふ畫家が居られます。

▲まことに申かねますが、去る九月十五日發行の女學世界御持合せの方は御送り下さいませ、御禮は必ずいたします。(大和驚家口中西靖子)

▲前號増刊「日常生活の教訓」第三等に當選されし初霜女の君、同四等當選勾當うた子の君、御住所至急御一報あれ(記者)

△少公女　藤井白雲子譯

著者女史のに比して遜色なき好譯筆これならば如何なる幼年者にもよく分り申すべく、又讀づかひ上品なれば、いつ何處にて誰の前に朗讀するも差支なかるべしとは坪内博士がこの序文に墨付されし丈け譯書としてはまづ申分なき好著なるべし、外國小說の譯書の多くは近代思潮の異傾向にのみ走りて家庭の讀物の乏しき折柄この種の小說を譯述せしは好箇眼といふべく、小公子の姉妹篇として世に歡迎さるべし。(定價金壹圓本郷區龍岡町濱錦堂發行)

△新譯文章軌範　大町桂月譯

支那文章の精華を拔きたるものにして漢文を稽古するもの丶第一に讀まざるべからざるものなるはこの書なり、冒頭に原文を載せ本文は假名交りにこれを譯し、評を原文の末に加へ一讀よく文の性質、規模を知らしむる樣工風したるよき袖珍本なり。(價七十五錢神田表神保町春秋社發行)

△世界お伽文庫第十七編 山の神　巖谷小波著

これはお伽噺の源泉とも云ふべき獨逸の最も有名なる口碑にもとづきて作りなされたる奇異譚の一節にして寬法博士、狐の鐵屑、海賊先生等の如き奇想天外の說話に富める面白き子供話なり。(定價一冊拾八錢本館發行)

△基督教歌集　本間・宗太郎著

本書は、耶蘇教の教旨を簡易明快に說述したるものにして耶蘇聖訓の大要なり、従來の耶蘇教の經典は難解なる箇所多く殊にその內容に至りては、殆んど五里霧中に彷徨するの感あるを免れざりしが本書は此の弊を脫し、いと通俗にして其教の教理と、倫理と聖書の梗概とを何人にも解り易くしたるものなり。(價壹圓金尾文淵堂發行)

△お伽十八番　巖谷小波作

小波山人得意のお伽噺中最も面白き黄金の猫、黄金の珠、寶玉、玉、川の少女、五色の羊、針の功名、以下十數篇の佳作を集めたるものなりいづれも奇想天外滑稽の妙、洋々として盡きず、クリスマスの贈物として適當の本なり。(定價六拾五錢京橋區弓町三立社發行)

△孔子の聖訓　二條公爵・東久世伯爵共著

本書は孝經、中庸、大學、論語、禮記等に現れたる孔子の聖訓を集めたるものにて、文は訓讀に易き樣假名交りとしたれば何人にも解し易くして聖訓の一斑を知るべき袖珍本なり。(定價八拾錢)金尾文淵堂發行

△明治勅題歌集　村松清陰編

本書は明治二年より四十三年に到る間の、新年勅題の御歌の集にて、上は兩陛下を始め奉り皇族殿下貴顯網方其の他名流の作歌數千種を集めたるものなり年々の勅題とその作歌の內容とを見て明治年間歌の變遷を知り得らる可き目出度集なり。(定價壹圓神田區神保町光風館發行)

△簡易聖書　レオ、トルストイ著

トルストイが自己の見識と思想を以つて、聖書を解釋し、稍々現代に生命と光りとを失はんとするバイブルに一種の新らしき生命を吹きこみたるものなり、従來飜譯の拙劣と意味の不明瞭を以つて讀者を困しめたる新約全書の類はしきに比して本書の如きは極めて簡潔なる聖典といふべし。(定價六拾五錢麴町區平川町金尾文淵堂發行)

△新家計簿　山脇みさを著

本書は貯蓄金明細表を初めとし、月計表、立替金一覽表、各費日誌表、每月決算表、其他財産要目、被服要目等十數項に分ちたる家計簿にして、各表に就き記入方等を詳細に說明しあり、家政を整へて行くには一冊あつてよろしき書なり。(價金四拾錢巣鴨內外出版協會發行)

△飛行の馬　巖谷小波編

世界お伽文庫第十六篇なり、獨逸ミツメキス氏の著にかゝる滑稽お伽噺選より材料を取りたるものゝ由なるか、我國の子供の頭に入り易きやうやさしく面白く書きあり(。定價金十三錢本館發行)

△かぞへうた　本居長世作曲

本曲は本邦民歌「ひとつとや」の新譜にして先頃東京音樂學校に於て作者自ら演奏して非常の好評を得たるものなり。(定價金二十錢銀座松本樂器會社發行)

本誌 新年號の活動

新年 大附錄

平福百穗畫
新撰 婦人風俗双六
大判極彩色 無類の美彩

新らしき社會の生存に缺くべからざるものは新活の氣を呼吸し、鮮美の養分を採るにあり、これに對して一日空ふすれば一日時勢の落伍者たるを免かれず、本誌はこの重任を全ふすべく、年改まると共に更に新活の氣を皷吹し、鮮美潑剌の物資を滿載して以て諸姉の要求に應ぜんと欲す、新年の本誌が如何に面目を改むるかに就ては今一々これが説明を用ゐざるも、一ケ月の後に於て事實となりて活現するを待ちたまへ、今は新人裝を凝らすに急にして如何に活躍すべきかを春の女神にさゝやきつゝあるの時なり。

彼女の眼光は常に時勢の活動を見、彼女のハートは人情の微細を捉ふるに長じ、彼女の批評眼は絶えず世態の變遷に注意しつゝ時に警拔なる直覺を下す、而してその藝術的良心は氣品尤も高尙にして當代の文壇をして常に顏色なからしむ。

▽皇后陛下の御平生
▽現在の生活と未來の生活
▽令孃の春遊び
▽家庭敎師の見たる伯爵家の奥
▽外交官夫人の苦心談
▽新婚の正月

▽東京では今何んな風が流行するか
▽現代生活の批評
▽絶えず鞭たれつゝある令孃
▽物に觸れての敎訓
▽戯曲に現はれたる婦人の性格
▽善良なる妻の模範

▽華族の令孃と紳商の令孃
▽心理小說奇特な孝子
▽處女の見たる社會
▽媒酌人の結婚苦心談
▽新敎育を受けたる奥樣の面影
▽女博士の苦學談

懸賞募集 光榮ある人生の春

希望に耀く青春婦人の價値ある理想を募る

（〆切十二月二十五日）

光榮ある人生の春、一生一度の靑春期、再び遭ひ難き人生の春、一刻千金の人生の春、彼女の容貌は皎として月のごとく彼女の胸懐は燦として玉をつゝる、而かも人生の春は容易に來らずして一度來るや逸すること奔馬のごとし、光陰は眞に人を待たざるより、我等は今此の得難き人生の春に遭ふて衷心の歡喜禁ずること能はず、自から筆を採つて我が人生の春を遺さんと欲す、謂へらく我れに一人淑女の自覺あり、以て萬人の庸婦を化するに足ると。是れ我が本來の理想なり。

こゝに雄大なる理想と高潔なる情操とを三千年の昔より遺傳されたる大帝國の賢婦人よ、卿等は今卿等の包める玉を披きて卿等の眞價を世界に示すの好機に遭へりこれ又卿等が聖代の恩德に酬い奉つる義務の一端にあらずや。

賞金

▲壹等	金參拾圓	一名
▲貳等	金貳拾圓	二名
▲參等	金拾五圓	三名
▲四等	金拾圓	五名
▲五等	金五圓	十名

規程

△原稿は普通原稿紙十二枚以上の事
△原稿の終に住所姓名を記する事
△宛名は博文館女學世界とし封皮に特記する事
△當選の文は一月中旬發表す
△賞金は發表の當日現金にて發送す

募集（十二月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲美　文（二十字詰十五行以内）

▲いろ〳〵の實驗（十五行以内）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△美文、と實驗は用紙は半紙の事△和歌、俳句、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館内女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美　文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

△いろ〳〵の實驗（賞壹圓以下）

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册　增刊四回：一、五、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規略

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十三年十一月廿六日印刷納本　第拾卷第拾六號

編輯發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　二千六百二十番　三千二百二十九番　三百・三番　千十八番

博文館發行 新年號豫告

雜誌創刊

明治四十四年一月より實業倶樂部、日曜畫報、英語少年、幼年世界を創刊す詳細は本誌前附欄に掲載す。

第十七卷

太陽

毎月一回 一日發行

●大判（四六二倍大） 本文紙數二百五十六頁
●寫眞版（二色刷二頁光澤紙四頁 普通……十二頁） ●外に本文中寫眞版數十箇挿入す
▲正價一冊金參拾錢郵稅一冊（本誌に限）三錢五厘

島帝國的雜誌は到る處に在り。然れども大陸帝國的雜誌は由來唯一の本誌あるのみ。日本は今や島帝國に非らずして大陸帝國たり。夙に大陸的經營を以て、群小雜誌界に濶步したる本誌は、此機運に乘じ、明春より更に一段の大飛躍を試む。請ふ之を事實に徵せよ。

新年大附錄

全誌面目を一新する外に左記諸大家の小說を附錄とす。

饗庭篁村君　塚原澁柿君　田山花袋君　正宗白鳥君
幸田露伴君　高濱虛子君　廣津柳浪君

太（後付の一）

第一卷

實業倶樂部

年と共に新たに出現せる趣味最も多き實業雜誌、富國の要道、立身の秘訣、面白く說て肩を凝さす。社會の表裏兩面の素っ破抜きも、諷言中傷は固く之を避く。娛樂の間に日進の消息に通する實業的活動寫眞。新年號内容の一斑は下の如し。

■帝國發展懸賞暗射圖（是れ新年附錄、膨脹せる帝國の代表的風景人物三十圖を集め、其名を匿して解答を募る、解答受賞者確實に五百人、賞金及賞品三百圓、）

■新進實業界拾五名士月旦（將來の我が實業界を背負ふて立つべき人々の面目見るが如し。）

■朝野名流の時事評論（人は皆な現代第一流、問題は實業の發展、致富の要訣、人格修養の訓戒、何れも處世の金科玉條。）

■新講談明治立志編（新派講談界の領袖伊藤痴遊氏が新作の事實談。編中の人物は皆な現存の人。）

■最近社會裏面觀（大角力協會樂屋の經濟、活動寫眞經營の内幕、などは其の中の一部分なり。）

■膨脹せる新日本の新年（臺灣、樺太、朝鮮の各地に於ける新領の風俗習慣、奇に似て奇ならず、今は皆な、我等の同胞。）

毎月一回 一日發行

●菊判本文紙數百六十頁
●寫眞版四頁挿入
▲正價一冊金拾五錢郵稅一冊一錢五厘

第五卷

實業少年

毎月一回 一日發行

●大判（四六版二倍大）本文紙數七十二頁
●光澤紙寫眞版四頁
▲正價一冊金拾錢郵稅一冊（本邦）壹錢五厘

新年大景品
發見の卷

◉手製未來記 幸田露伴君
金もうけ自由自在實業界の大革命記

◉恠人の發見 江見水蔭君
新飛行機の雄飛恠人境の大探險

◉快男兒八龍定 細川風谷君
海に千年山に千年の好漢北米に大成功

▲僅か拾錢で立身出世を教へる雜誌
▲有益の奮闘談は毎號之を連載す
▲少年本位の日本唯一の實業雜誌
▲最新實務の研究、就職立志の相談に應す
▲自宅獨習の師たるに耻ぢず
▲本誌を讀まざれば立身出世の機會を逸す

女（後付の二）

第六卷

農業世界

本誌は本邦農業雜誌中の覇王と稱せられ、發行部數の巨多なる、勢力の旺大なる記事の豐富なる他雜誌に超然たり、是れ世間同情の然らしむる所本誌は其の厚意に報ひん爲め、來年よりは大に記事を精撰するは勿論、世の要求に顧みて園藝副業に關する記事農民に對する、修養談、地方青年會の啓發誘導に關する記事を多くすべし、其の内容は之を一月號に見よ。

▼▼▼新年大附錄●農家講談 六十四頁 興味津々▲▲▲

●本誌は、農業、林業、水產に關する朝野名家の有益斬新なる明論卓說」耕種園藝、醸造、養蠶、畜產、土地改良、林業、水產、副業等の各事項に渉れる各事攻の學者實際家の執筆に係る學說實驗」農政問題、自治農村、產業組合、耕地整理等に對する意見と經驗」とを掲げ、斯界を改良指導することを期すべし

●本誌には、農業林業、水產業者の人物經歷、事業實行逸話等」農家が家庭に要すべき育兒、攝生、娛樂、料理、雇人待遇、家風、家法等」を掲げ」は農界の人物を奬勵し、」は農家の家庭を改善することを期すべし

●本誌には各地方に於ける冠婚葬祭、祝事娛樂、奇蹟奇談等の風俗習慣」農界に行はるゝ、俳句俗謠、俚歌より詩歌講話小說の類」を掲げて文藝的趣味と娛樂の念とを與ふべし。

●農村青年、農學生、地主、小作人に對する名家の修養談、青年團體に對する大家の卓見、狀況、通信等を掲げて其啓發誘導を爲し、海外の事情を詳記して讀者の參考に供し讀者の質問に叮嚀なる解答を與へ、又種苗、農具、地水其他の仲介を爲すべし。

毎月一回
十日發行

●菊判本文紙數二百四十頁
●寫眞版（光澤紙…四頁 普通…二頁）●彩色石版畵（植物標本）●原色寫眞版（動物標本）
▲正價一册金貳拾錢 郵稅一册（本誌に限る）二錢五厘

第十七卷

文藝倶樂部

新年の新提供
大懸賞金壹千圓!!!

毎月一回
一日發行

●菊判本文紙數三百二十頁●原色寫眞版一枚
●寫眞版（光澤紙（二色刷）六頁 普通……四枚）●木版摺錦繪一枚
▲正價一册金廿五錢 郵稅一册（本誌に限る）三錢

年々歳々素語錄の附錄にてもあるまじと、來る四十四年正月元旦發刊の「文藝倶樂部」は、奇抜なる題を設け其の解答者貳百名に金五圓宛の賞金を呈し、合計金壹千圓也を提供せんとす。其の詳細は載せて本年十二月一日發刊の第十六卷第十六號の誌上に在り見落し給ふ勿れ。倘此の際記事に寫眞版に繪畫に……善盡し美盡し、東洋第一の文藝雜誌たる實を擧げんと大發展大改良を實行し、讀者が十有七年に亘る眷顧に酬はんとす、切に倍舊の愛看を祈る。

第四巻

冒險世界

毎月一回
五日發行

鐵の腕炎の心

新年大附錄● 戰闘艦潜行艇 卓上海戰競技——押川春浪案 小杉未醒筆——本誌八倍大極彩色美麗

冒險世界は奮闘男兒の戰友也。英雄崇拜凡俗打破を主義とす
益々進歩し向上して止まず、今や雜誌界の巨人となれり
元旦號は五彩燦爛たる色刷とし、血の湧く如き記事を滿載す

新年呼物● 卷頭小說 强者之犧牲 押川春浪 ● 孤島之三少年 河岡潮風 其他壯快記事數十編

◎新年號に限り……一月一日發行
●大判(四六判二倍大)本文紙數百二十八頁
●石版刷本誌二倍大…一枚 ●寫眞版二枚
▲正價一冊金十五錢 郵稅一冊(本誌以上)二錢

女(綴付の四)

第六巻

幼年畫報

毎月一回
一日發行

お正月! お正月、うれしいお正月、幼年畫報のお正月。お正月の幼年畫報。どんなに面白い! こんなに面白い。どんなに美しい。こんなにうつくしい、さアさア御覧。はあやく御覧。あたいの好きな、幼年畫報、はあやく見たい、うれしいなアお正月。お正月の幼年畫報。みたい〳〵はやく見たい。

◎新年號に限り一月一日發行
●●菊判美麗畫本 ●石版極彩色刷十六頁
●●活版寫眞入二度刷十六頁 ●寫眞版四頁
▲正價一冊金十錢 郵稅一冊(本誌以上)一錢

新年號大附錄
いのさんの番
さゝなみ案 こどう畫

◎桃太郎の凱旋式……尾竹國觀畫
◎鳥の音樂會……桐谷洗鱗畫
◎ねずみの悪戯……尾竹國觀畫
◎唱歌カルタ……山中古洞畫
◎讀本繪とき……名和永年畫
◎日本の風俗……山中古洞畫
◎子供のあそび……宮川春汀畫
其他美麗なるもの頗る多し。

第十七巻

少年世界

少年世界は第十七巻を迎ふると共に、内容外觀共に益々整備して、改良發展の實を擧げ、少年雜誌界の覇王として群小雜誌の上に卓然たるものあるべし、即ち◎表紙畫は懸賞を以て募集したる、少年美術家の

毎月一回

一日發行

●菊判本文紙數百二十八頁（内十六頁着色二度刷）
●原色寫眞版一枚●石版數色刷一枚
●光澤紙寫眞版四頁挿入
▲正價一冊金十錢郵税一冊一錢五厘

新年大附錄

少年歴史地理双六

巖谷小波案
尾竹國觀畫

嶄新なる意匠を用ゐ◎口繪は『獨逸少年風俗』と大下藤伯の『海上の初日出』を掲げ◎二色刷寫眞アート刷には諸君の刮目すべきものあらん。

記事の重なるもの◎白梅組…さゝなみ◎猪の話…石川理學博士◎日本外史に就て…久保文學士◎梅の話…松村理學博士◎白蟻…名和昆蟲所長◎心地よくあれ…瀧澤師範校長◎世界第一艦…江見水蔭◎算術カルタ…竹貫直人◎血面兒…武田櫻桃◎北光丸…押川春浪◎同談會成る…木村小舟◎鬼柴田…上田文學博士◎旗の梅…沼田笠峰其他材料豐富山の如し。

第六巻

少女世界

少女雜誌の花として、日本女子敎育の光りとして、世に高評を博しつゝある少女世界は、六巻の春を迎ふるとゝもに、表裝をあらため、記事を豐かにして、家庭と學校との好讀みものとなるやうに、ます〳〵力をつくします。先づ、正月號のいかに優れてゐるかを見て下さい。

正月號大附錄

◦少女遊戯雙六

巖谷小波案　榊原蕉園畫

⦿羽子（表紙）…杉浦非水
⦿愛らしき少女（口繪）…三色版
⦿わか水（口繪）…丸山晩霞
外に寫眞版アート四頁

毎月一回

一日發行

●菊判本文紙數百二十八頁（内十六頁着色二色刷）
●石版口畫二頁●光澤紙寫眞版四頁
▲正價一冊金十錢郵税一冊（に限）一錢五厘

▼梅島先生巖谷小波

○花簪の箱…與謝野晶子

▼手帳の中より…沼田笠峰

▼魔人宮城…押川春浪

○窓の灯…西村渚山
○朝鮮物語…武居芳成
○笑顔の研究…嶋田潮山
○春の光…竹貫佳水
○和歌作法…佐佐木信綱

▼少女會館　各室とも愛讀者のために開放されてあります

女（裝付の五）

第十一卷

女學世界

新年大附錄

平福百穗畫

現代流行双六

大判極彩色 無類の美彩

《內容》

▽皇后陛下の御平生

▽現在の生活と未來の生活
▽令孃の春遊び
▽家庭教師の見たる伯爵家の奥
▽外交官夫人の苦心談
▽新婚の正月
▽媒酌人の結婚苦心談
▽新教育を受けたる奥樣の面影
▽女博士の苦學談
▽結婚後の十年間

▽東京では今何んな風が流行するか
▽朝鮮の正月
▽北海道の新年
▽現代生活の批評
▽絶えず鞭たれつゝある令孃
▽物に觸れての教訓
▽戲曲に現はれたる婦人の性格
▽善良なる妻の模範
▽華族の令孃と紳商の令孃
▽心理小說奇特な孝子
▽處女の見たる社會

每月一回 一日發行

●菊判紙數二百〇八頁 ●原色寫眞版一枚
●寫眞版（光澤紙八頁） ●石版（精巧彩色畫二枚 筆頭鉛筆畫毛筆畫二頁）
▲正價一冊金貳拾錢郵稅一冊（本誌に限る）貳錢五厘

第十四卷

中學世界

新年大附錄

世界最大の偉人

（執筆者……大隈伯爵、山本海軍大將、新渡戸博士、三宅博士、竹越三叉、福本日南、浮田博士、德富蘇峰、丘博士、三上博士……外數名士）

每月一回 一日發行

●菊判本文紙數二百四十頁
●寫眞版（光澤紙…四頁 普通…四頁） ●原色版水彩畫、ペン畫、鉛筆畫、色鉛筆畫 六頁
▲正價一冊金貳拾錢 郵稅一冊（本誌に限る）貳錢五厘

洋々たるわが誌運は、近くこゝに十有四卷を冠するに至り、吾人が生存の理由は、牢乎として拔くべからざるものとなれり。然れども、吾人は徒らに歷史を以て只一の誇となすものにあらず、寧ろ年々歲々、機軸を新にして、向上の一路、世の進運を助けんとするにあり。此の意味に依つて明治四十四年の中學世界は、革新の實を擧げて生氣潑剌、趣味豐贍凡そ青年學生諸君にして要望する所のもの、悉く備はらずと云ふことなし。方にこれ雜誌界の偉觀、新年號發刊の時を待つて、これに徵せよ

●大懸賞……官立學校入學擬試驗問題提出……（賞金壹百圓）

第五卷

數學世界

毎月一回
一日發行

●菊判本文紙數……各八十頁
●木版密書數十個挿入
▲正價各一册金拾錢　郵稅各一册壹錢

新年大附錄

數學遊戯

來る辛亥の初より大發展大飛躍を試むべき本誌の內容は左の如し

愛讀者の渴望に仍つて紙數を增加し三册に分ちて斬新なる……

■算術講義
■代數學講義
■幾何學講義……を掲く

追て『三角法講義』は前記何れかに追加す

數學世界　＾廣き意味に於ける數學雜誌なり、
數學世界　＾研究資料として大家の說を掲ぐ、
數學世界　＾愛讀者の爲に質問研究欄を設く、
數學世界　＾篤學者の爲に寄書論文欄を設く、
數學世界　＾懸賞問題を掲げて學生を奬勵す、
數學世界　＾斯界に於る出來事を報導すべし、

女（後付の入）

第五卷

鉄道汽船 旅行案內

毎月一回
一日發行

●菊判紙數約二百頁　▲携帶至便▼
●石版二度刷表紙美本
▲正價一册金拾錢郵稅一册（本誌に限）一錢五厘

抑も世に旅行の案內として發行する、雜誌は體裁舊式を脫せずして携帶に便ならず校正杜撰にして時間に誤り多し、加ふるに紙質粗惡印刷不鮮明にして、案內雜誌たる價値を有するもの絕無と云ふも誣言に非らず、弊館玆に見るあり精確なる材料と新機軸の體裁とに依り、携帶に便に、捜索に利なる組織を以て本誌を發行し來れり、蓋し本館は東洋唯一の印刷機械と千餘名の職工を有する製本工場とを備ふるを以て、最も發行日に近き發着時間の改正も、必ず訂正を加へ完全無缺の者を發行し得べし、是を以て大に旅行家の歡迎信賴を得、世の片々たる案內雜誌をして後に瞠若たらしむに至れり、弊館は之に甘んぜず四十四年より一層改良を計り以て江湖の眷顧に報ひんことを期す



柳清香油
けいしかう油
紳士
貴女用
フロラー香水
二十錢
一円卅錢
一円八十錢
美術小間物化粧品
東京日本橋通二
柳屋本店
電話本局二二一
GIYA
瓊姿油
RYUSEIKO
柳清香

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい）明治期復刻版⑩
明治43年11月（第10巻第15号）、12月（第10巻第16号）

2010年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3858-6　C3321